

近現代における青年団の結合原理をめぐる言説とその実態  
—青年団論の分析と地域青年団をめぐる社会教育史的研究—

筑波大学 安藤 耕己



# 近現代における青年団の結合原理をめぐる言説とその実態

—青年団論の分析と地域青年団をめぐる社会教育史的研究—

## 目 次

### 序 章 本研究の課題及び方法

第1節 問題の所在	1
第2節 先行研究の検討	3
第3節 本研究の目的と方法および研究の意義	18
第4節 研究方法および視点の定義	19
第5節 本論文の構成	22

### 第I部 近現代青年団論における青年団の結合原理をめぐる言説

#### 第1章 近代青年団論における若者組像と青年団の結合原理

第1節 問題の所在	34
第2節 若者組像の美化、あるいは〈教育〉化への批判	34
第3節 逸脱する「若者」と近代的存在としての「青年」	35
第4節 1920年代までの言説空間における若者組像	38
第5節 「青年団＝若者組母胎」論の構築と定着	42
第6節 『青年団の使命』における「青年団＝若者組母胎」論構築の背景	48
第7節 「若者組」像をめぐる民俗学と青年団中央組織との関係	52
第8節 結語	54

#### 第2章 戦後青年団論における「青年団＝若者組母胎」論の復権とその背景

第1節 問題の所在	61
第2節 戦後青年団論にみる「青年団＝若者組母胎」論と「若者組」像	61
第3節 「青年団＝若者組母胎」論の再表出と「若者組」像の再転換	64
第4節 終戦直後から日本青年団協議会結成前における田澤義鋪の顕彰	66
第5節 公職追放解除後の熊谷辰治郎の活動	67
第6節 戦前の青年団中央組織の顕彰	70
第7節 青年団運動における戦前／戦後の「接続」	72
第8節 青年団運動と「協同主義」	73
第9節 結語	74

#### 第3章 戦後青年団論における「素朴な結合要求」と「たまり場」への着目

第1節 問題の所在	81
第2節 青年団性格論における「素朴な結合要求」をめぐる議論	81
第3節 終戦直後から1970年代までの「たまり場」への着目	92
第4節 結語	98

## 第Ⅱ部 地域青年団の実態及び結合原理に関する実証的研究

### 第4章 近代日本における青年集団の二重構造に関する一考察

#### ——埼玉県旧名栗村における事例を中心に——

第1節 問題の所在	105
第2節 調査地概観	107
第3節 名栗の「若者」とその矯風	108
第4節 甲南智徳会の「公益事業団体」化と「若者」	111
第5節 事例のまとめと考察	115
第6節 結語	116

### 第5章 戦後における集落青年会の実相とその意味

#### ——岩手県花巻市柵目青年会の事例を中心に——

第1節 問題の所在	120
第2節 柵目青年会の概要と実態	120
第3節 岩手県における「実践的学習論」の提起と集落青年会の志向との乖離	130
第4節 結語	133

### 第6章 若者の「たまり場」づくりの消長過程とその帰結

#### ——岩手県旧三陸町浦浜青年会館の事例を中心に——

第1節 問題の所在	139
第2節 三陸町浦浜青年会による青年会館建設	139
第3節 会員から見た青年会と青年会館の位置づけ	147
第4節 念仏剣舞の全国大会出場とその後	152
第5節 考察	153

### 終章 本研究のまとめと課題

第1節 本論文の要約	159
第2節 本研究の成果と得られた示唆	161
第3節 残された課題	164

参考文献一覧	166
--------	-----

## 序 章 本研究の課題及び方法

### 第1節 問題の所在

本研究の目的は、近現代を通して、農村を中心にあまねく組織されていた青年団が、どのような原理で青年層を結びつけていたのかを明らかにすることにある。その際、その組織と活動が顕著であった 1970 年代までを主たる対象とし、青年団運動指導者や社会教育研究者、評論家といった「エリート」の言説レベルでの認識と、地方で青年団に加入した勤労青年層（一般の若者）という、「ノン・エリート」の実態から読み取られる視座とに分けて明らかにする。

本研究で取り上げる青年団とは、平たく言えば、近代<sup>1)</sup>以降成立し、義務教育終了後の地方在住の若者が主に結婚まで在籍した組織である。その活動は、近代以来の祭礼の運営や道普請などの地域の下請け・奉仕的なものから、戦後に至ると学習活動、文化活動、スポーツ活動等々を含みつつ、多岐に展開する。特に近年は、公益活動の担い手としての存在意義が改めて示されている。

近代以降、青年団は、地域網羅的であつ、全国組織にまで至る系統的組織化が図られてきた。1925（大正 14）年の大日本連合青年団の結成に至ると、道府県→郡→市町村→小・中学校区→集落という、系統的な組織形態を有した教化団体として位置づけられた<sup>2)</sup>。戦後は、1951（昭和 26）年に設立された日本青年団協議会（以下、日青協とする）を全国中央組織とし、戦前とほぼ同じ組織形態を表出させた<sup>3)</sup>。近代においては男女別組織であったが、戦後は統一化された<sup>4)</sup>。なお、1970 年代頃までは集落単位の組織が機能したが、それ以降は若者の減少により、学区単位、市町村単位での組織へと移行した。

改めてふりかえるに、近代に成立した、日本の公的な社会教育（行政社会教育）は、地域名望家層や教員など有識者の指導監督を前提とした、教化団体による教化施策が主であった。これにより近代の社会教育は、戦後のそれが「施設主義」とみなされるのに対し、「団体主義」と評される。先に小川利夫が「青年団型社会教育<sup>5)</sup>」とするように、1900 年代から 1920 年代にかけての青年団の全国組織化が、「団体主義」の端緒とみなされた。それゆえ、青年団の全国組織化は、「近代における国民教化策の顕著な例として、社会教育史研究においても中心的題材として位置づけられてきた<sup>6)</sup>。

特に、1900 年代から 1920 年代における、青年団の全国組織化に至る過程に関しては、青年団史の記述と青年団運動における言説、社会教育（史）研究での青年団に関する論及（以下、「青年団論」とする）では、一般に以下のプロセスで説明される<sup>7)</sup>。まず、①近世以来の村落での伝統的若者集団である「若者組<sup>8)</sup>」が、おおよそ 1890 年代から小学校教員や地域名望家らの関与によって、青年会として改組される。②それらが、地方改良運動を契機とし、1900 年代から 1920 年代にかけて市町村単位に青年団として統合改組され、全国組織化とともに国家体制下に取り込まれていく。さらに、この①②の過程において、青年団の前身あるいは母胎として位置づけられた若者組は、村落内に自然に発生した、社交・娯楽の場かつ自律性・自治性をもった教育機関として説明される。現在の教育学関係の事典においてもその種の記述がなされる<sup>9)</sup>。本論文では、以後この歴史認識を「青年団＝若者組母胎」論として位置づけ、論じるものとする。さらに、若者組

が日常的に集ったとされる若者宿（若衆宿）は、青年の家など、宿泊型青年施設の原像としても位置づけられる<sup>10)</sup>。いずれ、この若者組の性格を、そのまま近代の青年団が継承したとされている。なお、本論文第1章での結論を先んじて述べると、1930年代になると、近代青年団運動最大のイデオログである田沢義鋪は、若者組以来、青年団の結合原理は、青年期固有の社交欲に基づくものとした。

このように若者組は、現在においては青年団の「母胎」として〈教育的〉な位置づけが与えられ、いわば「美風」とされる。しかし、そもそも1780年代以降の寛政・文政・天保改革等の風俗取締を契機とし、明治維新後の1880年代頃に至るまで、若者組は、改良あるいは駆逐すべき存在として為政者や識者から厳しく糾弾される「弊風」であったことが、近世・近代史や民俗学の研究蓄積から明らかである<sup>11)</sup>。すなわち、若者組は青年団論や教育研究の文脈において、「弊風」から「美風」へと変化している。本章で後述するように、このことについて、1960年代に社会教育研究において小川利夫と宮坂広作らが言及したことがあるものの、結局のところ看過されてきたといつてよい。それは前掲の青年団全国組織化の過程が、「定説」として現在に至ることからも明らかである。

さらに、近代に消滅したはずの集落の若者組やその歴史性、性格・機能を継承した青年集団が、第二次世界大戦後に至っても市町村や学区単位で組織された青年団と別に併存していた、いわば「青年集団の二重構造」といえる状況があった。このことは、本章第2節で後述するように、民俗学や教育社会学などの実証研究において指摘されてきたことである。しかし、従前の青年団論、具体的には社会教育（史）研究においても、この「青年集団の二重構造」は等閑視されてきた。ここには、「上から」見た望ましき青年団像・結合原理に適ったイメージと、当事者たる若者たちから見た実態、いわば「下から」の結合原理との乖離が示唆されているのではなかろうか。

この若者組をめぐる歴史的評価の変転と同様、イメージと実態の遊離は、社会教育（史）研究における戦後青年団の描き方においても見られる。終戦直後の青年団の復活には、「やくざ踊り<sup>12)</sup>」などに代表される、娯楽的な志向が非常に強く働いていたこと、戦時体制からの解放感が若者におけるアノミ的状况を促進させていたことは、従来より指摘されるところである<sup>13)</sup>。それらは、同時代の社会教育研究においては、おおむね批判的に位置づけられている<sup>14)</sup>。

果たして、当時の地方に住む若者たちは、1953年頃から日青協が推進した小集団学習である「共同学習」に関わって語られるような、地域変革と生活課題の解決を一義として青年団に集っていたのであろうか。これは第5章で詳述するように、実態そのものではなかろう。また、識者から批判の対象としてあった、「遊ぶ」若者と「共同学習」で「学ぶ」若者とは、全く断絶した存在であったのか。たぶん、両者は離れたものではなく、その両者が密接に関係・連続する可能性や「遊び」と「学び」の両面が、活気のある青年団の活動には包含されていたのではなかろうか。

以上のように、社会教育（史）研究においては、当事者としての若者たちの生活世界における日常性を理解し、彼ら／彼女たちの志向に目を配る観点が欠けてきた。

さらに、現在の青年団の結合原理をめぐる言説にも目を配りたい。1910年代にその動きが顕著となる官製青年団化の親展、すなわち、小学校卒業者を全て青年団に取り込むこ

とが進んでから、既に 100 年以上が経過している。往時の勢いは失ったとはいえ、青年団あるいはそれに類する地域サークル等は現在も多く存在し、その連合組織としての日青協また財団法人日本青年館も厳としてある。

日青協のホームページ中、「日青協概要」にある「Q & A」には、以下の問いとその回答が掲載されている<sup>15)</sup>。

Q. 青年団は若者の集団であることはわかりますが、若者が集まる目的はなんですか。

A. 青年団は、地域に暮らす若者なら、職業や思想・信条、宗教に関わりなく誰でも入団できます。スポーツや文化活動、郷土芸能、祭り・イベント、ボランティア活動といったものから広く社会に目を向けた活動まで幅広く行っています。こうした活動を若者が集団として取り組むことで、人間として成長していくのです。青年団の目的は、「青年の生活を高める」ことです。「青年の生活を高める」ということは、若者一人ひとりが夢や希望を持てるように社会全体を発展させることなのです。そのためには、若者が集い・連なることが必要になってきます。青年団は、一人の力では解決できない社会の問題や矛盾にたいして団体（組織）として取り組んでいます。

ここでは、青年団の地域における社会的意義、中間集団としての機能が強調されており、ひとまずこれが現状における、日青協の青年団の結合原理に関する「公式見解」として位置づけられよう。なお、2011（平成 23）年 3 月の東日本大震災における地域復興に際して、青年団の存在が改めて注目された。それはソーシャル・キャピタル論にも基づく、地域における中間集団の再評価<sup>16)</sup>と、青年団組織の全国ネットワークによる現地支援が展開したことにおいてであった<sup>17)</sup>。また、同じホームページにおいて、日青協もその活動における公益性を改めて強調している<sup>18)</sup>。

とはいえ、上記のこれら公益性の強調や社会的意義を以て、いまの青年団組織は存在しているのであろうか。また、青年団の活性期といえる時期においてはどうかであったのか。例えば、1900 年代から 1920 年代にかけての青年団組織が国家的にも注目されていく時期、続いて終戦直後から 1960 年代にさしかかった時期までという、青年団史上の最活性期、さらには一時的に「青年団第二の高揚期」と評された、1973 年頃から 1982 年頃までの時期<sup>19)</sup>、これらに目配りをし、当事者たる若者の視座から青年団の結合原理を探ってみるべきではなかろうか。このことが現在の地方における、特に若者を対象あるいは担い手とした中間集団の活性化／再組織化に当たっても、示唆を与えることになるはずである。

なお、以下、本文中では項内（序章に関しては「目」内とする）で同一の年号が複数記載される場合、初出以外は西暦の後の元号表記を省略するものとする。

## 第 2 節 先行研究の検討

以上のように、本研究では、まず、社会教育史研究と主に社会教育の領域における青年団論とを対象とした言説研究を行う。具体的には、近世以来の伝統的青年集団である若者組と、近代に新たに成立する青年団とを、質的・歴史的にも連続させ、両者を非政治的・〈教育〉的なものとして意味づける言説、すなわち、「青年団＝若者組母胎」論が定着し、現在にまで至る過程とその背景、そこに見られる理想の青年団像や結合原理を

明らかにする。次に、近現代日本における地域青年団の活動実態を対象とし、青年団組織の結合原理について、日常性に立脚しつつ、当事者の志向性や観点に着目し、実証的に解明する。

言説研究に関して、これら伝統的青年集団及び青年団と、前者の后者への国家的再編統合に関する研究を、実践論・運動論的にも蓄積してきたのは、社会教育（史）研究と青年団中央組織における歴史研究であった。なお、ここでの「青年団中央組織」とは、次項で詳細に述べるが、青年団の全国組織と財団法人日本青年館とを合わせ呼ぶものである。加えて、民俗学・文化人類学、日本近代史研究、教育学・教育社会学の領域においても豊富な研究蓄積がある。さらに、青年団の結合原理に関わる実証研究については、社会教育研究が主にそれを担ってきたが、日本現代史研究における研究も近年蓄積されてきている。

以下、それらを整理しつつ、先行研究の成果と課題とを明らかにしていきたい。

## （１） 社会教育史研究における伝統的青年集団の再編統合過程に関する研究

### ① 社会教育史研究における近代期青年団への着目

本章冒頭に挙げたように、近代公的社会教育における教化策の根幹が「団体主義」とされるとき、青年団の全国組織化がその端緒と位置づけられる。そのため、その前後からの伝統的青年集団の再編統合過程が、近代を対象とした社会教育史研究においても中心的題材として位置づけられてきた。以下、その議論を整理する。

戦後における上記課題に関する研究の嚆矢は、桜井庄太郎による「青年団論の反省」「青年団論の反省（二）—大正時代—」「青年団論の反省（三）—昭和時代—」（『社会教育』8-6～8、1953）である。なお、桜井は戦後、教育社会学者として位置付けられていくが、これらの発表媒体と『大日本青年団史』（熊谷辰治郎著・発行、1942）編述に携わった<sup>20)</sup>立場からも、社会教育学の先行研究として位置づけるものとする。

過去においても、さほど注目されていない論考であるが、青年団を論じる主体とその意図に関して言及するもので、実に興味深い整理がなされている。桜井が「大正時代」、すなわち 1910 年代から 1920 年代における青年団体に関する動向として挙げる以下の 4 点には、先見の明がある。第 1 に、内務・文部両省による訓令が相次いで発せられたこと、第 2 に、明治神宮造営に全国の青年団体が奉仕したことなどを契機として、青年団体に皇室中心主義が滲透したこと、第 3 に、軍部の介入が顕在化したこと、第 4 に、青年団の中央機関的組織が相次いで結成されたこと、である<sup>21)</sup>。編述した『大日本青年団史』の要約のようにも見えるが、第 2、第 3 の点は戦後ゆえに言及できたことである。昭和になると、その 2 点はさらに顕在化することも併せて桜井は言及している<sup>22)</sup>。

さらに桜井が、「結び」において、近代の青年団論の特色を以下の 3 点に集約しているところが出色である。1 点目は、青年団論が多くの場合、青年団の外部にある「中央・地方の官僚・軍人、もしくは官僚・軍人出身の青年団指導者たちによって説かれてきたこと」であり、一般青年団員の発言が、特に印刷物の形では現れていないことを指摘する。次に、2 点目として、結局のところ青年団論を呈するのは、一部の青年団指導者や関係者に限られ、都市に住む知識人などエリート層は、地方の農村青年や勤労青年層にはほとんど関心を示していなかったことを指摘する。3 点目として、「青年団論はつねにある種の利用的意図から説かれてきた」ことを強調する<sup>23)</sup>。これらはまさに教化による統制と動員とい



う、後に宮地正人らが説明した、青年団体の再編統合の国家的意図を先駆的に言い表している」と評価できよう。また、桜井の指摘する第1の特色は、青年団論に当事者としてのノン・エリート青年団員の志向や、当事者視点での青年団活動の実態が反映されていないことを示唆している。このことは、本研究第Ⅱ部における、筆者の課題と共通する視座である。筆者が着想する半世紀ほど前にこの指摘がなされ、現在までその課題を乗り越える研究が無いということには、これまでの青年団研究あるいは社会教育史研究において、ある「規定性」が通底して存在することがうかがわれる。

社会教育史研究において、本研究で対象とする、近代における、伝統的青年集団の再編統合過程に関する先行研究はそれ自体が多いものではなく、特に『下伊那青年運動史』（長野県下伊那郡青年団史編纂委員会編、国土社、1960）に代表される、青年団自主化運動に着目がなされてきた。これは後述するように、1960年代から1970年代において社会教育（史）研究が自己教育<sup>24)</sup>運動に傾倒するようになると、よりその傾向が強まる<sup>25)</sup>。

この青年団施策を含め、いわゆる「上から」の施策に関する通史的分析は、橋口菊らによって1950年代に着手された<sup>26)</sup>。次いで、宮坂広作による『近代日本社会教育政策史』（国土社、1966）において通史的叙述がほぼ確立し、国立教育研究所編・発行『近代教育百年史第七巻 社会教育1』『同第八巻 社会教育2』（1974）において集大成がなされた。

その中で、1978（昭和53）年からの大串隆吉による、特に長野県の下伊那地方を対象とした一連の青年団自主化をめぐる研究<sup>27)</sup>は、豊富な文献資料に基づいたものである。前掲『下伊那青年運動史』では果たし得なかった、近代における行政村単位での青年集団の再編・統合の過程をモノグラフとして活写している。特にそこでの青年団自主化運動の消長過程を、当時の思想潮流と関わる人脈とに着目しつつ整理したところが高く評価できる。しかし、もの言う「政治青年」の姿は見えるものの、ノン・エリートの一般青年層の日常性は看過されがちである。その意味で、自己教育運動に着目した社会教育史研究の典型として位置づけられよう。

以後、社会教育研究においては、後述する松田武雄による『近代日本社会教育の成立』（九州大学出版会、2004）の刊行まで、青年団施策をも対象とした政策史とその通史的検討は低調であったといえる。1960年頃、社会教育研究において、「青年期教育の二重構造」、すなわち、正規の中等教育機関における教育と前者の代位としての勤労青年教育という、二つのトラックが固定化されることの解消を目指すことに関心が高まっていた。このことが研究の動向にも強く反映されていた。

特に、学界の主流派であったと言ってよい、東京大学の宮原誠一、碓井正久以下、小川利夫、宮坂広作、千野陽一らからは、後期中等教育の対象となる年齢の青年層に対しては高校全入が、それを超えた年齢の農村青年層には、農民大学運動に代表される、生産学習と政治学習が統合化された学習組織・運動の展開が期待されていた<sup>28)</sup>。

その中で、主に宮城県を中心とした検討とはなるが、伝統的青年集団の近代的再編統合過程を実証的・包括的にとらえたのが、不破和彦編著『近代日本の国家と青年教育』（学文社、1990）である。農村社会学研究の流れを引く、社会教育研究者4名による共著である。後述する教育社会学の佐藤守の研究に連なるものともいえる。同書では、近代の青年教育施策が整理された上で、宮城県内の再編・統合事例の分析が行われている。当事者の若者たちの志向を、地方雑誌の記事や公的文書にある若者への批判などから逆説的に読み

解き、それが伝統的青年集団の国家的再編統合に対して批判的・抵抗的なものであることを示した。また、その結果から、伝統的青年集団と青年団組織の併存状況が常態であったことが裏付けられるものとする点 (p.193) は、当事者の志向に着目するという本研究の視座を精査するに当たり、重要な示唆となるものである。

最後に、これらの時期と施策動向に深く関与する、人物・思想研究を整理しておきたい。山本瀧之助に対する小川利夫<sup>29)</sup>、田澤義鋪・下村湖人に関する、永杉喜輔の一連の評伝・論考<sup>30)</sup>、近年では同じく田澤と下村の言行を、公民教育論の観点から再評価する上原直人の論考<sup>31)</sup>がある。また、熊谷辰治郎に関する唯一アカデミックな評伝といえる上野景三の研究がある<sup>32)</sup>。なお、田澤義鋪に関するまとまった評伝は、田沢義鋪記念会代表丸山鶴吉編 (下村湖人著)『田澤義鋪』(財団法人田沢義鋪記念会、1954)のみである。前掲の永杉の文章も、彼が田澤・下村、ひいては日本青年館とも近い立場であったがゆえに、顕彰的な色合いが強い。

このように現段階までの社会教育史研究を俯瞰してみるに、近代における伝統的青年集団の国家的再編統合の時期から戦後への展開までを射程に入れ、体系的に青年団に関する施策と実態を解明した研究はみられない。なお、特に 1900 年代からおおよそ 1970 年代までに至る、青年団と青年教育施策については、戦前／戦後の断絶と戦後の民主化を強調する論調が主であった。その中で近年、戦前／戦後の連続性について本格的な検討が始められている<sup>33)</sup>。

## ② 自己教育運動と社会教育史研究のあいだ

この状況を理解するためには、小川利夫が 1960 年代以降に長くリードした、戦後社会教育史研究の前提を捉え直す必要がある。1964 (昭和 39) 年、小川は社会教育研究の目的は、『社会教育行政 (活動) と国民の自己教育運動との矛盾』を歴史的・現実的にあきらかにすることであると表明した<sup>34)</sup>。これは宮原誠一が示した、「民衆による下からの要求」と「支配階級から」の「上からの要求とが合流し混在している」とする<sup>35)</sup>「歴史的範疇としての社会教育」論に対して、「下から」の自己教育運動に一義的な価値を与えたものである。以後、小川の視座がその後の社会教育史研究の主流を占め、後述するように、自己教育運動に着目した研究が蓄積されていく。結果、国家・行政からの統制に対する抵抗的な運動が注目され、社会教育史研究の関心が、1910 年代以降の官製青年団化が進む時期に集中した。前掲の大串による一連の研究も、そこに位置づけられる。

自己教育運動に視座を置いた近現代社会教育史の通史には、藤田秀雄『社会教育の歴史と課題』(学苑社、1979)を嚆矢とし、藤田秀雄・大串隆吉編著『日本社会教育史』(エイデル研究所、1984)、大串隆吉『日本社会教育史と生涯学習』(エイデル研究所、1998)などがある。上述のように、これらにおける伝統的青年集団の国家的再編統合過程に関する記述は、主に 1920 年代から 1930 年代に展開する青年団自主化運動に集中するものとなる。中でも『社会教育の歴史と課題』『日本社会教育史』両書における、藤田による長野県を中心とした青年団自主化運動の記述は簡明である。かつ挙げられた参考文献も豊富であり、運動を簡潔に理解するとき大いに助けとなる。

しかし、これらの記述において留意しなければならないのは、記述の対象が、執筆当时に自己教育運動として評価される意味において取り上げられていることである。このこと

について、大串隆吉（1981）が整理する<sup>36)</sup>ように、1960年代以降の社会教育史研究が自己教育運動へ強く傾斜した背景には、1960年代から1970年代に幅広く国民運動として展開された民衆史運動の影響があった。いわば、「ものいう人びと」「権力に抵抗する人びと」の歴史を描くことの価値が強かったことがわかる<sup>37)</sup>。

このときに想起されるのが、日本における民俗学成立の契機である。日本の民俗学は、1930年代以降、卓越したオーガナイザーである柳田國男を中心に体系化・組織化されていく。柳田はこの時期の重要なテキストである『郷土生活の研究法』（刀江書院、1935）において、「我邦の農民史は一揆と災害の連鎖であった如き、印象を与えずんば止まぬこととなるであろう（p.25）」と指摘する。柳田は、官学アカデミズムにある史学研究を、「文献中心主義および社会経済史偏重」と批判し、そのオルタナティブたる「新しい史学」として民俗学を喧伝した<sup>38)</sup>。そこには、特に文字を持たぬ農民や庶民の、「日常」の生活史を活写しようとする意図があった。そのため、柳田は為政者やエリートによる文献記録にのみ拠るのではなく、口述による伝承や「もの（民具や金石文、絵画等も含む）」を資料として、庶民の生活や世界観<sup>39)</sup>を解明しようとしたのであった。この態度は、同時期のフランスにおける、アナール学派による社会史研究と共通する部分が認められる<sup>40)</sup>。資料批判に加え、イデオロギーに強く依拠して庶民の歴史を描くことへの強い違和感が示されたのである。

筆者もいわば“common people”（＝庶民）としての人びとの視座に立つ意味において、自己教育運動に偏した社会教育史の叙述に違和感を持つ。前掲した『下伊那青年団史』や大串の一連の研究において対象となった下伊那の若者たちも、日々政治に専心して生活していたとは思えない。それもふまえた「生活まるごと」の中に青年会活動やそこでの学習・運動を位置づけ理解せねば、運動の顕彰とはなるにせよ、彼らについて現代に学ぶ意義は薄れてしまう。

このような価値志向的傾向が強い社会教育史研究についての疑義は、1980年代より山本悠三によって具体的に呈され、2000年代には松田武雄によっても批判が加えられた。関わる山本の主張は、『社会教育概念の史的考察』（梓出版社、1989）、『近代日本社会教育史論』（下田出版 2003）に収録される。山本によると、小川利夫は、「社会教育は民主主義の歴史」としてあらねばならないとしつつも、実のところ、やはり社会教育とは、宮原の示した合流・混在論の枠にあるという現実認識を批判的にも意識していたため、「自己教育運動≡社会教育」という枠組みには自重的であったとする。しかし、小川の影響を受けたその後の社会教育史研究では、かえって「自己教育運動≡社会教育」とする前提が定着してしまったとする<sup>41)</sup>。次いで山本は、民主主義・自己教育というフィルターでもって歴史的事実を取捨選択し、そこで「下から」のみの国家や行政との抵抗の歴史を描き出していくことの危うさを提起している<sup>42)</sup>。

山本の一連の批判は、必ずしも社会教育の学界においてインパクトを持ち得たとはいえないが、その中で松田武雄は、主に山本が示す「社会教育」観をめぐっての批判を加えつつも一定の評価を行った<sup>43)</sup>。松田は、『近代日本社会教育の成立』（九州大学出版会、2004）において、宮原の「下からの要求と上からの要求の合流・混在」とする社会教育の歴史的理解をふまえ、両者の結節点に社会教育をとらえることを改めて主張した。前掲の山本と松田の社会教育観には相違が見られるものの、松田のいう、「（近代の）価値志向的な社

会教育本質論」にもとづく社会教育史、筆者なりにいえば、自己教育運動に傾倒した社会教育史研究が見落としてきたことへの違和感が共有されているといえよう<sup>44)</sup>。

なお、結果として山本は前掲の著作をはじめ、「上から」の社会教育政策の整理を行うことに専心した。松田は前掲『近代日本社会教育の成立』において、「上下」を統制／抵抗といった一面的な見方ではなく、「合流・混在」という視座を以て、社会教育政策の展開と社会教育思想とを時代的に対応させて検討し、再評価を行った。ただし、同書執筆時の松田の観点も、政策と社会教育思想とのすりあわせが中心であり、筆者が着眼する一般の人びとの学習実態にまでには視座が下りるものではなかった<sup>45)</sup>。

つまり、近代を対象とした社会教育史研究においては、絶対的に当事者（特にフォロワーの）視点での施策や運動の実態解明、その分析が欠如してきたのである。これは社会的実践を命題としてきた社会教育研究においては、看過できない課題として挙げられよう。

## （２）青年団中央組織における青年集団史研究

次に、本研究課題としての青年団と若者組との関係に関する言説の構築に深く関わってきた、青年団中央組織における若者組・青年団に関する研究について整理したい。前項で示したように、ここでの「青年団中央組織」とは、青年団の全国組織と財団法人日本青年館とを合わせ呼ぶものである。さらに、青年団の全国組織とは、1925（大正 14）年に設立された大日本連合青年団、それが 1939（昭和 14）年に改組された大日本青年団、さらに同団が少年団等の組織と統合され 1941（昭和 16）年に成立した大日本青少年団、第二次世界大戦後の 1951（昭和 26）年に成立し現在に至る、日本青年団協議会を指す。

財団法人日本青年館は、それらを指導監督・支援するため、内務省関係者を中心として 1921（大正 10）年に設立された半官半民的な組織であり、明治神宮外苑に宿泊・集会機能を持つ施設、「日本青年館」を有する。初代理事長は近衛文麿であり、ここを基盤として近衛新体制運動を支えたブレイントラストである昭和研究会関係者、新官僚・革新官僚、さらにいえば左右双方の思想性を持つ人材が結集し、大政翼賛会結成の基点ともなった。この点に関しては第 2 章において詳述するが、いわば青年団組織を通して国家レベルにおいて、青年層の掌握を担おうとした組織であった。

このように、近代の青年団中央組織は、その役員構成から見ても当事者である青年層が主体性を持ちうるものではなかった。大日本連合青年団の 5 人の理事長は、1926（大正 15）年から 1929（昭和 4）年まで第 2 代理事長を務めた井上準之助以外は、全て内務官僚出身であり<sup>46)</sup>、日本青年館と一体的に運用され、青年団運動を主導していた。

特に大日本連合青年団時代、日本青年館は積極的に若者組に関する歴史研究を行った。そのときに中心的役割を担ったのが、熊谷辰治郎であった。熊谷の略歴とその「研究」については第 2 章で後述するが、村落研究において高い能力を示した職員であった。熊谷は、日本青年館調査部と大日本連合青年団調査部双方に深く関わっていた。このときの熊谷らの研究手法は、主に若者組の条目（規約）を分析する方法である。

第 1 章で後述するように、田澤義鋪による『青年団の使命』（日本青年館、1930）において、「青年団＝若者組母胎」論はまず示された。以後、同論は、大日本連合青年団編『青年宿』（日本青年館、1931）を経て、「若者組」研究の嚆矢となる研究書として後世評価された『若者制度の研究』（下村虎六郎編、大日本連合青年団、1936）<sup>47)</sup>、そして青年団

史の「正史」といえる前掲『大日本青年団史』<sup>1)</sup>に反映されていった。特に『若者制度の研究』は、その所収した若者組の条目自体の資料的価値も高いものとして、戦後しばらくも権威ある研究成果として位置づけられた。

以後、同系統の記述は、戦後における青年団の「正史」といえる、日本青年団協議会編『日本青年団協議会二十年史』（日本青年館、1971）、日本青年団協議会編・発行『地域青年運動 50 年史』（2001）へと継承される。特に前者において、戦後の民主的な新生青年団と戦時体制下までのそれとの差異を強調する認識が見受けられるが、若者組から青年団へと移行する近代的統合についての認識は、大日本青年団史等の記述をふまえたものとなっている。

なお、1970（昭和 45）年には、日本青年館編・発行による『大日本青少年団史』が刊行されている。同書は後藤文夫理事長<sup>48)</sup>以下、熊谷辰治郎をはじめ日本青年館、そして大日本連合青年団以降の青年団中央組織関係者が深く編集に関わっていた。序文にもあるように、1941 年に刊行された『大日本青年団史』の補遺及び続編の位置づけとなっている。その内容はかつて平山和彦が「その叙述は多分に往時の青年団指導の回顧と正当化の姿勢の強いものとなっている<sup>49)</sup>」と評したように、刊行当時の時代状況においては、ことに保守的・復古的論調が強いものとして受けとめられる内容であった<sup>50)</sup>。

以上のように、青年団中央組織による、伝統的青年集団とそれらの近代における国家的再編統合に関する研究においては、1930 年代に確定された枠組み、まずは若者組と青年団との質的・歴史的連続性、次にはそれらが持つとされる、自立性、相互教育性、非政治性等の強調、すなわち、「青年団＝若者組母胎」論に基づく記述が、その後も踏襲されてきた。しかし、戦後、1960 年代の終わりに至るまで、1930 年代から 1940 年代にかけて刊行された、前掲の『青年団の使命』『若者制度の研究』『大日本青年団史』などが、実証的な研究書として読まれてきたことに留意しなければならない。すなわち、研究の体裁を採りながらも、結果として、青年団中央組織が、近世以来の青年集団史の〈管理〉に携わってきたともいえるのである。

この一連の言説構築過程では、第 1 章で詳述するが、田澤義鋪が青年団の結合原理を歴史性と青年期固有の社交欲の発現として価値づけて以降、青年団はそもそも歴史的に農村に遍く存在したものであるとして、国家的な再編統合過程における統制や政治性そのものを薄める志向が存在した。この点は第 I 部で詳細に検討する内容となる。

### （3）周辺領域における伝統的青年集団の再編統合過程に関する研究

次に、主に農山漁村部に対するフィールドワークにより、若者組の近代的統合について実証的に研究してきた領域の先行研究を整理する。民俗学と文化人類学では、近世以前からある伝統的青年集団としての若者組に着目し、その青年団への近代的統合について実証的に検討してきた。また、農村社会学をベースとする教育社会学研究もフィールドワークとそれに基づくモノグラフ分析により、実証的に教育構造の分析を行った経緯がある。以上の 3 領域の成果を概括していく。

## ① 民俗学

まずは民俗学である。日本民俗学のオーガナイザーである柳田國男は、早くから「若者組」へ着目しているものの、それは前記の青年団運動関係者と力点を違い、主に婚姻媒介組織としての着目であった。その中でも積極的に「教育」という言葉は用いないものの、1916（大正5）年発表の「青年団の自覚を望む」<sup>51)</sup>においては、「若連中」のいわば一人前教育における意義を示している。また、1919（大正8）年に朝日新聞に連載された「祭礼と世間」においても、同様に直接的に「教育」の語は用いないものの、「若連中」の「宿即ちクラブ」における教育的意義を示している<sup>52)</sup>。

さらに、中山太郎が『日本若者史』（春陽堂、1930）において、若者組を青年団の母胎として位置づける青年集団の歴史展開と若者組の機能について初めて体系的に論じた<sup>53)</sup>。しかし、中山の資料収集のあり方は柳田や彼の門下生が嫌うところとなり、一部の研究を除き、1970年代以降に著作が復刻されるようになるまで低い扱いを受けてきた<sup>54)</sup>。その結果、柳田直系の民俗学者は、柳田を継承して主に婚姻媒介組織としての機能に関心を寄せた。

その後は、実証研究に基づく「若者組」類型論と、それらの分布と特徴に関心が推移していく。1960年代、瀬川清子は若者組を、厳密な組織形態を持つ「若者組」型と、多くは同輩のメンバーで構成され緩やかな組織形態を持つ、「若者仲間」型に大別されることを整理した<sup>55)</sup>。その後、他の論者からも、宿で毎晩寝泊まりをするのは後者に多いことが指摘され、民俗学ではそれが一般的な理解となっている<sup>56)</sup>。

第1章に詳述するが、当時の日本青年館・大日本連合青年団と柳田國男との間には、密な関係があった。さらに、前述のように、熊谷辰治郎をはじめとした日本青年館・大日本連合青年団調査部の研究能力は、当時においては高い評価を受けるレベルであった。それゆえに、1970代に日本近代史と民俗学を架橋した平山和彦の一連の研究成果<sup>57)</sup>が提示されるまで、青年団運動関係者によって構築された「青年団＝若者組母胎」論とさらにはそれを教育機関とする位置づけが、柳田直系の民俗学においてもしばしば強い影響力を持つ<sup>58)</sup>。この背景については、やはり第1章にて詳述するが、これら言説に対する実証的研究からの批判は、平山を嚆矢とし、岩田重則、中野泰、宮前耕史らによって継承されていく<sup>59)</sup>。特に宮前は「若者組＝教育機関説」、さらに、若者組と青年団とを単系的に連続させる「若者組＝青年団の母胎」論<sup>60)</sup>は、田澤義鋪著の『青年団の使命』（日本青年館、1930）において確立されたことを論証している<sup>61)</sup>。このことは、本研究第I部において重要な示唆となったことを附言しておきたい。

以上のように、民俗学研究における伝統的・青年集団としての若者組の近代における国家的再編統合に関する成果において、特に1970年代以降、若者組と青年団との連続性に関する疑義の視座が強く持たれてきた。なお、このことに関わり、近年、民俗学や文化人類学の領域では、〈伝統〉の構築や「民俗」の生成と権威化の営みを、フォークロリズム（folklorism）という概念で説明することが多い。このフォークロリズムとは、非常に多義的な概念であるが、ひとまず「民俗文化が本来のコンテクスト（文脈）を離れて見いだされる現象<sup>62)</sup>」と定義される。民俗文化の意図的（ときには政治的な）二次利用がなされるような状況であるが、総じて、ローカルな民俗が、より広範な地域を表象するシンボ

ルとなり、場合によってはナショナルなものへと昇華させられることも含む。すなわち、「伝統」や古来の慣習性・継続性といった歴史性を根拠として、制度や行為などの正当性やそれらの存立の意義が示されることである。また、多くの場合、それは「美化」された過去の姿を原像として措定するものとされる<sup>63)</sup>。

なお、本論文第4章が、近代の埼玉県における林業・養蚕地帯を事例としたことに関わり、同様の構造を持つ関東甲信越、東北南部の自治体史等を参照した（【表：序-2-3-1】）。その中でも福島県旧保原村（現：伊達市保原町）の『保原町史第四巻 民俗』（保原町史編纂委員会編、保原町、1981）では、若者組の青年団への統合過程における若者組とおとなとの衝突を描かれるなど、豊富な文献資料に聞き取りも加味した複合的な記述がなされている（pp.375-387）。また、栃木県芳賀町の『芳賀町史通史編民俗』（芳賀町史編さん委員会編、芳賀町、2002）では、若衆の日常的な活動と青年会・青年団の活動とが並行して存在したことが、聞き取りと文献から活写されている（pp.290-294）。

## ② 民族学・文化人類学

日本において、民俗学と密接な関係をもって受容・展開されてきた民族学・文化人類学では、初期のイギリス社会人類学の影響を強く受け、年齢階梯制、同族型と年齢階梯制（＝講組型）村落の措定とその起源遡及に関心が払われてきた。そのため、年齢集団としての若者組に関心が持たれてきた<sup>64)</sup>。これゆえ、本論文で対象とする、近代における伝統的青年集団の国家的再編統合については関心が薄い。その中、ほぼ唯一として江守五夫の研究が、その問題に正対しているといえる。

江守による研究は、『日本村落社会の構造』（弘文堂、1976）の第二篇「明治国家と村落共同体」に収められた2論文である<sup>65)</sup>。独自資料はさほど用いられてはいないものの、興味深い論考である。江守は、年齢階梯制を持ち、引退原理が明確であった若者組が、青年会、青年団に改組されていく過程を注視する。江守は、そこで若者組の構成原理が国家的に改変されていくというよりは、原理そのものが天皇制国家の構成原理として昇華されていったことを指摘する。

江守は1968（昭和43）年の明治百年祭前後、日本の近代化を意味づけ直すムーブメントが活性化したことにも後押しされ<sup>66)</sup>、文献を多用した近代史的アプローチを採用し、国民国家生成というマクロな視座と、個々のムラにおける民俗の変容というミクロな視座とをつきあわせつつ、「近代化」を評価したのである<sup>67)</sup>。

## ③ 教育社会学における農村研究

戦後しばらく、教育社会学においても農村をフィールドとし、構造－機能主義的モノグラムを作成しつつ、農村の教育現象に関わる研究がなされた。その領域において、前掲の桜井庄太郎が、伝統的青年集団とその近代における再編統合に関する言及に先鞭をつけた。さらに竹内利美は、戦前から子ども組と若者組等の年齢集団に関して注目し、戦後早い時期にそれらに関する体系的な記述を行った。戦前に長野県の小学校教員であった竹内は、戦後には農村社会学をベースとし、主に教育社会学の領域で民俗学との境界に位置しながら、社会組織に関する村落社会研究を継続していく。竹内の若者組と青年団への着目は、『日本社会民俗事典』第4巻（誠文堂新光社、1959）の「若者組」の項において示され

る。ここでの若者組の組織類型と若者宿の厳密な区分を行うなどとした整理には、先駆的な位置づけが与えられものの、若者組の国家的な再編統合過程に関しては触れられていない。

竹内の記述は、主に先行研究の整理となっているが、実証研究に基づき、近代における伝統的青年集団の再編統合について詳細に検討を行ったのが、佐藤守『近代日本青年集団史研究』（御茶の水書房、1970）である。ここで佐藤は、集落（≡旧藩政村）単位での若者組から青年団への解体・再編統合過程をとらえた。佐藤の視座は、資本主義の展開過程の中における伝統的青年集団の変容・再編等に寄せられており、研究の目的は、「村落における内的特殊条件と、国家レベルにおける制度的改革、ないしは経済的変動という外的一般条件との交錯のもとで分析（p.12）」することにあつた。集落の分析は、社会人類学的な構造－機能主義的アプローチによるもので、全国に渡り、近世・近代文書と古老に対する聞き取りを活用したモノグラフが蓄積された労作である。この佐藤の態度には、「主として日本民俗学の角度から婚姻習俗の解明のために寝宿慣行と婚姻統制の機能分析に焦点づけられ、その解体過程を村落のレベルで実証的には分析使用としてこなかった（同上）」とするように、従前の、主に民俗学における若者組研究に対する批判が根底にあつた。

佐藤は、集落における伝統的青年集団と、その後身たる青年会等の存立基盤と形態とを、主に入会地維持と集落内での階層の存在等を加味しつつ分類した。結果、「若者組」から青年団に至るプロセスに関して、断絶型、並列型、包摂型の3類型、さらには並列・包摂型を合わせれば4類型が提起された<sup>68)</sup>。後年、さらなる実証研究からの批判を受けたものの<sup>69)</sup>、「若者組」から青年団までの移行・組織化のプロセスが多様であったことを示す、重要な研究成果となった。この点については、第4章にて触れることとする。

#### ④ 日本近代史研究における近代国家成立期における国民統合の視座

前掲の平山和彦らが参照した（あるいは相互に参照しあつた）のは、主に1970年頃から進展した日本近代史研究における、伝統的青年集団の再編統合に関する研究である。代表的論者として宮地正人、鹿野正直、大江志乃夫の三者が挙げられる。

関わる宮地の研究は、主に『日露戦後政治史の研究』（東京大学出版会、1973）に収録される。宮地は、1908（明治41）年の戊申詔書煥発後、1909（明治42）年の頃から1910年代にかけて進められた地方改良運動期における伝統的青年集団の国家的再編統合は、地方改良運動の主要なテーマであるとした。それは伝統的青年集団を村落共同体的秩序的存在として位置づけ、その上で天皇制国家の体系に包摂するものであつた。そのプロセスの性格は、「国家意識と天皇制イデオロギー浸透の障害物・破壊物から国家意識と天皇制イデオロギー浸透の強力な推進主体にすること」に加え、「新知識をもって日露戦争後国家の抱えていた諸問題——勤儉貯蓄・農事改良等——を遂行するところの力強い担い手に転化させること（pp.54-55）」を目指したものであり、それが青年会の設立の背景として意味づけられたのであつた。この宮地の見解は、そのまま平山らにも継承されていくが、「日露戦争を契機として村落共同体的秩序たる若連中・若衆組等の青年団体は急速にその姿を消していく（p.67）」とある見解はやや一面的であり、後述するように、実証研究からその一様なあり方は否定されたといえる。

宮地の検討は日露戦争終了までであるが、大江志乃夫は、『国民教育と軍隊』（新日本



出版社、1974)において、以後の1910年代から1920年代における官製青年団化までを焦点に入れ、地域青年団体の行政的統合による、青年層の包摂・活用をねらった国家的動向を検討した。大江は、内務省と文部省が、「公益事業団体」「修養団体」として青年団を位置付けていく過程を明らかにし、さらに田中義一ら陸軍がその軍事利用をねらい、青年団の組織化に介入してくる際のコンフリクトを詳細にとらえた。また宮地は、日露戦争後に伝統的青年集団が消滅していくとしたが、大江は、戊申詔書煥発後、行政主導での再編統合によって登場してくる「戊申青年会」と従前の若者組の両立、あるいは使い分けの状況が存在したことを指摘する。この状況は、前項で挙げた佐藤守の『近代日本青年集団史研究』からも、伝統的青年集団の再編統合過程における一つのパターンとしてあることがわかる。

一方、鹿野政直は、『資本主義形成期の秩序意識』（筑摩書房、1969）において、日露戦争前後から地域青年団体が再編統合されて行く際、理想の青年像が「平凡」で町村のよりよき成員としてのものであったこと、さらにそれが報徳思想でもって裏付けられていく過程を示した。さらに鹿野は、この志向と過程とが、第二次世界大戦後においても継続する、中等教育段階での青年期教育の二重構造（中等諸学校進学者と在地での補習教育・青年団への包括層とに分かれる）の遠因であることを看破している。

また、武田（長）清子による田澤義鋪研究では、田澤の「道義国家」論が土俗的な庶民のエートスをくみ取りつつ、機関説的な前提に基づく天皇観のもと、脱政治的でかつ報徳的自立観を前提としたものであると評価される。そして武田は、田澤らの「体制内」リベラリズムの同時代的な限界性と今日的可能性を問うた<sup>70)</sup>。武田の研究は、日本青年館・大日本連合青年団の性格を、単に統制的なものとすることから、多面的な理解を導く視座を青年団運動関係者「外」から示したものである。以後の社会教育史研究に大きな影響を与えたといえる。

ここまでの近代史研究は、近代国家における国民統合の一断層として官製青年団化までのプロセスに言及するものがほとんどであった。これに対し、1980年代には、まさに伝統的青年集団と青年団とを研究対象とした多仁照廣の研究が提示される。多仁の代表作は『若者仲間の歴史』（日本青年館、1984）である。同書は、1770年代以降を対象とし、伝統的青年集団の性格とその青年団への展開過程を、主に豊富な事例研究から実証的に解明しようとしていく。同書は、古川貞雄による『村の遊び日一休日と若者の社会史一』（平凡社、1986）と並び、近世から明治維新後にまで至る、伝統的青年集団の実態に関する社会史的研究として位置づけられ、その資料的価値も高い。

続いて多仁は、「青年団の母」と位置づけられてきた山本瀧之助の日記を公刊するに当たり、主導的な役割を果たした。結果、多仁の編著として『青年団活動史山本瀧之助日記』全4巻（日本青年館、1985～1988）が刊行された<sup>71)</sup>。『日記』の公刊は、山本瀧之助と官製青年団化のプロセスに関する研究を深化させるものとなった。『日記』刊行以前の山本像は、小川利夫を嚆矢とし、官製青年団化に至る青年団運動イデオログとしての面が強調され、批判的に論じられてきた<sup>72)</sup>。しかし『日記』刊行後は、山本の志向に底流する地域主義に着目し、その可能性と限界とを論じる視座に加え、改めて彼の地域社会に根ざした青年教育論に対する再評価も提示されている<sup>73)</sup>。

【表:序-2-3-1】 参照した主な自治体史（民俗編）

編者	書名	出版者	刊行年
福島県教育委員会編	『福島県教育史第1巻』	福島県教育委員会	1972
猪苗代町史編さん委員会編	『猪苗代町史民俗編』	猪苗代町史出版委員会	1979
保原町史編纂委員会編	『保原町史第四巻 民俗』	保原町	1981
梁川町史編纂委員会編	『梁川町史第11巻民俗編Ⅰくらし』	梁川町	1991
勝田市史編さん委員会編	『勝田市史 民俗編』	勝田市	1975
東海村史編さん委員会編	『東海村史民俗編』	東海村	1992
龍ヶ崎市史編さん委員会編	『龍ヶ崎市史民俗編』	龍ヶ崎市教育委員会	1993
牛久市史編さん委員会編	『牛久市史 民俗』	牛久市	2002
芳賀町史編さん委員会編	『芳賀町史 通史編 民俗』	芳賀町	2002
太田市編	『太田市史 通史編 民俗（上巻）』	太田市	1984
高崎市史編さん委員会編	『新編 高崎市史民俗編』	高崎市	2004
浦和市史総務部市史編さん室編	『浦和市史 民俗編』	浦和市	1980
飯能市史編纂委員会編	『飯能市史 資料編Ⅵ 民俗編』	飯能市	1983
岩槻市史編さん室編	『岩槻市史 民俗史料編』	岩槻市	1984
群馬県史編さん委員会編	『群馬県史 資料編25 民俗Ⅰ』	群馬県	1984
八潮市編	『八潮市史民俗編』	八潮市役所	1985
三郷市史編さん委員会編	『三郷市史第九巻 別編 民俗編』	三郷市	1991
蕨市	『新修蕨市史 民俗編』	蕨市	1994
静岡県編	『静岡県史 別編1 民俗文化史』	静岡県	1995
長野県編	『長野県史 民俗編 第一巻（一） 東信地方 日々の生活』	長野県史刊行会	1986
長野県編	『長野県史 民俗編 第二巻（一） 南信地方 日々の生活』	長野県史刊行会	1988
長野県編	『長野県史 民俗編 第三巻（一） 中信地方 日々の生活』	長野県史刊行会	1989

## ⑥ 伝統的・青年集団の再編統合に関するモノグラフ研究の蓄積

前掲の宮地や鹿野らの研究は、主に先行研究や既発表史料等からの事例の援用が主であった。それに対し、特に 1980 年代以降、自治体史編さんの進展とも関わり、伝統的・青年集団が青年会、そして青年団組織へと改組統合されていく過程を、特定の行政村や集落の実態に視座を伸ばして論究するモノグラフが蓄積されていった。その結果、特に日露戦争後からの青年会・青年団の活性化の様相をとらえるに、当時の青年層が天皇制イデオロギーを無批判に受容していたのか等々、「官製」の青年会・青年団を単に国民統合の装置として見なすことへの疑義が呈されるようになった。

さらに、前掲の佐藤守や大江が指摘していた、近代における青年集団の二重構造、特に 1920 年代にほぼ官製青年団化が完了した後も、伝統的・青年集団が青年団と併存していく状況に着目する視座が共有されていった。筒井正夫の論考を嚆矢とし<sup>74)</sup>、以後、住友陽文<sup>75)</sup>、飯塚一幸<sup>76)</sup>、鬼塚博<sup>77)</sup>と、この「官製」青年会が受容されていく背景を、単に教化的なものとするところから、拡張論じていく流れが展開する。これらの諸論考は、結果として、伝統的・青年集団が青年会・青年団へと改組されていく過程を意味づけ直したものと言える。さらに、両者の近代における併存について、及川清秀<sup>78)</sup>、布川弘<sup>79)</sup>、平田諭治<sup>80)</sup>らの具体的な論考が示されている。

及川は、神奈川県内の事例をもとに、戊申詔書煥発後、町村単位での青年会統一の流れがある一方、集落単位の支部会では、青年層の自主性、すなわち若者組の機能が残っていることをとらえた。これにより、及川は、「地方は上からの制度的な影響を受容しながらも、実質的には表面的な変更にとどめざるを得なかった<sup>81)</sup>」とし、実態に即しつつ、近代の伝統的・青年集団の統合過程を論じた。同様に、布川は、1900 年代からの広島県大崎下島における、伝統的・青年集団の青年会への解体・再編過程を分析した。そこでは若者組が明治に至っても従来の活動を展開させ、教員（学校的価値観）と対立した様相が示されている。「公式」の青年会と、日常の生活次元にある論理に基づく若者組とが併存していたわけである。さらに布川の成果においては、学校を経由した立身出世観が、その両者の間隙を埋めていく過程の存在が示唆されている。平田は、1910 年代、福島県旧湯本村において、1890 年代に大字単位で自然発生した青年層主導の会と、官立の行政村単位で組織された青年会とが併存した状況と、両者の志向の差を明らかにしている。

最後に、自治体史と郷土関係資料においても、これら青年集団の二重構造に関わる指摘が散見される。本章に前述した民俗学に関する記述と同様、林業・養蚕地帯を中心とした関東甲信越、東北南部の自治体史と郷土資料等を参照すると、例えば萩原進『群馬県青年史』（群馬県神道青年会、1957）は、古代から執筆当時の戦後までを射程に置き、群馬県内の青年集団の成立と展開を豊富な文献資料で論証した好著である。特に近代における青年集団の二重構造についての例示（pp.133-137）は、本論文第 5 章においても筆者の主張の傍証となるものである。また、自治体史の資料編の若者組等関係資料に見るべきものがある<sup>82)</sup>。

## ⑦ 近代日本における「青年」あるいは「青年期」の成立・定着に関する研究

さらに、伝統的・青年集団の統合過程に深く関わってくるのが、近代日本における「青年」あるいは「青年期」の成立・定着に関わる言説分析を主とした歴史研究である。この重要

な成果も事前に示しておきたい。

本研究に重要な示唆を与えるのが、まずは田嶋一「共同体の解体と〈青年〉の誕生」(中内敏夫他『教育—誕生と終焉』藤原書店、1990)である。同論文で田嶋は、山本瀧之助の生涯を軸に置きつつ、近代に成立した青年の階層分類を行った。続いて「青年」をめぐる構築主義的な言説分析に基づくのが、北村三子『青年と近代—青年と青年をめぐる言説の系譜学—』(世織書房、1998)、木村直恵『〈青年〉の誕生 明治日本における政治的実践の転換』(新曜社、1998)である。両研究は、近代の言説空間における「青年」概念の定着化と「若者」駆逐の過程を、近代の学歴・立身出世を尊ぶエートスを柱とし説明するものである。また、多仁照廣『青年の世紀』(同成社、2003)は、多仁のそれまでの山本瀧之助研究をふまえつつ、青年概念の成立と展開とを、主に青年団との関わりに注目して考察したものである。最後に、和崎光太郎『明治の〈青年〉—立身・修養・煩悶—』(ミネルヴァ書房、2017)は、特に1880年代以降に言説空間に表出してくる〈青年〉像と〈青年期〉の内実を、詳細にテキストを検討して分析を加えた。特に青年心理学の浸透に関するプロセスを丁寧に明らかにした結果、1900年代以降、「青年」が「不安定」で「教育の対象」であることが、識者の中で一般化されていく過程が明瞭に示されている。

#### ⑧ 周辺領域における伝統的青年集団の再編統合過程に関する研究の特徴と得られる示唆

本節で既に述べたように、民俗学研究での近代における若者組の国家的再編統合に関する成果は、若者組と青年団との連続性に関して疑義が示されて来たことが特徴として挙げられる。また、文化人類学や教育社会学での議論は、社会教育史での通説である、伝統的  
青年集団の単系的な青年団への移行を、実証的に否定するものとなっている。これは「青年団＝若者組母胎」論を揺るがし、ときに否定するものである。

さらに、以上見てきたように、日本近代史研究における伝統的青年集団の再編統合に関する研究は、日露戦争と地方改良運動以降、地方にある青年層を統制・動員し、以て町村、ひいては国家を支える、よりよき国民として形成させていくプロセスと、その論理の解明を中核としてきた。その枠組みをふまえた上で、モノグラフを用い、地域の実情や日常生活論理、青年層の関心にも目が配られ、施策や運動を受容する青年層の視座に立った論考も蓄積されてきた。そして、いわゆる若者組と青年会・青年団の併存という、近代における青年集団の二重構造の状況についても実証研究が蓄積されてきた。

近代における若者組の再編統合過程に関する青年団論の通説と、周辺領域における実証的な研究の成果との差異は、青年団指導層や戦後の社会教育研究者によって「上から」示された青年団の結合原理と、当事者の立場から見た、いわば「下から」の結合原理との乖離が示唆されるものである。また、周辺領域における先行研究からは、近代における全国組織化を伴う青年団の組織化は、「人工的」なものであることが改めて意識させられる。

なお、以上整理した隣接領域の先行研究において課題として挙げられるのは、当事者、もっと言えばノン・エリートのミニマムな生活圏における、日常生活や日常意識に立脚した視座の希薄さである。民俗学に代表される構造—機能主義的モノグラフにおいて、よりその傾向が強いことは上述の通りである。前述の通り、近年の日本近代史研究でのモノグラフは、より日常性や当事者の視点に立脚して叙述されているが、以前の国家レベルでの

叙述では、自ずからマクロな視座からのものにならざるを得なかった。また、よりミニマムな地域社会を対象としたモノグラフであっても、主に経済史的手法に依拠したものでは、用いる資料の限界もあり、当事者個々人の意識感覚にまでは言及し切れてはいない。

#### （４）社会教育学研究における戦後地域青年団研究の視座——遊ぶ青年／学ぶ青年——

##### ① 「やくざ踊り」の位置づけ

次に、本節冒頭に掲げた近現代、特に戦後における地域青年団の活動実態やその結合原理に関する先行研究を整理する。

前節に挙げたように、戦後農村における青年団の復活には「やくざ踊り」などに代表される娯楽的な志向が非常に強く働いていたことが指摘され、従前より社会教育研究においては、概ねこの時期の地域青年団の活動は批判的に位置づけられてきた。結果、「やくざ踊り」や演芸会などは、早くに「共同学習」に代表される「高次」の学習活動に移行されたものとして社会教育史上は描かれる。しかし、この通説に関しては、1950年代早々には消滅したとされる演芸会がそれ以降も残っていくこと、演芸会と青年演劇や生活記録運動とが併存していた実態が報告されている（第5章参照）など、実態面から見て説明できない部分が多い。

##### ② 集落青年会をめぐる視座

さらにいえば、これらの活動は主に集落青年会（集落単位での青年団組織<sup>83)</sup>）において行われることが多かった。しかし、これまでの社会教育研究での前提を振り返ると、戦後復活した青年団組織に関しては、市町村単位の組織における学習活動への主体的な取り組みや、前掲のように自己教育運動としてとらえられるものに主眼が寄せられており、集落青年会の活動実態にはほとんど注目されてこなかった。以下、社会教育研究では、なぜ集落青年会の活動を捨象してきたのか、社会教育史研究が本格化した1960年代前半以降を中心に概観してみたい。

小川利夫は「青年問題の現状と認識」（1961）<sup>84)</sup>において、「地域青年団の歴史的な性格」を問題とした。結論は、集落単位の組織を青年団組織の基盤とすることへの否定的な見解である。第3章において詳述するが、「部落青年団（筆者注：集落青年会）」の結合原理が、青年期に共通する「素朴な結合要求<sup>85)</sup>」であるとする、茨城県の実践家山口武秀の着目を評価しつつも、「青年団運動の特殊性を『青年の素朴な結合要求』のみに求める氏の見解は、非歴史的だといえよう（傍点原文）」とし、結論として山口が「青年団組織の基礎は部落だといまなお固定的にとらえている」ことを批判する<sup>86)</sup>。さらに、1910年代以降の官製青年団化の中で編成された青年団にしても、そもそも市町村単位で組織されたもので、「その基本的な組織原則は、もはや部落ではなく新しい市町村や県・国家の青年としようとした点に求められる」とした。制度的にみても戦後社会教育は市町村主義であり、青年学級も市町村単位での開設申請が前提であった。研究者の視座も市町村単位、あるいは昭和の大合併前の旧町村範囲における、公民館区（＝学区単位）での青年集団やサークルによって行われた学習活動や、青年学級、公民館活動等にあった。

1960年代以降、社会教育研究における小川の影響力は増していく。かつ本節で前掲したように、自己教育運動を重視する傾向と相まって、社会教育研究では戦後の集落青年会

の実態は等閑視された。

さらに、同時期の日本社会教育学会における宿題研究の成果刊行物である、日本社会教育学会編『農村の変貌と青年の学習（日本の社会教育第6集）』（国土社、1961）の内容に目を配ってみたい。この頃には共同学習の限界性が認識され、主要な論者は、生産学習と政治学習の統一の可能性を、1960（昭和35）年に発足した信濃生産大学に始まる、農民大学運動に求めていく時期であった。ゆえに、主に農業を中心とした生産学習と関わる営農組織の編成・再編に関心が寄せられていたため、結果として同書所収の論文では、若干、集落組織への言及が見られる<sup>87)</sup>ものの、やはり市町村単位での公的な学習支援とそれによる若者の組織化に関心が寄せられていたことが確認できる。

こうして振り返ると、戦後農村の民主化の担い手として「新生」青年団に期待した行政関係者や研究者、心から集落（ムラ）の民主化を願った人々にとっては、やくざ踊りや「お祭り青年団」は享樂的あるいは非道德的として否定されるものであったのである。前述のように、研究者の関心は、近代の青年団については、青年団自主化運動を中心とした動きに寄せられた。さらに戦後についても、いわば自己教育として評価される活動、積極的な若者へ焦点化されてきた傾向は否めない<sup>88)</sup>。共同学習提唱とその停滞を経て、1960年代以降、社会教育研究では、生産学習と政治学習に励む、いわば「政治青年」に対して高い価値が置かれ続けた<sup>89)</sup>。

### ③ 集落青年会の実相理解

さて、上記の整理を振り返って改めて考えるに、果たして当時の若者たちは地域変革と生活課題の解決を一義とし、青年団に集まっていたのであろうか。戦後青年団活動のピークといえる1960年前後においても、絶えず「お祭り青年団」への批判が、同時代の日青協での全国青年問題研究集会の報告にみられる<sup>90)</sup>ことからしても、必ずしもそうとはいえない。それゆえ、ここには当事者たる若者たちの志向に目を配る観点が欠如していると言わざるを得ない。

このように、1960年代までの社会教育研究における青年団研究、後年の社会教育史研究においても、理論・実践上の関心に乗らなかった青年像や青年団活動は等閑視されてきており、戦後の青年団像を一面的にしかとらえてこなかったきらいがある。このことは戦後青年団に関する研究において、積極的な青年が参加する市町村単位の組織にのみ着目してきたことから明らかである。少なくとも1960年代に始まる高度経済成長の時期までは日常生活圏であった集落（ムラ）が、封建遺制としても批判され、新生の市町村に期待する志向があったにせよ、従来の戦後青年団像は実態としてではなく、理念を示してきたという批判は免れない。

このことは、当事者たる青年からみた、いわばイーミック（emic）<sup>91)</sup>な意味において、青年団に結衆した意味を問う観点を欠如させるものである。青年団論の展開と対応させつつ、当時の地域青年団の実態と若者の意識を分析することで、日常性に立脚した青年団組織の結合原理を解明することが求められるのである。

そこで他分野の成果にも目を配ってみたい。終戦直後から社会教育行政からの現状報告等にくぐり踊りの実施状況が散見されるが、特にまとまったものでは、高木護編『やく

ざ踊り 戦後の青春 1 (たいまつ新書 33)』(たいまつ社、1978)<sup>92)</sup>があり、また流行歌分析からもその流行の諸相と起源に関してうかがい知ることができる<sup>93)</sup>。これらの報告を受けつつ、北河賢三が『戦後の出発 文化運動・青年団・戦争未亡人』(青木書店、2001)において、やくざ踊りの全国的な隆盛の諸相と、関わるおとな・当事者それぞれのまなざしを交錯させる。同書がはじめて、戦後史に農村のやくざ踊りの時期を意味づけていった点が評価される。しかし、終戦直後という設定年代の制約もあり、その後のやくざ踊りと地域青年団との関係の推移は検討されていない。

次に、戦後、農村調査をもっぱらとした学問領域に目を転じてみる。民俗学でも戦後に膨大な報告・民俗誌を蓄積させているが、あくまでも関心は、前掲のように近世以来の伝統的青年集団の機能・組織の遡源と類型化、そして近代における国家による改組統合の過程に関心が寄せられている。そのため、戦後の状況に関しての報告はあくまでも補足的である。本章でも整理したように、民俗学・文化人類学による年齢階梯制に視座を置いた若者組研究も民俗学と同様に機能の遡源と類型化に主眼がある。このように社会教育学のみならず関連領域に関してみても、終戦直後から 1960 年頃、高度経済成長にさしかかる時期までの集落青年会の実相は、十分にとらえられていないことがわかる。

これらの課題を明らかにしていくためには、当事者の視点とその集落青年会の置かれた地域特性を理解する必要があるといえよう。その際に有効なのは、当事者の口述と生活記録、日記等を用いた民俗学的・社会史的アプローチであり、これにより、当事者の意味づけ、当事者の人間形成における青年会の意味を読みとっていくことができると考える。

### 第 3 節 本研究の目的と方法と研究の意義

#### (1) 本研究の目的

以上のように、先行研究の整理の結果、青年団のプリミティブな結合原理については、その望ましき姿に対しての言及はなされてきてはいるものの、十分な検討がなされてきたとは言えない。さらに言えば、社会教育史研究と青年団中央組織における青年団研究においては、当事者たる青年層の日常性に基づく、実証的な研究が欠けてきたことが明らかである。

ゆえに、改めて示すに、本研究の目的は、近現代の青年団がどのような原理で青年層を結びつけていたかを明らかにすることにある。その際、青年団の全国組織化が展開していく 1900 年代から、その組織と活動が顕著であった 1970 年代までを主たる対象とし、エリートの言説レベルでの認識と、地方で青年団に加入した勤労青年層(一般の若者)という、「ノン・エリート」の実態から読み取られる視座とに分けて解明を行う。

そのため、具体的に以下 2 つの課題を設定する。

まず第 1 の課題は、伝統的青年集団としての「若者組」と近代に成立した青年団とを歴史的・質的に結びつけ、それらを美化・理想化し〈教育的〉なるものとしていく言説群、すなわち「青年団＝若者組母胎」論が、構築・再生・定説化されていくプロセス、さらに戦後の青年団論における、青年団の結合原理をめぐる言説をたどり、それらに見られる、望ましき青年団像や結合原理を明らかにすることである。続いて第 2 の課題は、当事者の若者から見た、近現代青年団の実態とその結合原理を明らかにすることである。

これにより青年団が自明のものとしてあった時代の結合原理が、理想像／実態双方から

明らかになる。両者の関係の検討により、現在の地方における、特に若者を対象もしくは担い手とした中間集団の活性化／再組織化に示唆を与えることが期待される。

## （２）本研究の方法

前掲の第１の課題については、言説研究、特に教育言説研究の方法にならい、関わる各種テキストの分析を行う。

同じく第２の課題については、青年団報、生活記録文集等などの文献資料、日記、インタビューデータ、その他断片資料を活用し、一般の若者の日常性に立脚した生活世界の再構成を試みることで課題を解明するものとする。なお、事例としては、近代から戦後までの青年集団の二重構造をみるにあたって、埼玉県旧名栗村（現：飯能市）を対象とした。旧名栗村は近代から長きにわたって合併せず、社会組織の連続性が明確であり、関わる資料集積がなされていたゆえである。戦後の地域青年団の実態に関しては、長く農村構造を残し、伴って青年団組織が比較的長く継続した岩手県の農村地帯の２事例（花巻市くぬぎのめ 目青年会、旧三陸町浦浜青年会）を主な事例として取り上げた。それゆえ農村構造が維持された 1970 年代までを本研究の対象とした。

なお、これらの事例については、能動性・自立性に特に着目した。旧名栗村では当初は行政的介入がありつつも、その後は若者たちが能動的に学区・全村単位の青年会活動を展開させ、一方として集落レベルでの自立的な活動も続けられたところに特に着目する。目青年会では、終戦後、行政的介入がないままに自立的に活動を再開させた。浦浜青年会では当初は行政的介入がなされたものの、やはりその後に能動的・自立的な活動が展開された。この能動性・自立性がどのようにして形成されていくのかが、第２の課題を解明するヒントとなると考える。

また、本研究では、① 1900 年代から 1930 年代にかけての青年団組織が国家的にも注目されていく時期、続いて、② 終戦直後から 1960 年代にさしかかった頃までの青年団史上の最活性期、さらには、③ 1973 年頃から 1982 年頃までの一時的に「青年団第二の高揚期」と評される時期、という 3 つの時期に着目する。①の時期に関しては、主に旧名栗村の事例、次の②の時期に関しては、主に目青年会の事例、さらに③の時期に関しては、主に浦浜青年会の事例により、当事者たる若者の視点から青年団の結合原理を探るものとする。

## 第４節 研究方法および視点の定義

以下、前掲した研究方法および視点を検討・定義する。

### （１）教育言説研究

ここでいう「言説」とは、英語ではディスコース（discourse）、フランス語ではディスクール（discours）が原語である。辞書的には講話、講演、論説、説明、談話などといった意味であり、あることがら・思想などについての語りやそれら総体を指すものとして用いられる。「言説」として意識化された時点で、それは何か不可侵の「聖性」や権威性を帯びているともいえる<sup>94)</sup>。また一方として、よくよくその根拠を考えると、それが曖昧ともなっていることが多く、いわば「暗黙の前提」が底流しているのである<sup>95)</sup>。

このことをふまえ、以下の今津による「教育言説」の定義を本論文においても採用する。



教育言説とは「教育に関する一定のまとまりをもった論述で、聖性が付与されて人々を幻惑させる力を持ち、教育に関する認識や価値判断の基本的枠組みとなり、実践の動機づけや指針としても機能するもの」をいう<sup>96)</sup>。

さらにいえば、そもそも「言説」を研究するという再帰的な問いは、教育界において成立しやすいのではないか。このことに関し、広田照幸は、ある時期から「教育の自律性」や「教育の独自性」を標榜し、教育関係者が「独自の世界」を構築してきたがゆえに、独自の価値基準や独自の「学問のフロンティア」が形成され、社会の変化と無関係に独自の価値基準と利害をもった「業界」が成立したこと、それがゆえに「教育言説」が閉じた回路で自足的に発展を遂げることを可能としたとする<sup>97)</sup>。この観点によると、国家的な管理・統制の中での教化策や準戦時体制化以降の「皇民化」カリキュラムなどは、その根拠を国体や神威に帰する、究極の教育言説の塊であったともいえるのである。

この「教育言説」という語が、アカデミズムの中に位置づいて久しい。日本で教育言説研究が本格化したのは、1990年代以降のことである。エポックメイキングな事象は、1994（平成6）年、「教育言説」が『教育社会学研究』第54集（日本教育社会学会編、東洋館出版社）においてそれが特集されたことである。同書中における今津孝次郎による論考、「教育言説としての『生涯学習』」は、教育言説の「ナショナルレベル」への教義化・政策言語化がどのようなしかけにおいて成立していくのかを、特に言説を発する主体である「権威」とそれを媒介し強化するメディアに注目しつつ分析する、一つの研究モデルを提起した。なお、今津は、1990年代から若手社会科学研究者と教育言説の研究会を催していた樋田大二郎らのグループと合流した。その研究成果は、今津孝次郎・樋田大二郎編『教育言説をどう読むか—教育を語ることばのしくみとはたらき—』（新曜社、1997）へと結実した。

今津・樋田らのアプローチは、主に学校教育に関するものであったが、一方として広田照幸は、家庭・地域社会をもその射程に含めた歴史社会学的アプローチを以て、教育言説研究に取り組んだ。広田は1990年頃より「ことば」に着目した歴史社会学的研究に着手しており、歴史社会学的アプローチによる教育言説研究の方法論的整理を、「教育言説研究の課題と方法—歴史的アプローチを通して—」（『アカデミア人文・社会科学編』第63号、南山大学、1996）において行っている。なお、広田の関わる一連の研究は、『教育言説の歴史社会学』（名古屋大学出版会、2001）に収録されている。同書では、「教育的」といった、曖昧ではあるものの、何かしらの権威性とアカデミックな含意性を有する語、およびそれに纏わる語りとして、教育言説の生成過程が解明されている。この際、雑誌や新聞などの文字メディアに基づき解明することに加え、ときに量的なデータでもって曖昧な教育言説を喝破していく研究スタイルが提示された。このスタイルは、同書の前に刊行された『日本人のしつけは衰退したか—「教育する家族」のゆくえ—』（講談社現代新書、1999）において、ほぼ完成されたものといえる。

特に本論文第Ⅰ部は、官製的運動としての青年団運動において、政治的意図をもって構築された言説が、「伝統」を根拠としつつ、「教育」性を帯び、まさしく教育言説として現在にまで至る過程を分析するものとなる。研究の進め方については、今津孝次郎の教育

言説分析を参考とする。今津の整理した教育言説研究は、言説の生成過程を単に追うのみならず、その生成に関わる権威や国家権力、運動などの恣意性を明らかにするものである。このことで青年団に関わる施策と言説の生成過程を関連づけて検討し、国家、社会教育行政、青年団運動指導者からみた青年団の役割とその意味を再考し、さらにはそこに看取される課題を明確化させる。

今津の示した研究の視点は以下の通りである<sup>98)</sup>。

- ① 一定の教育言説がいつごろ創出され、その創出者は誰であり、どのような機関や組織であったか。
- ② それに対する別の「対抗言説」が誰（何）によってどのように対置されたか。
- ③ せめぎあう教育言説が、どのようにしてマスメディアなどで取り上げられ、流通し広がっていったか。
- ④ 教育言説は、立法や行政、司法にいかなる影響力をもたらしたか。逆に、立法や行政、司法が教育言説の教義化にどうはたらいたか。
- ⑤ 教育言説は、どのような教育実践をどのように導き出したか。
- ⑥ 教育言説の教義化において、学問はいかなる役割を果たしたか、など。

上記の6点は、今津・樋田編の前掲書において、複数の著者において試みられており、それぞれ成果を示している。

具体的なテキストとしては、青年団中央組織が刊行した著作類を主に、辞書、雑誌記事類、さらに戦後に至っては、社会教育の現場に近い人々の目に留まりやすい『社会教育』（全日本社会教育連合会刊）、『月刊社会教育』（国土社刊）等の雑誌類、青年団の研修に用いられたテキスト類等を取り上げ、分析の対象とする。

## （２）社会教育史研究における「民俗誌」的方法

現在、社会教育・生涯学習での学習過程分析等にも用いられているのが、学習の「場」を参与観察し、ときにアクションリサーチのような参加型アプローチを試みつつ、そこで生成されている「学び」の内容とそのプロセスを把握する、状況論的アプローチである。特に、会話や発話の文脈性に着目したエスノメソドロジーも含め、特に「ことば」に着目し、情動的・相互行為的に「語り」や物語（ストーリー）が生成されていく過程に着目した研究を、ナラティブアプローチと総称する傾向にある<sup>99)</sup>。

参与観察やインタビューの成果を記述した報告・作品は、元来、文化人類学（社会人類学）で用いられてきたエスノグラフィー（＝民族誌）の語を以て呼称される。ところで、本研究における筆者の関心は、眼前にある活動や会話を用いた営みを記録し、描き出すことではなく、過去のある時における歴史的世界、特に個人の主観的世界における「意味づけ」及びその個人の属する集団によって生成されていた実践の場、そこで共有されていた価値観などを解釈して描き出すことにある。さらにいえば、反復されてきた日常生活、すなわち日常性に関する関心がそこにはある。この記述的アプローチは、従来、日本民俗学が行ってきた「民俗誌」をつむぐ営みに近い。住民が無意識に行っており、過去から多世代を経て伝承されているであろう事象を「民俗」とし、眼前にある「民俗」をもとに、一

年や一生という時間軸を加えつつ、日常性に立脚した歴史的世界を再構成していく。この記録が「民俗誌」として位置づけられる<sup>100)</sup>。

1960年代以降の民俗学で定着化する、ムラを有機体としてとらえ、その文脈で民俗事象の意味をとらえようとする構造－機能主義的モノグラフとしての民俗誌は、自然村の構造及び諸組織の機能を腑分けし、地域構造論の議論を深化させるなどの一定の成果を示した<sup>101)</sup>。しかし、従来の民俗誌には欠陥もある。まずは、民俗学成立以来の課題ともいえるが、口述へ過度に依存し、日常に「反復」される生活に着目するがゆえに、「いつ」のことかという絶対年代を欠いた、曖昧で牧歌的な世界を描き出す傾向があることである。さらに構造－機能主義的モノグラフは、その認識の前提として安定した状況を設定する。それゆえ甚だ静態的な叙述となり、村落社会の変動をとらえることが難しい傾向がある。これは本章第2節で取り上げた、佐藤守『近代日本青年集団史研究』においても共通する課題である。

次の課題は、民俗学では個人の経験や語りが、すぐにその属する集団やムラを代表するものとして昇華される傾向があるため、眼前にある語り手そのものへの問いを捨象することである。そもそも構造－機能主義の根幹には、「構造が意識を規定する」唯物論的な前提があり、個々人の主観が軽視される傾向がある。

その中、社会変動における個人、特にリーダーの役割に着目した民俗学者・宮本常一は、「意識が存在を規定する」、いわばポスト機能主義的な感覚を豊富な見聞から持ち得ていた。この宮本を嚆矢として、集団やムラの変動について、個人史を通して理解する意味において、ライフヒストリーの導入がなされてきた<sup>102)</sup>。さらには、「生き生きとした」人びとの姿を描く叙述法としてもライフヒストリーが導入されてきた傾向が看取される<sup>103)</sup>。

なお、本章第2節で取り上げた柳田國男の歴史研究批判は、資料（史料）論批判としてもとらえられる。本章でこれまで整理してきたように、青年団研究を含め、社会教育史研究では、当事者（特にフォロワーやノン・エリート）視点での施策や運動、具体的な実践の実態解明とその分析が十分であったとはいえない。これは資料的限界として片付けられてきたことかもしれないが、それでは文字なきところに歴史は存在しないことになる。となれば、記録されない実践は記憶とともに霧消してしまう。このときに特にオーラリティ（語られたこと／語られること）に着目する意義があろう<sup>104)</sup>。

本論文第Ⅱ部では、個人の経験を重ね合わせ、文献資料等が残されていない実践の掘りおこしを行う意味において、また、ライフイベントに対する個人の意味づけを解釈するためにダイアログを提示した。

## 第5節 本論文の構成

本論文はⅡ部構成となっている。

まず第Ⅰ部（第1章～3章）では、近代以降の青年団論の中で伝統的青年集団を青年に改組統合する過程がどのように説明され、青年団の結合原理がどのように語られてきたのか、またその背景を言説分析の方法で整理するものである。まずは近世から存在する若者組と近代に成立する青年団とを、質的・歴史的にも連続させ、両者を〈教育〉的なものとして意味づける言説が成立・定着し、現在にまで至る過程とそこに働く力学を言説分析から解明する。また、その過程で示された青年団の結合原理に関する言説の

内実に関しても考察を行う。次に戦後、特に 1960 年前後から 1970 年代における青年団の結合原理をめぐる言説の展開を、「素朴な結合要求」と「たまり場」というキーワードを軸に整理し、その背景を考察する。

第Ⅱ部（第4章～6章）はまず、近代山村における青年集団の二重構造に着目した実証研究から、当事者である青年の志向性に着目して青年団の結合原理を考察し、第Ⅰ部で分析した言説の構築性を裏付ける。以後は戦後における地域青年団の活動実態を対象とし、青年団組織の結合原理について、日常性に立脚し当事者の志向性や観点に着目して解明を試みた実証的研究となる。ここでは、当事者である若者の日常性や意識感覚に立脚し、若者側からみた近現代における地域青年団の実相とその結合原理や意味を解明する。その際、特に、能動的・自立的な活動が展開するときに鍵となる、対話的空間としての「たまり場」と、そのもつアジール<sup>105)</sup>性に着目する。

第1章では、近世以来の若者組像が 1900 年代からの青年団論の中で「弊風」から徐々に「美風」へと転じていく過程を整理し、近代における「青年団＝若者組母胎」論構築の背景について考察を行う。

第2章では、戦後、「青年団＝若者組母胎論」が青年団論の中で再表出していく過程を整理し、戦後における「青年団＝若者組母胎」論再表出の背景について、日本青年館の周辺から「田澤精神」が称揚された3期に着目しながら検証する。

次に第3章では、戦後、特に 1960 年前後における、青年団の結合原理をめぐる、若手社会教育研究者と現場に近い評論家らの言説の衝突あるいは乖離を整理し、その背景を考察する。その後、次に、やはり同時期から 1970 年代以降において、「素朴な結合要求」と通底する「たまり場」というキーワードが、青年団論において意識的に用いられていく過程を整理し、その意味を考察する。

第4章では、埼玉県旧名栗村に 1890 年代から存在した青年会組織である甲南智徳会、その後身として 1920 年代に成立する名栗村青年団と若者組とが併存する二重構造の検証から、「青年団＝若者組母胎」論における、若者組から青年会、青年団への単系の展開を実証的に批判する。また、在村青年層における日常的な組織の結合原理を検証する。

第5章においては、主に岩手県花巻市棚田青年会の事例から、終戦直後から 1960 年頃、高度経済成長にさしかかる時期までの集落青年会の結合原理を解明し、併せて岩手県社会教育主事・池野正明が主導した「実践的学習論」と青年層の志向とが乖離していく相をとらえ、その意味を考える。

第6章においては、1970 年代に自らの手で「たまり場」としての青年会館作りを行い、岩手県発の若者の「たまり場」づくりのモデルとなった岩手県旧三陸町浦浜青年会の事例から、「たまり場」の消長過程とその背景、青年会の結合原理およびその可能性と課題とを検討する。

---

1) 以下、本論文での時代区分の呼称について整理する。日本史研究での通例に基づき、明治時代から第二次世界大戦までを「近代」、以後を「現代」とし、双方を通時的にとらえた時代区分を「近現代」とする。また、第二次世界大戦を挟んでの、主に昭和時代をゆるやかに区分する際は、慣用的な「戦前」「戦後」を用いる。例えば第二次世界大戦から 1980 年代の青年団に関する議論を、「現代青年団論」と

しても、「現行」「現在の」という意味にとらえかねられない。この際は、「戦後青年団論」がその時間的経過も含意され、適すると思われる。

2) 平山和彦「青年団」、福田アジオ・新谷尚紀・湯川洋司・神田より子・中込睦子・渡邊欣雄編『日本民俗大辞典 上巻』吉川弘文館、1999 参照。

3) なお、郡単位での組織は、1953（昭和 28）年以降進む市町村合併以降、急激に解消されていった。

4) 1900 年代より、各地で義務教育終了後の未婚女性を「処女会」に組織化する流れがあり、男子の青年団と同様、1910 年代よりそれが女子青年団として再編されていく。1918（大正 7）年に前年に組織されていた青年団中央部に模して、処女会中央部が設立された。さらに 1926（大正 15）年の内務文部両省による女子青年団に関する訓令をふまえ、1927（昭和 2）年に大日本連合女子青年団の発足を見た。これにより男子同様、都道府県→郡→市町村→小・中学校区→集落という系統的な組織形態に、全ての未婚女性が包含されることになった。なお、1941（昭和 16）年には、大日本連合女子青年団は、大日本青年団、大日本少年団連盟とともに大日本青少年団に統合された（千野陽一『近代日本婦人教育史』ドメス出版、1979、pp.197-227、p.361）。本研究では、近代における男子青年対策・軍事利用との連続性を見る視点、また資料的制約からも、近代においては男子のみの青年団を、戦後からは男女がともにある青年団を対象として論ずるものとする。

5) 小川利夫「現代社会教育思想の生成」、小川利夫編『現代社会教育の理論』、亜紀書房、1978。

6) 小川利夫・倉内史郎編『社会教育講義』明治図書、1964 の刊行以降、この視点での近代社会教育史研究はその体をなしてくる。詳細は次節を参照。

7) 近代における伝統的・青年集団の青年団への統合過程としてまず参照されるのは、いわば青年団史の「正史」である熊谷辰治郎著・発行『大日本青年団史』（1942）である。ここでの記述がいわば「定説」となり、以後も補強され定着化したのである。このことは第 1 章第 5 節で詳述する。

8) 伝統的・青年集団には多様な呼称があったが、ひとまず本研究では「若者組」という語を用いる。なお、「若者組」は多くの場合、フォークターム（実際に用いられていた民俗語彙）では無く、そもそも学術用語である（平山和彦『青年集団史研究序説 上巻』、新泉社、1978、p.2）。

9) 青木一・大槻健・小川利夫・柿沼肇・斎藤浩志・鈴木秀一・山住正己編『現代教育学事典』労働旬報社、1988 における、上野景三による「若者組・娘組」の項、細谷俊夫・奥田真丈・細野重男・今野喜清編集代表『新教育学事典第 6 巻』第一法規出版、1989 における、田嶋一による「若者組」の項などが代表的である。なお、社会教育・生涯学習辞典編集委員会編『社会教育・生涯学習辞典』朝倉書店、2012 における、多仁照廣による「若者組」の項があるが、教育的意義に関して記述がない。

10) 上野景三「青年指導論と施設」、横山宏・小林文人編著『公民館史資料集成』エイデル研究所、1986、pp.755-766、同「青年倶楽部の思想と実践」、新海英行編『現代日本社会教育史論』日本図書センター、2002、pp.139-159。

11) 多仁照廣『若者仲間の歴史』日本青年館、1984、pp.101-124。川村邦光『〈民俗の知〉の系譜』昭和堂、2000、pp.40-49。古川貞夫『増補版 村の遊び日』農山漁村文化協会、2003、pp.156-267。

12) やくざ踊りとは、当時の流行歌のレコードに合わせて手踊りや組おどりをするものであった。詳細は第 5 章にて詳述するが、股旅もの（道中もの）、マドロスものといったジャンルがあった。民謡も踊られ、多くは組踊りがなされた。主に終戦直後に全国的に爆発的に流行した。

13) 北河賢三『戦後の出発 文化運動・青年団・戦争未亡人』青木書店、2000 参照。

14) 宮坂広作「青年学級の変容過程」、宮原誠一編『青年の学習』国土社、1960、p.118、国立教育研究所編・発行『日本近代教育百年史 第八巻』、1974、p.984、藤田秀雄『社会教育の歴史と課題』学苑社、1978、

pp.212-215。

15) 日本青年団協議会 HP 中、「日青協概要」(<http://www.dan.or.jp/danpress/gaiyou/gaiyou.html#anchor-2>)、2017 年 3 月 4 日閲覧。

16) 松田武雄編著『社会教育・生涯学習の再編とソーシャル・キャピタル』大学教育出版、2012、荻野亮吾『『社会関係資本』論の社会教育研究への応用可能性』『東京大学大学院教育学研究科紀要』53、2013、pp.95-112 参照。

17) 田中潮「震災から立ち上がる青年たち」『月刊社会教育』56(1)、国土社、2012、pp.13-19。

18) 15) 前掲、「日青協概要」において、「歴史的に見ても青年団は非営利団体として、地域の中で一定の「公益」の役割を担ってきました。まさに青年団は、青年による青年のための、まちづくり・人づくり NPO であるといっているでしょう。最近では、青年団の中で NPO 法人格を取得するところまでできました」と、問いに答える形でその公益性が強調されているが、かつての「公益性」が能動的な動きであったのかは、歴史の中に位置づけ直して振り返る必要があろう。

19) 笹川孝一「青年の学習活動の基点をどこに求めるか」、『月刊社会教育』24(6)、国土社、1980、p.68、掛谷昇治「地域に生き地域を支えつづける青年団活動」、『月刊社会教育』29(7)、国土社、1985、p.32。

20) 著者兼発行者熊谷辰治郎となっているが、編述には桜井庄太郎も当たっている。

21) 桜井本文前掲「青年団論の反省（二）―大正時代―」、p.36。

22) 桜井本文前掲「青年団論の反省（三）―昭和時代―」、p.28。

23) 桜井同上、p.31。

24) 戦後社会教育では「国民の自己教育と相互教育」を前提とし、それを行政が支援する構造が社会教育法に基づくあり方として認識されてきた（寺中作雄『社会教育法解説』社会教育図書、1949、p.1）。戦後の自己教育論は、第二次世界大戦後に戦前の公民教育論を引く形で論じられ、それが次第に国家と対峙する国民の学習権と表裏一体にとらえられていく過程があった（大平滋「戦後自己教育論の展開」、大槻宏樹編著『自己教育論の系譜と構造』早稲田大学出版部、1981、pp.114-138）。戦後社会教育史研究をリードした小川利夫らが、社会教育史研究の前提として位置づけた自己教育論の指すところは、究極的には行政社会教育と対峙する傾向をもった。その流れにある藤田秀雄は、自己教育論に基づいた近現代社会教育通史の嚆矢である『社会教育の歴史と課題』（学苑社、1981）において、執筆当時、行政からの学習支援が充実してきたことに一定の評価を与えつつ、自己教育を「行政機関からの援助を受けると否にかかわらず、教化と対立しておこなわれる勤労大衆の学習活動（p.9）」と位置づけている。ここが本稿で筆者が対峙し、松田武雄が「価値志向的」と評する自己教育論に相当するとみてよい。

25) 1995 年頃までの研究を対象としているが、社会教育研究を含めた総合的な近代青年団史研究のレビューは、上野景三「青年教育史研究の課題と展望―青年団史研究を中心に―」、『日本教育史研究』第 15 号、1996、pp.111-130、によってなされている。本項の執筆に当たっては多大な示唆を得た。

26) 小川利夫・橋口菊・大蔵隆雄・磯野昌蔵「わが国社会教育の成立とその本質に関する一考察（一）―地方自治と社会教育―」、『教育学研究』第 24 巻第 4 号、金子書房、1957、pp.1-18、同「わが国社会教育の成立とその本質に関する一考察（二）」、『教育学研究』第 24 巻第 6 号、金子書房、1957、pp.29-37、橋口菊「国民教育の再編成と社会教育行政確立に関する一考察」、『教育学研究』第 27 巻第 3 号、1960、pp.196-205。

27) 大串隆吉「長野県下伊那郡旧千代村役場青年教育関係資料と解説―青年会自主化から産業組合青年連盟まで―」、東京都立大学人文学部編・発行『人文学報 教育学』13、1978、pp.83-158、同「大正自由教育と青年会自主化運動（上）―下伊那郡竜丘・千代村の場合を中心に―」、教育科学研究会編『教

育』30-7、国土社、1980a、pp.44-59、同「大正自由教育と青年会自主化運動（中）―下伊那郡竜丘・千代村の場合を中心に―」、同編『教育』30-8、国土社、1980b、pp.102-120、同「大正自由教育と青年会自主化運動（下）―下伊那郡竜丘・千代村の場合を中心に―」、同編『教育』30-9、国土社、1980c、pp.104-112、同「昭和大恐慌と青年会自主化運動―下伊那郡竜丘村、千代村を中心に―」、東京都立大学人文学部編・発行『人文学報 教育学』17、1982、pp.15-65。

28) 特にこの状況がわかるのが、14) 前掲、宮原誠一編『青年の学習』（国土社、1960）の各論と、それと多く執筆者が重なる日本社会教育学会編『農村の変貌と青年の学習（日本の社会教育第6集）』（国土社、1961）である。『青年の学習』所収の碓井正久「勤労青年の心理的態度とその形成―農村青年を中心として―」（pp.272-296）、『農村の変貌と青年の学習』所収の小林文人「農村青年と教育の機会」（pp.60-81）においては、農村では年少青年（後期中等教育学齢期）には定時制高校等の制度を用いて高校進学を、以後の年長青年においては、は農民大学につながる学習組織化が望まれていたことがよく理解される。

29) 小川利夫「山本滝之助論」、全日本社会教育連合編・発行『社会教育』8(10)、1953、pp.40-53。同「地域青年団成立史論（Ⅱ）―地域青年団論の形成―山本滝之助論―」、日本青年館調査研究室編・発行『研究室報』No. 11、1967、pp.139-160。

30) 永杉喜輔『青年の父・田澤義舗』（民主教育協会、1966）、同「青年教育」（永杉喜輔・藤原英夫編著『社会教育概説』協同出版、1967）、同『かくれた青年指導者たち（永杉喜輔著作集 9）』国土社、1974など。

31) 上原直人「社会教育思想としての公民教育論の検討―田澤義舗を中心に」、『日本社会教育学会紀要』No. 46、2010、pp.11-20、同「下村湖人の教育思想と地域青年教育の実践：戦前期を中心に」、『生涯学習・キャリア教育研究』8、2012、pp.53-62 など。なお、これらの論考をもとに上原直人『近代日本公民教育思想と社会教育―戦後公民館構想の思想構造―』大学教育出版、2017 が刊行されている。

32) 上野景三「解説」、熊谷辰治郎全集刊行委員会編『熊谷辰治郎全集』勁草書房、1984、pp.911-926。「解説」とはなっているが、熊谷の生い立ちから日本青年館と大日本連合青年団以降の青年団中央組織における活動等、詳細に報告されており、論文として評価できる。特に当時は存命であった関係者の証言に基づく記述は、資料的価値も高い。ただし、戦後の活動に関しての記述はなぜか少ない。それゆえ、この熊谷の戦後の活動に関しては、第3章において触れた。

33) 安藤耕己「戦後における戦前期青年団指導者の『復権』と『協同主義』―主に 1960 年代までの動向に着目して―」、『日本社会教育学会紀要』No. 46、pp.1-10、本論文第3章参照。

34) 小川利夫「社会教育の組織と体制」、小川利夫・倉内史郎編『社会教育講義』明治図書、1964、p.51。

35) 宮原誠一『教育と社会』金子書房、1949、p.165。

36) 大串隆吉「地方社会教育史研究の方法」、津高正文編『地方社会教育史の研究（日本の社会教育第25集）』、東洋館出版社、1981、pp.44-61。

37) 中村政則の整理によると、日本における民衆史高揚の時期は4期ある。第1期は日清戦争後から日露戦争後の産業革命期、第2期は第一次世界大戦の好景気から 1920 年代の戦後恐慌を経た慢性不況の時代、第3期は 1930 年代の恐慌とファシズムの時期である。そして第4期は、高度経済成長期からその破綻の時代である。このように日本資本主義の好況と不況の大きなサイクルに見合って民衆史の高潮が訪れている。第四期の高揚の背景は、安保闘争と高度経済成長があるという。つまり、安保体験と変革主体としての民衆抵抗のエネルギーの確認、高度経済成長下における、均一化と伝統や地方の否定の結果としての人間喪失に対する疑問が背景としてある。同時期に隆盛した地方史、地域史も同様の興隆

の背景を持つものと理解される（中村政則『日本近代と民衆—個別史と全体史—』校倉書房、1984、pp.15-19）。一般に、戦後において民衆（思想）史として知られるムーブメントは、色川大吉による『明治精神史』（黄河書房 1964）を嚆矢とし、安丸良夫の業績が知られる。その他、上野英信・山本茂美・石牟礼道子・森崎和江・山崎朋子らのノンフィクションが位置づけられていった。宮本常一が編集・執筆に関わった『日本残酷物語』1～5巻（平凡社、1959～1960）はその先駆として位置づけられる（大月隆寛「解説—かつて『残酷』と名付けられてしまった現実—」、宮本常一・山本周五郎・楫西光速・山代巴監修『日本残酷物語 1 貧しき人々のむれ』平凡社、1995、pp.531-541、畑中章宏『『日本残酷物語』を読む』平凡社、2015 参照）。

38) 柳田國男「郷土研究と郷土教育」、『郷土教育』27 号、1933、pp.80-105。

39) 日本民俗学ではこれを「心意」と呼ぶが、ひとまずは社会史でいう「心性」とほぼ一致するものとして理解して構わないと思われる。

40) 福田アジオ「社会史としての民俗学」、福田アジオ『日本民俗学方法序説』吉川弘文館、1984、pp.111-127。

41) 山本本文前掲『近代日本社会教育史論』、pp.6-9。

42) 山本本文前掲『社会教育概念の史的考察』、pp.170-171。なお、山本は、「社会教育とは、基本的には社会秩序の安定、国民の思想統制が課題であって、その一部分にこれまで述べてきたような社会教育政策があり、それらは教育学として位置づけられることができる（傍点ママ）」とし、「その一部分には地方自治を基盤としたイデオロギー支配という政治的な側面」があり、教育学を超え、政治学や社会学などの分野にも位置づけられるとし、そのような性格である社会教育を教育学固有の領域として位置づけることにはもともと無理があるとする（山本同上、p.74）。ここで山本がいう「社会教育」は、近代のそれを強くイメージしたものと思われ、やや留意が必要ではあるが、この指摘は、本論文が多分野にわたる先行研究の批判のもとにあることを説明する助けとなる。

43) 松田武雄「社会教育史研究の課題と展望—社会教育の概念と研究方法論に焦点づけて—」、日本教育史研究会編『日本教育史研究』第 24 号、2005、p.43。

44) 2 人に先んじて『戦後社会教育史の研究』（昭和出版、1981）、『地方社会教育史の研究（日本の社会教育第 25 集）』（東洋館出版、1981）両書の編者であった津高正文は、1960 年代からの歴史研究における民衆史運動と地域史運動の影響を受けつつ、中央に自立しうる「地域社会教育史」の成立を高唱した。当時までの住民運動の展開と革新自治体の広がり背景にはいたものの、津高は、「国民の自由で自主的な教育・学習・文化活動と公的社会教育とを固定的・機械的に区分することを改め」、両者の相互規定・補完性を認めるべきとの認識を示している（津高前掲『戦後社会教育史の研究』、p.29）。これは宮原の社会教育論をポジティブに受けとめたものであり、松田の主張に近いものとして見ることができる。なお、津高が編者となった両書であるが、特に『戦後社会教育史の研究』は、社会教育職員集団によって「公的」に学習権保障が果たされてきた事例を中心に掲載している。このため、実態に即して見たとき、行政社会教育と自己教育運動とを対立的に見ることは、ナンセンスであったともいえよう。後者は、日本社会教育学会の宿題研究の成果報告を行う年報である。時期区分論をめぐる議論には発展段階説の枠組みが先に立った趣がある。そこに時代性を感じるものの、全体としては淡々とした実証的な論文報告が多く、自己教育運動に偏った内容とはなっていない。

45) 松田のとらえる「下からの要求と上からの要求の合流・混在」の姿は、歴史研究ではなく、近年に松田が取り組んできたソーシャル・キャピタル論や補完的原理を援用した実証研究に基づく、自治体への施策提言という方向で具体的に示されているといえる（松田武雄『社会教育・生涯教育の再編とソーシャル・キャピタル』大学教育出版、2012、『コミュニティ・ガバナンスと社会教育の再定義—社会教



育福祉の可能性』福村出版、2014)。

46) 初代、一木喜徳郎（在任 1924（大正 13）年～ 1925（大正 14）年）、第 3 代、後藤文夫（在任 1930（昭和 5）年～ 1934（昭和 9）年）、第 4 代、田澤義鋪（在任 1934（昭和 9）年～ 1936（昭和 11）年）、第 5 代、香坂昌康（在任 1936（昭和 11）年～ 1938（昭和 13）年）と、全て内務官僚出身者であった。

47) 後述するように、著述は野口孝徳、志村義雄が当たった。

48) 1934（昭和 9）年～ 1936（昭和 11）年に第 4 代理事長。戦後になって 1956（昭和 31）年～ 1969（昭和 44）年に第 13 代理事長として再任された。

49) 平山和彦『青年集団史研究序説 下巻』、新泉社、1978、p.9。

50) 翌年に刊行された前掲の『日本青年団協議会二十年史』の叙述スタンスとは、その立場の差異が明確で興味深い。『大日本青少年団史』がなぜこのときに刊行されたのかも含め、この時代の日本青年館周辺の動きについては、第 2 章にて再度分析する。

51) 柳田國男『定本柳田國男著作集 第 29 巻』筑摩書房、1970 所収。

52) 柳田國男『定本柳田國男著作集 第 10 巻』筑摩書房、1969、p.424。

53) しかし、前節に挙げた田澤義鋪による『青年団の使命』（日本青年館、1930）より数ヶ月遅れて刊行されている。序文には柳田國男への指導に対する謝辞と田澤に跋文を寄せてもらったこと、熊谷辰治郎に資料閲覧の便宜を図ってもらったことへの謝辞がある。全体の構成は、それから 6 年後に刊行される前掲『若者制度の研究』に影響を与えたことを平山和彦が指摘する（49）前掲、p.9）が、筆者の見るところ、田澤の『青年団の使命』からの直接的影響はさほど強くはなく、いわゆる単系的な「青年団＝若者組母胎」論を前提にはしていない。特にそれら伝統的青年集団が持つ、性の管理に関する機能の指摘などはかえって先駆的といえる。また、それがゆえに、田澤が跋文でそのことに若干の苦言・皮肉ともいえるコメントを載せている。柳田國男も若者組に限らず、性の問題を論じることを忌避したことは従来、指摘されるところである。中山太郎『増補版 日本若者史』（バルトス社、1983）において、平山和彦が柳田と中山の関係を含め、その周辺事情に関する詳細な解説を加えている（平山和彦「本書の解説」、中山太郎『増補版 日本若者史』バルトス社、1983、pp.7-15）。

54) 平山和彦「中山太郎」、瀬川清子・植松明石編『日本民俗学のエッセンス』ペリかん社、1979、pp.110-122。

55) 瀬川清子「年令構成からみた若者組」、『日本民俗学会報』48、1966、pp.1-18。

56) その他、加入を長男に限るか否か、加入年齢を青年型・青壮年型としてみるか等の組織構成員と機能とに着目した類型論、それらの分布に着目する議論が、瀬川の主張を念頭においた福田アジオの議論を嚆矢に長く提起されていった。詳細は、中野泰『近代日本の青年宿一年齢と競争原理の民俗―』吉川弘文館、2005、pp.5-12 を参照。

57) 平山 49) 前掲書に所収。

58) 岩田重則『ムラの若者・国の若者 民俗と国民統合』未來社、1996、pp.13-17。

59) 関わる平山の研究は、主に『青年集団史研究序説』上・下巻（新泉社、1978）に集録されているが、下巻において、特に『斯民』『帝国青年』等の雑誌記事や関係する著作等を丹念に分析し、日本青年館および大日本連合青年団に至る、青年団中央組織の成立から展開までを、時系列的かつ政治史的観点に基づき整理している。上巻では、田澤らが強調した「若者組の自主性・自治性」の美化あるいは創出の過程に注視し、実際に民俗事象からその内実を検討する作業を行っている。いわば近代における「上から」の青年包括策に伴って生成される言説と、「民俗」と農村の実態とを照らし合わせる研究視点と成果を示している。次に、平山同様、日本近代史と民俗学双方の知見と方法に拠りつつ、伝統的青年集団の近代における国家的再編統合を、より明確にテーマとして研究したのが岩田重則である。岩田の関

る研究は、主に 58)前掲の『ムラの若者・国家の若者—民俗と国民統合—』(吉川弘文館、1995)に収録されている。岩田は、平山より明確に、戦前の青年団「運動」と民俗学との強い結びつきを示した。岩田はそれゆえ、戦後ある時期まで田澤らが示した若者組と青年団とを質的・歴史的にも、そして単系的に連続したものとする言説が無批判に継承されたことを批判し、その再編過程と実態の多様性を各地の民俗事象を提示し整理した。その後、伝統的青年集団の近代における国家的再編統合について体系的に論じたのは、中野泰である。関わる中野の研究成果は、56)に前掲した『近代日本の青年宿』(吉川弘文館、2005)に収録される。中野は山口県玉江浦の「青年宿」を主たる事例とし、田中義一や田澤義輔ら青年団運動指導者によって、「青年宿」が地域社会の存立状況から脱文脈化され、ナショナル・モデル化かつ〈教育〉化されていくプロセスを丹念に追った。結果として、同書は、「民俗」として喧伝された「青年宿」が、年齢と競争の原理に則った社会組織であり、かつ近代に生成されたことを明らかにした労作となっている。

60) 宮前耕史『『若者制度』の誕生—地方改良運動期以降における政府青年団(体)施策と『若者組=教育機関説』の成立』、筑波大学教育学会編『筑波教育学研究』第2号、2004、pp.17-31。なお、筆者は宮前の提示を参照し、ほぼ同義で「青年団=若者組母胎」論として用いる。

61) なお宮前は、「創られた」「創造された」という意味を強調するために、「捏造」の語を用いている(60)前掲、p.29 注(5))が、同時に「田澤による『若者組=青年団の母胎の論』の『捏造』が、字義通りの「捏造」—故意の「こじつけ」「でっちあげ」であったのか、あるいは同時代的な歴史観が田澤により提示されたに過ぎなかったのか、現段階では断言でき(同)」ないとして、その語の使用に留保を与えていることを附言しておく。

62) 八木康幸「フォークロリズム」、福田アジオ・新谷尚紀・湯川洋司・神田より子・中込睦子・渡邊欣雄編『日本民俗大事典 下』吉川弘文館、2000。

63) 加えて、民俗文化の商品化や、それらが伝承されている(とされる)地域の人びとによる自覚的な民俗文化利用もこの範疇に入る。民俗文化を資源化し展開する観光化とフォークロリズムの問題については、岩本通弥編『ふるさと資源化と民俗学』吉川弘文館、2007 に詳しい。また、宮前耕史は、三重県答志島における「寝宿」慣行の意義が、その価値に対する地域の人びと自身による相対化・客体化により、外部に対して語れるものと内部における共通理解とが島民によって意識的に使い分けられているという、再帰的な状況があることを報告している(宮前耕史「民俗に関する言説の内面化—答志島・答志の寝宿慣行をめぐる『民俗再帰的状况』と言説としての『寝屋制度』—」、筑波大学大学院博士課程日本文化研究学際カリキュラム編・発行『日本文化研究』、2005、pp.17-56)。

64) 年齢階梯制原理に基づいた、年齢集団としての青年集団の研究の見通しは、高橋統一の「年齢集団」『日本人の社会』(講座・比較文化6、研究社、1977、「年齢階梯制」「年齢集団」、『文化人類学事典』弘文堂、1987の整理と中野 56)前掲、pp.12-16 参照。

65) 江守五夫「明治国家体制の人類学的考察—天皇制支配と自然村秩序—」、論文集刊行委員会編『民族学からみた日本—岡正雄教授古稀記念論文集—』河出書房、1970、同「地方改良運動における村落共同体の再編成—明治期模範村の実態調査をとおして—」、高橋幸八郎編『日本近代化の研究』上巻、東京大学出版会、1972。

66) 江守本文前掲『日本村落社会の構造』、p.466。

67) この視座は前掲した平山、岩田、中野、宮前らにも共通したものであり、「木を見て森を見ぬ」傾向になりがちであった、90 年代までの民俗学研究主流のあり方に対する、オルタナティブな視点と方法の提示であったと見てよい。

- 68) 佐藤本文前掲『近代日本青年集団史研究』、pp.14-15、190-191。
- 69) 福田アジオ「若者組」、4) 前掲書所収、pp.229-230、中野泰 56) 前掲書、pp.24-28。
- 70) 長（武田）清子「田沢義舗の人間形成論： 青年団教育に追求した国民主義の課題」、『国際基督教大学学報』I-A、教育研究 10、1963。
- 71) 『日記』各巻末にある多仁による解説は、後に『山本瀧之助の生涯と社会教育実践』（不二出版、2011）として加筆のうえ、刊行された。結果として同書は、必要十分な資料提示によって、官製青年団化および日本青年館・大日本連合青年団の成立事情を知るに当たり、実に簡明な通史ともなっている。
- 72) 小川 29) 前掲「山本瀧之助論」。
- 73) 田嶋一「『青年』の社会史—山本瀧之助の場合—」、編集委員会編『教育—誕生と終焉』（叢書産む・育てる・教える 1）、藤原書店、1990、pp.132-160 が『山本瀧之助日記』を活用し、詳細な分析を行っている。
- 74) 筒井正夫「日本帝国主義成立期における農村支配体制—静岡県原里村の事例を中心に—」、土地制度史学会編・発行『土地制度史学』27(1)、1984、pp.16-33。筒井は、静岡県旧原里町における近代における青年会における報徳的志向の展開に触れる。筒井は、「青年会活動を通じて、通俗道徳の実践による農業生産力上昇志向と天皇崇拜思想に基づいた帝国主義的大国意識とが、矛盾なく結びつきながら形成されていったのである（p.29）」として、報徳思想が媒介となり、殖産に関わるプラグマティックな志向が示されることで、青年層が積極的に青年会に参加する意義を認めたことを示唆した。
- 75) 住友陽文「日露戦後における青年会組織化の前提—沼隈郡千年村青年会と山本瀧之助を素材として—」、関西大学史学・地理学会編・発行『史泉』66、1987、pp.40-61、同「青年会の活動に関する一考察——一九一〇年代前半の状況—」、和歌山県史編纂委員会編『和歌山県史研究』15、和歌山県、1988、pp.59-68、同「形成期青年会の論理と展開」、日本史研究会編・発行『日本史研究』340、1990、pp.28-54。住友は日露戦争後に地域社会における「公共性」を担うことで、逆説的に「官製の」青年会が国民統合の要となったとし、その過程には社会的公共性を吸収したかたちでの擬制的「団結」が存在したことを提起した。具体的には、住友は前掲した多仁編の『山本瀧之助日記』を用いつつ、沼隈郡の青年会の実態を分析した結果、日露戦争以後の実用的事業への傾斜を確認した。それにより青年会の行政補完的機能が高まり、かえって地域からの自律性を失っていく過程がとらえられている。
- 76) 飯塚一幸「近代日本の青年団体—京都府丹後地域を事例に—」、史学研究会編『史林』75-1、京都大学文学部史学研究会、1991、pp.1-41。飯塚は、京都府旧岩滝村での若者仲間から青年会成立までのモノグラフにおいて、村内に明確な身分格差がある中、当初は上位層が青年会をコントロールしたときには若者仲間の性格を残した活動が続いたが、1890（明治 23）年前後より小学校教育を受けた層が蓄積されると組織の自律化が進み、青年層自らの運営がなされていくとする過程を示した。これは、青年会の担い手が中・下層の青年層に移行していった積極的な動きであることを示されたものである。
- 77) 鬼塚博「青年集団に見る地域社会の統制と民衆によるその受容の過程—長野県下伊那郡を事例に—」、歴史学研究会編・発行『歴史学研究』No. 669、1995、pp.19-36。鬼塚は、これまでも強い関心が寄せられてきた下伊那における近代の青年集団の統合過程について、それを地域社会における青年集団の復権の過程として見る可能性を提示し、「官製」青年会への積極的な青年層の関与をとらえ直した。鬼塚によると、1880 年代以降に成立する小学校教員主導の青年会は、集落に基盤を持たないがゆえの弱さを有していた。その後、日清・日露戦争での銃後活動をてことして教化施策を受け入れつつも、青年主導の下で青年会が活動の基盤を確保していったのだとする。
- 78) 及川清秀「地方における青年会政策とその動向について—神奈川県を事例から—」、地方史研究協議

会編・発行『地方史研究』51-1、2001、pp.23-43。

79) 布川弘「大正期の地域社会における教育と天皇制—大崎下島を事例に一」、広島史学研究会編・発行『史学研究』232、2001、pp.1-18。

80) 平田諭治「福島県石城郡湯本村の青年学習活動をめぐる地域・国家・世界」、筑波大学教育学系編/発行『筑波大学教育学系論集』34、2010、pp.43-55。

81) 78) 前掲、p.41。

82) 埼玉県編『新編埼玉県史 資料編 25 近代・現代 7 教育・文化 1』埼玉県、1984、長野県編『長野県史 近代史料編 第八巻(一) 戸口 社会集団』社団法人長野県史刊行委員会、1987 など。その他、本研究のテーマに関わっては、『浦和市史第四巻 近代史料編Ⅳ』(浦和市史総務部市史編さん室編、浦和市、1982) は社会史的な資料価値が高い。同書には最終的に旧三室村(現：さいたま市) 三室小学校長および旧美園村(現：さいたま市) 村長等を歴任した厚沢八郎氏の 1911 年から 1948 年までの日記が翻刻され収録されている。

83) ここでの「集落」とは、行政区としての「部落」(戦時体制下に整備された部落会との連続性がある) の意味で用いている。民俗学でいう自然村をルーツに持つ「ムラ」とほぼ同義と考える。ただし、「部落」の語が被差別部落を指すものとして理解されることがあり、公に用いられることが避けられる状況があるため、本論文では「集落」を用いている(白井宏明「部落」、福田アジオ「ムラ」、福田アジオ・新谷尚紀・湯川洋司・神田より子・中込睦子・渡邊欣雄編『日本民俗大辞典 下巻』吉川弘文館、2000 参照)。なお、この自然村に由来する集落は、1888(明治 21) 年の町村制公布(1888) 以後の町村制施行以降、町村のもとにある行政組織として組み込まれていく。例えば第 4 章で取り上げる埼玉県旧名栗村(現：飯能市名栗) は、1889(明治 22) 年 4 月に上名栗村と下名栗村が合併して誕生した。後述するように、この際、江戸時代以来の村組(集落) が行政区として行政村下に組み込まれ、15 の区が設定された(飯能市名栗村史編集委員会編『名栗の歴史(下)』飯能市教育委員会、2010、p.49)。また、本研究で以後詳述するように、おおそ 1890 年代以降、全国的に結成されていく青年会は、集落単位や学区単位で組織されることが通例であった。1910 年代以降の官製青年団化の過程で市町村単位に青年団が組織化されていく際、それらの多くは支部や分団として位置づけられていく。終戦直後から復活していく青年団組織の多くは支部・分団組織であったが、その際は青年「団」ではなく、元来用いられていた青年「会」と称することが多かった。以後、1951(昭和 26) 年に日本青年団協議会を頂点とする全国組織が結成されるまでの間に、集落青年会は再び市町村青年団の分団・支部として位置づけられていくことになる。

84) 小川利夫「青年問題の現状と認識」、生活科学調査会編『青年教育』(講座・日本の社会教育Ⅲ)、医師薬出版、1961、p.9。

85) 第 3 章で詳細に検討するが、「素朴な結合要求」とは、戦後に農民組合を支援基盤に衆議院議員を二期務めた経験を持ち、後年住民運動に深く携わった山口武秀が、『青年運動の理論—その基本法則はなにか—』三一書房、1960 において示した、地域青年団(主に集落単位) の基盤となる結合原理であった。山口は「自由に語り合いたい、一緒に行動したい、友だちがほしい、疑問をただしたい、さらには娯楽を求める、毎日の生活に不満がある等々、そうしたもののうえに青年どうしの結合要求がうまれる。そのいろいろなことがらが、素朴な結合要求というかたちとなってあらわれる。それらは一見きわめてさりげないものだが、それが地域青年団をながく存在させてきた土台である(pp.96-97)」とし、またそれが都市だけではなく農村の青年にも表出する青年期に共通する特質であることも強調した。

86) 84) 前掲、p.10。

87) 伊藤三次・福尾武彦・池田貫徹「学習集団の存在形態とその展望」、中野哲二「零細農地帯における在村青年の学習—ふたつの事例を中心として—」。なお、中野論文は鹿児島県における集落における学習組織の実態に関する報告である。

88) なお、藤田秀雄は群馬県島村に駐在したときの経験から、やくざ踊りのもつ娯楽性が集落においては必要であったことを述べ、一定の評価を与えている（藤田秀雄「青年団における小集団学習の問題点」、日本社会教育学会編『小集団学習（日本の社会教育第3集）』国土社、1958、pp.97-99）、同本文前掲『社会教育の歴史と課題』学苑社、1978、pp.212-215）。

89) 藤岡貞彦「昭和30年代社会教育学学習理論の展開と帰結（上）」、『東京大学教育学部紀要』第10巻、1968、pp.201-224。藤岡はここで「共同学習」論の停滞要因の分析を行い、その克服を農民大学運動に求めた。

90) 日青協による全国青年問題研究集会の報告である、日本青年団協議会青年団研究所編『日本の青年』（読売新聞社、1955）においても、全国各地で演芸会ややくざ踊りが部落青年団の行事として催されていることが随所で報告されている。藤田秀雄による88)前掲「青年団における小集団学習の問題点」からは結果として1958（昭和33）年に至っても、やくざ踊りがまだ盛んに催されていたことがわかる。また、筆者調査による岩手県花巻市の事例では、1980年代までは青年団の行事としてやくざ踊りを催す演芸会が催されていた。

91) ある文化集団の「内側」にある文脈で生活事象を理解しようとする視点。対概念として、外部から比較を前提に共通のコードでもって生活事象を理解しようとする視点、外部からでも容易に観察可能な事象を理解する視点として、エティック（etic）がある。

92) 同書は、野添憲治をはじめとした10名の農民作家・詩人が手記を寄せたものである。

93) 古茂田信男・島田芳文・矢沢寛・横澤千秋編『新版日本流行歌史』上巻、社会思想社、1994、p.114。

94) 今津孝二郎「教育言説とは何か」、今津孝二郎・樋田大二郎編『教育言説をどう読むか』、新曜社、1997、p.6。

95) 広田照幸「教育言説研究の課題と方法—歴史的アプローチを通して—」、『アカデミア人文・社会科学編』第63号、南山大学、1996、p.194。

96) 94)前掲、p.12。

97) 広田照幸『教育言説の社会学』名古屋大学出版会、2001、pp.9-10。

98) 94)前掲、pp.13-14。

99) 福田アジオ『現代日本の民俗学—ポスト柳田の五〇年—』吉川弘文館、2014、pp.92-96 参照。

100) 宮本常一は、民俗誌と区別し、現在ある生活を記録したものを「生活誌」として呼称した。

101) 主たる論者として「個別分析法」を提起した福田アジオが挙げられる。自身によるそれらの反省については、99)前掲、pp.92-96 参照。

102) 宮本のライフヒストリー提示の典型は、『忘れられた日本人』（未来社、1960）に見られる。

103) 安藤耕己「成人の学習におけるライフ・ヒストリー法——学習の意味を人生に即してみる——」『成人の学習（日本の社会教育第48集）』東洋館出版社、2004、pp.48-49 参照。

104) 社会教育研究では、概して、ライフヒストリー研究をはじめとしたナラティブアプローチと質的研究全体に対して、正当な位置づけがなされてこなかった。しかし近年、質的研究に関心を持つ若手研究者による方法論の検討と成果の提示がなされており（日本社会教育学会編『社会教育研究における方法論（日本の社会教育第60集）』東洋館出版社、2016）、ナラティブに着目した研究も積極的に提示されてきている。併せて社会教育研究そのもののミッション自体を問う議論も喚起されている。

105) 主に社会史研究の文脈において、聖域や免責の場、不輸不入の土地といった意味において用いられ

てきているが、その指す内容は一定ではない。これらアジール論を整理した夏目琢史は、近代社会においてのアジールとは、「人びとがそこに入れば助けられると思っている空間であり、なおかつそれが社会的に承認されていること」を定義としている（夏目琢史『アジールの日本史』同成社、2009、p.141）。本稿においては、地域社会のおとなたちの権力が一定程度以上に遮断され、そのことが当たり前のこととして承認されている空間・場であることをイメージして用いている。

## 第 I 部 近現代青年団論における青年団の結合原理をめぐる言説

### 第 1 章 近代青年団論における若者組像と青年団の結合原理

#### 第 1 節 問題の所在

序章で述べたように、若者組は、その逸脱行為が寛政の改革（1787（天明 7）年～1793（寛政 5）年）の頃から統制の対象となり、明治に入るとさらに明確に「弊風」としてとらえられる存在となっていた。しかし、特に 1930 年代以降の青年団運動において、「若者組」と「青年団」との直接的な結びつきが強調され、次第に〈教育〉的な意味を付与されることで、言説上は肯定的な存在としてみられるようになった。以降、若者組は修養的・教育的性格を持ち、自治的な存在であることが強調され、若者組と青年団とを質的・歴史的にも連続しているとする歴史認識、すなわち「青年団＝若者組母胎」論が青年団運動と密接に結びついたうえで示されていく<sup>1)</sup>。

同論は、その根拠が歴史性に置かれていた。そもそもがミニマムな村落において継承されてきた（とされる）民俗事象をピックアップし、ナショナルモデル化をしたものである。それを現行の制度や事象と結びつけ、その正当性や権威性を歴史性に求めるための起源にまつわるストーリーが、「構築」「改変」されていく。

以下、本章では「青年団＝若者組母胎」論の成立の背景について考察を行い、そこにおいて強調された理想の青年団像青年団と青年団の結合原理について整理する。

#### 第 2 節 若者組像の美化、あるいは〈教育〉化への批判

##### （1）社会教育研究および教育社会学からの批判

いわゆる、「青年団＝若者組母胎」論への批判、すなわち、その構築性への批判は意外に早く、それも教育学から始まっている。1953（昭和 28）年の桜井庄太郎による「青年団論の反省」<sup>2)</sup>、同年の小川利夫による「山本滝之助論」<sup>3)</sup>を嚆矢として始まっていた。その後、小川は 1966（昭和 41）年発表の「地域青年団成立史論（Ⅰ）—その歴史的原像の再認識—」<sup>4)</sup>、翌年発表の「地域青年団成立史論（Ⅱ）—地域青年団の形成—山本滝之助論—」<sup>5)</sup>において再度批判を加えている。また、宮坂広作も 1966 年刊行の『近代日本社会教育政策史』（国土社刊）において若者組の美化を批判している。教育社会学の立場からは、佐藤守が 1970（昭和 45）年刊行の『近代日本青年集団史研究』（御茶の水書房刊）において、豊富なモノグラフに基づき、若者組が青年団に移行する過程には複数のトラックがあることを明らかにし、定説化している単系的推移を実証面から否定した。

##### （2）近代史および民俗学からの批判

これ以降の教育学分野からの批判は見られなくなる一方、1970 年代以降、民俗学と近代史とを架橋した平山和彦の一連の研究成果<sup>6)</sup>が提示されることにより、青年団論における、美化された若者組と青年団とを質的・歴史的にも連続したものとする言説、さらにはそれを教育機関とする位置づけへの批判が日本近代史と民俗学から始まる。近代における若者の国民化へのプロセスを追った、岩田重則『ムラの若者・くにの若者』（未来社、1996）、近代における青年団運動指導者による「青年宿」の脱文脈化と〈教育〉化のプロセスを追

った、中野泰『近代日本の青年宿』（吉川弘文館、2005）はその批判を継承する。なお序章第2節でも触れたが、近年において、民俗学の立場から宮前耕史が、若者組が青年団論において「美風」として肯定的な存在へ転換したのは1930年代であることを明確に論証している<sup>7)</sup>。本章および第2章も宮前の論をふまえ、より詳細に考察していくものである。

このように、他分野の実証的研究から青年団論における若者組像への批判が続くものの、1970年代以降、教育学、特に社会教育研究からの批判的な論は、管見の限りほぼ見られなくなる。そのことはいわゆる勤労青年教育から在学青少年教育へと施策と関心とが推移した結果であると思われる。なお、以降は、やはり伝統的な年齢集団として位置づけられる「子ども組」をめぐる歴史的イメージの変化・操作が展開する<sup>8)</sup>。

このように、社会教育研究における近世から現代に至る青年集団の歴史をめぐる認識は、他領域において展開してきたような実証的研究から距離を置いたところにあること、すなわち教育言説化していることが推測される。それは、そもそもそうであったのか。あるときからそうなったのか。

このことを明らかにするため、以下、本章においては、「青年団＝若者組母胎」論に着目し、その構築過程を明らかにする。そのため、まずは1780年代から1890年代にかけての近世から近代に至る、若者組に対するネガティブなイメージの表出過程を整理する。なおそこでは、近代における「若者／青年」という、“Youth”を示す語彙の変化にも着目する。次に、いわば「美風」化した若者組像が、近代から戦後の青年団論においてどのように表出し、理論上・実践上の意味においてどのような影響を持ち得たのかを、山本滝之助、熊谷辰治郎、田澤義舗らの著作をもとに検討することとする。そして「青年団＝若者組母胎」論が、1930年代に「構築」されていった背景を考察する。

### 第3節 逸脱する「若者」と近代的存在としての「青年」

#### （1）若者組への〈まなざし〉

2000年代以降の青少年（教育）施策は、「キャリア教育」と若者自立支援策に収斂されている。現在、経済的にも社会的にも自立できない若者が相当の厚みを持って存在していることが、看過できない国家的課題として認識され、彼ら／彼女たちをいかにして（職業）社会に接続させていくかが急務とされているがゆえである。しかし、そもそもこれまで述べてきたように、近世史上の「若者」の指すところは、おとなが自立を促し後押しする対象どころか、おとなに楯突く存在であり、統制あるいは改良すべき社会的カテゴリーとして、為政者や識者などによって厳しく糾弾されるものでもあった。そして明治となり、近代のハイカラさをまとうて現れたのが、「青年」という語であった。この「青年」は、「若者」を駆逐しつつ、国民国家形成に関わる国民教育（教化）と強く結びつけられていった。

このように、日本においては英語の“Youth”に相当する語は、近世から近代に至る中で変化してきた。さらにその変化は現代までも続いてきたことが、これまでも多くの論者から指摘されてきている<sup>9)</sup>。端的に言えば、「若者」から「青年」へ、さらにはまた現代では「若者」へという流れである。

改めて対象化してみるに、「青年」という概念自体、「子ども」期と同様、近代化の産物としてとらえられる。すなわち、日本におけるそもそもの「青年」とは、後述するように、1890



年代以降に成立した書生や学生といった、近代国家における公教育制度成立を前提とする、都市に住む「特権階層」を指す言葉であったからである<sup>10)</sup>。

それ以前は「若者（わけえもの）」や「若衆（わかいしゅ）」などといった呼称が存在し、「青年」に該当する年代や壮年をも含んで用いられることがあった。日本の伝統社会においては15歳前後から一人前として扱われることが通例であるが、15歳前後から30歳前後、さらに地域によっては40歳代を過ぎるまでが「若者」として扱われ<sup>11)</sup>、ムラにはそれらの年代によって構成された若者組が存在したとされる。その若者組は、村落の警護や消防の役割を担い、祭礼や芸能の担い手、若者の社交娯楽の場などとして機能したとされ、婚姻媒介の組織としても評価される<sup>12)</sup>。

しかし、一方として、若者組は、祭礼や芸能への耽溺・没入ゆえに怠業し、休み日の追加や延長を村役人に強訴することもあった。古川貞雄によって、甲信越の養蚕地帯を中心とした1770年代以降における若者組の発生と展開、およびその統制をめぐる詳細な報告と考察がなされている<sup>13)</sup>。古川によれば、この若者組の動きは、18世紀以降の農業の生産力向上と、農村経済の貨幣経済化に伴う生活水準の向上によって生じた余裕に起因する<sup>14)</sup>。また、祭礼や婚礼の際の乱暴狼藉、儒教的価値観からは甚だ逸脱した性規範のありようなどからも、村落秩序を揺るがす存在として見られるようになった。

これらの理由のため、上掲の古川や多仁照廣の指摘にある<sup>15)</sup>ように、若者組が「弊風」とみなされ、1780年代以降となると解散令が出され、統制の対象となることも多かった。また、多仁と川村邦光が指摘するように、明治となっても同様に、府県史料における禁令を見ると、1870年代頃まで、少なからぬ府県において、若者組の逸脱行為に関する禁令や若者組自体の解散令が出されていることがわかる<sup>16)</sup>。以下は、1876（明治9）年、相川県（現・新潟県佐渡市）において発せられた禁令の一部である（旧字体を新字体に改めた。以後、本章では同じ。）。

第十七条 在中ニテ寢床屋ト唱ヘ村内辻堂或イハ嬬婦杯ノ家ヘ処女若者等打寄表向ハ紡織勉励等事寄内実ハ淫行ヲ専ラトスル向モ有之哉ニ相聞ヘ禽獸ノ如クニテ大恥辱ノ至リ也自今右様ノ儀急度禁止候事<sup>17)</sup>

この条の大意は次のようである。村で寢床屋といって、村内の祠堂や未亡人などの家に若い娘たちや若者が集まり、表向きは夜なべ仕事をしているというが、実際は淫らなことに耽っていると聞く。まるで動物と同じで全くもって恥ずべきことであるため、以後、これらの習慣は禁止する、と。

上記は、いわゆる、寢宿あるいは若者宿と娘宿の慣行である。後にこれらは婚姻媒介の機能があるとして、特に柳田國男以降の民俗学において評価されていったものである。若者組の宿慣行については、後述するように、後年は美風として位置づけられていく。

いずれにしろ、村落社会において、生産活動の主要な部分を担っていた、これら若年層の生産活動からの段階的な離脱傾向は、その後、近代における「青年」の誕生に至ることになる。

### （３）「青年」の誕生と浸透

上記のような若者組への弊風視にも伴い、近代の言説空間において、「若者」は次第に「青年」に取って代わられていく。以下に述べるように、「青年」は、1890年代以降、非常にハイカラな都市の匂いをまとった言葉として現れた。また、1900年代以降に加速化する国民国家形成における、青年団の全国組織化にも伴い、その使用が通例化していったことから、「国民」意識の形成と密接な関連性を持つことが想定される。

田嶋一の整理による<sup>18)</sup>と、近代における「青年」には3つの層が存在した。まず第1の層は、共同体を離脱し都市に出て学生となった真の意味での「青年」であり、いわば現代的な理解でいう「青年期」を享受できた層である。旧制高校生、大学生が典型である。第2の層は、都市に出て進学して「真の青年」になることにあこがれつつも、ムラを離脱できなかった者たちである。やむを得ず師範学校に進学して教員になり、都市の青年にコンプレックスを持ち続ける者も多かった。この層から地方における青年会指導者が出現する。後に「青年団の母」とされた山本瀧之助が、その典型である。そして第3の層が、ムラに生き、官製青年団組織に組み込まれていった、「ふつう」の若者であった。田嶋の表現を借りると、彼らは「青年団のメンバーとして、『青年』のレッテルをはられはしたものの、青年期の実質は剥奪されていた<sup>19)</sup>」のであった。この層が当時の青年層の大部分を占める。なお、第2の層は、この中から青年期を獲得しようと「もがいていた」層ということになる<sup>20)</sup>。

1889（明治22）年の町村制施行以降、地域名望家層や教員らが、若者組の改良や初等教育の学力温習を図って、小学校卒業者を組織化して青年会を組織していった。さらに日露戦争後の不況に際し、地方改良運動の担い手として全国網羅的に青年会の組織化や結成が奨励され、その後1910年代から1920年代に官製青年団化が進んでいった。その官製青年団化の中で青年団員の年齢の上限が25歳程度とされたこと、さらに後述するが、1900年代頃から日本においても根付いてきた、青年心理学における「青年期」概念での年代設定が一般化してきたことにより、「青年」の指す年代は、現在のものとはほぼ同様になったと想定される。また「青年期」概念の普及は、学生といった属性ではなく、現代の意味で言う青年期という、いずれもが経験するライフサイクル上のカテゴリーとして、「青年」の用語を普及させるに大いに貢献した<sup>21)</sup>。

### （４）「若者」と「青年」の間

この近代における、「若者／青年」の根本的な違いは、北村三子が指摘する<sup>22)</sup>ように、「若者」とは社会的にはすでに一人前として見なされつつも、子ども性を内包するような存在であったのに対し<sup>23)</sup>、「青年」は子ども時代の最後に位置づけられ、教育の対象として想定されていたことにあるといえよう。このとき、「青年」とは、地方自治を支える「よき村人」であり、精勤し税を納め兵役の義務を果たす「よき国民」の前段として、国家的に熱いまなざしが常に降り注がれる存在であったのである。

前項で述べた、おおよそ1890年代以降に見られる青年会組織化は、逸脱的でときに反権力的存在ともなる「若者」を小学校教育と連続させ、よりよき国民の前段である「青年」に移し替えていくことを目論んだものであったといえる。その際、国家的に大きな「物語」

が生成されていく。近代の「青年」と近世の「若者」とを歴史的・質的にも連続させる論、すなわち「青年団＝若者組母胎」論なのであった。

以下、この「青年団＝若者組母胎」論が生成され、安定化していくまでの過程を言説の上から検討していく。なお、主に検討するテキストの一覧は別表の通りである（【表1-3-4】）。

#### 第4節 1920年代までの言説空間における若者組像

##### （1）1890年代までの若者組観

上掲の相川県での禁令などが掲載された府県史料では、1876（明治9）年までの若者組に関わる禁令等が確認できるが、その後しばらく、若者組に関する為政者や識者の見解は詳らかではない。その点、川村邦光は、主に『朝夜新聞』の記事をもとに、1879（明治12）年から1880年代における若者組と行政との対立を描き出している<sup>24)</sup>。行政組織の発達に伴い、近代法と私法との衝突が生じる。村の火消しや警察権の行使主体としての若者組が、その機能発揮の正統性を行政組織に奪われていくときに相当な衝突が生じたことがわかる。ゆえに、この時期の若者組の否定は、近代法秩序を末端の村にまで至らしめるときに高まったともいえる。1889（明治22）年の町村制施行後、全国で展開した青年会設立の動きは、若者組の否定と改良・矯風とを学校教育との連続性の中で試みたものなのであった。

識者の言でこれを確認しよう。1886（明治19）年、西村茂樹が帝国大学（現：東京大学）で行った演説原稿を、翌1887（明治20）年に刊行したのが『日本道德論』（出版人：西村金治）であった。国民道德を喚起するに当たり、具体的に世相を嘆きつつその改善を論じた啓蒙的な文章であるが、そこに在京の識者である西村から見た、地方の「若者（組）」への批判が示されている（句点を補った）。

先ツ従前ノ習慣中ノ悪キ者ノーニヲ挙グレバ、第一ニ町村ニハ若者トイフアリテ、少年無頼ノ徒、党ヲ結ンデー団結トナリ、或ハ飲酒賭博シ、或ハ女色ヲ挑ミ、或ハ祭礼戯場等ノヲ（こと）ヲ主宰シ、事物ノ道理ヲ弁ゼズ、専ラ客氣ヲ以テ村中ニ横行シ、長老ノ言ヲ用ヒズ、町村ノ約束ニ従ハズ、以テ其土地ノ患ヲ為ス者アリ、偶々少年謹飾ノ者アルモ、此党ニ入ラザル時ハ、人前ニ出ルヲ能ハズ、初メハ止ムヲ得ズシテ此党ニ入ルモ、遂ニハ之ニ慣レテ、己モ亦悪党ノ一人トナルヲアリ、方今小学ノ設ケ國中ニ普キヲ以テ、此輩ノ行事モ漸ク改マリシト雖モ、猶風俗ヲ敗リ良民ノ害ヲ為スヲ多シ（pp.63-64）。

西村は「少年無頼の徒」がグループとなり、飲食賭博・女色に耽り、祭礼芸事を主催し、血氣盛んにして、年長者の意見や町村の規則をも従わず跋扈していることを嘆く。もちろん、これも小学校教育が普及し改善はされてきたものの、未だ悪弊として存在するとする。

##### （2）山本滝之助の若者組像

こうして、地方では、名望家や小学校教員らが中心となって青年会を組織するに至る。そのとき、広島県沼隈郡の一小学校准訓導であった山本瀧之助は、1896（明治29）年に

【表1-3-4】本章において取り上げる主要テキスト

出版年	編著者	書籍・論文表題	出版社・発行者
1887	西村 茂樹	『日本道德論』	西村 金治
1896	山本 瀧之助	『田舎青年』	山本 瀧之助
1909	山本 瀧之助	『地方青年団体』	洛陽堂
1926	田澤 義鋪	『政治教育講話』	新政社
1926	日本青年館調査課	『青年団の研究資料―第二期青年館時代―』	日本青年館調査課
1930	田澤 義鋪	『青年団の使命』	日本青年館
1931	熊谷 辰治郎編	『青年宿』	日本青年館
1933	熊谷 辰治郎	『青年団の経営 農村の部』	日本青年館
1936	下村 虎六郎編	『若者制度の研究』	大日本連合青年団
1942	熊谷 辰治郎	『大日本青年団史』	熊谷 辰治郎

『田舎青年』を自主出版し、都市に住む「青年＝学生」中心の青年論に対し、声高に異議を唱えた。彼は同書において、地方にあっても高い意思を持つ「田舎青年」の「勃起」を促し、その結合形態である「田舎青年会」の全国連合を以て、地方青年層の国家への主体的な参画を訴えた。山本はこの『田舎青年』を以て、中央の言説空間に打って出ようとしたのである。しかし、当時はほとんど注目されることがなかった。

前節にて紹介した田嶋一の整理で言うと、山本は近代の青年における第2の層、本来の「青年」である都市に住む学生に憧れつつも、離村できない層の代表的な存在となる。田嶋は山本瀧之助の日記を分析し、彼が若者組から「浮いていた」ことを示唆する<sup>25)</sup>が、同時代の珍奇な風俗にかぶれたりする若者たちの「墮落」を嘆いてはいるものの、『田舎青年』には特に若者組の批判は見られない。

しかしその後、1904（明治 37）年に公刊された『地方青年』（国光社刊）では、以下のように、ことに旧態としての「若連中」を対概念として出すことにより、「地方青年」の存在を好学有志のものとして位置づけようとする（句点を補った。傍点ママ）。

茲に地方青年といへるは其の名の指す如く全く地方にありて勉強する所の青年なり。茲に地方といへるは市町村の中多く村を指すものにして彼の田舎亦は在郷の謂なり。従つて其の青年なるものは学校にあるにあらずして唯獨り学び自ら修むるに過ぎざるものなり。直に之を言へば、高等小学を卒え若くは中学を一二年の間就業し、今は多少家業を手伝ひ、或は一時学校教員に傭はれ、役場の受付を務め、郡役所の給仕をなし、或は鉄道駅夫を志す所のものにして、其の中年長けや、勝ぐれたるは、郡役所の書記となれるもあり、一人前の学校教員となれるもあるなり。既に在郷の青年即ち地方青年なりと雖も、されど、彼の裸体となりてお祭に御輿を担ぐものは全国孰れの地にありても多く之を若連中と呼びなす。近來是等団体の漸くにして青年会、青年団等の名を冒すありと雖も、所謂地方青年なるものは決して是等若連中の謂にあらず。從來青年の二字は学生の獨有に歸し、学生即青年、青年即学生たりしも、所謂地方青年の其の將に為す有らんとするの志は、元よりも之れを若連中と伍せしむるべきにあらず。俄かに学生と同一視すべからざるに似たるも、青年の株を争はしめて今より冠らすに青年の二字を以てせしむること、決して不穩当なる事にはあらざるなり。

（pp.1-3）

山本はこの時期から「若連中」と、田舎青年改め「地方青年」との差異を公に強調し始める。もちろん、そこには、若連中（＝若者組）の改良が前提としてある。

1900年代から1910年代に至る、日露戦争から地方改良運動推進の時期になると、山本が訴えた「小学校教員が中心となって若連中の改良を図り、それを母体とした町村単位の組織化」が、以後1910年代以降に徹底される官製青年団の原型として採用されていく。1909（明治 42）年に刊行された『地方青年団体』（洛陽堂刊）は山本の主著とされ<sup>26)</sup>、まさに青年団イデオログとしての山本の志向が完成されたものと言える。同書中「第三 現今地方青年団体の振興」を見ると、山本自身の言説が中央で取り上げられ、文部・内務両省の青年団施策に影響を及ぼしていく様が詳細に記録されている。この点に関して、平山和

彦が地方改良運動下の青年団対策と指導について、かなりの部分に山本の影響があることを論証している<sup>27)</sup>。以後、内務・文部の両省から若者組に着目した言説が提示されていく。

たとえば 1905（明治 38）年秋、当時の文部大臣久保田譲は、次のように演説をしたとされる<sup>28)</sup>（句点を補った。下線筆者、以下本章では同じ。）。

従来各地方青年の風儀に関し一面其憂ふべきものと共に、一面甚喜ぶべき現象を認むるものあり。旧来各市町村の大字又は小字毎に「若衆連」又は「若連中」など称する青年の団体ありて、その風儀行動往々粗暴卑猥にして弊害有るもの少なからざりしが、近時教育の普及に伴ひ此等団体中新に規約を改訂して、其面目を改めんとするものあり、又は有志の青年等別に青年会を組織するあり、而して此等改訂又は新設したる規約中会員又は一地方の風儀改善を図るあり、農事の改良を図るあり、其他各種の事項ありて、土地の情況会員の種類等に依り規約する所各異なりと雖も、要するに善良なる目的を有し而して又善く之を実行せるもの既に少なからざるに至り、戦時中に於ける国民精神振興は大に其の発達を促したるものゝ如し。

下線部にあるように、若者組の弊害を認識しつつも、それが小学校教育の普及により、善良なるものとして変化していったと評価する内容である。さらに、翌 1906（明治 39）年 1 月に発せられた、文部省普通学務局長による各地方長官宛通牒でも、以下のような一節が確認される<sup>29)</sup>。

近来各地方に於いて風儀矯正智徳の啓蒙体格の改良其他各種公益事業の幫助を目的とする各種青年団体の設置を見るに至れるは通俗教育上に於ても其効果尠からざることゝ存候に付其発達を遂げしむると同時に若連中等の青年団体に於ても其の弊習を排除し有益なる活動をなさしむる用適宜誘掖指導相成度候。

以上のように、弊害あるも風儀改善して利用価値あり、というのが文部・内務両省において共通した認識であった。すなわち、この日露戦争後の地方改良運動推進の時期において、若者組が単なる弊風からその位置づけが変化し始めたとみられる。

なお、『地方青年団体』では、山本における若者組への認識も変化を見せている（句点を補った。傍点ママ。）。

元来青年会といへる名目は、彼の基督教青年会より来たものであらう。曰はゞ輸入品ではあるけれど、併し、それは単に名称の上の事。若者は即ち青年、「若連中」は即ち青年団体であれば、我國の青年会なるものは何にも基督教青年会を待つて出来たといふではない。古来より存在してゐた所のものが時勢の進運に連れられて、新しい名目を得たまゝに、それに改名したといふに過ぎぬのである。（p.5）

要するに地方の青年団体とは主として「若連中」を指すものである。「若連中」に起源といふほどのものがあるや否や。孰れにしても固より二百年三百年以来のものではない。従がつて今の青年団体を説くものは先づ、青年団体は決して新組織ではない、

全く「若連中」の改造であると云ふとを承知せねばならぬ。(pp.15-16)

以上の引用では、若者組と青年会の組織上の連続性が示されるが、若者組の改造が青年会であるという、質の不連続性が前提となっている。ゆえに、『地方青年団体』での以後の記述、「第二 既往に於ける地方青年団体の状態」では、若者組の悪弊が列挙されている。しかし、同節の終わりに以下の重要な記述が見られる（句点を補った。傍点ママ。）。

（筆者注：若連中が）弊風視されてゐる所のものも仔細に考へて見たなら案外良俗の潜んで居らぬとも限るまいが、併し総体から之れを曰はば古き昔は知らず、維新前後に於ける「若連中」は要するに世間から嫌忌されてゐた、少くとも歓迎され奨励されてはゐなかつたのである。教育の無いものが血氣盛りを全く放任されてあつたとすれば、動々もすれば団体の勢力を恃んで我儘放埒を働いたことの寧ろ無理からぬことを思うふべきである。これを個人に例へて見れば、嚴なる父、慈なる母の爲めに、其の子が終に不良少年に陥つたと同じく、既往に於ける「若連中」は斯くて世間の厄介物に傾いてゐたのである。(pp.27-28)

以上の引用部は、従前、弊風視されてきた若者組を「教育の無いもの」ととらえ、おおらかに容認する記述である。要するに、教育次第で若者組は、地域社会と自治体、そして国家においても有益な存在へと転換しうることを謳ったのである。

以上のように、1900年代から1910年代に至る、日露戦争から地方改良運動推進の時期、公的な言説空間において、若者組は単なる弊風から脱していった。これは同時期に進められた地方青年団体組織化の動向と関わるものであり、前述のように山本滝之助の言説提示の意義が認められる。

このように山本は、1900年代から1910年代にかけての青年団組織化のイデオログとして活躍したと言える<sup>30)</sup>。しかし、以後の1920年代から1930年代に加速度的に展開する官製青年団化や青年団中央組織の成立に際して、中央において適切な位置づけがなされたとはいえない<sup>31)</sup>。言説上も山本は青年団の「母」とされ<sup>32)</sup>、田澤義鋪が「父」とされた<sup>33)</sup>。こうして、一小学校教員であった山本ではなく、元来エリート官僚であり、第4代大日本連合青年理事長および第5代日本青年館理事長を歴任し、後に貴族院議員になる田澤が「正統」な青年団運動イデオログとして後年位置づけられていったのである。

山本は『地方青年団体』において、「若連中」の起源について、少なからぬ紙面を割いて説明を加える。鎌倉時代を起源とする説や台湾での事例の紹介等は、そのまま田澤義鋪の著した『青年団の使命』（日本青年館、1930）から『若者制度の研究』（下村虎六郎編・大日本連合青年団、1936）、『大日本青年団史』（熊谷辰治郎著・発行、1942）という、青年団運動における「正史」の記述に引き継がれていく。しかし、この過程では山本の認識とは異なる、若者組と青年団との関係に関する歴史認識が構築されていくのである。

### （３）「衰退」した若者組

1926（大正15）年3月、日本青年館調査課によって『青年団の研究資料—第二期青年館時代—』が刊行された。その史料収集と執筆は、冒頭の序文への署名からも、当時同館

主事であった熊谷辰治郎が当たったと思われる。後に、若者組研究の「権威」となる熊谷ではあったが、このときは同研究に当たってから3年ほどであり<sup>34)</sup>、序文にも資料は、山本瀧之助の著作に依るところが大である旨を明示している状況であった。

同書では、「若連中が、現在の日本の青年団の前身であるといふことに対して、異論がないやうであるが」とし、「若連中は元服式即ち成年式と関係した旧慣の上に成立したもので、「此の点から考えて見ても現在の青年団とは大部その目的性質を異にしてをつたものであることは明らかだ」と当初は青年団の母胎としての若者組像を前提としつつも、その性格は異なるものとして認識していたことがわかる（p.1）。これは山本、そして本節で取り上げてきた青年団施策中の言説を承けてのものと推測される。続いて、日本各地における、若者組の弊風視と風儀矯正を狙いとした青年会結成の事例が列挙されていく。

結果として熊谷は、「所謂若連中組が着実醇朴の風を失ひ、遊惰に流れ、弊風の漸くきざしかゝつた頃から、その改造が企てられたのである（p.4）」とする。ここには近世の若者組はさにあらず、近代以降に墮落して「弊風」とみなされるようになり、その改良のため青年会が勃興したという若者組観、およびそれと青年団との連続性に関する認識があることがうかがわれる。

ここで整理すると、1926年という段階において、青年団中央組織において重要な位置にあった熊谷の若者組と青年団との関係についての認識は、以下の通りとなる。まずは、若者組が青年団の母胎であるということは前提としつつも、その性格は共通していないこと、次に、若者組はそもそも村落で一定の機能を果たしていたものが、近代になって墮落したため、その改造を図って1890年代頃より青年会が各地に勃興していった、ということとなる。

特に後者の認識は、前掲した山本瀧之助のそれとはやや異なる。山本は若者組がかつての、いわば「健全」な姿を失って、弊風視されていったという見方はしていない。山本の認識では、若者組の性格は近世以来共通している。山本は、若者組を「教育の無いもの」として相対化し、その改変性を期待したのであった。まさにそれは、教育による若者組の「青年」化なのであった。

この「墮落」以前の若者組像を措定する熊谷説は、その後、田澤義鋪らによる、美化された若者組と青年団とを歴史的に直結させる言説—「青年団=若者組母胎」論—の構築に際して、その前提となっていくのである。

## 第5節 「青年団=若者組母胎」論の構築と定着

### （1）「青年団=若者組母胎」論の構築

熊谷説は、近世に「健全」な若者組像を措定し、官製青年団化が完成した1920年代以降の青年団と若者組とをひとまず歴史的に結びつけたのであるが、その質は異なるものとしていた。その域から飛躍し、近世の若者組と近代に国家的統合の下に成立する青年団とを、質的・歴史的にも連続するものとする「青年団=若者組母胎」論は、近代青年団運動最大のイデオログである田澤義鋪によって提示された。

既知の如く、田澤は内務官僚出身で1921（大正10）年の財団法人日本青年館創設時における理事の一人であり、1934（昭和9）年からは第5代日本青年館理事長となる。日本青年館創設の契機となった明治神宮造営における、青年団体の奉仕活動を組織化した担当



官僚であり、そこから 1930 年代をピークとした、近代青年団運動の代表的イデオログとなっていく。

田澤は、1930（昭和 5）年に刊行された『青年団の使命』（日本青年館刊）において、従来、近世以来の「若者組」の改良の結果が青年団であるという認識であったものを、「若者組」と青年団とを質的な共通性と歴史的な連続性をもつものとする、いわゆる「青年団＝若者組母胎」論を展開させ始めたのである。既にこのことは宮前耕史によって論証されており<sup>35)</sup>、筆者もそれを支持するものであるが、宮前は、田澤による言説の構築に関する背景への具体的な論究には踏み込んでいない。政治的な背景等についての論究は後述するものとするが、ひとまず本節では『青年団の使命』における、田澤による同書執筆の理由を読み解いていく。

ではまず、同書第二章「我が国青年団の起源及沿革」の冒頭の箇所を検討する。

我国現時の青年団が徳川時代以前の青年の集団と同一物ではないことは云ふまでもないが、少なくとも、我々は現時の青年団の前身として徳川時代の若者制度を有してゐる。この若者制度の実体の上に、明治時代の青年団は築き上げられたと云つて差支ない。この伝統あればこそ、明治時代の青年団が、政府の命令乃至奨励を待たず、又有力なる大人物の提唱発起もなく、全国至る處に成長発達することが出来たのである。又この多年の習俗的基礎によりてこそ、法規の強制もなく、世俗的利益特権の代償もなく、幾分の盛衰は免れないとしても、常に継続発達する所以を解することが出来ると云はねばならぬ。(p.5)

以上の引用部には、既に歴史の「改変」がある。もちろん、直接に政府の関与はなかったとはいえ、「明治時代の青年団」がさも「伝統」と「習俗的基礎」により、自発的に組織化されてきたような記述である。1900 年代から 1920 年代にかけて展開する青年団施策に関与し、推進者であったはずの田澤の言には首を傾げざるを得ないが、その背景は後ほど考察するものとし、以下読み進めていきたい。

特に以下の引用がその後の青年団論における若者組像を確立させるものとなる。田澤は、

前に述べたる如く、我国の現在の青年団はその前身として徳川時代の若者制度を有するが（中略）、徳川三百年に治世に入つて、若者制度の如き平和的文化的集団が大にその本領を発揮することが出来たのであらう。(p.14)

とし、その普及は全国津々浦々であつたとする。そして、

名称は勿論青年団とは云はない。或は若連中と云ひ、或は若衆組と云ひ、又若者仲間とも云つた。そして多くは、部屋、宿、寝部屋などゝ称する倶楽部或は会館をもつてゐて、若い青年達は、暇の時はそこに集つて来て、その若々しい青年期の共同生活を楽しんでゐたのである。（中略）一体我国の青年団は、だんだん述べ来つたが如く、時の政府が命令して作ったのでもなく、学者や政治家が発起して出来たのでもなく、素朴極まる原始民族の自然の習俗として起り来つたと推測し得るのであるから、青年

期の、止むに止まれぬ社交慾・娯楽慾の発現が、その根底となつてゐることを思はなければならぬ。（同上）

と、繰り返し「素朴極まる」青年期の社交欲・娯楽欲が、その根本的な結合原理であるとする。

さらに、田澤は同書第二章第四節「明治時代の青年団体」において、これらの若者組が「明治時代」になって「置いてきぼり」を食らったとする。それは警備や火消しの役割が行政に取って変わられたこと、さらに共同体秩序の緩化による年中行事の消滅等に起因し、若者組の「本来」の機能が果たせなくなった結果であり、以後、若者組の墮落の現象（即ち、「弊風」視されること）が盛んになったのだという。その墮落した「青年団」（ここでなぜか「青年団」という語を若者組に当てるのであるが）の復活を行ったのが、おおよそ 1890 年代からとなる青年会勃興であるとする（pp.31-32）。この論は、熊谷辰治郎の説を承けたものであるといえよう。

そして田澤の論は、若者組の美化・理想化に至る。第三章「青年団の本質並に将来の進路」第一節「沿革に現はれたる我青年団の特色」において、若者組から青年団へと継続される「一貫した青年団の生命の流れ」を探求するとする。沿革より見えた特色として以下の5点、「一、自然に発達せる団体なること」「二、自治的団体なること」「三、地方的単位を有しつゝ国家的連絡を有すること」「四、青年期の社会生活の団体なること」「五、その目的とする修養は一般的なること」を挙げる（pp.70-71）。

一については、「原始時代以来の民族的習俗の上に築き上げられ、神社を中心とせる我地方生活の中に、青年本来の欲求に基き、極めて自然に発達せる處の団体である（p.71）」とし、その起源を伝統に拠って説明しようとする。二については、「当然自然に発達せる団体であるから当然自治的存在であるのである（同）」とし、「政府や市町村の青年教育の機関ではない（同）」とする。三については、青年団の全国組織がヒエラルキーとして存在するのではなく、自立的な地域青年団によって構成されるアソシエーションであることを強調する。しかし、そもそも若者組は国家的に連合するものではなく、近代における青年団そのものに言及しているに過ぎない。四は、若者組と青年団とを、ともに社交娯楽と修養という、青年期の社会生活に関わる団体であるとするものである。ここで田澤は、上述した青年団の根本的な結合原理としての青年の「社交欲」を、以下のようにさらに詳しく説明する。

我国の青年団は、その起源沿革の章に於て述べた如く、又本節に於て説明し来つたが如く、民族の原始的習俗（恐らくは）を基礎として、自然に出来上り、地方々々に於て、自治的に結合し来りし団体であるが、その自然に出来、自然に発達し来つたのには、それだけの理由がなければならぬ。法制の強制もなく、権力の支持もなく、度々の時勢の変革に際しても、尚その存在を続け、而かも時運と共に進むことの出来るには、それだけの理由がなければならぬ。その理由こそは、我国の青年団が、ある時代の一時的の要求とか、ある一部の人の主義思想とかによらないで、実に人間性の根本的性質に根ざしてゐる存在だからと云ふ点にあると云はなければならぬ。

一体人間は社会生活の動物である。社会生活を無視して人間の生活は想像すること

が出来ぬ。この人間の社会生活の欲求、簡単に之を社交欲と云つておくが、この社交欲は、人間性の根本的性質の一つであつて、確にその本能とも云つてよろしい。而して人間の本能は、その青年期に於て最も多く活躍すると云はれてゐる。この社交欲の本能亦然りである。老人はことによると、孤独の生活に甘んじて、行雲流水を友とし、谷間に庵を結んで暮すことも出来るか知らんが、青年期に於ては中々さうは行かぬ。常に群居を好んで、盛んに多数の交友を欲するのである。日本の青年団はこの人間性の根幹である社交欲、而かも青年期に於ける社会生活の欲求に応じて、発生し又発達したものと云はねばならぬ。之何ぞ權力の強制もなく、何等利益の代償もなく、かほどまでに根柢深き存在として発達し来りし根本的原因と云はねばならぬ。之れ即ち私達が青年団を以て青年期に於ける社会生活の団体と云ふ所以である。(pp.74-75)

ここにあるように、青年期ゆえに発現する社交欲こそが、青年団の根本的な結合原理であることが強調される。

さらに四でいう修養とは、宗教教育等に傾かない一般的なものであるとの規定があるため、五の内容は前年に制定された「青年団綱要」とも共通するものである。なお、同書第三章第三節「青年と政治並びに社会運動」では、青年団と政治および社会運動の關係に関して基本的に中正を求め、共產主義は強く非難し、国家への奉仕を「使命」として求める(pp.104-115)。

以上のように、田澤は、若者組以来の青年団体の歴史・沿革からみた特色として、それら団体が自然発生した自治的団体としてとらえる。そして「修養即ち娯楽 (p.101)」という観点から、「若者宿」における社交娯楽を評価し、その社交欲を根本的な結合原理とした。しかし、『青年団の使命』刊行時、田澤の評価する青年団の（ここも若者組ではない）社交娯楽とは、「室内野外の団体遊戯などで、健全にして弊害なきもの、竝に登山、遠足、運動競技の如き、娯楽にして一面修養を兼ねるものなど (p.95)」に価値づけられた「勤労の合間々々」の娯楽や遊戯であつた (pp.95-96)。そのうえ飲酒は害悪であることが強調される (pp.96-97) など、実に「健全なもの」であつたことには留意しておかねばならない。

このように、『青年団の使命』によって、それまでも内務・文部省から改良すべき弊風を持ち合わせていると認識されていた「若者組」は、一気に、いわば「美風」へと転換した。さらにその根本的な結合原理を「青年期」固有の「社交欲」に求めるなど、発達段階として誰でも迎える「青年期」概念に基づいた認識があることが注目される。

しかしここでの田澤の論述は、自身の見聞と伝聞資料、また田澤が郡長として赴任していた静岡県安倍郡やその周辺の若連中資料などに拠るのみで、本来、従来の弊風たる「若者組」像を転換させるほどの史料に裏付けられものとはいひ難いものであつた。さらに言えば、当時の青年団のあるべき姿と（あるいは意図的に）混同された言及が多く見られる。そのことから、以後におけるこれらの論の定着には、田澤と青年団中央組織の「権威性」が働いたものといえよう。

## (2)「青年団＝若者組母胎」論の定着化

この田澤が構築しようとした「青年団＝若者組母胎」論はどのように流布し、定着して

いったのかを以下検討する。

『青年団の使命』刊行後をたどると、1931（昭和6）年には、熊谷辰治郎編の『青年宿』（日本青年館）が刊行され、ここで「若者組」と常設宿泊型の「若者宿」との結びつきが強調された。次いで1933（昭和8）年には、熊谷辰治郎著の『青年団の経営 農村の部』（日本青年館）が刊行されたが、同書中の青年団発達の沿革に関する記述は、『青年団の使命』のそれを引き継いだものとなっている（pp.6-12）。上野景三によると、『青年団の経営』は、『青年団の使命』と併せてよく読まれ、両書は当時の青年団運動にとってはバイブル的な存在であった<sup>36)</sup>という。とすれば、両書によって、地方の青年団指導層や心ある青年団員には、いわゆる「青年団＝若者組母胎」論が権威性を持って示されていたことになる。

以後、さらに、「青年団＝若者組母胎」論は、「若者組」研究の嚆矢となる研究書として後世評価された、前掲『若者制度の研究』、そして青年団史の「正史」といえるやはり前掲した『大日本青年団史』に受けつがれていった。『大日本青年団史』における、青年団の源流に関する記述は、次項で述べるように、多少の差異は認められるものの、『若者制度の研究』のほぼ引き写しであるため、以下では同書の記述を対象としてみる。

『若者制度の研究』では、「若者組」とは「我が国固有の美風」であり、どの村々にも存在した「云ふまでもなく現在の我国青年団の前身であり、その母胎を為すものであった（p.1）」とされる。そして、「結び」では、田澤が『青年団の使命』で示した、自然発生、自立性、宿での社交娯楽を通しての修養が図られること、相互教育の場であることなどが「若者組」の特色として示された。さらに、田澤も『青年団の使命』で既に強調していたように、「若者組」は、必ず独自の宿泊型施設としての「若者宿」をもつものとされた。

ここで示された特色は、若衆条目と雑誌等からの事例から導かれた形態とはなっているが、「田澤義鋪氏を始め我が青年団の諸先輩の云はれる通り（p.328）」と形容されているように、田澤が『青年団の使命』において示した若者組像を継承したものであった。このように田澤によって提唱された、「青年団＝若者組母胎」論は、『若者制度の研究』によって「補強」され、『大日本青年団史』によって定着化し権威化され、一般化していったのである。

### （3）『若者制度の研究』における若者組の〈教育〉化

以上見てきたように、近代における青年団論において若者組の美化が進んだ。そして後述することであるが、特に戦後は〈教育〉化が進んだ。しかし、いつから青年団論における若者組の〈教育〉化が進んだのであろうか。

というのも、田澤義鋪は1930（昭和5）年刊行の『青年団の使命』において、若者組の自然発生性、自立性を特に強調したものの、「修養」団体であること以上の言及はない。熊谷による1931（昭和6）年刊行の『青年宿』、同じく1933（昭和8）年刊行の『青年団の経営 農村の部』においても同様である。すると、若者組あるいは若者宿に「教育」的評価を行ったのが、1936（昭和11）年刊行の『若者制度の研究』であったことがわかる。同書は大日本連合青年団調査部が編集したもので、実際の著述には同職員であった野口孝徳と志村義雄が当たった<sup>37)</sup>。

同書では、「（若者）仲間生活の目的は結局に於て若者達をほんとうの一人前にする為

の教育であり、訓練であつた」とし、若者組の任務や目的の究極はこの点にあったともする（pp.108-109）。「結び」では、若者組の教育的評価、すなわち〈教育〉化が繰り返し図られる。たとえば寺子屋などで行われた教育はごく初歩のものであり、それ以上の「謂はゞ高等の教育は実にこの若者団体の内部に於て行はれてゐた（p.326）」とし、「かくの如く若者団体は先づ当時の庶民階級の若者達に依つて、いつの間にか自然とつくり上げられた殆ど唯一の相互教育組織であつたのである（同上）」と、その学びが集団の中で相互的になされることを強調した。

また、以下の記述にあるように、

若者仲間では若者達が真実大人一人前として、やがて世に立つ事が出来るやう、あらゆる教育と訓練又は修養が総合的に且つ実際的に行はれた。つまり今の学校教育に於けるが如く教育と生活との間に分離が無かつたのである。宿を中心として行はれた若者仲間の生活は、先づ彼等の社交娯楽の為のものであつたが、他面、それは其儘直ちに彼等の修養生活であり、若者達が先輩達から様々な訓練や教育を施される生活であつた。故に彼等の享けた教育は飽くまでその村の実情に即した、具体的で且つ社会的なものであつた。（p.327）

斯くの如く若者制度は当時の庶民階級が、その生活のうちに自ら編み出した、誠に特色のある教育組織であつた。特色があると云ふのは、教育と云へばすぐ学校を憶ひ出す今の観念から考へてのことであるが、それに依つてこの制度が単なる教育の機関ではなく、それ以上に社会的にも大いに意義ある制度であつたことが直ちに明らかになるのである。（同上）

と、学校教育への批判も交えつつ、若者組を通して、地域社会の文脈に基づいた「大人一人前」になることが強調される。

『若者制度の研究』における若者組の〈教育〉化については、やはり宮前耕史が指摘している。宮前の言でいうと、「若者制度＝教育機関」説が同書で成立したとされる<sup>38)</sup>。しかし前項で述べたように、『若者制度の研究』の論述の枠組み・内容をほぼ引き継いで編集されたはずの『大日本青年団史』においては、「一人前教育」「相互教育」といった「教育」の語が若者組と関わって用いられていない。とはいえ、現在に至って〈教育〉的な若者組像は、問うまでもない教育言説と化している。このことをどうみるか。先に挙げた宮前にしても『若者制度の研究』以降には目を配っておらず、また、論究はテキストの分析に終始しているため、この疑問には答えうるものではない。

『大日本青年団史』の著述は、『若者制度の研究』における野口・志村ではなく、主に後年、教育社会学者として知られる桜井庄太郎が当たっていた。とすれば、両書の記述における差異は、執筆者の志向性の差異が反映されているとみるべきであろうか。この点は本章第7節において、日本青年館・大日本連合青年団と柳田國男との関わりの中で検討を加えたい。

## 第6節 『青年団の使命』における「青年団＝若者組母胎」論構築の背景

### (1) 青年団軍事利用への批判

では田澤はなぜ 1930（昭和5）年という時期に、論を飛躍させ、若者組と青年団とを歴史的・質的にも直結させる言説を構築し、普及を図ったのか。そのヒントは、まずは『青年団の使命』中に確認される。そこでは執筆の理由となる「懸念」が何度も示される。

今や、我国の青年団は、動かすべからざる基礎を持つ確固たる存在であつて、社会一般からも、相当に認識せられてゐると云つてよろしい。（中略）

かくの如く、青年団の存在が一般社会から重視せらるゝことは、我々青年団関係者として、喜ばなければならぬことに相違ないが、之と同時に、注意し警戒すべき点がないでもない。それは、青年団の不当な利用と、誤れる指導意見の濫発である。青年団が相当に社会に認められ、且つ機会ある毎にその実力を発揮し来ると、之を利用して自己の目的を達しようとする人々が生じて来る。勿論かくの如く青年団を利用しようとする人々の中には、不純な動機で自分一個の利害に利用しようとする人々もあれば、国家社会の為に之を善用しようとする人々もある。（p.1）

以上の引用箇所にある「青年団の不当なる利用と誤れる指導論」への懸念は、その後の記述でも繰り返し述べられ、以下のような本書執筆の理由が述べられる。

而して、その正しき青年団の本質と使命とを明にしようとするならば、我々は、先づ之を過去に於ける我国青年団の沿革を調べ、次に現在に於ける情勢を明にし、その中に一貫して流れつゝある青年団の生命を見出し、之を尊重しようとする根本的態度の下に、更に時運の進歩に順応するだけの用意がなければならぬ。（中略）さう云ふ伝統を無視し、過去の生命を無視した、指導者一個の精神的要求のみより出発した指導経営は、我国の青年団の場合にありては、確に誤れりと云はなければならぬ。（中略）兎も角、多年の歴史を有した青年団が厳として実在してゐる以上、之に関係し、之を指導しようとするならば、何うしても、その歴史の中に青年団の生命を探らなければならぬ。（中略）その歴史と伝統との中に、未だ多くの人に知られない大精神が横たわつてゐて、之を発揮することこそ、新しい時代の理想に向つて躍進する所以だとわかつたならば、之に越す結構なことはない筈である。（pp.3-4）

以上にあるように、青年団の「不当なる利用と誤れる指導論」に対抗する論理を歴史・伝統に拠って示す、これが本書のまず第一の目的なのであった。では具体的に、「不当なる利用と誤れる指導論」とは何を指していたのであろうか。

これはまた本書中、第二章第五節「大正以後の青年団」から読み取られる。まず田澤は、1915（大正4）年の内務・文部大臣による第一次青年団訓令と通牒煥発の背景を述べる。第一次世界大戦におけるドイツ軍と青年組織との密接な関係をモデルとし、青年団の年齢上限を、頑なに20歳までと陸軍の田中義一中将（当時）が主張して規定されたことを理由に、「その動機の一部に、軍国的訓練を行はんがために、青年団を改造せんとする意図を含んでゐた（p.54）」陸軍主導のものであったとした。以後、田澤はこの訓令と通牒が

地方の実態と異なるが多かったため、種々混乱が生じたことを述べた後、

独軍の軍国思想が、漸次英仏のデモクラシーの思想に圧倒さるるに至つたと共に、我が国に於ても、漸次その影響を見るに至り、この訓令によつて、我が国青年団を改造し了らんとせる一部の計画は、ついに失敗に帰し、後に述ぶる積りであるが、年齢も二十五歳を常例とすることとなり、組織も自治的に改むることゝなつたのである。

(pp.56-57)

と、婉曲的に陸軍の青年団施策介入を批判している<sup>39)</sup>。以後、1918（大正7）年のやはり内務・文部両大臣名による第二次青年団訓令は、「歴史的価値は大したものではなかつた」とする。対して1920（大正9）年の第三次訓令が「重大なる歴史的意義をもつ」ものとして、その解説に紙面を割く。

この時の訓令は、自主自立の精神を明確に宣言したものであつて、青年団は、之によりはじめて自治団体たるの本質を明かにすることが出来たのである。「青年団を統ぶるものは、之を団員中より推挙するを本則とす」と言ひ、さらに此の訓令に基く通牒に於ては、従来二十歳を以て常例とせるものを「地方の実情に応じて二十五歳に進むるを妨げなき」ことを述ぶる等、大正四年の訓令に於て、著るしく訓練主義、画一主義的色彩を濃厚ならしめたのを緩和し、青年団をして、あくまでも自治生活の本義にかへらしむるに務めたのであった。

大正九年の訓令は、かく重要な歴史的意義をもてる外に、なほ当時の、思想傾向をも窺ふに十分である。即ち、大正四年の訓令が、一時は地方を風靡して、訓令それ自身のもつ内容以上にいちじるしく訓練主義を濃厚ならしめたのに対して、その弊を改め、本来の、自治的団体に復帰せしめんとしたものであり、且つさきの訓令が、大正三四年の世界戦争に際して、常時連戦連勝せる独逸国の強力に驚き、その軍国的思想に影響されてゐるものなるに対し、大正八年、大戦終結と共に、結局は自由思想、デモクラシーの勝利に帰せるに眼ざめ、こゝに曩の暗々裏に影響した軍国的思想を是正せんとする意味合ひから、この訓令となつて現れたものと見なければならぬのである。大正四年と大正九年、この二つの訓令を併せ考へる時、そこに始めて政府の青年団に対する一切の態度が明らかとなるであろう。即ち青年団そのものゝ本来の性質を認めながら、それを指導し援助してゆくといふ態度、即ち之れである（同上、pp.61-62）。

以上、長い引用とはなつたが、田澤の軍国主義への批判と大正リベラリズムへの共感がよく浮かび上がっている。第三次訓令・通牒において強調された青年団の「自治」性は、団長を団員内から選ぶことから、その保障が強く謳われたものと理解できるものである。ここには戦後に「体制内リベラル派」と評される<sup>40)</sup>、田澤の志向性がよく表れていると思われる。

1940（昭和15）年の第75回帝国議会において、立憲民政党所属の衆議院議員齊藤隆夫が、いわゆる「反軍演説」によつて議員除名処分を受けるに至った際、田澤が批判質問を行ったことが知られる<sup>41)</sup>。また、大政翼賛会にも入会をせず距離を置いていた。

本書冒頭に挙げられた「不当なる利用と誤れる指導論」は、まずは第一次訓令における、陸軍主導の青年団の軍事利用・訓練主義的な志向に対して寄せられたものとして見てよいであろう。なお、第三次訓令により軍事色が弱まったと見るのは早計で、1926（大正15）年、結局は青年団員が全加入することになる青年訓練所が全国において、主に実業補習学校と小学校に併設されていく。

## （２）思想対策

もう一つは、全国の地方青年における政治・思想状況をめぐる対応が背景としてあったことが想定される。本書中ではそれほど紙面が割かれていないが、つとめて田澤は、『青年団の使命』においても「望ましい政治教育」は推奨するものの、青年団の自小作争議等での不偏不党、中立を強調する（p.110）。さらに無産政党、国粋派の運動いづれにも加担することを戒める。これが戦後、「田澤精神」として喧伝される青年団の「中正」の主張である（第2章参照）。

以上の推測を裏付けるのは、『青年団の使命』に先だつ1928（昭和3）年に刊行された、田澤著の『道の国日本の完成』（日本青年館刊）である。この『道の国日本の完成』は、主に同年にあった「共産党事件」、すなわち3・15事件として知られる、第1回普通選挙実施後の共産党や無産政党の活性化に対する弾圧が、執筆の理由として挙げられている（p.1）。ゆえに同書では、共産主義への批判に加え軍国主義への批判も行った後、国体を前提としつつ、「精神生活と物質文化の渾然たる調和」に根拠をおいた「道義国家」を理想の国家として示す（pp.54-55）。さらにその対外方針は、「国際平和の手段による国際正義の樹立（p.58）」とし、国際連盟に期待を寄せ、国防は軽んじないとしながらも侵略戦争と帝国主義は否認する。対内方針は「社会平和の手段によつて社会正義を樹立すること（p.60）」とした。なお、そこでいう社会平和とは、直接行動と暴力革命を否認し、階級闘争に依らず社会連帯の観念に基づくもので、「合法的で政治的な、そして教育的な道徳的な手段（同上）」であった。

国体の範疇にある、「体制内リベラリスト」としての田澤の本質がよく現れている内容である。労使の調和は、彼が深く携わった協調会の趣旨でもあり<sup>42)</sup>、「道義国家」は、彼のなそうとする社会政策の結果としての理想像であったともいえよう。とすれば、この2年後に刊行された『青年団の使命』においても、これらの視点が引き継がれていると見るのは自然であろう。

また、田澤理事の主導のもと、同年から制定が始まっていた大日本連合青年団綱領が翌1929（昭和4）年に決定された<sup>43)</sup>。

### 大日本連合青年団制定

#### 青年団綱領

- 一、我等ハ純真ナリ 青年ノ友情ト愛郷ノ精神ニヨリテ団結ス
- 一、我等ハ若シ 心身ヲ修練シ勤労ヲ楽ミ自主創造ノ人タルヲ期ス
- 一、我等ハ希望ニ燃ユ 清心ノ意氣ヲ以テ愛ト正義ノ為ニ奮闘ス
- 一、我等ハ国家ヲ愛ス 忠孝ノ本義ヲ体シ献身奉公国運ノ進展ニ盡ス
- 一、我等ハ心ハ広シ 人道ノ大義ニ則リ世界ノ平和ト人類ノ共栄ニ努ム<sup>44)</sup>



ここにも国体の下にある中正の修養団体、そして国際協調という田澤の「道義国家」観が反映されていることが明らかである。

さらに『青年団の使命』が刊行された 1930（昭和 5）年の 7 月に刊行された（『青年団の使命』は 3 月刊）中山太郎著『日本若者史』（春陽堂刊）に田澤は跋文「日本若者史の後に」を寄せている。そこで田澤は次のように述べている。

わが国の青年団が、世界に類例なき特殊の性質を有し、特殊の機能を發揮しつつあるのは、研究者の何人も異議なき所であらうが、その然る所以を討めれば、欧米のそれは、大体に於て青年教育に一かどの識見ある人々が、その教育的信条を社会に訴へ、之に共鳴する人々を集めて組織してゐるものであるのに対し、我が国の青年団は、遠く古代の民族的風習を基礎とし、時代の変遷に伴ふて、或は発達し、或は改造されたものであると云ふ点に存すると云はねばならぬ。

わが国の青年団、殊に地方村落に於ける青年団にありては、入団の手續はなくとも、小学校を終りて青年期に達すれば、当然青年団員となり、我も人も之を疑はぬと云ふ実情である。かう云ふことは、歴史的に、長年月の伝統の上に立つて初めて行はるゝことであつて、かの一定の主張に共鳴して集り来る特別の青年運動とは、全然その性質を異にしてゐることが、之によつても明らかであらう。

上段の下線部「遠く古代の民族的風習～」の部分にあるように、「青年団＝若者組母胎」論の意義を復唱するものであり、下段の下線部からは、その存在は伝統により根拠づけられ、「かの一定の主張に共鳴して集り来る特別の青年運動」——前述の経緯からも共産主義運動と思われる——との差異が強調される。

さらに、1932（昭和 7）年に刊行された『政治教育小論』（新政社刊）では、「青年団と実際政治」という項において、「青年団は実際の政治運動の関係してはならぬ（p.114）」と断言する。そしてやはり『青年団の使命』での「青年団＝若者組母胎」論に関わる記述を復唱しつつ、「かくの如く我が国の青年団は、主義主張に基づく同志の団体でなく、郷土におけるいっさいの青年が共同してその青年生活を充実せしめようとする団体（p.115）」であると強調した。もし社会運動に関わりたいのなら、「そういう運動を起こしたいものは青年団のほかに、別にいわゆる『同志』の青年を集めてそういう運動を起こすべきである（p.116）」とする。

このように、歴史を「構築」あるいは「改変」しようとしてまで田澤が確立させようとしたのが、青年団の「自治性」と「中正」的な位置づけであつたと言えよう。しかし、この枠にある青年団像は、内務官僚出身であり、あくまでも国体の範疇にある「体制内リベラリスト」としての田澤の志向の枠に収まるものであつた。戦後においては、この田澤における「リベラル」もオールド・リベラリズムと位置づけられるものになった。結果としてこの青年団像は、戦後の青年の〈叛乱〉期には青年層の統制の論理として活かされていくのであつた。このことは第 2 章において示すものとしたい。

## 第7節 「若者組」像をめぐる民俗学と青年団中央組織との関係

### (1) 熊谷辰治郎の位置づけ

序章においても示したように、民俗学においては柳田直系の民俗学者は、柳田を継承して主に婚姻媒介組織としての機能に関心を寄せることとなった。そのため、民俗学者からも、青年団中央組織により構築されていった「美風」としての若者組像には、平山和彦らの批判が始まる 1970 年代までは、特段の異論が呈されてこなかった。一つには、熊谷辰治郎らの研究能力の高さが、その権威性を保たせたものと思われる。

熊谷は、1921（大正 10）年、岩手での小学校校長の職を辞して上京し、小尾晴敏の主催する東京社会教育研究所で学ぶ立場となつて以来、「日本若者史」を研究テーマとして学んだ<sup>45)</sup>。研究所生となつてすぐ、同年 6 月からは、日本青年館調査嘱託として勤務した。以後、1925（大正 14）年の大日本連合青年団成立後には同団主事となり、調査活動と雑誌・書籍等の編集活動を軸に、大日本連合青年団の実務を全般にわたり担っていったとされる<sup>46)</sup>。

上野景三は、熊谷の日本青年館入所に際して期待された役割を、「青年団運動の理論的枠組を形成することであつた」とし、その背景として、1910 年代からの 1920 年代に至る 3 度の訓令を受け、「修養機関」「自治的団体」としての独自の役割と内容を形成するための理論化が求められていたことを指摘する<sup>47)</sup>。以後、熊谷は、初期の日本青年館調査部部长として<sup>48)</sup>、伝統的青年集団の研究と現行の農村及び青年団調査を主導した。これらの活動は、後に大日本連合青年団に設けられた調査研究部の基となり、1930 年代以降、前掲『青年宿』、『若者制度の研究』、『大日本青年団史』等の刊行に至った<sup>49)</sup>。

熊谷は 1928（昭和 3）年に創設された村落社会学会には、農業経済学の渡辺庸一郎や地理学の小田内道敏らとともに幹事として名を連ねた。熊谷の自宅で同会が開催されるなど、主要メンバーとしてあつたといえる。熊谷の証言によると、柳田から「青年団の研究を本格的にするのなら、日本の村落のことがわからねばならない」と示唆されたゆえであつたという<sup>50)</sup>。

同時期から柳田と熊谷、そして日本青年館との関係は密である。『青年と学問』（日本青年館、1928）の刊行、さらに同書を『郷土研究十講』と改題しての再刊（日本青年館、1931）することを端緒に、柳田による日本青年館、大日本連合青年団関係の講演や関係する雑誌への寄稿などが確認されるようになる<sup>51)</sup>。なお、日本青年館で長く資料整理と調査研究に携わってきた掛谷昇治によると、これらの柳田と日本青年館・大日本連合青年団との密な関係は、1936（昭和 11）年 4 月の田澤義鋪理事長の辞任をもって終焉を迎えたという<sup>52)</sup>。田澤の辞任自体が、二・二六事件の事後処理を期したものとされる<sup>53)</sup>。以後は準戦時体制の進行の中、日本青年館・大日本連合青年団自体が昭和研究会の活動母体となり、近衛新体制運動、そしてその後の翼賛体制の拠点となつていくのであつた。

### (2) 民俗学草創期と日本青年館・大日本連合青年団

若者組研究で知られる民俗学者である瀬川清子（1895～1984）は、1928（昭和 3）年 7 月 22 日から 30 日まで愛知県知多郡日間賀島での民俗調査に際し、「この旅行に出る時に、いつものやうに、青年会館の熊谷さんと野口さんに紹介状をもらったのであつたが<sup>54)</sup>」としたためている。岩田重則によると、この「熊谷さんと野口さん」とは、熊谷辰治郎と

野口孝徳であるという<sup>55)</sup>。「いつものやうに」とあるように、柳田を介して瀬川も青年団中央組織の研究部メンバーと密接な関係にあった。

また、村落社会研究会会員でかつ日本青年館関係者であるメンバーが編集に深く関与したのが、柳田國男著の『郷土生活の研究法』(刀江書院、1935)であった。日本民俗学の確立期であった1930年代において、やはり柳田著の『民間伝承論』(共立社書店、1934)と並んで、民俗学紹介と方法論の重要なテキストとして位置づけられる書である。村落社会研究会員で大日本連合青年団嘱託であった小林正熊と、同じく同会員かつ大日本連合青年団調査部員であった野口孝徳が講義録をもとに編集に当たったといい、後半部の「民俗資料の分類」は小林が一人で編集した<sup>56)</sup>。

このように、日本民俗学や農村社会学が各々のアイデンティティを示し始めた1930年代において、熊谷と日本青年館・大日本連合青年団の調査部門に所属するメンバーたちは、村落研究の最先端にあった。それゆえに同時期から提示される熊谷らの研究報告と著作は、実証的な研究成果として、戦後しばらく位置づけられる權威性を持ち得ていたとみてよい。この軛から解き放たれたのは、1962(昭和37)年に柳田國男が没した後、戦後に大学教育の中で民俗学を学んだ平山和彦や福田アジオらが民俗調査を積み上げ、アカデミズムの場で発言するようになってからである。

なお、同時期の1928年に大西伍一の主導により農村教育研究会が組織されるが、村落社会研究会と共通する会員も多く、熊谷も後に深く関与していく。大西は後に熊谷のスカウトにより嘱託となり<sup>57)</sup>、1934(昭和9)年、大日本連合青年団設立十周年記念として日本青年館に開設された「郷土資料陳列室」の準備を主導することとなる。大西はその後も大日本連合青年団調査部嘱託として、下村虎六郎(湖人)部長のもと、前掲『若者制度の研究』刊行に関わった<sup>58)</sup>。

### (3) 若者組の〈教育〉化をめぐって

本章第5節において、特に1936(昭和11)年に刊行された『若者制度の研究』によって、若者宿を拠点とした若者組のあり方が、「相互教育」の組織や一人前教育の場となるという観点で教育的評価が与えられていたことを指摘した。「相互教育」という語については、先んじて田澤義鋪が『政治教育講話』(新政社、1926)において、政治教育は「相互教育」であるとして用いていることが確認される(pp.65-66)ものの、その後に刊行される『青年団の使命』では「相互教育」の語は全く用いられていない。むしろ内容から見るに、『若者制度の研究』の「相互教育」に関わる記述には、田澤の影響というよりは柳田國男の「前代教育論」との共通点、あるいは影響が感じられる。

柳田が1930年前後より知識重視の学校教育と対比させるかたちで、伝統的村落における「前代教育(=近世以前の教育、近代学校制度成立前の教育)」を一人前教育として評価し始めていたことが、関口敏美<sup>59)</sup>、福井直秀<sup>60)</sup>らによって指摘されており、特に1931(昭和6)年に発表された、「義務教育の条件」<sup>61)</sup>という文章に両者は注目している。ここでは同齡集団、ここでは特に青年団と若者組を例示して、いわゆる後年「群の教育」、「笑いの教育」とされる<sup>62)</sup>、集団内の相互作用と「笑い」の制裁による教育の意義が示されている。しかし、そこでは、『若者制度の研究』にあるような、「相互教育」そのもの

の語を用いているわけでもなく、管見の限り、柳田の全著作を通して「一人前教育」というフレーズは用いられていない。

ただ、前述のように、柳田國男と日本青年館、大日本連合青年団調査部のメンバーは密接な関係を持っていた。『若者制度の研究』の執筆者として挙げられている野口孝徳は、前掲したように、1935（昭和 10）年に刊行された柳田の『郷土生活の研究法』の編者であった。野口は、1932（昭和 7）年に柳田が前年に行った講義をまとめた「郷土史」というパンフレットを読む、「郷土生活の研究法の会」に熊谷辰治郎、さらにはやはり『郷土生活の研究法』の編者である小林正熊とともに参加しており<sup>63)</sup>、このことが『郷土生活の研究法』発刊へと至った経緯がある。それゆえに柳田の「前代教育」に関わる話に触れていた可能性はある。

この推測は、『若者制度の研究』の論述の枠組み・内容をほぼ引き継いで編集されたはずの『大日本青年団史』において、「一人前教育」「相互教育」といった「教育」の語が若者組と関わってほとんど用いられていないことから補強されよう<sup>64)</sup>。

## 第 8 節 結語

### （1）本章のまとめ

本章第 3 節において示したように、若者（組）を弊風視する志向は、近代日本における“Youth”に相当する語彙を、「青年」へと転換せしめた。その場合の「青年」は学校教育との連続性が前提となる、「教育」の対象でもあった。青年団施策は、村の若者を、国家および地方において有用なる人材として育成し、かつ活用する「統制と動員」をねらったものであった。ゆえに、「若者」の「青年」化が図られたと言ってもよい。「統制と動員」こそが、近代から戦後の 1970 年代、高度経済成長後までに至る、日本の青年施策、青少年施策の根幹であった。

1910 年代から 1920 年代に至る官製青年団化推進の時期には、陸軍が軍事利用の志向を以て介入を図った。さらに、日露戦争後の資本主義経済の進展に伴う労使紛争、自小作争議の展開に際しては、共産主義の浸透が懸念される状況にあった。その際、日露戦争後より、徐々に言説上も「弊風」から「美風」へと転換しつつあった近世来の若者組は、1930（昭和 5）年に刊行された、田澤義鋪による『青年団の使命』により、当時の青年団と歴史的・質的にも直結された。以降、青年団中央組織の正史とも言える、1936（昭和 11）年刊行の『若者制度の研究』、1942（昭和 17）年刊行の『大日本青年団史』において、田澤以来の自然発生性、自治性の強調に加え、そこにおける相互教育性が強調されることで、〈教育〉化がなされ、青年団をめぐる言説空間上でその美化が完成したのである。この理想化された若者組像が、そのまま理想の青年団像として示されたのである。

そして本章では、「青年団＝若者組母胎」論の成立の背景、およびそれと民俗学との関わりを検討した。そこでは上記のように、『若者制度の研究』、『大日本青年団史』等の青年団「正史」、日本青年館と深い関わりを持っていた柳田國男の前代教育論の影響が推測された<sup>65)</sup>。

なお、近代において、青年団の結合原理について明言する言説は少ない。そのなかではほぼ唯一、田澤はこの理想化した「若者組」像に仮託しつつ、青年団は若者組以来の「自然の習俗」であり、「素朴極まる」青年期の社交欲・娯楽欲がその根本的な結合原理である

ことを強調した。以後、青年団の結合原理はとりわけて論われることなく、自明のものとされていった。この根拠となる言説としての「青年団＝若者組母胎」論の「不自然さ」に対しては、本章冒頭に述べたように、戦後になって異議が唱えられるようになる。

## （２）農村青年の「青年期」の確立と保障をめぐる

本章で取り上げた青年団論は、それすなわち農村青年の青年期論であった。山本瀧之助は、本章第３節で取り上げた 1907（明治 40）年刊行の『地方青年団体』において、「青年団体は当然小学校の一部である延長したものである。学齢は十四歳までではない実に三十歳まであるといふことを覚悟すべきである（p.101）」ともし、「せめては徴兵適齢まで学校と青年団体との連絡が保たれたならば、我国の兵士は屹度今一層善良なるものが出来ることと思ふ（同上）」と「国民教育（p.110）」の中に小学校から兵役までの連続性を展望する。そして、「青年団体は広義に見たる教育機関である（p.107）」と位置づける。なお、この兵役との連続性については、前述したように、それをねらった陸軍主導の動きに対し、後年、田澤義鋪らによって批判が加えられていくこととなる。

ここでの山本の主張は、彼をして官製青年団化のイデオログならしめるものであったことは間違いない。その一方、本章第２節において示した田嶋一の指摘にもあるように、山本は、学校教育との連続性の上に保障されていた教育の対象としての「青年」、それすなわち「学生」という階級・階層論的な意味合いに抗していた。山本は農村においても、学校教育と連続した青年教育（山本は具体的に夜学会や実業補習学校を比定する）の場を制度的に確立することで、農村青年にも「青年期」を保障することに強い価値を持っていた。彼の処女出版である『田舎青年』、続く『地方青年』の前掲引用部、彼の主著である『地方青年団体』においても、山本の「青年＝学生」という風潮に対する異議申し立てが繰り返され示されている。これは山本の人生における、最大のコンプレックスの現れであり、かつ青年団組織化の論理として彼を突き動かしたことは、既に指摘されてきたところである<sup>66)</sup>。

北村三子は、山本瀧之助をはじめとした青年団関係者による教育論には、当時人口に膾炙されてきた青年心理学の影響が見られると指摘している<sup>67)</sup>。具体的には『地方青年団体』での山本論に垣間見られる、集団心理へのポジティブな評価に着目している<sup>68)</sup>。また、北村は、1900 年代頃より、青年心理学が「学校騒動」への対応のため、特に中等教育の現場で求められ、以後、青年（期）理解のために一般にも普及していく過程を示している<sup>69)</sup>。同じく北村によると、近代における青年心理学の父と言われる<sup>70)</sup>、アメリカの G.S.ホール<sup>71)</sup>の学説が同時期より紹介されている<sup>71)</sup>。

ホールの青年心理学研究は、1880 年代より開始されていた。彼の研究の集大成として位置づけられる、1904（明治 37）年に刊行された『Adolescence（青年期）』上・下巻<sup>72)</sup>では、青年期特有の不安定さを「疾風怒濤の時代（Sturm und Drang）」とし、不安と動揺の時期、すなわち第二の誕生と表現したことでよく知られる<sup>73)</sup>。同書は当時としてはだいぶ早く、1910（明治 43）年に元良勇次郎・中島力造・速水滉・青木宗太郎共訳（抄訳）によって『青年期の研究』（同分館）として刊行された。訳者序文に「訳者は方今<sup>ほうこんこのしゅ</sup>這種の著述を本邦学界に紹介することの極めて緊要なるを感じ、原著二巻千数百頁の大冊に就き、其要を摘み、其意を約して、此書を成せり」とあるように、早急に青年心理学の研究が求

められ、またそれを受容する状況が存在していた。上掲の北村の指摘にあるように、「学校騒動」への対応、また加えて和崎光太郎が指摘するように、学生の「病的状況」などの社会的課題に対応すべく、外来の青年心理学の導入が求められていたのであった<sup>74)</sup>。これにより、1900年代から1920年代にかけて、不安定な発達段階としての「青年期」の概念が、教育関係者をはじめとする識者を端緒とし、受容が進んでいったことが推測される。

田澤義鋪が1930（昭和5）年に『青年団の使命』で示した、「素朴極まる」「青年期」の「社交慾」・「娯楽欲」がその根本的な結合原理とする主張も、まさに「青年期」の語が用いられている（他の箇所でも「青年期」の語は多用されている）。ここには、田澤も青年心理学の影響を受けていたこと、あるいは青年心理学の知見が、少なくとも知識層においては一般化していたことがうかがわれる<sup>75)</sup>。さらに関わって、田澤はやはり『青年団の使命』において、台湾や南洋諸島の先住民における若者宿に類する民俗を取り上げた後、以下のように述べる。

勿論私は、我大和民族が、今の南洋の土人、乃至台湾の生蕃と同一種族だなどゝの乱暴な意見を述べるものではないが、共通の原始的習俗が存在してゐたであらうと推測することは、寧ろ当然の事だと考へざるを得ぬ。かくの如く我民族の、少くとも我民族を形成した一部の種族の、原始的習俗に其の源を発してゐると考へてこそ、徳川時代の若者制度が、何人によつて創始せられたともなく、権力者の命令とも無関係に、全国津々浦々何れの処にも、大体同じ形に於て存在してゐた事実を、初めて説明することが出来るであらう。（p.7）

上掲の文章における認識は、現在の観点ではダーウィニズムそのものであるが、田澤は、若者組や若者宿といった「青年期」に顕著な組織的活動が、通文化的にその基層に存在するものとして意味づけ、「青年団＝若者組母胎」論を補強しようとしていることに気づかされる。

本章ではここまで『青年団の使命』を繰り返し読み解いてきたが、山本瀧之助同様、田澤が農村での「青年期」を保障する意図を持っていたことは明らかであろう。しかし、その「青年期」も都市の学生のように労働と切り離されるものでもなく、日常生活の周縁部（夜間や農閑期など）において具現化されるものであった。さらにそこでの「青年」像は、地域そして国家に奉仕する、よりよき国民像の枠を外れるものではなかったことはこれまでも述べてきたとおりである<sup>76)</sup>。また、より強く批判的な観点で見れば、歴史性と通文化的な基層性の強調という、いわば縦軸（歴史性）と横軸（通文化性）とを統合するかのような重層的なフォークロリズム的言説でもって、近代における伝統的青年集団の改組・統合過程を捨象し、正当化したともいえる。

いずれ結果として「青年団＝若者組母胎」論は、近世以来、「青年期」が農村部においても若者組への加入によって存在してきたというストーリー、若者組・青年団に共通する結合原理としての社交欲、さらにはそれを前提とした「一人前」になるための「相互教育」の機関・組織としての機能を青年団論に根深く打ち込んだ。こうしていわば疑いなき「大きな物語」となった「青年団＝若者組母胎」論は、まさに聖性を帯びた教育言

説としても意味づけられるのである。

- 
- 1) 詳細は第2章において論じる。
  - 2) 全日本社会教育連合編・発行『社会教育』8(6)、1953、pp.32-39。
  - 3) 全日本社会教育連合編・発行『社会教育』8(10)、1953、pp.40-53。
  - 4) 日本青年館調査研究室編・発行『研究室報』No.10、1966、pp.33-50。
  - 5) 日本青年館調査研究室編・発行『研究室報』No.11、1967、pp.139-160。
  - 6) 平山和彦『青年集団史研究序説』下巻、新泉社、1978。
  - 7) 宮前耕史『『若者制度』の誕生—地方改良運動期以降における政府青年団(体)施策と「若者組=教育機関」説の成立—、筑波大学教育学会編『筑波教育学研究』第2号、2004、pp.17-31。
  - 8) 安藤耕己「〈教育的〉な「若者組」「子ども組」の成立—青年集団・子ども集団の歴史的原像をめぐる言説とフォークロリズム」、日本社会教育学会編『〈ローカルな知〉の可能性—もうひとつの生涯学習を求めて—(日本の社会教育第52集)』、東洋館出版社、2008、pp.145-156。
  - 9) 1990年代以降、関わる研究が蓄積されていく。田嶋一「共同体の解体と〈青年〉の誕生」、中内敏夫他『教育—誕生と終焉』藤原書店、1990、pp.32-50)を嚆矢とし、岩田重則による近現代史と民俗学を架橋した研究(岩田重則『ムラの若者・くにのわかもの』未来社、1996)が、さらには北村三子(北村『青年と近代—青年と青年をめぐる言説の系譜学—』世織書房、1998)、木村直恵(木村『〈青年〉の誕生 明治日本における政治的実践の転換』新曜社、1998)らの言説研究が提示された。また〈教育〉化された「青年宿」の生成過程に関しては、中野泰の歴史民俗誌的研究(中野『近代日本の青年宿』吉川弘文館、2005)に詳しい。戦後における「青年」「若者」の転換に関しては、難波功士の一連の研究(難波「戦後ユース・サブカルチャーズについて(1): 太陽族からみゆき族へ」、『関西学院大学社会学部紀要』96、2004a、pp.163-178、「『若者論』論」『関西学院大学社会学部紀要』97、2004b、pp.141-148)が参考になる。
  - 10) 田嶋9)前掲、pp.32-40。
  - 11) 安藤8)前掲、p.3。
  - 12) 安藤耕己「若者の『居場所』へのまなざし—史的考察—」、田中治彦・萩原建次郎編著『若者の居場所と参加—ユースワークが築く新たな社会—』東洋館出版社、2012、pp.71-72。
  - 13) 古川貞雄『村の遊び日—休日と若者組の社会史—』平凡社、1986。
  - 14) 古川同上、古川貞雄『増補 村の遊び日』農山漁村文化協会、2003、p.182。
  - 15) 多仁照廣『若者仲間の歴史』日本青年館、1984。
  - 16) 多仁15)前掲書 pp.184-185 に 1869(明治2)年から 1876(明治9)年までの府県史料に見られる、若者組に関わる禁令の一覧がある。それらの全文は、谷川健一・鈴木正節校訂「府県史料〈民俗・禁令〉」竹内利美・谷川健一編『日本庶民生活史料集成 第二十一巻』三一書房、1979、pp.3-528 中で確認される。
  - 17) 前掲『日本庶民生活史料集成 第二十一巻』、p.212。
  - 18) 田嶋9)前掲、pp.41-44。
  - 19) 同上、p.43。
  - 20) 同上。
  - 21) 北村9)前掲、p.138。

22) 同上 p.49。

23) 宮前耕史は若者組に加入すること、それすなわち一人前となるという、子ども→大人という 2 段階のライフサイクル論に疑義を呈す。より明確に子ども→若者→大人という 3 段階のライフサイクルで説明すべきとし、若者組への加入による〈教育〉を経て段階的に一人前の村人となっていくという、伝統社会における「若者」期の存在を強調している（宮前耕史「明治中後期地方青年の思想と行動」、筑波大学大学院博士課程日本文化研究学際カリキュラム『日本文化研究』第 7 号、1998、pp.51-52）。

24) 川村邦光『〈民俗の知〉』の系譜—近代日本の民俗文化—昭和堂、2001、pp.54-59。

25) 田嶋 9) 前掲、p.140。

26) 多仁照廣『山本瀧之助の生涯と社会教育実践』不二出版、2011、p.111。

27) 平山和彦『青年集団史研究序説 下巻』、新泉社、1978、pp.14-15。

28) 山本瀧之助『地方青年団体』洛陽堂、1909、p.40。

29) 同上、p.41。

30) 平山 27) 前掲書、p.16。

31) 安藤耕己「多仁照廣著『山本瀧之助の生涯と社会教育実践』」、日本歴史学会編『日本歴史』775、吉川弘文館、2012、pp.126-127。

32) 田澤義鋪が「日本青年団運動の母とも云ふべき」（「山本瀧之助氏全集の後に」、熊谷辰治郎編『山本瀧之助全集』山本瀧之助氏功労顕頌会、1931、p.9）と述べているのが初出かと思われる。

33) いつから田澤を「青年団の父」と呼ぶようになったかは不確かであるが、戦後の文章で確認できる限り、1950（昭和 25）年に下村湖人（虎六郎）が「僕の二十歳ごろ」、横山祐吉編『青年』第 35 巻 6 号、財団法人日本青年館、p.83 において、「日本青年団運動の父と仰がれる田澤義鋪先生は」と評している。翌 1951（昭和 26）年には、熊谷辰治郎が「青年団史上に輝ける思い出—明治神宮御造営奉仕の意義—」、『青年』第 36 巻 1 号において、「青年団運動の慈父と慕われた田澤義鋪先生」（p.57）としている。その後、永杉喜輔は、1966（昭和 41）年に『青年の父・田澤義鋪』（民主教育協会刊）を刊行している（本文中に「青年の父」の標記なし）。以上のような田澤と近い立場にあった人びとからの尊称が、「青年『団』の父」として確定されたのは、1971（昭和 46）年に刊行された『日本青年団協議会二十年史』（日本青年団協議会編、財団法人日本青年館刊）での「青年団の父・田澤義鋪」（pp.25-27）においてであったと思われる。その箇所は当時、日本青年館の職員であった富田昌宏氏が記述した（富田昌宏「<sup>いま</sup>も生きている田沢精神」、小尾帛雄編『青年』1973 年 1 月号、財団法人日本青年館発行、1973、p.57）。

34) 上野景三「解説」、熊谷辰治郎全集刊行委員会編『熊谷辰治郎全集』勁草書房、1984、p.914。

35) 宮前 7) 前掲。

36) 上野 34) 前掲、p.919。

37) なお、志村義雄についての詳細な情報はないが、大日本青年団職員であった北原泰作によると、志村は北原同様に左翼転向者で、「札つき」であったという（北原泰作『賤民の後裔—わが屈辱と抵抗の半生—』筑摩書房、1974、p.310）。戦後、1950（昭和 25）年には、ルース・ベネディクト著の『民族—その科学と政治性—』（北隆館刊）の訳者となっているなど、民俗学や民族学と近い立場にあったことがわかるが、その時期以降の状況も不明である。なお、柳田の周辺には多くの転向マルキストがいたことが指摘されている（福田アジオ『日本の民俗学—「野」の学問の二〇〇年—』吉川弘文館、2009、pp.112-114）ため、このルートの人脈に位置づけられるのかもしれない。志村とその周辺については、今後さらに追究する必要がある。

38) 宮前 7) 前掲、p.25。



- 39) なお、第1次訓令・通牒にみられる陸軍による軍事利用の意図に対する批判は、当時から中央報徳会のほか、山本滝之助、山崎延吉、柳田國男らの論者からもなされている。特に政友会所属の衆議院議員匹田鋭吉が帝国議会において再三質問し、批判を行った（平山 27）前掲、pp.25-27）。
- 40) 笹川孝一「戦後初期社会教育行政と『自己教育・相互教育』」、碓井正久編『日本社会教育発達史』亜紀書房、1980、p.252。同様の田澤のリベラリストとしての評価は、武田（長）清子「田澤義鋪の人間形成論—青年団教育に追求した国民主義の課題—」、『国際基督教大学学報 I-A 教育研究』No. 10、1963を嚆矢に、宮坂広作『近代日本社会教育史の研究』法政大学出版局、1968、p.187 においても行われた。
- 41) 田澤義鋪記念会代表丸山鶴吉編（下村湖人著）『田澤義鋪』財団法人田澤義鋪記念会、1954、pp.226-231。
- 42) 田澤は協調会において、1920（大正9）年から1924（大正13）年の間と1940（昭和15）年から1944（昭和19）年において常任理事であった。また、1938（昭和13）年には時局対策委員を務めた（後藤文夫編『田澤義鋪選集』財団法人田澤義鋪記念会、1967、pp.1098-1107）。
- 43) 41)前掲、pp.171-172。
- 44) 熊谷辰治郎著・発行『大日本青年団史』、1942、p.234。
- 45) 上野景三「解説」、熊谷辰治郎全集刊行委員会編『熊谷辰治郎全集』勁草書房、1984、p.914。
- 46) 同上、pp.913-914。
- 47) 同上、pp.914-915。
- 48) 掛谷昇治「日本青年館と柳田國男」、柳田國男研究会編著『柳田國男・ジュネーブ以後』三一書房、1996、p.47。
- 49) 同上、p.49。
- 50) 45)前掲、pp.917-918。
- 51) 48)前掲、p.47。
- 52) 同上、p.50。
- 53) 41)前掲、pp.217-225。
- 54) 瀬川清子『日間賀島民俗誌』刀江書房、1951。
- 55) 岩田 9)前掲書、p.15。同上。
- 56) 掛谷 48)前掲、pp.47-48、著者無記名「解題」、柳田國男『柳田國男全集 28』筑摩書房、1990、p.645。
- 57) 熊谷辰治郎「回顧二十年」、熊谷辰治郎著・発行『大日本青年団史』1942、p.37。
- 58) 48)前掲、p.49
- 59) 関口敏美『柳田國男における「学問」観の展開と教育観の形成』風間書房、1995。
- 60) 福井直秀『柳田國男—社会変革と教育思想—』岩田書院、2007。
- 61) 大日本学術協会編『教育学術界』63-4、モナス、1932。
- 62) 柳田が「群の教育力」という語を明確に用いるのは、『昔の国語教育』（岩波書店、1937）においてである。同じく「笑いの教育」という語を明確に用いるのは、「平凡と非凡」（新日本文化の会編『新日本』1-5、小山書店、1938）においてであるが、同趣旨のことは本文中に挙げた「義務教育の条件」で述べられている。しかし、同論文はその後柳田の著書には収録されず、1962（昭和37）年より筑摩書房より刊行が開始された『定本柳田國男集』にも掲載されていなかったため、関口敏美らに「発見」されるまでは一般に知られるものではなかったと思われる。
- 63) 柳田國男研究会『柳田國男伝』三一書房、1988、p.792。
- 64) 先に挙げたように、『大日本青年団史』の著述は桜井庄太郎が当たっていたが、桜井自体は柳田や民俗学との関係を直接には持っていない。

65) これに加え、本章では視座から外れるため触れなかったが、戦後、教員としてのまなざしを持った竹内利美、宮本常一、都丸十九一らの示した若者組像が後年引用・参照された。さらに、1962（昭和37）年の柳田國男の没後、著作集の刊行開始に伴う民俗学の関心への高まりもあり、大田堯、田嶋一ら教育学者がそれら「教育習俗」としての年齢集団に関心を示した。そこに1980年代前後からの中内敏夫らによる教育史における社会史的視点の導入も相まって、これらの言説は安定し、〈教育〉的な若者組像が確立していった（安藤 8）前掲、pp.151-152）。

66) 田嶋一「〈青年〉の社会史——山本滝之助の場合」、中内敏夫他『教育—誕生と終焉』藤原書店、1990、pp.132-160。

67) 北村前掲 9)、p.143。

68) 同上、pp.257-262。

69) 同上、p.126、pp.139-141。

70) 西村直喜「序文」、依田新・大西誠一郎・斎藤耕二・津留宏・西村直喜・藤原喜悦・宮川知彬編『青年心理学研究の方法と課題』金子書房、1973、p.1。

71) 北村 9) 前掲、pp.111-112。

72) Hall G Stanley. *Adolescence : its psychology and its relations to physiology, anthropology, sociology, sex, crime, religion and education*. v. 1 v. 2. : D. Appleton and Company, 1904.

73) 岡路市郎「青年心理学の系譜」、70) 前掲書所収、pp.196-203。

74) 和崎光太郎『明治の〈青年〉—立志・修養・煩悶—』ミネルヴァ書房、2017、pp.198-211。

75) 上野景三は、1900年代から青年心理学の知見に基づく「青年期」の語が辞書に掲載され始めることを例証している（上野景三「社会教育の変容が若者にもたらしたもの」、石井まこと・宮本みち子・阿部誠編『地方に生きる若者たち—インタビューからみえてくる仕事・結婚・暮らしの未来—』旬報社、2017、pp.253-254）。

76) なお田嶋一は、農村における青年期の「実質化」の動きが1920年代以降の自由大学運動や青年団自主化運動に現れていくものとして指摘する（田嶋 9）前掲、p.44）が、これは田嶋が言うところの、青年の第2層、すなわち教員や旧中間層の子弟、さらに第2層と第3層の境界にあり、中等教育までを受けずとも進取の気性に富んだ若者など、双方とも、ときに「政治青年」となりうる層に焦点化しすぎるきらいがあるのではないかと思われる。これは序章で批判した「自己教育論」を前提とした社会教育研究と同様の歴史像を導き出してしまう可能性がある。

## 第2章 戦後青年団論における「青年団＝若者組母胎」論の復権とその背景

### 第1節 問題の所在

第1章では、近代日本における「若者」から「青年」への語彙の変化も、青年層が学校教育と連続させられながら青年団組織へ包摂されていった過程の結果とみた。また、1930年代までの青年団論において、「青年団＝若者組母胎」論が生成され、定着していく過程を主要なテキストから整理を行った。その主体は、青年団中央組織とその関係者であった。本章では、戦後、1970年代までを対象とし、青年団中央組織の変化と併せ、「青年団＝若者組母胎」論がどのように青年団論に位置づけられていたのか、またその背景を以下確認したい。

なお結論を先んじて述べると、終戦直後から1950（昭和25）年から翌1951（昭和26）年まで続く朝鮮戦争の時期にかけて、日本青年館によって「田澤精神」が称揚されたことが確認される。次に第1次安保闘争を経た1960年代になると、主に1930年代までの青年団中央組織と関係者を称揚する言説群が再提示される。前者の時期の背景に関しては、小川利夫、大串隆吉<sup>1)</sup>により、占領下における青少年施策、反共施策との関わりが指摘されているが、後者の1960年代以降における言説群の提示については、これまでも検討が十分ではない。

さらに、本章では上記の2時期の間に、熊谷辰治郎が、自身の公職追放解除の翌年となる1953（昭和28）年、「日本青年連盟」を政治家・財界人らと組織し、積極的に1920年代以降の青年団中央組織に関する言説提示を続けた時期があることに注目する。

熊谷らの戦前における青年団指導者たちの「復権」までの過程をふまえ、編年的に青年団中央組織と関係者を称揚する言説提示がなされた時期を改めて整理する。そして、それらの時期が表出した背景を、日本青年館を拠点とする青年団中央組織における、戦前から戦後に至る人的連続性に着目しつつ考察する。

### 第2節 戦後青年団論にみる「青年団＝若者組母胎」論と「若者組」像

#### （1）戦前の青年団像の否定（終戦直後）

戦時下における1944（昭和19）年の大日本青少年団の解散後、青年団の全国組織は消滅していたことになる。結果、全国組織の再建は、1951（昭和26）年の日本青年団協議会（以下、日青協とする）の成立をもってなされる。この終戦直後からの日青協を頂点とした組織形態の成立過程に関しては、小川利夫が指摘するように、「文部省→府県内務部長→市町村長」という地方教育行政のルート、そして日本青年館ルートともいべき「財団法人日本青年館→各都道府県支部→旧青年団指導者及び幹部」という2つのルートが存在した<sup>2)</sup>。当初はCIE（民間情報教育局）によって、第1ルートの全国組織化は、戦前的官製青年団の復活として危惧されたが、反共や対労働運動などの意図と合致すること、さらに日本青年館の積極的な介入もあって、結果として容認されたとされる<sup>3)</sup>。

日青協成立後、「青年団＝若者組母胎」論とそこでの若者組像がどのような位置づけにあったかを論じる前提として、まず日青協成立以前の論議を見ておくことにしよう。ここでは、1949（昭和24）年に日本青年館から刊行された『青年団ハンドブック』（横山祐吉

著)を取りあげる。同書は、戦後における本格的な青年団に関するテキストであり、グループワーク理論の紹介と普及が主たる目的となっている。その中では、

しかし真に日本の民主的青年団の在り方が、遠く鎌倉時代からの歴史を持つ若者制度の延長や戦前の大日本連合青年団時代、又は戦時中の統制された大日本青少年団の伝統と歴史から出発したものではなく、戦後青年の新しい使命感に基く民主的な青年団体としての在り方として出発したものであることは銘記されなければいけません。

(p.5)

として、「青年団＝若者組母胎」論における「若者組→青年団」という連続性の否定、戦時期までの青年団との断絶を強調した「新生」青年団としてのあり方が示されていた。

## (2)「若者組」に対する実態からの批判

日青協は、成立後、1952(昭和 27)年より青年団運動の自主性を守るため「主体性確立」を運動方針として掲げた。さらには 1954(昭和 29)年からの「青年団主体性確立 3 カ年計画」、1957(昭和 32)年からの「第 2 次青年団主体性確立 3 カ年計画」を推進した<sup>4)</sup>。そして、この時期の日青協の活動で特筆すべきは、1953(昭和 28)年における青年学級法制化への反対運動と、その中で学級講座型の青年学級の対抗として登場した「共同学習」の提唱と普及であったといえる。このように日青協が「主体性確立」を掲げ、「共同学習」を進めていた 1960 年前後までが戦後青年団運動のピークといえるが、この時期における青年団論の中で、若者組像と「青年団＝若者組母胎」論に関して見てみたい。

日青協成立後に刊行されたパンフレット『青年団』<sup>5)</sup>における、「青年団の歴史」の項においては、留保をつけながらも「青年団＝若者組母胎」論が垣間見られる。しかし、その後、1960 年前後までは実態としての若者組に対し、批判的な論調が占めていることが以下のようにうかがわれる。

たとえば、日本青年団協議会が編集し、日本青年館が刊行していた雑誌『青年団』の 1955(昭和 30)年 8 月号、9 月号において、静岡県賀茂郡上河津村(現河津町)の「若衆組」と「若衆宿」に関して、同村在住の藤川太一からの報告が見られる<sup>6)</sup>。そこでは基本的に若衆組と戦後青年団との非連続性が強調される。藤川は、「青年たちは青年団の台頭(中略)と、民主主義、自由主義思想の普及によって、青年会(宿)の風習や形態を好まず、加えて、神社の祭典の主導権が青年会よりも部落に移行し、青年たちの興味は自然に青年会からはなれて、青年団に新たな期待が寄せられている<sup>7)</sup>」とする。このように、同報告では、実態としての若者組に関しての否定的な見解と、「新生」青年団への期待が示されている。

この報告を受けて同誌 10 月号には、日青協に近い立場の研究者である桜井庄太郎と吉田昇、当時青年団研究所長であった横山祐吉が参加し、司会は、当時日青協事務局長であった福本春男が務めた、「若衆組を改革する道」と題する座談会の模様が掲載されている。この座談会では過去の若衆組の自主性を認め、また若衆宿を「教育機関」として評価している。しかし、現在ある若衆組に関しては、加入の際や加入後に自由意志が反映されないことを特に問題視して否定されるべきものとしてとらえ、他方、終戦後の「新生青年団」

を評価する論調に終始している (pp.22-33)。

また、1958 (昭和 33) 年 2 月に行われた第 4 回全国青年問題研究集会での討議の内容をまとめた、日本青年団体協議会編『日本の青年 昭和 33 年度版』(読売新聞社編、1958) では、東京大学の碓井正久が「組織の問題」を整理している。ここでは「青年団の古さ」として、当時も青年団が「古くさいもの」として認識され、青年団の前身としての「若衆組」の「古さ」を継承している点が問題とされた。そして、同書では「いまも生きている若衆組」と題し、昔の「若衆制度」が現在まで残っている例として、同じく静岡県賀茂郡からの出席者の話がとりあげられている。

ここでは、「二十歳未満の男子は、特別の事情のない限り公民館に宿泊する」ことになっていて、「若い衆にもはいれないやつは一人前になれない」といわれている。年齢の階層は、はっきりとわかれ、「大若い衆」「中若い衆」「小若い衆」と呼び名までちがっている。年長のものには口ごたえすることは許されないので、あいさつの仕方がわるいと、年一回の「ぎんみより会」でさんざんしぼられる (pp.113-114)。

として、その強制的加入や入退会の自由がないことが批判されており、「若衆組の強い地方の青年団は、なんとかして、この古い若衆組の圧力をはねよけようといっしょうけんめいになっている (p.114)」と結ばれている。

これまでだいたい取り上げてきた下村虎六郎編『若者制度の研究』(大日本連合青年団、1936)においても、静岡県賀茂郡の事例や条目が多く挙げられている。それらは、同書刊行当時では、「鞏(強)固な団結と相互扶助 (p.180)」を表すものとして評価されていたはずである。しかし、この時期では、日青協の指導層や研究者からも、その年序列が明確な組織形態や制裁の存在などが、上記のように「古い若衆組の圧力」として認識されていたのである。

以後もたとえば、35 歳までの長男が強制加入させられる「若連」を問題視する福島県からの報告が、「家と部落の民主化」という文脈で 1960 (昭和 35) 年度の青年問題研究集会で報告されている<sup>8)</sup>など、この 1960 年前後までの青年団の活性期においては、部落(＝ムラ、集落)が機能しており、その中の組織としての若者組やその流れをひく青年団の活動が、言説としてではなく実態として認識されていた。家制度や部落の規制を封建遺制とみなして、その民主化が唱えられたこの時期においては、当然の如く批判の対象となったのであった。

1950 年代からは、序章で既に述べたように、研究者からも「青年団＝若者組母胎」論に関して、その「伝統」の構築に関して疑念が呈される<sup>9)</sup>が、その中でも小川利夫が、近代性年団論における若者組像について、歴史的理解が歪曲されたものであると明確に指摘した<sup>10)</sup>。

さらに、日青協副会長を務めた寒河江善秋著の『青年団論』(北辰堂、1959)や 1960 年代に日青協が刊行したテキストである『青年団のビジョンを求めて』(日本青年館、1964)、『仲間の実践に学ぼう 活動家の手引第 2 集』(日本青年館、1966)などを見ても、特に「青年団＝若者組母胎」論や若者組などに触れる記述は見られない。

### 第3節 「青年団＝若者組母胎」論の再表出と「若者組」像の再転換

#### (1) 「青年団＝若者組母胎」論の再表出と日本青年館

1960（昭和 35）年に設置されていた日本青年館調査研究室は、歴史研究に着手する志向を見せていた<sup>11)</sup>。『研究室報』No. 9（1965）には、岩手県で若者組研究をしていた高橋九一の文章が、同No. 10（1966）、No. 11（1967）には、小川利夫による戦前の青年団論に関する論考が掲載された<sup>12)</sup>。また同時期、日本青年館理事長であった後藤文夫が理事長を兼ねていた、財団法人田澤義鋪記念会<sup>13)</sup>によって、『田澤義鋪選集』が1965（昭和 40）年より編集を開始されており、同書は1967（昭和 42）年に刊行された。以後、1968（昭和 43）年に日本青年館から『若者制度の研究』が、翌年には『青年団の使命』が復刊された。さらには1970（昭和 45）年には『大日本青少年団史』が同じく日本青年館から刊行された。

『若者制度の研究』復刻版冒頭の「復刻版の刊行に際して」では、「すなわち若者制度は、いまの青年団の前身であり、その母胎をなすものであったとって間違いない」とされており、ここに1930年代に『青年団の使命』によって示され、『若者制度の研究』によって「完成」した「青年団＝若者組母胎」論が、その2冊の復刻とともに青年団論において再表出したのである。さらに『大日本青少年団史』は、序章第2節で示したように、だいぶ復古的論調が強いものとなっている。

当時においても、青年教育に関わる研究者から「青年団＝若者組母胎」論とそこにおける「若者組」像に関する批判が進展していた<sup>14)</sup>。その中で続いた復古的とも言える言説提示や出版の動きからは、当時の日本青年館の志向性がうかがわれる。

いずれにしろ、このような1960年代から顕著となる、主に日本青年館による、戦前の青年団中央組織と関係者に関する言説の提示や関連する書籍の復刻・刊行の動きによって、1930年代までに確立した理想の青年団像と、その基本認識である「青年団＝若者組母胎」論を再表出させたのであった。この時期の背景をめぐっては、後ほど詳細に論じることとしたい。

#### (2) 日青協における「若者組」像の「再転換」

1971（昭和 46）年に刊行された日本青年団協議会編『日本青年団協議会二十年史』（日本青年館刊）においても、前項で示した小川利夫らによる批判を受け入れ、やや留保的な書き方とはなっているものの、「わが国の青年団はこれらの若者団体（筆者註：若連中など）を母胎として発達したといわれている<sup>15)</sup>」として、青年団の「母胎」である「自主的・自治的な組織」としての「若者組」像が挙げられ、「愉快的仲間づきあい」の場としての「若者宿」像が示されるのであった。この記述も前述したように、日本青年館主導の言説提示に影響を受けていると推測される<sup>16)</sup>。

そして、同時期の発行と推測される日青協のパンフレット『せいねんだん』<sup>17)</sup>、では、「1. 日青協の歴史」において、『日本青年団協議会二十年史』でも留保されていた若者組の中世起源説が復活している。さらには「一方では若者宿と呼ばれる、青年の共同宿泊所があり、若者たちの相互教育の場として、また、仲間づくりの場としての役割をはたしてきました」として、若者宿が「相互教育の場」「仲間づくりの場」とされ、後段ではさらにその「自主性」が強調されている。

このように、戦後、1960年頃までは、青年団論においても実態面から批判されていた

若者組が、再び歴史的イメージとして語られ、それが日青協のいわば「正史」である『日本青年団協議会二十年史』やパンフレットにおいて示された。それすなわち、青年団論において、若者組が再び肯定的なものへと「再転換」されたとみることができよう。

### （３）生活集団論における「若者宿」像

1976（昭和 51）年、日青協の組織対策委員であった那須野隆一による『青年団論』（日本青年団協議会、1976）が刊行された。同書は序章第 3 節に示したように、「青年団第二の高揚期」とされる 1973 年頃から 1982 年頃までの時期、重要なテキストとなった。

「生活集団」は、「青年の要求と青年にとっての必要とを結びつけ、青年個人における要求の多様性、そこから出発して多数青年の要求の普遍性に重点をおいて組織される集団、多目的集団<sup>18)</sup>（傍点ママ）」であった。

『青年団論』においては、「“若者宿”のいわれ」として、「若者宿」や「娘宿」の説明が加えられる。そして、その後『若者制度の研究』以降、引き合いに出される「若者宿」での状況が、以下のように描写される（下線筆者）。

一日の仕事を終えて、青年男女がそれぞれの“たまり場”である若者宿や娘宿にあつまる。そこで、「手仕事」や「夜なべ」など手づくりの労働をしながら、あれこれと話し合う。その話しというのは、とくにテーマをきめてということではなかったが、その日の情報を交換しあったり、仕事の苦しさ楽しさを語りあったり、修養話しに耳をかたむけあったり、ときには冗談話しに花を咲かせたりしたにちがいない。

このように、若者宿（または娘宿）はもともと、青年たちが労働と学習と娯楽およびそれらを中心に生活まるとのふれあいをおこなう、いわば「宿泊型青年施設」であった。そしてそこには、青年たちが働くこと、生きること、学ぶことのまるとをみずからの手で管理していこうとする、青年の自治訓練のひとつの原型があった。<sup>19)</sup>

以上のように、那須野の生活集団論は「たまり場」と「ふれあい」を前提とし、生活史学習の展開を重視した<sup>20)</sup>。那須野はその「たまり場」に、上記の下線部にもあるように、「青年団＝若者組母胎」論において若者組と不即不離とされていた若者宿像を重ねたのであった。そして、そこでの「寝床分科会」が、生活集団の形成には重要とされた。

この時期には、前述のように、『日本青年団協議会二十年史』や日青協のパンフレット等で「若者宿」が「愉快的仲間づきあい」「仲間づくり」の場として強調されていた。日本青年団協議会編・発行『青年団強化の手引 続ビジョンを求めて』（1978）においては、生活集団論は、さらに明確に「青年団＝若者組母胎」論と結びつけられ、「若者組＝生活集団」として提示されているのであった<sup>21)</sup>。このように 1970 年代には青年団論において、「青年団＝若者組母胎」論は再定着されていたと言えよう。とはいえ、生活集団論における「青年団＝若者組母胎」論の「援用」の意味は、政治的な意味が先行したものとは言えない。このことはまた改めて第 3 章で論じることとする。

それでは以下では、戦後における「青年団＝若者組母胎」論再表出の背景を考察する。

## 第4節 終戦直後から日本青年団協議会結成前における田澤義鋪の顕彰

### (1) 田澤義鋪の死と終戦

田澤義鋪は、1936（昭和 11）年に日本青年館第 5 代理事長を辞職した。これは二・二六事件の事後処理を期してとされる<sup>22)</sup>。以後、貴族院議員として、また選挙粛清中央連盟と 1940（昭和 15）年に常任理事に復した協調会での活動を主としたが、戦局の拡大と行き先を憂いつつ、1944（昭和 19）年に急逝する。

その後、東京大空襲を経ても日本青年館本館は焼失を免れ、1945（昭和 20）年 9 月に連合国軍に接收されたものの、法人の解散は命ぜられず存続した。なお、日本青年館創設初期からの有力な職員である熊谷辰治郎（第 1 章第 7 節参照）は、終戦から日を待たない同年 10 月に小野武夫、下村湖人、横山正一らと「新青年問題懇話会」を結成し、日本青年館と青年団運動関係者らの結集を図って、機関紙『新青年文化』の刊行を始めた<sup>23)</sup>。しかし、それから 1 ヶ月も経たない同年 11 月、熊谷は公職追放により免職されている。前章で触れたように、熊谷は、戦前の若者組研究をリードした他、田澤路線の青年団運動の具体的なテキストであった『青年団の経営』（日本青年館、1933）の著者として知られる。

熊谷らが去った後の日本青年館は、第 8 代理事長・朝比奈策太郎のもと、雑誌『青年』を同年 9 月号より再刊させ、1951（昭和 26）年 2 月号まで刊行させたほか、C I E（民間情報教育局）と文部省とが、青少年教育を進める際の起点として機能した<sup>24)</sup>。

### (2) 反共キャンペーンと「田澤精神」の称揚

1948（昭和 23）年 10 月、日本青年館第 10 代理事長・佐々弘雄が、就任後わずか 8 ヶ月で病没したため、翌 1949（昭和 24）年 2 月、田澤義鋪の知友であった鈴木文史朗が第 11 代理事長に就任した。鈴木は、戦前には朝日新聞社に在籍したジャーナリストで、就任当時は、リーダーズダイジェスト日本支社長であった。鈴木は理事長就任後、雑誌『青年』には、田澤自身そして田澤時代の日本青年館関係者による、あるいは彼らに関する文章が掲載される。

同年 4 月号には、鈴木による「田澤精神について」が、11 月号には下村湖人による「田澤義鋪の人間像とその業績」が掲載され、この時期に軍国化に抗したヒューマニスト、リベラリストとしての田澤像が強調された。下村はここで「田澤精神を復活せよ」と青年に呼びかけ、大日本連合青年団の時期に回帰することを求めた。なお、これらの言説は C I E の意図するところに沿ったものであったようである。C I E の第 2 代教育部長であるタイパーが、「今は田澤先生の精神の再興を要するときである」と評価したことを鈴木が喜び、上掲の「田澤精神について」に記している<sup>25)</sup>。

さらに『青年』は、1949 年 10 月号から反共・親米の内容へと大きく変貌し、以後、同誌が休刊される 1951（昭和 26）年 2 月号までその傾向が続く。これは反共主義者であった鈴木理事長のイニシアティブによるもので、朝鮮戦争前後の時局を反映したものであったことが推測される。しかし、余りにその主張は極端で、「思想、宗教の中立を建前とする青年団運動の関係者を困惑させることがしばしばであった」とされる<sup>26)</sup>。

そしてやはり『青年』1949 年 10 月号には、当時の GHQ 新聞部長であった、D. C. . インボーデンによる「二宮尊徳を語る」が掲載されており、インボーデンは報徳の精神こそが日本民主主義に求められることを説く。つまり当時の時代状況に鑑みるに、GHQ あ



るいはC I Eからは、終戦後の経済復興にあたっては報徳思想が重視された。さらに反共施策が明確となる中では、政治的中立性を強調する田澤の青年団論は公認されるものであったのであろう。田澤が翼賛体制とは一定の距離を置いていたことが、好印象を与えていたことも想像される。

## 第5節 公職追放解除後の熊谷辰治郎の活動

### (1) 下村湖人による田澤の伝記刊行

前節で述べた終戦直後からの雑誌『青年』による顕彰に続いて、1954（昭和 29）年には没後 10 年を記念して、下村湖人による伝記、『田沢義鋪』（田沢義鋪記念会代表丸山鶴吉編、財団法人田沢義鋪記念会）が刊行された。下村は田澤のもとで青年団講習所長を務めるなどし、田澤をモデルとした人物を『次郎物語』に登場させるなど、田澤に心酔していたことがよく知られている。なお、『田沢義鋪』は、後に「この人を見よ」と改題され、下村の全集刊行の度に含まれた。そのため、『次郎物語』とともに、田澤像を普及させるに貢献したと思われるものの、1960 年頃までの戦後の青年団最盛期において、それらが一般青年団員にどの程度浸透していたかは定かではない。

というのも、前章で述べたように、1951（昭和 26）年の日青協成立から 1960 年代にさしかかるまで、戦前の青年団と戦後「新生」青年団を断絶させる志向性、さらには「封建遺制」として若者組（的な青年団）を批判することが一般的であった。そのため、同時期には戦前の青年団に関わる記述や「青年団＝若者組母胎」論が、日青協の刊行物や青年団活動のテキスト類から消えているのである。

では、上掲『田沢義鋪』出版後から、第3節に述べたように、1960 年代になって日本青年館による戦前の青年団を称揚する活動が活発化する間は、単にそれら言説の空白期間としてあったのであろうか。そこには、熊谷辰治郎の「奮闘」が認められる。

### (2) 熊谷の公職追放解除と日本青年連盟の結成

1952（昭和 27）年のサンフランシスコ平和条約発効による主権回復により、それまでも段階的に解除が行われてきた公職追放が完全に解除された。これにより、戦前・戦中に青年団中央組織に関わった人々が、再び表舞台へと登場してくる。同年、熊谷辰治郎の公職追放も解除された。熊谷は翌 1953（昭和 28）年 1 月、準戦時体制期に活躍した革新官僚の一人として知られる栗原美能留<sup>27)</sup>、さらには戦前に古河財閥を率い、後に商工大臣等を経験した実業家・政治家であり、戦後は日本貿易協会会長、日本文化放送、営団地下鉄等の社長を歴任した<sup>28)</sup>中嶋久万吉らと「日本青年連盟」を結成、中嶋が会長に就任した。以後、熊谷は編集兼発行人として、同会の機関誌、『NIPPON 青年』の刊行を始める。

栗原は、1939（昭和 14）年から 1941（昭和 16）年まで大日本青年団常任理事に就任し、以後、大政翼賛会、大日本翼賛壮年団等に深く関与した。終戦後すぐ 1945（昭和 20）年 10 月に厚生省社会局長に就任したが、翌 1 月には公職追放で辞官。3 月からは恩賜財団同報援護会常任理事に就任したが、これも 1949（昭和 24）年 3 月に再度公職追放で退職しており、日本青年連盟結成時には完全に浪々の身であったという。その後、1955（昭和 30）年より母校である成蹊学園に就職し、中学校の校長等を歴任した<sup>29)</sup>。戦後の栗原には特段の著作は見られず、『NIPPON 青年』にも一切文章を寄稿していない<sup>30)</sup>。

同連盟にはいかなる関係者が集まっていたかを整理しておきたい。以下、1960（昭和 35）年 9 月時点での日本青年連盟の役員を見てみる<sup>31)</sup>【表2-5-2】。そこでは中嶋が同年 4 月に没していたために会長職が空席となっているが、顧問には 7 人の名前が認められる。内務官僚出身で創設時からの日本青年館理事経験者である田子一民、やはり内務官僚出身で戦前に第 6 代日本青年館理事長を務めた香坂昌康、戦時下に三菱重工業社長、大政翼賛会生産拡充委員長の職にあった郷古潔<sup>32)</sup>、戦前に外務大臣を務め、当時は参議院議員であった佐藤尚武、戦前に日本女子大学校長、大日本青少年団副団長を歴任した井上秀（後に日本女子大学役員に復した）<sup>33)</sup>、1951（昭和 26）年から 1954（昭和 29）年まで文部大臣を務め、逆コース的施策を進めたと指摘される岡野清豪<sup>34)</sup>、そして、戦後も保守本流の指南役として知られた安岡正篤も名を連ねていた。これは、安岡が 1949 年に結成した指導組織である師友会<sup>35)</sup>の会長を中嶋が務めていたところと深く関わっているようである<sup>36)</sup>。なお、熊谷と安岡の結びつきは、熊谷が岩手県の小学校校長を辞して上京し、1922（大正 11）年に入所した東京の社会教育研究所においてであることが推測される<sup>37)</sup>。また熊谷と中嶋との直接の結びつきは 1952 年になってからであったという<sup>38)</sup>。

常任理事には熊谷が一人就任しており、それ以外の理事には 8 人の名前が認められる。栗原をはじめ、石川弥八郎（戦前に熊谷の指導を受け、戦後に日本青年館中央理事を経験、第 6 代～8 代福生市長）<sup>39)</sup>、菅原兵治（安岡正篤の金鷄学院時代の弟子で、元日本農士学校校長<sup>40)</sup>）、名取忠彦（元翼賛壮年団長）、細野軍治（国際政治学者）らが名を連ねた<sup>41)</sup>。参与には倉橋定（元大日本婦人会総務局長）、難波田春夫（国家主義的経済学者）、福田耕（二・二六事件時の内閣総理大臣秘書官）、町田辰次郎（元協調会常務理事、金鷄学院顧問）<sup>42)</sup>ら 5 人の名が認められる<sup>43)</sup>。これらの面々は、準戦時体制から国家総動員体制確立までに深い関わりを持っており、占領下では公職追放を受けていた者が多い。安岡の影響を受けた者も少なくない。

連盟の目的は、「地域青年団体の発達と、勤労青年層の健全な進歩、そして民主主義日本の確立による祖国の振興」とされていた。設立当時、「殊に青年層に対しては、日共の五全協指令に基づく、赤色共産主義の組織的活動が、一段と積極化し、その影響が、全面的に顕著な左翼化の様相を呈しつつあった<sup>44)</sup>」ことから、その主要な目的は青年団の左翼化の抑制にあり、中核人物・幹部養成を通して既存青年団を「中正健全」に育成していくことを目指していた。文部省社会教育官等を歴任した高橋真照は、日本青年連盟の主な会員は、青年団OBであったとしている<sup>45)</sup>ことから、やはり直接的に青年世代を組織化するものではなかったようである。すなわち、青年団中堅指導者の指導・支援を行うことにあった戦前の青年団中央組織のエートスを、ある意味そのまま継承した団体であったといえよう。

### （３）『NIPPON青年』にみる日本青年連盟及び熊谷の志向

熊谷は公職追放解除翌年の 1953（昭和 28）年には、上記のように「日本青年連盟」を結成するのみならず、多くの青少年育成関係の公職に就く。同年中には 4 H クラブ常任理事、文部省社会教育審議会青少年審議会委員、日本ユネスコ国内委員会事務局顧問に就任し、以後、1955（昭和 30）年には文部省社会教育審議会委員、1957（昭和 32）年に財団法人世界友の会理事、1958（昭和 33）年には日本青年団体国際委員会常任理事、そして 1959

【表2-5-2】昭和35（1960）年 日本青年連盟役員

役職	氏名	主要経歴※※
会長	中島 久万吉※	古河コンサル出身。後に商工大臣等を経験した実業家・政治家であり、戦後は日本貿易協会会長、日本文化放送、営団地下鉄等の社長を歴任。昭和35年4月病没。
顧問	井上 秀子	戦前に日本女子大学校長、大日本青少年団副団長を歴任。戦後に公職追放を経て、日本女子大学役員に復帰。
	岡野 清豪	戦後、衆議院議員。地方自治庁長官・文部大臣、通産大臣兼経済審議庁長官を歴任。
	郷古 潔	戦時下に三菱重工業社長、大政翼賛会生産拡充委員長。戦後、公職追放を受ける。
	香坂 昌康	内務官僚。第6代日本青年館理事長、第5代大日本連合青年団団長。
	佐藤 尚武	戦前に外務大臣。戦後は参議院議員、参議院議長を務めた。
	田子 一民	元内務省社会教育課長。創設時からの日本青年館理事。戦前より衆議院議員、衆議院議長を務める。戦後は公職追放解除後、農林大臣も経験。
	安岡 正篤	陽明学者。金鶏学院を母体に結成した国維会で後藤文夫らの新官僚に影響を与えた。戦後に全国師友協会を設立、歴代首相、政財官界首脳に信奉された。
常任理事	熊谷 辰治郎	日本青年館、大日本連合青年団、大日本青年団、大日本青少年団に一貫して勤務。公職追放解除後、日本青年連盟を設立。
理事	石川 弥八郎	元西多摩青年団団長。戦後に日本青年館年館中央理事、後に第6～8代福生市長。石川酒造社長。
	今村 捷二	戦後に日本急行会長等を歴任。全国師友協会関係者か。
	岡部 繁	全国師友協会関係者か。著作『信徒弟道』（日本電報通信社出版部、1944）。
	牛山 栄治	日本大学教授、群馬女子短期大学学長等歴任。山岡鉄舟の研究家。安岡の関係者。
	栗原 美能留	戦前の革新官僚。大日本青年団常任理事（1939～1941）。大政翼賛会、大日本翼賛壮年団等に深く関与。戦後は公職追放を経て、成蹊学園の中学高校の校長等を歴任。
	菅原 兵治	安岡正篤の金鶏学院時代の弟子。戦中期に日本農士学校校長を務めた。
	名取 忠彦	全国師友協会関係者か。翼賛壮年団団長。戦後、山梨中央銀行頭取。
	細野 軍治	安岡正篤と深い親交。国際政治学者、拓殖大学教授、青山学院大学教授等を歴任。
参与	木村 尚一	事績不詳
	倉橋 定	元大日本婦人会総務局長
	難波田 春夫	国家主義的経済学者。戦後は東洋大教授、早大教授を経て関東学園大学長。
	福田 耕	二・二六事件時の内閣総理大臣秘書官。
	町田 辰次郎	元協調会常務理事、元金鶏学院顧問。

出典）日本青年連盟編・発行『Nippon青年』1960年9月号、1960、p.23

※出典の『Nippon青年』1960年9月号は9月25日刊行のため、実際には会長欄は空位となっていた。

※※出典はpp.67-68および注27)～43)に明示。

(昭和 34) 年に国立中央青年の家運営委員に就任する等々、文部行政と深い関係があった<sup>46)</sup>。ゆえに、『NIPPON 青年』誌上からうかがわれる熊谷の志向は、常に総理府・文部省等の青少年(教育)施策を肯定するものとなる。

例えば、文部省社会教育審議会委員就任後の同誌 1956(昭和 31)年 3 月号の「青年教育の当面する課題」においては、青少年教育の柱として愛国心の必要性を説く。また、法制化された青年学級に対しては、ことさらにその実効化を訴え(「民主主義を盛り上げるための青年学級の充実を希望する」『NIPPON 青年』1959 年 12 月号)、1959 年の社会教育法改定に当たっては、積極的に 13 条規定の廃止を唱える(「社会教育団体に補助金を出すべきだ」『NIPPON 青年』1958 年 10 月号)。これらの反応は、日青協や若手社会教育研究者、現場職員らの志向とかなりの相違を見せていたと思われ、保守的な論者として見られていたといえよう。

熊谷は、同時期に日青協からは等閑視されていた、田澤や戦前の日本青年館・大日本連合青年団等に関わる事績、当時の回顧等を積極的に『NIPPON 青年』に掲載しており、特に 1960 年代になるとその傾向が強まっていく。

#### (4) 熊谷辰治郎の「復権」

このように熱意を持って熊谷が執筆を続けた『NIPPON 青年』ではあるが、国立国会図書館を除く公的機関での所蔵がほとんど確認できないことから、その普及は限られていたと思われる。ゆえに、熊谷らの言説が一般的に認知されていたかにはやや疑問が生じるものの、青少年(教育)施策に関わる各種委員等に就いていた熊谷の日青協に対する影響力は、決して弱いものではなかったようである<sup>47)</sup>。

なお、日本青年連盟同様に、末次一郎が代表を務める右派青年団体である日本健青会が、1960 年前後において、党派対立によって度々混乱の様相を呈していた日青協に、中道の「主体性派」を支援することで介入していた<sup>48)</sup>。「主体性派」は、1954(昭和 29)年からの「青年団主体性確立 3 カ年計画」、1957(昭和 32)年からの「第 2 次青年団主体性確立 3 カ年計画」を推進し、財政的な自立をも目指していた中道的な執行部のグループであった<sup>49)</sup>。しかし、この日本健青会による支援を契機に、日青協「主体性派」のキーパーソンであり、日青協副会長、常任理事を務めた寒河江善秋が、以後、末次とも関係を深め<sup>50)</sup>、熊谷とも浅からぬ関係を持って交流していたようである<sup>51)</sup>。

熊谷は、1957 年に東京都知事から社会教育功労者としての表彰を、1959(昭和 34)年には、当時の日本青年館理事長であった後藤文夫、さらには前田多門、河原春作(第 9 代日本青年館理事長)らとともに文部大臣から社会教育功労者表彰を受けた<sup>52)</sup>。最終的に 1961(昭和 36)年、満 68 歳になる年に藍綬褒章を受ける<sup>53)</sup>。受勲を祝う会でのコメントには、戦前から一貫して 40 年におよぶ青年教育への賛辞が寄せられる。ここにおいて、熊谷は公職追放の不名誉を返上し、戦前・戦後に一貫した「青年運動家」として位置付けられ、「復権」を果たしたのであった<sup>54)</sup>。このことは、1959 年 11 月 2 日に文部省より社会教育功労者として表彰された翌日、皇居拝観が催され、天皇・皇后と拝謁したことによっても自他ともに認められるものとなった。なお、同月だけで日本青年館に 5 回も出入りしている<sup>55)</sup>。

その後、熊谷は 1966(昭和 41)年には日本青年館中央評議員に就任し、再び日本青年

館の組織に直接関わる。同年には高橋真照が中央評議員に、永杉喜輔が中央理事としてあった。2人は戦前の青年団講習所社会教育研修生の同期であり、田澤理事長、下村湖人講習所長の薫陶を受けた人たちである。さらにそのとき、前掲のように、戦前に一度その職にあった後藤文夫が1956（昭和31）年より理事長に復していた。

このように、1960年前後までの戦後青年団運動の最盛期と比べて、1966年に熊谷が日本青年館中央評議員に就任した頃には、日本青年館の役員等の構成においても、1920年代から1930年代の青年団中央組織に関わった人びとが確認されるのである<sup>56)</sup>。

## 第6節 戦前の青年団中央組織の顕彰

### （1）戦前の青年団中央組織関係著作等の刊行

前述した終戦直後から1951（昭和26）年の日青協成立前における、『青年』誌による顕彰と、1954（昭和29）年の伝記公刊に続き、田澤と主に1930年代までの日本青年館・大日本連合青年団の顕彰が大々的に始まるのは、序章第2節で述べたように、1960年代になってからである。主に日本青年館が直接にその顕彰に関わる。具体的な実態は、本章第3節に前述した通りであるが、1967（昭和42）年の『田澤義鋪選集』の刊行（発行元は、日本青年館に所在した財団法人田沢義鋪記念会）、1968（昭和43）年の『若者制度の研究』と翌1969（昭和44）年の『青年団の使命』の復刊、1970（昭和45）年の『大日本青少年団史』の刊行などが顕著な例である。

1966（昭和41）と翌年度に日本社会教育学会会長を務めた永杉喜輔は、上述のように1934（昭和9）年に大日本連合青年団社会教育研究生となり、青年団講習所長、下村湖人の薫陶を受け、青年館理事長であった田澤義鋪とも接触した。彼は、田澤・下村双方の精神に触れた、いわば生き証人であった<sup>57)</sup>。序章第2節でも触れたように、永杉には下村湖人の事績に関する業績、戦前の青年団運動と日本青年館、田澤に関する業績が多く見られる<sup>58)</sup>。特に1966年、日本青年館中央理事に就任した後には、『青年の父・田澤義鋪』（民主教育協会、1966）、「青年教育」（永杉・藤原英夫他著『社会教育概説』協同出版、1967）らが発表されている。特に『社会教育概説』中の「青年教育」では、田澤、下村らの事績の評価に少なからぬ紙数が割かれるなど、当時の類書と比して懐旧的・保守的な内容となっている。

### （2）日本青年館関係者の言説と「青年団＝若者組母胎」論の再出

1960年前後の第1次安保闘争の時期において、日本青年館関係者の言説と関係する雑誌記事を確認するとその立場がわかりやすい。まずは『NIPPON 青年』誌とそこにおける熊谷の言である。

『NIPPON 青年』1959（昭和34）年10月号では、「安保問題特報」と題し、複数の見解を掲示しているが、特に主筆である熊谷辰治郎は、まずは同年6月のデモ隊国会乱入に関して、「革命寸前」とし、強く批判する。

何んという、でたらめなことだ。日本人はこんなにまで節度を失っているのかと思うと、慨嘆にたえない。若し、こういうことが看過されるなら、国の秩序はどうなる。おそろしい革命が、寸前に来ているのだ。いまこそそれを防がねばならないときだ。

社会党、総評の責任を糾弾すべきだ。(p.12)

さらに熊谷は、同誌上の「安保改定と日青連の立場」とする文章において、自民党の立場を肯定しつつ、一方で社会党と「文化人、インテリ、大学教授、総評の一派」の志向を批判する(p.16)。以上だけでも、熊谷の保守論者としての立場は確認される。

前述したように、『NIPPON 青年』がどれだけ一般の目に届いたかは定かではない。ただし同時期には、主に行政関係者に読まれた雑誌である『社会教育』(財団法人全日本社会教育連合編・発行)、『青少年問題』(財団法人青少年問題研究会編・発行)において、戦前の青年団の顕彰と政治活動への批判が繰り返されていた。やはりその主要な論者は、日本青年館周辺の人びとである。

たとえば『社会教育』1960(昭和35)年5月号では、「(座談会)これからの青年団体」と題して、日青協役員に加え、いわば官製の青少年連合組織である中央青少年団体協議会関係者が列席し、日青協の政治活動に懸念が寄せられている<sup>59)</sup>。議論を日本健青会の末次一郎が主導しているところが象徴的である。以後も同誌同年11月号では、当時、日本青年館関連の財団法人である、日本産業開発青年協会事務局長となっていた寒河江善秋が、「政治活動への正しい姿勢—社会教育関係団体と政治活動—」において、政治活動偏重に疑問を呈する。全国地域婦人団体連絡協議会会長であった山高しげりも「選挙運動は絶対反対」と、女性に対する過度の政治活動への傾斜に警鐘を鳴らす。日青協会長であった杉山金市郎も「青年団の役割りは」と題して、特定のイデオロギーに傾斜する青年団活動に警鐘を鳴らす<sup>60)</sup>。さらに1961(昭和36)年10月号では、末次一郎が『『考える青年を』』と題し、「青年団の役員会や、この冬開かれた『青研集会』などにも、ハッキリ現れているように、馬鹿の一つ覚えのような左翼理論にしがみついて、そこから一步も出ようとしないう連中もいる(p.19)」と挑発的な文章を寄せる。

以後、『社会教育』では、永杉喜輔<sup>61)</sup>、桜井庄太郎<sup>62)</sup>、高橋九一<sup>63)</sup>、熊谷辰治郎<sup>64)</sup>と、1930年代までの大日本連合青年団の時期における青年団に関する研究と、「青年団の源流として」の若者組研究の論文が続けて掲載される。さらに、『NIPPON 青年』においても、ほぼ同内容となる桜井<sup>65)</sup>、高橋九一<sup>66)</sup>、熊谷<sup>67)</sup>の文章が掲載されている<sup>68)</sup>。

次に、『青少年問題』では編集に当たっていた文部省社会教育官であった高橋真照の寄稿が目立つ。高橋は1964(昭和39)年8月号に掲載された「青少年団体活動の現状とその問題点」において、以下のように述べる。

わが国の青年団体の特色といわれる地域青年団は、地域を基盤とした自然発生的青年集団であるが、明治時代にはいって、日清戦争以後の国家興隆期にはいって、国および地方公共団体との結びつきを深め、日華事変以降は、国家の統制団体となった歴史的事実がある。戦後は民主団体として再発足をしているが、地域青年団としての歴史と伝統との上に立脚している。勿論戦時色はかなぐりすてているが、地域を基盤とした大衆青年のすべてに働きかけ、その青年団活動は一般的で宗教的、思想的、政治的立場は団体のカラーとしては中立性を保持している。(p.10)

ここでは田澤による『青年団の使命』以来提示されてきた、「地域を基盤とした自然発

生」性が強調される。その存在は、「明治時代」以前から一貫した「歴史」と「伝統」との上に立脚するとする、「青年団＝若者組母胎」論における青年団の起源・性格論が述べられ、併せて中正の政治的立場が強調される。

こうして、熊谷辰治郎が 1966（昭和 41）年に日本青年館中央評議員に就任した頃に日本青年館に結集していた人びとは、主に青年団そして青年一般の左傾化に強い懸念を抱き、中正を基調とする戦前の青年団論を再表出させた。すなわち、青年団の存在根拠を歴史性に置き、穏健な地域団体としての性格を強調するのであった。つまり、青年団の存在の根拠や若者の結合原理は、そもそも昔から自明のものとして存在しているとされ、その性格も中立であることが示されているわけである。また、これはまさに「上から」の望まじき青年団像ということになるろう。

## 第 7 節 青年団運動における戦前／戦後の「接続」

以上のように、田澤と 1930 年代までの日本青年館と大日本連合青年団の時期までの青年団が、日本青年館と青年団運動関係者によって顕彰・称揚された時期を改めて整理すると、以下の 3 期であった。まず第 1 期は、1949（昭和 24）年の鈴木文史朗理事長時代に日本青年館より刊行された雑誌『青年』における、「田澤精神」への回帰が訴えられた時期である。次に第 2 期は、1953（昭和 28）年 1 月に結成された日本青年連盟が刊行した雑誌『NIPPON 青年』における、1970 年代まで続く熊谷辰治郎らによる言説提示である。第 3 期は、熊谷辰治郎が中央評議員に就任した 1966（昭和 41）年の前後から 1970 年代にかけて、主として往時の青年団中央組織に関わる著作等の刊行・復刊等が続いた時期である。なお、この時期には日本青年館に戦前の青年団中央組織と関わる人々が、役員として在籍していた。

これらの時期に、関わる言説が提示された背景を整理すると、第 1 期に関しては、占領下施策における反共志向への合致が強く認められる。その際に田澤らの青年団論では強く求められていた、青年団の政治的中立性を強調することは有効であった。第 2 期は、日青協内の党派対立に際して、「中正」を求める際、田澤らの思想が強調された時期である。続いて第 3 期は、いわば日本青年館「公認」のもと、積極的に田澤と主に 1930 年代までの青年団中央組織の顕彰が図られた時期であった。ここには、明治 100 年の顕彰ブームに際しての、日本の近代化を見直す潮流の影響も認められる。しかし、特に若者組と青年団とを直結させ、その存在の根拠を悠久の歴史の中に求める言説が再提示されていたことには、1960 年頃からの高度経済成長にさしかかつての青年団活動の停滞に対する、日本青年館関係者らの懸念をみることができよう。さらに第 3 期の時代背景をふまえると、第 1 次安保闘争から当時ピークを迎えていた大学紛争へと至る、青年層の「叛乱」の沈静化の意図をみることもできる。

いずれにしろ、これら 3 期には、青年の左傾化、体制からの逸脱化を懸念する志向が共通してその背景にあったとみてよいであろう。そこに田澤をシンボルとして、1930 年代、大日本連合青年団の時期までの青年団のあり方が称揚されたことがうかがわれる。

## 第8節 青年団運動と「協同主義」

### (1) 昭和研究会、そして大政翼賛会に連なる人脈の復権

以上に整理したように、1965 年前後から特に田澤らが主導権を持っていた大日本連合青年団の時期を顕彰・称揚するだけでなく、回帰的・復古的ともとらえられる言説の提示が重層化していく。この時期には、占領下での公職追放等の空白期間を経て、戦前の青年団中央組織関係者が、再び日本青年館の役員等として在籍していた。

1921（大正 10）年の財団法人日本青年館設立時に創設理事であった田澤義鋪、後藤文夫、後に警察官僚として知られた丸山鶴吉らは 1910 年前後のほぼ同時期に内務省に入省していた。親軍的で右翼革新的な志向を持つ、新官僚の代表的存在として知られる後藤は、田澤とともに日本青年館と大日本連合青年団設立に関わり、戦前・戦後ともに日本青年館の理事長を務めることになった（第4代、第13代）。また、二・二六事件時には内務大臣を務める。

この3人は、1925（大正 14）年には日本青年館初代理事長であった近衛文麿らと、既成政党による党弊打破と国内政治革新を目指した「新日本同盟」を設立し、以後、選挙粛清運動から新体制運動に至るまで関わることになる<sup>69)</sup>が、田澤は以降の翼賛体制からは一定の距離を置いていた。後藤は前述したように、官僚出身政治家として、近衛を首相として戴いた新体制運動から翼賛体制推進までに深く関わっていく。

近衛が日本青年館理事長に就任するに当たって招いたのが、近衛の京都帝大時代の学友である後藤隆之助であった。後に、後藤は近衛を支えるブレーントラスト「昭和研究会」を1936（昭和 11）年に正式に設立する。同研究会は、「憲法の範囲内での国内改革、墮落した既成政党の排撃、ファシズム反対」を原則として<sup>70)</sup>、政治機構改革、外交、経済、教育問題等々の多岐にわたる分野に関わり、対中国戦線の拡大阻止と和平を図りつつ政策構想を続けた。それが新体制運動として1941（昭和 16）年の近衛第2次内閣組閣に至り、以後、翼賛体制へと連続していく。昭和研究会は1940（昭和 15）年の大政翼賛会結成に伴い発展解消されているが、ここに名を連ねた幅広い左右知識人たちは、戦後も日本青年館の周辺にその姿を見せていく。

一方、後に日本青年連盟の顧問として名を連ねることになる安岡正篤、そして近衛、日本青年館創設に関わった内務官僚の一部は、1926（大正 15）年に安岡が開設した私塾・金鶏学院を経て、1932（昭和 7）年に創立された政治結社・国維会に結集していた。そこにはやはり、後藤文夫が深く関わっており<sup>71)</sup>、新官僚が多く参加していた。

このように、創設時からの日本青年館と青年団運動に関わった人びとは、大正から昭和へと遷ろう時期からは、緩やかに「日本主義」の潮流の中にあった。そこに昭和研究会を媒介として幅広い左右知識人の人脈を含みながら、日中戦争開始後の新体制運動、翼賛運動へと連動していった。その後、占領下での公職追放を経て、1960 年代に再び日本青年館とその周辺に結集した。つまり、主に1910年代から1930年代までに展開した戦前の青年団運動と戦後の運動とにおける、人脈上の「接続」が見られたのである。

### (2) 底流する「協同主義」

1920 年代の日本青年館と大日本連合青年団の成立から、昭和研究会を経由して翼賛体制に向かう過程において、その基本理念となっていたのは「協同主義」であったとされる。



三木清が理論化したとされるものの、実際にその定義は明確でもなく、一定でもない<sup>72)</sup>。昭和研究会の事務局として関わった酒井三郎は、後年、協同主義とは資本主義・共産主義・全体主義も乗り越えた新しい思想であり、政党中心の議会制度は国民組織で、資本主義の経済機構は協同主義経済で、思想面では自由主義と個人主義とを協同主義で乗り越えようとしたと説明したという<sup>73)</sup>。つまり、協同主義とは、時務に際した究極のコーポラティズムであったとみるほかない<sup>74)</sup>。

上述のように、戦後に至り、青年団に「政治的中立」を強く求めていったのは、1920年代に成立する青年団中央組織に連なる人々であった。戦後、彼らが「復権」した、あるいは戦前との人的な「接続」がなされたと前項で述べたものの、彼らからみればそもそも一貫してそこにあったのではなかろうか<sup>75)</sup>。

## 第9節 結語

本章では、1910年代から主に1930年代までの青年団運動の中で構築された「青年団＝若者組母胎」論が戦後の青年団論において再表出する過程を整理した。要約すると「青年団＝若者組母胎」論とそこにおける「若者組」像は、終戦後から1960年代までは、研究者からもその恣意性が批判され、また実態面からも批判の対象となったことから、青年団論において一時見えなくなった。

しかし、1920年代の成立時からの組織を継承し、占領下での青年団の全国組織化に積極的に関わった日本青年館では、回帰的・復古的な志向性に基づき、1965年前後から戦前における青年団資料の復刊等を行った。その結果「青年団＝若者組母胎」論とそこにおける若者組像が再表出されていく。以後、「青年団＝若者組母胎」論と若者組像は、それらのイデオロギー性が批判され、実証的な青年集団史研究の進展によって実態面からの誤謬<sup>76)</sup>が指摘されながらも青年団論には根づいている。例えば後述する第3章第2節、第3節の議論においてもそれが確認できる。

この「青年団＝若者組母胎」論の再表出の背景に関して、1960年代までに、田澤義鋪と主に1930年代までの青年団中央組織とその関係者が、日本青年館とその周辺によって顕彰・称揚されていく3期の過程を整理した。これらが表出した背景を分析した結果、全ての時期において、主に青年層の左傾化と体制からの逸脱を抑制するため、田澤義鋪をシンボルとし、1930年代までの青年団のあり方を称揚したことがうかがわれた。また、これらの言説提示は、特に主権回復後の公職追放解除により往時の青年団中央組織の関係者が復権していくに伴い本格化していったため、それらの背景に戦前と戦後の人的連続性があることが確認された。

「青年団＝若者組母胎」論とそこにおける「若者組」像に関しては、その根拠が明確ではない言説が、強調点や性格づけを変えられながらも政治的な意味、また運動論的な意味において、青年団の存在意義や教育的意義の根拠とされてきた。もちろん、この不明確さゆえに「若者組」像が一種の教育言説として「聖性」を帯び存在し続けたともいえる。しかし、それは1920年代から1930年代にかけて青年団運動の「権威」であった、田澤義鋪をはじめとする青年団運動関係者によって提示されことで「権威」づけられたものであった。それがさらに戦後において、日本青年館を拠点に再生されたのである。

このことを鑑みると、若者組や若者宿における教育的意義に関しては、それらがどのような意味において〈教育〉的であったのかということとは不確かなままである。

以上見てきたように、「青年団＝若者組母胎」論をめぐっては、ローカルな民俗事象を〈伝統〉へと昇華させ、制度や施策を根拠づけようとする営みが確認された。これは序章第2節でも触れた、フォークロリズムの典型として位置づけられよう<sup>7)</sup>。繰り返しいえば、フォークロリズム的状况が成立する際、そこでは「伝統」や古来の慣習性・継続性など、歴史性を根拠として、制度や行為などの正当性やそれらが存立する意義が示される。

さらにいえば、このようなフォークロリズム的状况は、ある事象（特に〈伝統〉的とされるもの、「民俗」と認識されるもの）を、本来、それらが存在した地域社会から脱文脈化させるものである。元来、〈ローカルな知〉である、「地域」における「伝統文化」や「民俗」という周縁的存在をコンテクストから断ち切り、〈伝統〉としてナショナルな文化の中心へと位置づけていく営みは、近代国家におけるナショナリズムの構築と深く関わる。それは文化の単純化、画一化をも促し、意図的な操作も可能とする。

そのことに留意すると、到達目標が具体的に示されるべき教育の実践に際して、〈伝統〉や〈歴史〉でもって権威づけられた抽象的なイメージが掲げられることは、その根拠を曖昧とするものとなるのではないか。特に社会的実践を命題とする社会教育では看過できない課題である。

改めて確認してみたい。〈ローカルな知〉に着目すること自身は、ネガティブな営みではない。既成の概念や認識を大きく変える可能性を持ち得るがためである。近代における前代教育の「発見」「再評価」がまさにそれであった。しかし、〈ローカル〉であるがゆえに、特定のコンテクストでしか通用しない限定性も本来持ち得るはずである。

ゆえに、近現代の青年団の結合原理やそのもつ機能の根拠を、安易に歴史世界のイメージや言説、あるいは抽象的な運動論や指導者の論理に求めることなく、そうした実践に関わった当事者の視点から実証的に分析していくことが求められているのである。これが第Ⅱ部での検討課題となる。

---

1) 小川利夫「戦後青年団運動の系譜―日青協十年の道程―」、宮原誠一編『青年の学習』国土社、1960、p.142、pp.149-151。大串隆吉「勤労青年の教育運動の高揚と停滞」、碓井正久編『日本社会教育発達史』（講座現代社会教育Ⅱ）亜紀書房、1980、pp.294-304。

2) 小川 1) 前掲、pp.141-142。

3) 同上、p.154。

4) 日本青年団協議会編・発行『地域青年運動 50 年史』2001、pp.18-19。

5) このパンフレットの発行年は銘記されていないが、記載されている統計資料が昭和 28（1953）年のものが一番新しいことから、それ以降の発行と推測される。

6) 藤川太一「若衆組と若衆宿の制度について」、日本青年団協議会編『青年団』日本青年館、1955 年 8 月号、1955、同「若衆組（宿）のうつりかわり」、日本青年団協議会編『青年団』日本青年館、1955 年 9 月号、1955。

7) 6) 前掲「若衆組（宿）のうつりかわり」、p.34。なおこの報告では、若衆組が 1901（明治 34）年に青年会に改称されたことが前述されている。

- 8) 日本青年団協議会編『日本の青年 昭和 35 年度版』日本青年館、p.123。
- 9) 桜井庄太郎「青年団論の反省」、『社会教育』8(6)、全日本社会教育連合会、1953、永杉喜輔「明治以降における地域青年団の成立過程」、『群馬大学紀要人文科学篇』6-1、1956。
- 10) 小川利夫「山本滝之助論」、『社会教育』8(10)、全日本社会教育連合会、1953。
- 11) 調査研究室長であった成田久四郎は、1963（昭和 38）年に刊行された『研究室報』No. 5 において、「青年団の研究に民俗学的立場を」と題して、民俗学研究を援用した青年団に関する実証研究を以て、「混迷を続ける現代の青年団の性格の基調を再確認すること」、そして、近代史からの戦前の青年団に関する批判に対するために「オーソドックスな歴史学習の必要性」を提起している。
- 12) 高橋九一「一、村と若者組」「二、青年集団の機能とその変遷」（日本青年館調査研究室『研究室報』No. 9）1965、小川利夫「地域青年団成立史論（I）—その歴史的原像の再認識—」（日本青年館調査研究室『研究室報』No. 10）1966、同「地域青年団成立史論（II）—地域青年団論の形成—山本滝之助論—」（『研究室報』No. 11）、1967。
- 13) 日本青年館関係者、近代の青年団運動関係者らによって 1952（昭和 27）年に設立され、日本青年館内に事務所が置かれた。『田澤義鋪選集』の前には、田澤義鋪記念会代表丸山鶴吉編（下村湖人著）『田澤義鋪』が 1954（昭和 29）年に刊行されていた。
- 14) 前掲した小川の二つの文章は、日本青年館調査研究室刊行の『研究室報』に掲載されたとはいえ、「青年団＝若者組母胎」論に批判的であった。そして、宮坂広作もまた同時期に『近代日本社会教育政策史』（国土社 1966）において、小川同様、「若者組」の美化を批判していた。さらに教育社会学からは、佐藤守が『近代日本青年集団史研究』（御茶の水書房、1967）において、豊富なモノグラフ分析から、「若者組」が青年団に移行する過程においての 3 類型を提起し、「若者組」が青年団にそのまま移行する、という単系的な推移を実証面から否定していた（序章第 2 節、第 4 章参照）。
- 15) 日本青年団協議会編『日本青年団協議会二十年史』日本青年館、1971、p.2。
- 16) 1960 年代に至っての日青協の保守化に関しては、碓井正久「日本の巨大組織〈14〉日青協」（『朝日ジャーナル』1965 年 6 月 20 日号）1960、pp.35-40、高橋成雄「青年団の自主性と主体性を守る」（『青年』1981 年 6 月号、日本青年館）1981 参照。
- 17) 発行年不明であるが、「加盟団一覧」が 1973（昭和 48）年現在となっているため、その後の発刊と推測される。
- 18) 那須野隆一『青年団論』日本青年館、1976、p.124。
- 19) 同上、pp.24-25。
- 20) 生活史学習は、「自己紹介学習」「生い立ち学習」を、「たまり場」での話しあい、すなわち「たまり場学習」を通して行っていくものであった（那須野同上、pp.66-89 参照）。
- 21) 日本青年団協議会編『青年団強化の手引 続ビジョンを求めて』、1978、p.16。
- 22) 田澤義鋪記念会代表丸山鶴吉編・発行『田澤義鋪』1954、pp.217-225。
- 23) 熊谷辰治郎「終戦直後の青年団の動き（二）」『NIPPON 青年』1971 年 3 月号、日本青年連盟、pp.1-4。
- 24) 小川 1) 前掲、pp.141-142。
- 25) 横山祐吉編『青年』1949 年 4 月号、日本青年館、p.10。
- 26) 成田久四郎「鈴木文史朗」、成田久四郎編著『社会教育者事典・増補版』日本図書センター、1989、p.241。  
この時期の鈴木については、大串 1) 前掲、pp.300-304 も参照のこと。
- 27) 内政史研究会編・発行『栗原美能留氏談話速記録』（内政史研究資料第 184 ～ 186 集）、1977 中、「栗原美能留氏略歴」による。

- 28) 中嶋久万吉『政界財界五十年』まつ出版、2004（初出、講談社、1961）巻末、「著者履歴」参照。
- 29) 27) 前掲。
- 30) 附言すれば、同誌は熊谷辰治郎の個人オピニオン誌的性格が強かった。
- 31) 『NIPPON 青年』1960 年 9 月号、日本青年連盟、p.23。
- 32) 盛岡市公式 HP「郷古潔」（<http://www.city.morioka.iwate.jp/moriokagaido/rekishi/senjin/007467.html>）、2015 年 12 月 29 日閲覧。
- 33) 成田久四郎「井上秀」、26) 前掲書、pp.182-185。
- 34) 八木淳「岡野清豪」旺文社編・発行『20 世紀 Who's who 現代日本人物事典』1986、p.231。
- 35) 1954（昭和 29）年より「全国師友協会」に改称した。
- 36) 中嶋の回顧録である『政界財界五十年』（講談社、1961）には安岡が序文を寄せている。2004 年に復刊された版には、中嶋が 1960 年に亡くなった際に安岡から寄せられた弔辞が掲載されている。
- 37) 1923（大正 12 年）年には、同研究所に大川周明と安岡が教授として在職していた（熊谷辰治郎「小尾晴敏の青年指導者養成構想」『NIPPON 青年』1971 年 1 月号、日本青年連盟、p.1）。
- 38) なお、熊谷が在籍当時の社会教育研究所では、当時、古河財閥を率いていた中嶋が講演を行っている（28) 前掲、pp.176-177）ものの、このときに熊谷との直接的なつながりはなかったようで、戦後に至っての安岡正篤の紹介によるものであったという（熊谷辰治郎「ありし日の思い出を語る」、『Nippon 青年』1960 年 3 月号、p.2）。
- 39) 福生市編・発行『福生市史 下巻』1994、p.817。
- 40) 庄内日報 HP 中、「郷土の先人・先覚 61 菅原兵治」（<http://www.shonai-nippo.co.jp/square/feature/exploit/exp61.html>）、2015 年 12 月 29 日閲覧。
- 41) 理事のうち他の 3 名、今村捷二、岡部繁、牛山栄治の 3 氏については、当時の事蹟が明確にはわからない。今村、岡部は全国師友協会の関係者かと思われる。今村については、『関西経協』9-11（青沼四郎編・関西経営者協会発行、1955）には、「富士鋼業取締役労務部長」、同誌 19-12（1965）には、「日本急行会長」としての肩書きで寄稿をしていることが確認される。岡部は著作『信徒弟道』（日本電報通信社出版部、1944）があり、序文を安岡が執筆しているほか、全国師友協会の機関誌である『師と友』（小林正雄編・発行）152 号（1962）、183 号（1965）にも寄稿していることが確認される。牛山栄治は、戦後に中学校長会会長、日本大学教授、群馬女子短期大学学長等を経た人物で、山岡鉄舟の研究家として知られる。熊谷辰治郎の紹介で中嶋と知り合ったという（村山元理「中嶋久万吉と帝人事件：財界人から精神的指導者へ」（一橋大学大学院商学研究科提出博士論文（博士（商学）乙第 535 号）2015、p.146）が、熊谷とのそもそものつながりは不詳である。
- 42) 横関至「町田辰次郎と協調会」、法政大学大原社会問題研究所編『協調会の研究』柏書房、2004、pp.241-269。
- 43) 参与にもう 1 人木村尚一の名もあるが、氏については事蹟が不詳である。
- 44) 『NIPPON 青年』1960 年 9 月号、日本青年連盟、pp.8-9。
- 45) 高橋真照「青年団運動と熊谷辰治郎先生」、熊谷辰治郎先生の受章を祝う会編・発行『一人の青年運動家』、1962、p.22。
- 46) 熊谷辰治郎全集刊行委員会編『熊谷辰次郎全集』勁草書房、1984、pp.927-936。
- 47) 寒河江善秋「青年運動家熊谷先生」、45) 前掲書、pp.36-38。
- 48) 健青運動十五年史編纂委員会編『健青運動十五年史一人づくりをつみあげて』日本健青会中央部、1964、pp.224-233。末次の人物像と戦後の青年（教育）施策への関与については、安藤耕己「戦後青少

年教育施策と末次一郎一主に 1960 年代までの「官製」的組織・運動の展開に着目して一』『茗溪社会教育研究』(5)、2014、pp.18-29 を参照のこと。

49) 1953 (昭和 28) 年に日青協副会長となった山形県出身の寒河江善秋によるネーミングであったようである (寒河江善秋「日青協と健青会の間で」、健青運動十五年史編纂委員会編『健青運動十五年史一人づくりをつみあげて一』日本健青会中央部、1964、p.229)。寒河江自身は後に日本健青会の常任参事ともなり、1960 年代には民社党系の組織で活動している (安藤耕己「戦後青少年団体の展開と青年団運動—寒河江善秋の周辺に着目して—」、日本社会教育学会第 60 回研究大会自由研究発表資料、2013、pp.3-5) など、実態として保守系左派、革新右派に近いメンバーたちが多かったようである (田河正雄「日青協 その深刻な争いの診断」『月刊社会教育』1960 年 2 月号、pp.38-51、なお田河は寒河江らを「保守派」と表現している)。寒河江は主体性派の実績として、生活記録運動、産業開発青年隊運動、共同学習運動、沖縄復帰運動を挙げる (上掲寒河江「日青協と健青会の間で」、p.229) が、それは 1960 年頃までの青年団活性期の事跡とほぼ重なる。また、そこには常に須藤克三 (第 3 章にて詳述) らの山形人脈の支援があった。

50) 成田久四郎「寒河江善秋」、26) 前掲書、pp.429-431。

51) 寒河江 47) 前掲。

52) 『NIPPON 青年』1960 年 4 月号、日本青年連盟、p.8。

53) 45) 前掲。

54) 受章記念誌の書名は、45) にあるように『一人の青年運動家』とされた。

55) 52) 前掲。

56) 館史編纂委員会・編纂作業委員会編『財団法人日本青年館七十年史』財団法人日本青年館、1991、pp.1359-1371。通例、中央理事、中央評議員に就任するのは、日青協の役員経験者と財界人が多かった。

57) 野口周一「永杉喜輔論—その人と思—」、高崎経済大学附属産業研究所編『群馬・地域文化の諸相』日本経済評論社、1992、pp.295-333。

58) かかわる論考は、永杉喜輔『かくれた青年指導者たち (永杉喜輔著作集 9)』国土社、1974 に所収されている。

59) 全日本社会教育連合会編・発行『社会教育』15-5、1960。

60) 全日本社会教育連合会編・発行『社会教育』15-10、1960、pp.20-23。

61) 永杉喜輔「社会教育の源流をさぐる『田沢義輔とその周辺』」全日本社会教育連合会編・発行『社会教育』20-1、1965。

62) 桜井庄太郎「社会教育の源流をさぐる『若者組と青年会—明治時代の青年集団—』」全日本社会教育連合会編・発行『社会教育』20-4、1965。

63) 高橋九一「社会教育の源流をさぐる『『わかもの』と『若者組』—岩手県を基盤とせる—』」全日本社会教育連合会編・発行『社会教育』20-5、1965b、「社会教育の源流をさぐる『『わかもの』と『若者組』II—岩手県を基盤とせる—』」全日本社会教育連合会編・発行『社会教育』20-6、1965c。

64) 熊谷辰治郎「社会教育の源流をさぐる『山本瀧之助の歩んだ道』」全日本社会教育連合会編・発行『社会教育』20-8、1965b。

65) 桜井庄太郎「若者組と青年会—明治時代の若者条目と青年会規約を中心として—」『NIPPON 青年』1964 年 9 月号、1964。

66) 高橋九一「岩手を基盤とする若者組の考察」『NIPPON 青年』1965 年 1 月号、日本青年連盟、1965a。

67) 熊谷辰治郎「山本瀧之助の歩んだ道」『NIPPON 青年』1965 年 8 月号、日本青年連盟、1965a。

68)この事情は、『NIPPON 青年』1964年2月号の「日本青年運動史研究協議会要項 (p.8)」からうかがわれる。同協議会は、日本青年連盟が主催した。趣旨は、地域青年団の体質改善を図るために、「地域青年団を歴史的、社会的の両面から研究しなければならない(同)」とされ、まずは若連中の昔から資料を蒐集し、比較検討するものとしている。同年3月16日から18日にかけて2泊3日の日程で東京都小金井市の浴恩館を会場に開催された。講師・助言者には熊谷辰治郎(日本青年連盟会長代理)、高橋真照(文部省社会教育官)、近藤斉(東京学芸大学教授)、桜井庄太郎(日本大学教授)、永杉喜輔(群馬大学教授)、瀬川清子(民俗学研究者)、小山隆(東京都立大学教授)、寒河江善秋(日本産業開発青年協会常務理事)、古谷脩則(日本青年団協議会会長)という面々が挙げられている。ここでの報告をもとに、高橋と桜井の論文が作成されたものとみられる。高橋九一は前掲67)論文において、日本青年運動史研究協議会に参加して報告したことを明示している(p.11)。

69)中村宗悦『後藤文夫』日本経済評論社、2009、pp.62-65。

70)酒井三郎『昭和研究会 ある知識人集団の軌跡』中公文庫、1992、p.46。

71)河島眞『国維会論』『日本史研究』360、1992、pp.1-32。

72)塩崎弘明「革新運動・思想としての『協同主義』」、近代研究会編『近代日本の検討と課題』山川出版社、1988、pp.264-283、同『国内新体制を求めて』九州大学出版会1998、pp.235-262。

73)中島誠「知的集団の終焉」、昭和同人会編著・後藤隆之助監修『昭和研究会』経済往来社、1968、pp.301-302。

74)先に挙げた昭和研究会の基本原則は、「憲法の範囲内での国内改革、墮落した既成政党の排撃、ファシズム反対」であったが、これは1929(昭和4)年に大日本連合青年団が制定した「青年団綱領」の精神と通底することを榊原史郎が看破している(榊原史郎「昭和研究会設立への序章」、70)前掲『昭和研究会』、p.33)。これは田澤の事績として顕彰される、選挙粛清運動、政治教育推進、反軍国化の強調へと全て重なる。また、田澤が青年団の全国組織である大日本連合青年団に関して、それが連合体であることを強調したところも、その後の昭和研究会における協同主義と通底するところがみられる。これらに関わって、近現代史研究の立場から、雨宮昭一は「左からのイデオロギー順で共産主義—社会主義—協同主義—自由主義・資本主義だとすれば、協同主義は、左右両方に関わっているといっていよい(雨宮昭一『占領と改革(シリーズ日本近現代史⑦)』岩波書店、2008、p.112)」とする。雨宮は、1930年代から戦時体制下の日本において、陸軍統制派・革新官僚などの「国防国家派」と近衛文麿周辺の昭和研究会に集った「社会国民主義派」を協同主義の中に比定している(同上、pp.4-8、pp.191-192)が、双方とも結果として日本青年館と大日本連合青年団、さらには以降の大政翼賛会と深い関わりを持つ。また、雨宮はこれらの協同主義の範疇に入る官僚・政治家・軍人らが戦時体制下において企図した施策が、そのまま戦後占領期の改革へと連続していることを示し、1930年代から第二次世界大戦後の内政・経済・外交等の施策的および人的な連続性を強調する。

75)とはいえ、彼ら個々の思想は保守とも(オールド)リベラリズムともいい難いところがあり、振れ幅がある。ここには、やはり協同主義の底流が感じられる。

76)また現在では、「若者組」は、村落組織として厳格な組織形態を持つ「若者組」型と、多くは同輩のメンバーによって構成される緩やかな組織形態をもつ「若者仲間」型に大分されること、そして、いわゆる「若者宿」像の前提となっている常設宿泊型の施設は、「若者仲間」型に多いことなどが指摘されている(岩田重則『ムラの若者・くにの若者—民俗と国民統一』未来社、1996、pp.24-29、福田アジオ「若者仲間」「若者宿」(福田他編『日本民俗大辞典』下巻 吉川弘文館、2000 参照)。

77)教育学においてフォークロリズム的状况に着目した先行研究として挙げられるのは、小国喜弘『民俗学運動と学校教育』(東京大学出版会、2001)である。小国は日本近代での学校教育におけるフォー

クロリズム的状况について、特に戦後初期社会科の展開と関連させて考察した。小国は戦前の郷土教育運動における教員の実践や、戦後の初期社会科教科書作成に柳田國男以下の民俗学者が積極的に関わったことで民俗学が一時的には学校教育と密接な関係を持ったものの、結果として、社会科で画一的な国民文化像・国民像を提示することに帰したことを明らかにしている (pp.161-183)。さらに、第1章第1節において挙げた、桜井庄太郎、小川利夫、宮坂広作らの研究において、既にここで言うフォークロリズム批判の視点があったことが指摘できよう。

### 第3章 戦後青年団論における「素朴な結合要求」と「たまり場」への着目

#### 第1節 問題の所在

第2章で述べたように、戦後の青年団論、特に日青協執行部や日青協の全国青年問題研究集会（以後、本章では頻出するため、以下「青研集会」とする）助言者の研究者らによる言説において、「青年団＝若者組母胎」論は1960年代までは否定されるものであった。その代わり、青年団の性格論と青年の立場から見た結合原理をめぐる議論が、1959年前後からしばらくの間続けられることとなる。背景には安保問題や高度経済成長を前に変貌を遂げ始める農村の状況があった。さらには、若手社会教育研究者からのマクロかつ啓蒙的な言説と、農村青年の日常の立場や感覚に立脚した言説との衝突があった。それが「素朴な結合要求」論をめぐる顕在化する。また、その衝突には「青年団＝若者組母胎」論に関わる歴史認識の違いも顕在化した。以下、その状況を整理し、その意味を考察する。

次に、やはり同時期から1970年代以降において、「素朴な結合要求」と通底する「たまり場」というキーワードが青年団論において意識的に用いられていく。この過程を整理し、その意味をも考察する。

#### 第2節 青年団性格論における「素朴な結合要求」をめぐる議論

##### （1）「多目的集団」論の提起

1951（昭和26）年の日青協成立後、その運動方針によりやうくに青年団の性格が明記されたのが、1959（昭和34）年であった。そこでは、青年団は「地域社会を基盤とした、多角的な要求を持つ網羅的青年の集団であり、多元性を包容することが青年団の特質である<sup>1)</sup>」ことが示された。これは同年10月に開催された同年度の日青協第4回理事会において確認されたものであり<sup>2)</sup>、安保問題に直面しての日青協の態度を確認する文脈の中で動きでもあった。それゆえ、上掲の引用に引き続き、「この組織の現状と特質の上に立って、日本の安全と民族の繁栄、さらに世界平和と人類の幸福に重要な関係のある安保問題に取り組んでいく」ことが併せて確認されたのである<sup>3)</sup>。

さらに、昭和36（1961）年度の日青協運動方針には、「青年団は地域を基盤とした組織であり、多目的集団であるから特定の目的や思想は要求されない」と、特定の政党や政治勢力からの引き離しが明示されている。それだけ、日青協には左右双方の政治勢力からの介入がみられたのであった。

先んじて、主体性派のキーパーソン・論客であり、1953（昭和28）年度、1955（昭和30）年度に日青協副会長を務め、以後も日青協の助言者や産業開発青年隊運動の推進役となった寒河江善秋は、1958（昭和33）年3月に刊行された『社会教育』誌において、青年団の性格論を展開する。寒河江は、青年団とは、もともと地域社会を組織の基盤とした多様な青年層を包含する大衆組織であって、ある面甚だ曖昧で頼りない存在ではあるが、集落の身边にある日常の暮らしの矛盾や不合理に取り組んで、少しでも解決しようとするのに集落青年会が「大衆的な前衛組織」として貢献するとする<sup>4)</sup>。また寒河江は、行政が青年団の持つ娯楽性を否定すること、日青協の運動方針が現実の農村青年の日常とかけ離れていることを批判した<sup>5)</sup>。さらに日青協が1959（昭和34）年2月に刊行したテキスト、日



本青年団協議会編『私たちの青年団—性格と活動家の任務—』（日本青年館刊）では、青年団を「多目的団体」と位置づけている。これらから、上掲の「多目的集団論」は、当時の日青協主流派である主体性派の中道的な立場性が反映されたものであったといえる。しかし、この「多目的集団論」は後述するように、青年団の非政治性を強調するものとして批判された。

そこで次に主体性派が運動方針に持ち込んだのが、「素朴な結合要求」論であった。1962（昭和 37）年の日青協運動方針では、

青年団はその成立条件からして素朴な青年ひとりひとりの関心にねざして成り立っていて、その構成する団員は、若い年令集団であるというところに一つの特色をもっている。（中略）また、青年団の成立条件である地域性は、環境、生活条件、伝統等多くの同質性をもつものであって、結合し行動する場合の大きな要素となるとともに、若い年令集団であるということはいつでもだれでもどこでも入れるし、退会も自由であるという、ごく自然の自由な組織条件がその基点となっている。<sup>6)</sup>

とされた。

いわば青年期特有の結合形態としての地域青年組織として、青年団を位置づけるものであった。これは、田澤義鋪が 1930 年代に『青年団の使命』で示した認識と通ずるものである。いずれ結果として、この「素朴な結合要求」論は激しい批判を若手研究者から受ける。以下、同論の提唱者である山口武秀と批判者である小川利夫、宮坂広作という当時、新進気鋭の社会教育研究者の批判点を確認したい。

## （２）山口武秀による「素朴な結合要求」論

山口武秀は、茨城県新宮村安塚（現：鉾田市安塚）出身の農民運動家であった<sup>7)</sup>。戦前には共産党籍があり、全国農民組合での活動から投獄されるなど、無産運動の闘士であった。戦後は日本農民組合、その後常東農民組合協議会を支持基盤として 1947（昭和 22）年から 1953（昭和 28）年まで 2 回、衆議院議員に当選した。1966（昭和 41）年からは環境汚染に反対する住民運動に深く関わるようになり、その後の成田空港闘争への関与も知られる<sup>8)</sup>。

この山口が 1959（昭和 34）年に上梓したのが、『青年運動の理論』（三一書房刊）であった。「まえがき」によると山口は戦前の無産運動活動期に青年団活動もしていた（p.7）。執筆当時、「ここ数年、各地の地域青年団や農協青年部等の講習会などにでかけることがおおくってから、直接その幹部の話もきいた。そして、いつでも一つの問題を感じていた。どうもはっきりしない。読んでも、聞いても、背中をかく思いである。それは、青年団運動をなり立たせている基盤、その基本法則というものはなにかということである（同上）」と本書の執筆の動機を記している。その基本法則というのが、山口曰く、「素朴な結合要求」なのであった。

ではその「素朴な結合要求」とは何か。

素朴な結合要求をなりたててくるものの内容にはいろいろある。自由に語り合いた

い、一緒に行動したい、友だちがほしい、疑問をただしたい、さらには娯楽をもとめる、毎日の生活に不満がある等々、そうしたもののうえに青年どうしの結合要求がうまれる。そのいろいろなことがらが、素朴な結合要求というかたちとなってあらわれる。それらは一見きわめてさりげないものだが、それが地域青年団をながく存在させてきた土台である。(pp.95-96)

山口のいう青年の「素朴な結合要求」とは、上掲の引用にあるように、青年が対話や娯楽を求めて自然に群れ集うことを指すといえる。

さらに山口はこう述べる（下線筆者）。

現実の社会関係は青年にとってきびしい。人間成長の過程において必要な社会的青年期もみとめられない。そのなかで、青年は諸欲求をもち、人間らしい自由な生活がもとめられる。そこに、青年はお互だけでより合い、青年だけの世界をもつことによって、自由な世界をつくりだそうとする。人間性をそこなわれない生活の場所をみいだそうとする。あるいはこれから社会にたつために必要な諸準備をする機会をもとうとする。それが具体的なかたちとしては、語り合いたい、一緒に行動したいなどのことがらとなり、それらのうえに青年どうしの素朴な結合要求がなりたっている。したがって、青年の素朴な結合要求なるものは、社会的青年期の要求という重要な内容をもっているわけである。(p.96)

山口はまた、素朴な結合要求を「大人が個々の要求を実現せんとするときにもつ集団化の意向なるものとはちがった、青年独自のものである。いわゆる青年の世界でうみだされてくるものである(p.49)」とする。このことから山口は、「素朴な結合要求」を上掲引用部にあらわれる、「社会的青年期」に認められるものとして位置づける。

なお、この「社会的青年期」とは、1959（昭和 34）年に、社会学者の高根正昭が清水幾太郎編『青年』（有斐閣刊）に所収された「青年期の社会的意味」という小論において示したものである。高根によると、青年期には身体的青年期と心理的精神的青年期とがあることは意識されてきた（pp.2-4）のであるが、高根はそれらに加え、いわゆる大人になるための「社会的準備期（p.7）」としての「社会的青年期」を措定した。そしてそれは、「ごく自然に高等教育を受け（同上）」ることができる、富裕な階級に属する青年に保障されるものであった。さらに高根は、「社会的準備期を送った青年たちは、高等教育を受けたため、原則としてその社会の指導者になることが約束されて（同上）」おり、「社会的準備期を送らなかった青年たちは、原則として、一生社会の底辺で生活することを運命づけられる（同上）」とした。それゆえ、「われわれは社会的準備期としての社会的青年期を設定しなければならない」とした。また高根は、この青年期は以上のように、他の二つの青年期と比べて、階級問題が深く関わることを強調した<sup>9)</sup>。

山口の『青年運動の理論』は、明らかに高根の「社会的青年期」論をふまえた記述となっており、高根が論じきれなかった農村青年の「社会的青年期」について自説を展開したといえる。山口は、社会的青年期が、農村青年層においても青年団という形態で保障されていることを説明する（pp.69-70）。これを前提に、山口は以下のように述べる。

農村青年は、独占資本から農村が支配・収奪されるという環境のもとで、だれもが大体おなじ立場、階級的立場にたっている。そこではいわゆる青年の特権たる社会的青年期をうばわれ、そのためみずからうばわれた社会的青年期をおぎなわんとして、素朴な結合要求をもち、そのうえに地域青年団をつくる。地域青年団の根底にあるものは社会的青年期の要求であり、青年の素朴な結合要求というものはそれを内容としたものにほかならない。人間成長の過程において特権的にみとめられるべき社会的青年期は、おおくの青年たちに保障されておらず、とくに農村青年のばあいそれがひどいというところに、青年どうしの素朴な結合要求がうまれ、地域青年団をなりたたせることになったのである。(p.88)

社会的青年期をもとめる農村青年の動きは、部落単位の地域的な青年集団をつくるというところにはじまる。みずからの時間ももてず、経済的なゆとりもなく、いわゆる非文化的な農村で生活する青年は、お互の交友、集団化によって青年だけの生活、世界をつくりだし、そのなかにわずかに人間らしさ、青年らしさをみいだそうとする。満たされないものを幾分ともその場面でおぎなわんとする、それが社会的青年期をもとめる農村青年の動きである。地域青年団はそうしたものとして出発し、かためられた。地域青年団の結成には部落社会が青年の一定のまとまりを必要とし、そのために公認的存在となったという一面の理由もあったのだが、青年の主体的立場で考えるとき、そうなっているといえよう。したがって地域青年団は青年生活の独自の舞台となり、社会にたいしてそれをまもり、拡大しようとするところで、青年運動としての性格をもつことができる。もっとも、青年たちは「なんとなく集る」ということで地域青年団をつくっているのが実情であるが、その「なんとなく集る」という状態には、そうした意味がもたれているのである。(pp.96-97)

このように「社会的青年期」を農村において補完あるいは保障するために、「部落青年団」を基盤に、地域青年団に青年が「素朴な結合要求」をもって結衆するという。すなわち、山口のいう「素朴な結合要求」とは、主に農村にいて青年期にあるメンバー間において、自然にわき上がる、気の置けない友人たちと話したい、遊びたい、というような対話や娯楽、さらには密接な関係性の構築を求める要求である。

続いて山口は、当時の地域青年団を目的集団化すべきという議論に関して、「本来、大衆的な学習というものは、その学習がなんらかの生活目的とむすびついた特定の効力をもち、あるていどそれを強制されるかたちの環境におかれたときに、完全な状態で実現される」と、プラグマティックな課題ならば学習は効果的に行われるとする。しかし、山口は、より抽象的でときにイデオロギーが先行しがちな「社会活動・政治活動につねにすべての青年を動員することもできないはなしである」とし、それにより社会的青年期を求めるための青年団は弱体化されてしまうとも指摘する (p.108)。

とはいえさらに、山口は「素朴な結合要求」はあくまでも「土台」であることを以下のように強調する。

だが、ここであきらかにしておきたいことは、地域青年団の土台は素朴な結合要求だが、その活動は社会的青年期の要求にもとづくものだけではないという事実にかんしてである。そこには、いわゆる社会的要求の活動もあり、ときに政治活動もある。だが、やはりそれらの活動も素朴な結合要求・社会的青年期の要求という土台があったところで、その上に開花したものだと思われる。地域青年団は社会的青年期の要求のうえになりたっているといつてまちがいない。(p.97)

このように、山口は「素朴な結合要求」を土台に、ときに青年団は政治的な活動にも及ぶことを主張した。

この意味合いをふまえつつ、「素朴な結合要求」あるいはこれに類する認識が、以後、現場に近い論者に共有され、青年団の性格論において用いられていくのである。

### (3) 従前の青年団論と「素朴な結合要求」論との関係

山口は、「素朴な結合要求」があるがゆえに青年団は今に至ることを以後も繰り返し述べ、「その素朴な結合要求が、時代々々によって課された表面的な目的、役割にさまたげられながらも、一貫して地域青年団の本来の在り方をささえてきたのである (p.96)」とする。さらに山口は、これを近世の「若衆組」以来、貫流するものとする(下線筆者、以下本章では同じ)。

戦前の青年団と戦後の青年団ではそのはたしている社会的役割は明確にちがっているし、そこにみられる日青協の努力は多とすることができよう。しかし、それだからといって、地域青年団をなりたたせている青年の「素朴な結合要求」という土台が、あたらしい役割、任務でかんたんに代行され、おきかえられるとは考えられない。その土台はあくまで土台として存在し、それを無視することはゆるされまい。

大日本青年団の時代においても、地域青年団のつくられる基盤には青年の素朴な結合要求があり、部落の単位組織(支部)のなかにはそれなりの自主的な結合がいていたのである。それは上から一方的に統制され、存在していたというだけのものではなかった。地域青年団は江戸時代の若衆組iraいの歴史と伝統をひきつぐものといわれるが、そこでは時代々々によってそれぞれことなった社会的役割をになわされていたといつても、やはりそのなかには一貫して青年の自主的な結合がながれていたといつう一面があつたのではあるまいかと思われる。問題は、表面的な社会的役割や任務という場面から組織の性格をみようとするのではなく、さらにふかく組織をなりたたせている土台からその性格の本質をみきわめなくてはならないということである。

(pp.29-30)

また、これは生業や職住が一致する農村において成り立つということを山口は強調し(p.30)、1959(昭和 34)年度の日青協の運動方針に「青年団の中心は農村部である」と明記されたことを支持した。

上掲の引用下線部にあるように、「地域青年団は江戸時代の若衆組iraいの歴史と伝統を引きつぐものといわれる」とすることからも、山口の言説は、従前の青年団論をふまえ

ている。

「素朴な結合要求」を結合原理とした地域青年団の歴史的イメージは、第1章で前述したように、田澤義鋪が『青年団の使命』で示したものと通底するところがある。改めて確認すると、田澤は、青年団の「母胎」である若者組が「素朴極まる原始民族の自然の習俗」であり、「青年期」の「止むに止まれぬ社交慾・娯楽慾の発現が、その根底となつてゐる」とし、社交欲が青年団の結合原理としてあることを指摘していた。しかし、もちろん山口がイメージする若者組や青年団は、田澤が示した教化的・修養的なそれとは異なり、終戦直後からの「やくざ踊り」への熱狂の時代を経たもので、かつて「弊風」とされた若者組像同様、田澤が示した「お行儀のよい」ものではなかったであろう（第5章参照）。

#### （4）小川利夫と宮坂広作による批判

この山口の「素朴な結合要求」論を、当時、35歳の小川利夫と29歳の宮坂広作という新進気鋭の研究者が批判した。青研集会の助言者でもあった二人であるが、小川は青年団の形成過程をめぐる歴史認識の違いにおいて、宮坂はそれに加え、農村青年の「社会的青年期」の「基本法則」が「素朴な結合要求」とされることへの批判を示した。さらに両者とも、山口論に依拠した、青年団「多目的集団」論への強い批判を行った。

宮坂が1960（昭和35）年度の執行部提案の運動方針が、「そっくり山口氏の『青年運動の理論』のひきうつしであることは、山口理論の評価のうえできわめて示唆的であるといえよう<sup>10)</sup>」とする。このことから、『青年運動の理論』刊行後すぐから、日青協主体性派が山口説に着目していたことがうかがわれる。そして同年度の1961（昭和36）年2月に開催された、第7回青研集会に山口が助言者として招かれている<sup>11)</sup>。それを承け、本章冒頭に挙げたように、1962（昭和37）年度の日青協の運動方針に「素朴な結合要求」が盛り込まれたことが時系列的に理解できる。

既に序章においても述べたように、小川利夫は1961（昭和36）年1月に刊行された『青年教育（講座・日本の社会教育Ⅲ）』（生活科学調査会編、医歯薬出版株式会社刊）に所収された「青年問題の現状と認識」において、山口の『青年運動の理論』を以下のように厳しく批判した。

青年団運動の特殊性を問題にするとき、まず「青年の素朴な結合要求」に着目していること、そのこと自身はけっして不当ではない。しかし、それに着目すればするほど青年団運動の特殊性を「素朴な結合要求」のみに求める氏の見解は、非歴史的だといえよう。ここではくわしくは述べられないが、戦前においてはもちろん戦後においても、青年団の特殊性は、むしろ一般的にみて青年の要求が第二次・第三次なものとされている点に認められるからである。

山口氏は青年団の特殊性を問題にする場合、部落だけをみて市町村をみていない。青年団組織の基礎は部落だといまなお固定的にとらえている。しかし、そのような把握は、青年団の母胎としての若衆組にはあてはまっても、明治中期から後半にかけて若衆組の再編成をとおして創出された青年団の社会的性格をとらえることはできない。いわゆる「若衆組」は、「近世農村に特有な結合様式の一つとして」、単なる青年の集団というよりも、むしろ「むらの生活集団」とよばるべき性格をもっていた。

したがって、そこでは青年は「世代としての青年」である前に「村の若衆」であることを当然要請された。(中略)

しかし、新しく再編成された青年団は、少なくとも二つの意味において、若衆組とは区別される。その一つは、新しい青年団はいぜんとして部落を単位とする若衆的青年の結合をだきかかえ、そのうえに成立したものであることにはかわりなかったが、その基本的な組織原則は、もはや部落ではなく新しい市町村単位であったということである。いま一つは、その組織化のねらいが、もはや青年をたんに「家」や「部落」の青年としてではなく、同時に、新しい市町村や県・国家の青年としようとした点にもとめられる。(中略) 青年団はまさしく「一万二千の青年町村」をつくり、それによって「地方自治の根帯と作らしめ」ようとして、〈上から〉つくりだされたものであった。したがってそこでは、「素朴な結合要求」が青年団の「土台」となったというよりも、むしろ、瀧之助にみられるような『田舎青年』の「素朴な要求」を利用し、あるいは、それを体制内部にひきつけ転向させることをとおして、はじめて青年団の組織化が可能となったというべきであろう。(pp.9-10)

ここには、山口と小川の着眼する青年団の組織基盤の認識に大きな差があったことが示されている。山口は部落(=集落)の日常生活における青年団活動と、そこにおける社会的青年期の保障形態としての意味づけを強調している。一方として、小川は、戦前から戦中期の農村青年層の組織化が、彼らの意図を超えた部分で国家的な要請に基づき進んだことをマクロな視点で改めて指摘し、山口論のいわば「非歴史性」を批判している。さらに言えば、1953(昭和28)年から進められた昭和の大合併で成立した、新制自治体への期待もうかがわれるものである。

小川は地方改良運動、経済更正運動、戦時下での部落会・常会の設立などの官製的村づくり運動、戦後の新生活運動などでは、常に大字や集落単位の自助努力、隣保精神の高揚が自治民育のかけごえのもとに求められ、集落の紐帯が意識化させられてきたことへ批判を加えてきた<sup>12)</sup>。ゆえに、「村の若衆」として、まずは地域社会への奉仕が求められる(と小川が認識する)部落(=集落)基盤の青年会の存在に批判的になるのは自然であった。

いま見たように、小川の戦後青年団論と公民館論の根底には、近代の青年団運動から継続して、特に田澤義鋪らの内務省系「体制内リベラル」<sup>13)</sup>による、民本主義的な匂いをもったナショナリズムが戦後社会教育の制度の根幹にあることへの違和感がある<sup>14)</sup>。そのことが1960年代の自治公民館論争における小川論の根底にも貫流している<sup>15)</sup>。それゆえ青年団についても、ことさらに戦後新たに合併再編されていた市町村やその範囲での団体・組織活動に期待したと言える。

では小川は、山口の言うところの青年団の「基本法則」、言い換えれば「結合原理」を何としてとらえていたのか。もちろん、小川は前掲の引用においてもあるように、それに青年の「素朴な結合要求」があることには「不当でない」と一定の評価を与えてはいる。そのとき、この文章中で小川が強く高い位置づけを与えるのは、学生問題と青年労働者問題、農村青年問題の結合形態である。小川はその三者が権力の側において、「ともに青年問題として分割統治の対象となっていたのにたいして、反体制運動の側では、かえってそれらを区別し、あるいは、一つの運動のために他を『利用』しようとする傾向がつよかつ

た」とする。その中で戦前の例外として、長野県下伊那の青年団自主化運動、秋田県土崎町の青年団自立独立運動、「青年団及び青年訓練所の思想事件」などを、青年集団における「労農提携」の遺産として見る (pp.8-9)。

生活と労働とその条件の保障を実現すべく自主的・自律的に機能し、ときに政治的志向を強く示すこともある目的集団としてのあり方が、小川が当時理想とした青年団の姿であり、そのことが青年団の結合原理となるべきものであったと言えよう。

同様の観点で宮坂広作が山口論を批判した。やはり小川と同じ『青年教育（講座・日本の社会教育Ⅲ）』中の「青年運動の現状と課題」においてであるが、宮坂は以下のように述べる。

青年団運動の組織的・思想的欠陥の正確な認識は、当然運動の新しい局面、新たなる発展の方向を模索せしめるはずである。もちろんここで青年団の組織的基板に「いつの時代にあっても一貫してつらぬかれてきた青年の〈素朴な結合要求〉」を措定するような、牧歌的リリシズムにまで還元する必要はない。この理論は、青年団を若衆宿や村祭りの手踊りや角力の次元にまでひきもどすことだけでなく、青年団がいかに権力によって育成されて、「公認」の地域（市町村行政区）の団体になったか（なっているか）という歴史的分析を欠き、今日の青年の複雑な、新しい形態の要求を認識しないことで過ちをかさねている。(p.371、傍点ママ)

さらに宮坂は、高根の社会的青年期論に一定の評価を与えつつも、「たとえば山口武秀の場合のように、たかだか『青年が実際に世の中に出るための準備期』程度の狭義にしか解釈されないために、若干の混乱をもたらしたように思われる」と批判し、社会的青年期とは、「生理的青年期・心理的青年期を現実の社会関係にそくしてとらえなおしたものとすることによって、青年の要求を把握する場合に、その世代的特質たる生理的・心理的要求と青年が属する階級の要求とを、統一的に理解することがはじめて可能になる (pp.337-338)」とする。

こうしてみると、山口は、高根のいわば青年期モラトリウム論を農村の現実において理解し、その補完・保障を試みたのであり、宮坂は、そのややもすると非政治的にとらえられる部分をロジカルに批判したといえる。そして、宮坂は、「農村青年運動としての性格をもつ青年団運動、農業・農民問題と真剣にとりくむことなくしては、農村青年大衆の要求にこたええないことは縷説の必要があるまい (p.372)」として、こう記す。

地域のほとんど全戸の安保反対署名をとり、青年のほとんどが主体的に反対運動にとりくんだという北信飯山地区の青年団」が、それに先立つ長期にわたる共同学習運動の——リレー日記→生活記録文集→（農業経営）生産学習→（安保問題）政治学習——発展と、農協民主化などの実践への結果として、その確信と情熱とをうみだしたという事例は、この発展方向をめざす運動の一つのシェーマとして聞くべきものであらう。(p.372)

これが当時の宮坂の考える青年団（運動）の理想の展開過程であった。すなわち、生産

学習から政治学習に展開するという、目的集団化した姿である。

### （５）現場からの視点との齟齬

このように、小川と宮坂が、いわば「非歴史性」と「非政治性」をもって「素朴な結合要求」を批判したのである。しかし、前章までで取り上げてきた青年団中央組織関係者らによる言説提示とは異なり、山口が戦前以来、無産運動の活動家であったことには注意を払わねばならない。やはりかえって山口の論が、当時の農村青年層の日常性に立脚したリアルなものとして受け止められるのである。

さらに、より現場に近い立場にあった社会教育関係職員や青年団関係者の立場からも、小川や宮坂とは異なる視点が提示されていた。たとえば、後年、共同学習論の提唱・推進の基盤となったことでも知られる山形県において、長く青年教育支援に携わった佐藤信一は、集落包括的な青年会を活動の基盤に置きつつも、その中で機能分化がなされていき、小集団が形成されていくことを指摘した。特に佐藤は、その中に単に集って話に興じるような未組織的な集団の存在を重視し、それらが「青年たちにとっては何等かの意味において人間形成機能の役割を果たしている<sup>16)</sup>」と評価した。そして青年学級においては、それらの未組織的な集団の存在を前提とし、「素朴な単純な形態において地域青年ひとりひとりの生活の願いをくみとって、それを学習活動にまで組織化していくことを考えるべきであろう<sup>17)</sup>」とし、青年学級の学習内容の硬直化に対する現場からの視点を提示した。

本章冒頭に示した寒河江をはじめ、実態に精通している立場から見ると、近代の青年団組織はもちろんのこと、戦後において再組織化された市町村単位の青年団組織は、集落青年会の代表者や意思ある若者らによって主導される組織としての面が強かった。むしろ若者たちの日常と密接な関係があったのは集落青年会であり、かつその活動に大多数の青年の結合要求が表出していると思えるべきであった。しかし、例えば本章第２節に示した上掲の寒河江の発言などは当時、日青協内の左派役員からは保守的であるとして批判されるものであった<sup>18)</sup>。

なお、佐藤信一も前掲書において、山形県における、集落青年会の若者組との連続性と断絶とに着目して、存立形態の類型提示も行っている。また、社会教育学にも深い関わりを持っていた教育社会学者である佐藤守<sup>19)</sup>、江馬成也<sup>20)</sup>のモノグラフ研究は、多様な戦後の部落集落青年会の現況にも言及している。

さらに、高度経済成長期前後における民俗学などの研究成果を見るまでもなく、これら集落単位の青年団組織は、まだ日常の生活組織として機能していた。青年集団の動向と運動の実態を検討するに当たり、市町村単位の活動を過剰に評価することは、表層的な理解に終わることが懸念される。

### （６）評論家「トリオ」の視点とアカデミズムへの批判

同時期、日青協の青研集会の助言者として、在野の立場にある３人の評論・実践家がタッグを組んでいた。それが須藤克三<sup>21)</sup>、島田武雄<sup>22)</sup>、松丸志摩三<sup>23)</sup>であった。この３人は、青研集会の助言者中でも異彩を放っていたようであり、「実践派の須藤、島田武雄、松丸志摩三のトリオが、アカデミックで、いささか運動のセンスに欠ける傾向の理論派に反ぱつし」、「在野精神をむき出し」にしていたが、「このトリオの存在は一陣の涼風を呼



んだ」と評されている<sup>24)</sup>。

この「在野精神」は、まずは1957（昭和32）年、大学研究者を加えず、須藤ら3人と、当時の日青協主体性派の主要メンバーである寒河江善秋らによって、須藤克三編『青年団運動50の質問』（農山漁村文化協会刊）を刊行したところにもあらわれている。同書では彼らの前提とする青年団の基盤は、「自分たちの住んでいる社会（それはつまり村落なのですが）を豊かな住みよいものにするという運動の目的を達成するためにも、自分たちの生きている部落の伝統や人間関係や制度や風俗や、とりわけ生産と政治とにかかわりをもたなければなりません（p.17）」とし、部落（＝集落）の組織基盤を前提とした問答が展開される。

同じく『青年団運動50の質問』では、青年団の活動の根幹にある「話し合い」については、以下のように記される。

そしたらみんな「ひとりぼっちでいると淋しい、みんなの顔をみて語っていると、たとえそれがとりとめのない雑談だって、楽しくなるんだ。それだけで何となく自信がでてくるような気がする」というのでした。

青年団をぎりぎりまでおしつめてみると、ここにくるのではないかと思います。みんなと一しょになって、楽しくすごしたい。——素朴なこの願いは、青年団の出発点であり、活動の帰結点ではないかと思います。

まず、みんなと、心おきなく、何でも話し合うことから、みんなの心と心のつながりがでてくるのです。論理や意識だけ一致しても、なかなか人間と人間の信じ合いにはなれません。（pp.97-98）

この農村における集落基盤の、いわゆる「素朴な結合要求」をもととした結合原理の認識は、本章冒頭に掲げたように、日青協主体性派が示していく多目的集団論の前提となり、以後、山口論をふまえつつ、継承されていくことになる。

この「トリオ」が、日青協の助言者陣の理論派といえる研究者に、いわば「つかかった」のである。その対象は主に、東京大学および同大学出身の研究者、例えば碓井正久、小川利夫らであった。須藤、島田、松丸の共著として『村の社会教育』（牧書店、1959）、『農民の知恵』（牧書店、1960）が刊行されているが、両書とも研究者の示す概念や理論と現場との乖離を批判する。3人の農村に関する豊富な知見と農村青年らの生活記録をもとに、農民の立場・視点からの農村生活の論理が提示され、そこでの社会教育の現実と課題とが投げかけられている。

たとえば『村の社会教育』において、島田は以下のように指摘する。

生産点にいる村人の生活感情を無視し、そこで“家づくり”や“村づくり”に取り組みながら生長している青年たちの生き生きとした体験を正しく反映しないで、別のところからもってきた、さかだちした発想法が社会教育の指導者や文化人といわれる人たちによって、まだまだ、民衆におしつけられている傾向はないであろうか（p.134）

戦前に成人し、戦前から高度経済成長の入り口までの農村を見通してきた三者の農村変

革観は、ひとまず現実における農村の状況の文脈をふまえた、漸進主義的なものであったといえよう。

『村の社会教育』に対する小川利夫の書評<sup>25)</sup>に対する「トリオ」の反駁<sup>26)</sup>は辛辣である。小川の書評は、「碓井正久、千野陽一、藤岡貞彦と小川との共同討議にもとづいて、小川がまとめたもの<sup>27)</sup>」であり、当時の日青協助言者であった東京大学出身の研究者と同大学院生らの志向が集約されていたものといえる。

小川の書評では、まず冒頭に同書が「きわめて率直に、これまでの社会教育の考え方、あり方そのものに建設的な批判をくわえようとしているだけに、とりわけ、今後の社会教育の実践・研究に多くの示唆をあたえているといえよう<sup>28)</sup>」と3人に敬意を払いつつも、「全体として、今後の社会教育を国民のさまざまな教育、文化運動のなかでどのように位置づけ、どのように構想するかについての実践的な課題と展望とは、けっして積極的に問題とされているとはいえない<sup>29)</sup>」とし、須藤らにおける、公教育としての社会教育の位置づけをめぐる認識が不十分であることへ向けられる。

それに対し、須藤は、小川の文章の難解さや観念性を批判しつつ、「あの本の中では、われわれは民衆の声とか、民衆の姿というものをくどいほど具体的に引出したつもり<sup>30)</sup>」で、「民衆というものはこういうふうな社会教育を受け止め、こういうふうな願いを持っている。そういうことに対する分析がない社会教育は困るということを云ったはずなんだ。ところがあの書評の中では民衆は置き去りにされている<sup>31)</sup>」と再度、小川らへの批判を行った。特に小川らが強調した、「公教育としての社会教育」に対する位置づけに目配りされていないとする批判に対しては、

現在の公権力的な社会教育と行政というものの矛盾の中で民衆が迷惑している。民衆というものをもっと大事にして、新しい社会教育を民衆のものにさせようと学者も考えるならば、われわれの舌たらずの点をもっと組織立てて強いものにしてくれるように示唆してくれればいいと思う。われわれから見たならば、一体お前さん達は敵なのか、味方なのかと云いたくなる。(笑) 足りない点を補って力をつけてくれるのか、われわれをしょげさせるつもりなのか、そしてもう一ぺん勉強して出直して来いというのか、その点あいまいだね<sup>32)</sup>。

と皮肉を交えつつ批判する。また、宮原誠一の門下生が主事となって活動する、長野県の「そういう特殊な村を拠点にして行くというところ<sup>33)</sup>」に小川らとの農村の実態に関する認識の差があるとする。

なお、結果として、この須藤らの批判は、以下にあるように小川の反省的な記述を引き出している。山口批判を展開した前掲「青年問題の現状と認識」(生活科学調査会編『青年教育(講座・日本の社会教育Ⅲ)』医歯薬出版株式会社刊、1961)において、批判の箇所に至る前、小川は、青研集会では青年問題が全て「青年団問題」に収斂されていく「青年団至上主義」の傾向があることや青研集会自体がマンネリ化していく傾向があるとする。そして、その原因として以下のように反省する。

まず第一は、いわゆる学習主義、教育主義批判に対するわれわれ自身の批判である。

われわれは、ともすれば「自分のポスト」でだけものを考えがちになる。学校の子どもに対する教師のおちいりがちな欠陥は、社会教育実践、研究でめしをくうわれわれのなかにも、つねに不断に再生産されている。たとえば、われわれは、働く青年や青年集団を、たんに教育の対象として、学習集団あるいはいわゆる「社会教育関係団体」としてのみ、一方的にとらえがちである。そしてまた、研究の着目をそれらの「教育活動の規則の集積」にのみ固定させがちである。そこには、学習や教育が、いったい「なんのために、なにを学ぶ」のか、をはなれてひとり歩きする傾向があった。 (pp.4-5)

この引用部における二つの下線部には註が付されており、いずれも須藤らによる『村の社会教育』が参考文献として挙げられている。なお、同書で須藤が担当した章の見出しは、「だれのためになにをするのか」であった。小川も改めてほぼ一世代上である「トリオ」に敬意を示し、彼らの批判を受け止めたものと見てよいであろう。

以上のように、本項で取り上げたやりとりを見るに、小川らのアカデミックかつマクロな観点からの指摘とそこに込められた革新性への期待と、須藤らが依拠した農村現場の実態、「民衆」の認識との距離感が浮かび上がる。

しかしもちろん、両者とも日青協の青研集会の助言者として長くともにあり、同じ雑誌媒体においても並んで筆を執っていた。小川らがいわば「理論派」、須藤らが「現場派」という立場にあり、農村、そして農村青年の組織化や学習の展開の支援に携わりながらも、両者の認識には「革新（急進）性／漸進性」という違いが存在していた。このことは当然のことながら、両者の目指す青年団像の違いや学習における展開の方向性の差として現れていく。

両者の認識や志向性のリアリティをめぐっては、第5章で取り上げる、同時期の岩手県における岩手県社会教育主事・池野正明による「青年団体構造改革論」とその運動の帰結が示唆するものが大きい。第5章で詳述したい。

### 第3節 終戦直後から1970年代までの「たまり場」への着目

#### (1)「たまり場」の発見

一方、同時期に山口が示した「素朴な結合要求」と通底する、青年の日常的な結衆の形態を積極的に評価し、共同学習論の前提として位置づけていく言説が研究者からも提示されるようになる。その嚆矢が、大田堯による「たまり場」への着目である。

寺中作雄が『公民館の建設』（公民館協会、1946）において、彼の示した初期公民館構想<sup>34)</sup>に「溜り場」としての公民館を示したことがその後よく知られるが、実際に「たまり場」という語が社会教育の中でキーワードとして用いられたのは、1953年頃からの共同学習論の展開期に始まる。大田堯が浦和市西堀青年学級「ロハ台」のグループとの実践から「たまり場」の意義に気づき、それをサークルにおける学習論の中で論じた<sup>35)</sup>。

大田は、「農村のサークル活動」（大田堯編『農村のサークル活動』農山漁村文化協会、1956）の中で、以下のような「村のたまり場」をサークルの前史としてとりあげた。

どんな部落にも、若い衆たち、おかみさんたち、あるいは、おやじさんたちの“た

まり場”があるものです。その場所は、氏神さまの石段の片すみだったり、橋げたの一角で、年中材木がつみあげてある上だったり、駄菓子屋の店先の茶飲台だったり、ビッコの椅子がころがり、チビた机がちらかっている一パイ飲屋だったり、あるいは小川のほとりの洗濯場であったりするのです。そこでは、家の中では、お互いにむつつりとしていて、ろくに言葉をかわさない親子でも、PTAの集りで一度も口を割ったことのない母ちゃん、公民館の集りで、神妙なよそゆきの顔でかしこまる親父さんも、身体中のこわばりをすっかりほぐして、見ちがえるような明るさをとりもどすのです。駄ジャレがパチパチと飛びかい、歓声がどっとおこります。(中略)

このたまり場は、誰からか与えられたというところではなく、農民が自分たちでつくり出し、かちとってきた自由な空間なのです。(中略)

しかし、たまり場は、一方からいうと、あくまで行きどまりのたまり場でした。歴史的な大事件と直接につながらない袋小路にあったわけでしょう。部落部落のたまり場は、それぞれに孤立していて、何のつながりもありませんでした。たまり場ではくらしの苦悩も語り合われました。しかしその大部分が、ウップンばらしでおわったこともたしかでしょう。だからといって、それが水泡のようにあわく、はかないものにすぎないかといえ、必ずしもそういいきれないものがあるとおもいます。(中略)

長い間、陽の目を見なかった村々のたまり場も、行きどまりであることをやめて、歴史の舞台に堂々と姿をあらわすような日が、近づいてきているのではないのでしょうか。(pp.228-233)

大田は、通時代的に不定型に日常の中に存在する対話的空間とそこに生起される関係性を当事者の立場から肯定的にとらえ、共同学習の基盤・前提として着目した。また、共同学習の主要な理論提唱者であった吉田昇の「共同学習のすすめ方」(吉田昇・福尾武彦・碓井雅久・小川利夫『青年の学習活動』農山漁村文化協会 1959)では、以下のように「うさばらし」の必要性が強調される。

共同学習という、みんなで話しあってすすめる学習の基礎には、うさばらしの気持が強いささえとなっている。

こうしたうさばらしの要素を軽くみすぎることは、たいへんなまちがいだ。話しあいがおもしろくなければ、みんなが出なくなってしまう。たとえ義理で集まったところで、話は堅苦しいよそ行きのものになってしまう。よそ行きの話からは、ひとびとの生活を高めてゆくエネルギーは生まれない。共同学習の指導者は、あくまでも、あせってはいけない。

だから、話しあい学習に、自由なふんい気をいれるために、世話役の人はいろんな苦勞をする必要がある。(pp.52-54)

同文中には、大田の『農村のサークル活動』に関わる記述が頻出し、吉田がその内容をふまえていることがわかる。先に挙げた大田のいう「ウップンばらし」の場である「たまり場」と吉田のいう「うさばらし」の場は、その日常性および対話的空間としてあることをみて、ほぼ同様の指摘とみてよい。

共同学習論の提唱・実践期である 1953 年頃から 1960 年前後にかけて、小集団学習の実践に深く関わっていた大田によって、若者たちの置かれる日常生活の理解、彼らの日常意識が理解され示されていた。そして、密接かつフランクな関係性としての「たまり場」が、小集団学習の前提として日常から「発見」され、その重要性は共同学習の理論的支柱ともなっていた吉田昇によっても認識されていたのである。これらの「たまり場」「うさばらし」といった対話的空間は、「素朴な結合要求」を表現した姿としてほぼ重なるものであり、研究者の側から、青年層のそもそもの結合原理は、日常的な対話的空間の要求と確保に求められることを提示するものとなった。

なお、前項で示したように、小川は青研集会において、青年問題が全て「青年団問題」に収斂されていく、「青年団至上主義」の傾向があることを批判的に指摘しているが、1955 年頃から 1960 年頃までは、小川が言うように青年団における共同学習の展開のあり方、そして地域網羅的な青年団とそこに派生するサークルとの共存、青年学級と青年団との関係性をめぐる議論が展開した<sup>36)</sup>。その中で、大田の報告したロハ台の実践は、よく引用されたり例示されるものとなった。大田は、日青協の青研集会の助言者を、1955(昭和 30)年の第 2 回のみでしか務めていないものの、ロハ台の報告のインパクトはだいぶ大きいものであったことがわかる。

たとえば創刊間もない『月刊社会教育』(国土社刊) 1958(昭和 33)年第 2 号・新年号(第 2 巻第 1 号・2 号)では、「特集・小集団学習」と銘打って各地からの事例報告と研究者の論考が寄せられている。当時の社会教育の現場では、地域・集落内に従前からある組織やサークル等に視野を広げ、それらとメンバーが重複する青年団及び青年学級の活性化、青年団とサークル・諸組織の連携を模索し、共同学習を展開させることに関心が寄せられていたことがわかる。山形市の社会教育主事であった坂部和男による、「地域社会とサークル活動」というレポートでは、青年団内において、やはり大田の『農村のサークル活動』の「ロハ台」に触発された事例が報告されている(p.37)。その趣旨は、「青年のサークルは、青年団という老化したものの中に自由なたまり場の性格を注入して若返りさせるホルモン剤の役割を担っている(p.41)」とするように、「たまり場」の語を用いつつ、青年団とサークルとの共存と連携とを模索するものであった。

やはり『月刊社会教育』1958 年第 3 号(同巻第 3 号)では、京都府社会教育主事であった米田譲が「団体と小集団」と題して報告している。米田は、青年団や婦人会での小集団活動の中において、特に今までの団活動に対して不満を持ったメンバーによる自主的な集まりや、「いわゆる『たまり場』の発展した集りとして村や部落を基盤としてしぜんに生れてきた」性格が小集団の基盤にあることが、その自主性の観点から見ても重要であることを指摘する(pp.34-37)。

同じく『月刊社会教育』1958 年 12 月号(同巻第 12 号・13 号)では「特集・共同学習をふかめる」と題して、三井為友の「共同学習の基礎理論」をはじめとした研究者の論考と実践報告が多く掲載されている。そこで「ロハ台」のチューターであった小学校教員の正木欽七が、「新しい職場に生きがいを求めて—『ロハ台』その後の青年たち—」と題してルポを寄稿している(pp.38-42)。正木は、「ロハ台」がその活動を閉じていき、共同学習が継続していかなかったことに、大田堯らの指導者の関わり方を批判的にふりかえる。その点に関わり、やはり同号におけるシンポジウム記録では、栃木県茂木町の公民館主事

であった笹島保が、共同学習の停滞に際し問題になっていた「指導性」について、ロハ台の実践における大田の指導者としての役割が曖昧に示されていたことを例示しつつ、問題提起を行っている（pp.75-76）。

以上の例示から見ても、共同学習論の実践上の議論が高まっていた 1958 年およびその翌年においては、大田による「ロハ台」の実践記録やサークル論が強く意識されている。報告や論考に「たまり場」の語が用いられているのも、大田の影響が感じられる。

とはいえ、「たまり場」という語は、その後、とりたててシンボリックに用いられてない。1960 年前後から 1974 年頃までは、現代史上においては安保闘争に代表される政治の時期、いわば「青年の叛乱期」として位置づけられる。仲間による話し合いを重視した共同学習の「身近主義」には限界がとえられ、ナショナルなレベルでの経済と政治の問題、そして農業の共同化や大規模化に関わる、生産に関わる問題を学習課題とすべく、農民大学運動が展開しようとしていた時期であった。この時期、「たまり場」の語は社会教育の理論上も実践上にも見られなくなった。

しかしその後、1970 年代になると「たまり場」のタームが、同時期に都市公民館における、主に青年層を対象とした社会教育実践論、青年団の学習論という 2 つのトラックで表出していく。以下、その流れを確認したい。

## （２）都市公民館における「たまり場」論の提起

寺中作雄の初期公民館構想において示された、「溜り場」としての公民館像をふまえて、1960 年代の都市公民館論の延長線上に示されたのが、「三多摩テーゼ」として知られる「新しい公民館像をめざして」（東京都教育庁社会教育部、1974）であった。これは、東京三多摩地域の公民館実践を踏まえて編まれ、示されたものであった。その中では、まず、「公民館は住民の自由なたまり場です」とされ、「ひとりぼっちで、行き場のない人間でもそこに来れば、楽しく、理屈でない時がすごせ、さらには学習に参加したり、グループに加入できるキッカケをつかめるような、自由なたまり場、自己解放の場として公民館があるのです<sup>37)</sup>」と、「たまり場」としての公民館の位置づけがなされている。そして実際に国立市公民館を舞台として、「たまり場」を前面に打ち出す、若者を対象とした実践が展開されていったのであった。

既に 1960 年代から国立市公民館では、青年室が青年の自主運営によって使用され、夜間にも自由に使うことが出来るようになっていたといい<sup>38)</sup>、勤労青年層の継続的な利用形態が確立されていた。この実践に関しては、1976（昭和 51）年以降、国立市公民館職員であった平林正夫によって報告されていく<sup>39)</sup>。平林は、『「たまり場考」——社会教育における空間論的視点』（長浜功編『現代社会教育の課題と展望』明石書店、1986）において、それまでの国立市公民館の実践をふりかえりつつ、社会教育施設における「たまり場」空間の理論的検討を行う。平林はそこで寺中作雄の初期公民館構想に見られる、住民の「溜り場」としての公民館の位置づけが、1970 年代における公民館の性格論へと継続しているとの認識を示す。そして、国立市公民館における青年による「コーヒーハウス」の実践を通して、「たまり場」の理論化を図った。平林は、「たまり場空間というのは、自然発生的に生まれた、ある程度、固定化されたメンバーの閉ざされた空間（テリトリー）であり、その場では一般社会論的価値から自由な価値、あるいは掟をもつことができる場、

と考えられる (p.158)」とした<sup>40)</sup>。

そのような性格を持つ「たまり場」を生成していく仕掛けに関して、平林は職員の関わり方、さらには施設のハード面のあり方に関しても提言を行っている。以後、国立市公民館を事例とした平林らの報告と論考が、1980年代まで続く。

### (3) 1970年代以降の青年団論と「たまり場」

1970年代、「たまり場」の語が青年期教育と結びついて表出してくるもう一つのトラックが、青年団の学習論・組織論に関わるものである。この時期には、第2章第3節に前述したように、那須野隆一により『青年団論』(日本青年館、1976)が刊行された。そこでは、名古屋サークル連絡協議会(名サ連)の実践をもととした生活集団論が示され、その実現のため、「たまり場」での生活史学習が提起された。ここでは1974(昭和49)年以来、日青協が青年団の性格として示していた生活集団論とそれに基づく実践のあり方が提示されたのであった。

「生活集団」とは、再掲すると、「青年の要求と青年にとっての必要とを結びつけ、青年個人における要求の多様性、そこから出発して多数青年の要求の普遍性に重点をおいて組織される集団、多目的集団<sup>41)</sup>(傍点ママ)」である。那須野は当時の時代状況において、青年集団が、さまざまな青年サークルのように、離合集散を原理とみなす機能集団(=「うたかた集団」)化していったとみなしていた<sup>42)</sup>。そしてそれらの機能集団を、青年の生活と人格を地域と結びつけつつ、「まるごと」包括する生活集団へと再編することを志向していたのであった<sup>43)</sup>。これはまさに、小川や宮坂らが厳しく批判した、「素朴な結合要求」論とそれに依拠した多目的集団論をそのまま引き継いだものである。さらにいえば、既に第2章第3節で述べたように、その前提やイメージには「青年団=若者組母胎」論が反映されている。

那須野の生活集団論は、そもそもは名古屋サークル連絡協議会(名サ連)等での都市勤労青年サークルにおける実践を通して構築された都市勤労青年サークル論であった。また、那須野は、生活集団論における「たまり場」での生活史学習を1950年代共同学習論の創造的発展と評価していた<sup>44)</sup>。しかし、既に第2章第3節で述べたように、『青年団論』では、最盛期の青年団の姿や、彼の立論の前提となっている名サ連での実践が語られるのではなく、「たまり場」に「若者宿」像を以て語るレトリックが用いられた。これは那須野が、都市勤労青年サークル論を、「青年団論」として提示するときの橋渡しとして、なじみ深い従来の「青年団=若者組母胎」に基づく言説を用いたことが推測される。

1974年の生活集団論提起以後、日青協は、生活史学習を「たまり場学習」として簡明化し、それを那須野同様、1950年代共同学習論の再止揚として明確に位置づけて推進していた<sup>45)</sup>。1978(昭和53)年に刊行された『青年論潮』創刊号(日本青年団協議会刊)中にある、「たまり場学習を進めよう」を手がかりにその内容を見てみたい。

#### たまり場学習の意味

“たまり場”とは——団員のだれでも気軽に寄り集まれて“本音を語る”ことのできる場、“自分を出す”ことのできる場です。公民館や喫茶店、個人の家にいたるまで、いつでも自由に青年たちが集まれる“たまり場”の形はさまざまでも、青年団の

日常活動の拠点となるところです。つまり、「たまり場」での話し合いは、正規の学習会や研修会にたちむかう青年たちの問題意識や学習意欲をつちかうと同時に、正規の学習会や研修会で学んだことを青年たちの行き方の指針や道標にまでつくりあげていく役割をはたしています。（那須野隆一氏——青年団の運動と学習——組織対策特別委員会まとめより）

“たまり場学習”とは、たまりばにおいて、団員の“生活と人格のまるごとのふれあい”をおこないながら、よもやま話しながら、系統的な学習にいたるまでさまざまな形でおこなわれる学習活動をいいます。（pp.5-6）

以上の説明に続き、「たまり場学習の内容」として4つの内容が挙げられている。そのうち、「①共同学習の見直しと実践」、「②青年団の歴史学習と今日的意義の発見」、「③青年団の目的・性格の学習」の3つが「系統的な学習」として進められ、最後の「④よもやま話し、情報交換、経験交流学習」に関しては、『たまり場』学習は、以上のべた系統的な学習の前後と合間に本音と弱音を出しながら、よもやま話し、情報交換、経験交流学習を行い、やる気を起す団員を一人でも多く増やしていきます」というように位置づけられている（p.6）<sup>46)</sup>。

なお、この時期には、都市型公民館に倣って、地方においても公民館施設のデラックス化・大規模化が進展した。しかし、その施設管理上の問題から、夜間に若者が気軽に公民館施設を使うことができなくなる事態が頻発し、青年会館の自主建設や自治体への建設要望が行われていたのであった<sup>47)</sup>。このことは日本青年館新館建設運動と結びつけられ、さらに都道府県・市町村レベルでの青年会館建設運動が展開する<sup>48)</sup>。

那須野は特にそれを強調しなかったが、日本青年団協議会編・発行『青年団強化の手引 続ビジョンを求めて』（1978）では、青年会館に「青年のたまり場としての機能（現年版青年宿）（p.57）」があるとし、「たまり場」として位置づけたのであった。すなわち、このとき青年団論においても、「施設空間」と「たまり場」が一体化してとらえられていたのである。

このように、1970年代に至ると、青年団と関わっても、日常に存在する「たまり場」という関係性を肯定的にとらえ、いかにそれを実践と結びつけていくのが課題として認識された。それも、1950年代における共同学習論が展開されていたときの議論とは異なり、「たまり場」という関係性を無から生成すること、さらにそのための施設空間の確保へと議論と実践が展開していったのである。

このように、1980年代にさしかかるまでは「たまり場」が青年団と都市勤労青年サークル論において、キーワードとして確立していった。しかし、結局、日青協による「たまり場学習」は全国的に根付かないままに停滞していったことが関係者より報告されている<sup>49)</sup>。ゆえに、1990年代まで、青年団もしくは都市勤労青年サークルと「たまり場」に関する報告や論考は雑誌等続くものの、そのほとんどは生活集団論生成のモデルであった名古屋の事例に即するものに限定されていく<sup>50)</sup>。

#### （４）言説空間における「青年」の「若者」化

第1章で整理したように、近代において「若者」の語に取って代わった「青年」とは、



農村においては地方自治を支える「よき村人」であり、精勤し税を納め兵役の義務を果たす「よき国民」の前段として、国家的に熱いまなざしが常に降り注がれる存在であった。ここでのまなざしは、戦後に至れば、当事者たる青年層にとって鬱陶しいものである。その反映は、「青年／若者」の語彙の変化にも現れる。

結論からいうと、1980年代以降、「青年」は、学術用語や政策用語を除き、死語になっていった。その代わり、むしろ「若者」が好んで用いられる。難波功士によると、1970年代以降にその傾向が顕著となり、併せて「青年文化」も、「若者文化」へと取って代われ、サブカルチャー化が進んでいくという構図となる<sup>51)</sup>。この理由に関しては難波も十分に答え切れていないが、「青年」には刻苦勉勵的な雰囲気があり、1960年代からの若者の「叛乱」期以降の一種快樂主義的・逸脱的な文化には「青年」がなじまなかったとする指摘は示唆的である<sup>52)</sup>。つまり、「青年」には堅さが、「若者」に逸脱やゆるさが含意されているということである。

ここには、おとなが抑えきれない存在という意味も含めて、近世から近代に至る時期には統制の対象ともなっていた、「若者」に近いニュアンスがあるとみてよかろう。併せて大学への進学率が上昇するにつれ、学生（かつての「青年」そのもの）の特権性が徐々に失われていったことも背景として指摘できる。こうして、おとなからの〈教育的〉なまなざしがまわりつく「青年」は、一般語彙からは退場していったのである。

また、この1970年代以降の「青年」から「若者」という、“Youth”を示す語彙の「再」転換期、上述のように、社会教育における特に青年期教育の実践に関わって、「たまり場」という語が、キーワードとして浮かびあがってきたわけである。すなわち、そこでは、青年団の解体・弱体化への対応と、都市に居住する青年層の組織化が課題となっていたのである。

さらに高校と大学への進学率上昇と学校経由の就職の確保により、従前の勤労青年層に対する教育支援の必要性は減少した。さらに、交代制や一定でない休日など、産業構造の変化に伴う働き方の多様化は、青年団や勤労青年サークル等の集団活動を阻害していった。こうして社会教育や生涯学習という文脈においても、勤労青年教育という語自体が徐々に死語と化していったのである。

併せて、その「たまり場」の語も、1980年代からの勤労青年教育の衰退と軌を一にして理論や教育実践からは消えていき、以後は在学青少年教育の進展とともに「居場所」の語が青少年教育の枠組みにおいて頻繁に用いられ、定着化していく。このことは第6章で後述するものとしたい。

## 第4節 結語

### (1) まとめ

1960年前後、青研集会の助言者間で、青年団の性格論をめぐる議論が展開された。ここでは、「素朴な結合要求」論をめぐる、生産学習と政治学習の展開を評価する、小川利夫や宮坂広作らの若手社会教育研究者と、当時の農村の現状と農村青年層の志向をふまえた言説との衝突が見られた。その後、小川らの評価軸は、生産学習と政治学習の結合形態としての農民大学運動へと傾斜し、いわば「政治青年」への高い評価が前提となっていく。同じ研究者でも共同学習推進の中心にあった大田堯や吉田昇らは「たまり場」に表象

される、日常的な対話空間を小集団学習の基盤として認めたが、その指すものは「素朴な結合要求」に基づく対話的空間とほぼ重なるものであった。その後、1970年代になると「たまり場」論として、青年団論においても「素朴な結合要求」論の肯定がなされていく。

改めて横断的に見ると、特に1960年前後、戦後の青年団運動のピーク期に、日青協を挟んで、これらの青年団の性格論や結合原理に関する、研究者／現場の応答がなされていた。安保闘争と基本法農政下での農村・農業の変化を感じつつ、青年の主体性を確立するに当たって不可避な政治性を強く支持する、若手研究者側からの「上から」の言説と、まずは日常性に基づきつつ、農村青年層において、いかにして「青年期」を保障するのかという、「下から」の提起との衝突であったといえよう。

その後、現代史上、いわゆる「青年の叛乱期」に位置づけられる1960年代においては、第2章に整理したように、日本青年館を拠点とし、戦前の青年団中央組織に関する刊行物の再刊や刊行という形で「青年団＝若者組母胎」論とそれに基づく、「中正」の青年団像が繰り返され示される。そして、青年団組織そのものが衰退していき、脱政治化していく中、まずはその組織の再構築がはかられていく。そこではかつての「青年団＝若者組母胎」論が援用され、かつ「素朴な結合要求」論に基づいた、農村型の生活集団論が提起されるに至った。

また、以上見てきたように、「たまり場」の語が戦後社会教育、特に青年期教育と結びついて表出する時、そこには以下の視点が存在してきたといえる。まず、①「たまり場」を日常に存在する密接な関係性を伴う対話的空間としてとらえ、肯定的な価値を与えるもの。次に、②①の「たまり場」を生成しようとするもの、そして③として、実際の施設空間に上記①の「たまり場」を生成させようとするもの、の3点に集約できる。概して、①から②及び③へと、議論と実践は推移してきたといえる。

まず、①については、1953年頃から1960年前後、共同学習論が提唱・普及されたとき、集団による話し合い学習の前提として、大田堯や吉田昇らによっていわば「発見」された。次に、②は、上掲①の「たまり場」を生成しようとするものである。1970年代に那須野隆一らによって提唱された生活集団論に基づき、日青協が進めた「たまり場学習」がそれに該当する。なお、この時期には、第2章第3節で前述したように、「若者組＝生活集団」「若者宿＝たまり場」とする歴史イメージが重ねられて提示された。

そして③の傾向は、主に1970年代から顕著となっていくが、そこには2つの流れがある。まずは、国立市公民館の実践事例に基づく、平林正夫らによる都市公民館での「たまり場」論の展開である（③-a）。次は、青年団による、「たまり場」を標榜した青年会館建設に関わる運動である（③-b）。これは、1970年代から高まる日本青年館の新築運動とも結びついていく。このように、この時期には、もともと①の意味で関係性を示していた「たまり場」が、具体的に施設建設や整備と結びつけられていった。

③-a においては、1970年代以降に理論的に精緻化されていく都市型公民館論における「たまり場」の重視と、若者宿以来（とされる言説に乗った）若者のアジールを公民館に確保していこうとする志向とが結びつけられているのが、平林の論考において確認できる<sup>53)</sup>。③-b に関してみると、小規模な青年会館の建設においては、当事者からも「たまり場＝施設」とする傾向が強かったといえる<sup>54)</sup>。

上記の視点の流れを改めて整理すると、公民館論のトラックは常に①→③-aの視点で

あるといえる。まず、公民館という施設空間があることが前提となるからである。青年団論のトラックの場合、青年会館建設運動や公民館青年室確保の運動等が展開したところでは、①→②→③-b という図式が描けるが、具体的な施設もしくは空間の確保運動が展開しないところでは、①→②という図式で説明できよう。

とはいえ、1980年代以降、国立市公民館と名古屋の事例を除くと、各地の「たまり場」に関する動向はうかがい知られなくなり、青年会館の利用の停滞、公民館青年室の利用の停滞なども顕在化してくる。これは、青年団の衰退と軌を一にしているといえよう。

## （２）「日常」と「ナカマ」への回帰

上述のように、「たまり場」という語は、戦後社会教育において、若者の「日常」のありように着目することから「発見」された。かつて1950年代をピークに展開した共同学習が、主に「イエ・ムラ・ナカマの問題」を課題とし、それを超えたナショナルなレベルでの政治や経済の問題に行き着かないことが批判された<sup>55)</sup>。しかし、高度経済成長を経て、1970年代から若者の直面した課題が、再び「ナカマ」と個人そのもののありように立ち返ってきたとき、「たまり場」が再び青年期教育のキーワードとして浮かび上がってきたとみることができよう。

ただし、1980年代以降、国立市公民館と名古屋の都市青年サークルの事例を除き、社会教育に関わる媒体においても、「たまり場」に関する動向はうかがい知れなくなる。加えて、青年会館や公民館青年室の利用の停滞も顕在化してくる。これは、青年団や勤労青年サークルの衰退と軌を一にしている。さらにこのことには、1970年代からの勤労青（少）年教育から在学青少年教育へという施策上の転換も大きく関わっている。

## （３）「素朴な結合要求」と「たまり場」、そして「青年団＝若者組母胎」論

以上のように、本章では、主に1960年頃に青年団の性格論をめぐる議論において示された「素朴な結合要求」論が、1970年代に「たまり場」論へと展開していく過程を確認した。改めて確認するに、「素朴な結合要求」とは、主に農村にいる青年期にあるメンバー間において自然にわき上がる、気の置けない友人たちと話したい、遊びたい、というような対話や娯楽、さらには密接な関係性の構築を求める要求である。

そしてそれらの言説における認識の根幹あるいは端々に、「青年団＝若者組母胎」論とそこにおいて構築されたイメージがある。本章で取り上げた、山口武秀の示す若者組（若衆組）と青年団との連続性に関する歴史認識も、田澤以来の言説をふまえたものであった。さらに高度経済成長を経た1970年代以降、那須野隆一が整理し示した生活集団論は、「青年団＝若者組母胎」論に示された若者組像、若者宿像をふまえたものであった。それは、そこで示された若者組≡青年団像が、農村青年層における「青年期」を保障する際のロジック（歴史性、通時性）として有効であったがゆえであろう。このとき、青年団論において、若者組から青年団にまで共通して存在する結合原理として、「素朴な結合要求」が位置づけられたといえよう。

さらに、「素朴な結合要求」によって成立した関係性やその具現化して見える場が、「たまり場」として、1950年代の共同学習提唱の際、さらには1970年代以降に青年期教育の枠組みにおいて用いられたのである。いわば「親密圏<sup>56)</sup>」の希求が「素朴な結合要求」

であり、それによって成立した対話的な空間・場が「たまり場」なのであった。

第1部の検討の結果、青年団の結合原理をいわば「素朴な結合要求」に求める論は、戦後、現場に近い立場の論者から支持され、「たまり場」論へと展開していく。これら言説のリアリティ、そして「素朴な結合要求」の内実は、第Ⅱ部における実証研究により検討することとしたい。

- 
- 1) 日本青年団協議会編『日本青年団協議会二十年史』日本青年館、1971、p.306。
  - 2) 同上、pp.305-306。
  - 3) 同上、p.306。
  - 4) 寒河江善秋「青年団の今日的意義―無用論に答えて」、全日本社会教育連合会編・発行『社会教育』13(3)、pp.9-13、1958。翌年、寒河江善秋『青年団論』北辰堂、1959に所収。
  - 5) 同上。
  - 6) 1)前掲、p.389。
  - 7) 山口武秀『山口武秀著作集』三一書房、1993、pp.741-743。1915（大正4）年生まれ、1992（平成4）年没。
  - 8) 同上。
  - 9) これは、学生＝青年という近代の青年像（第1章前掲）そのものともいえる。また、エリクソンによる青年期モラトリウム論と通底する、もしくはそれに先んじた指摘であるといえる。高根は、モラトリウムの享受あるいは保障が、階級（階層）によって制約されることを特に強調する。そうすると、勤労青年層に社会的青年期はなかった、もしくは保障されていなかったのか。そのときに高根は、女子工員らの生活記録運動に注目する。しかし、これも労働組合があるような規模のある労働環境にあつてのものであった。高根は、社会的青年期を「すべての青年に、解放されなければならない（p.48）」とするものの、その具体的な提言にまでは至っていない。
  - 10) 宮坂広作「青年運動の現状と展望」、生活科学調査会編『講座・日本の社会教育第Ⅲ巻青年教育』医歯薬出版、1961、p.374。
  - 11) 1)前掲、p.350。
  - 12) 小川利夫「歴史的イメージとしての公民館」、小川利夫編『現代公民館論（日本の社会教育第9集）』東洋館出版、1965、pp.6-39。
  - 13) p.58、40) 参照。
  - 14) 長（武田）清子「田澤義鋪の人間形成論―青年団教育に追求した国民主義の課題―」、『国際基督教大学学報 I-A 教育研究』No. 10、1963、小川前掲「青年問題の現状と認識」、pp.10-12。小川 12)前掲。
  - 15) 12)前掲。
  - 16) 佐藤信一「農村青年学級と小集団学習」、日本社会教育学会編『小集団学習（日本の社会教育第3集）』国土社、1958、p.92。
  - 17) 同上、p.93。
  - 18) 西山秀尚「青年団の現代的性格―『日本の青年』35 年度版の主体性論批判―」、『月刊社会教育』5(3)、国土社、1961、寒河江善秋「日青協と健青会の間で」、健青運動十五年史編纂委員会編『健青運動十五年史―一人づくりをつみあげて―』日本健青会中央本部、1964、pp.227-229。左派（革新系）の中心的人物は、1956（昭和 31）年度日青協副会長、京都府の西山秀尚であった。田河正雄は、1959（昭和

34) 年度には日青協の府県団中、21 府県団が革新系となっていたことを指摘しており（田河正雄「日青協 その深刻な争いの診断」『月刊社会教育』1960 年 2 月号、p.41）、このことが日本健青会・末次一郎による主体性派支援の背景となっていた（第 2 章第 5 節（4）参照）。

19) 佐藤守『近代日本青年集団史研究』御茶の水書房、1970。

20) 江馬成也「山村社会の変容と若者組織—『鋤柄講契約』の事例を通して—」村落社会研究会編『村落社会研究』第 7 卷、塙書房、1971。

21) 須藤は山形県出身で 1906（明治 39）年生まれ、1982（昭和 57）年没。日本大学卒。当時は山形新聞の非常勤論説委員を務めながら、評論家として活動していた。1951（昭和 26）年には無着成恭編『やまびこ学校』出版に寄与したこともあり、同年には山形県児童文化研究会を結成。以後、生活記録運動の支援者・オーガナイザーとしても活躍した。俳人としての評価も高い。戦後初期より山形県内の青年団の組織化支援に携わり、特に 1949（昭和 24）年に山形県連合青年団が成立する前後からは、寒河江善秋らとの交流を深めた（北河賢三「須藤克三と戦後山形の教育文化運動」『同時代史研究』第 5 号、同時代史学会、2012、佐藤藤三郎「あこのころの社会教育—須藤克三・私の思い—」『月刊社会教育』No. 696、国土社、2013）。1954（昭和 29）年から 1965（昭和 40）年まで日青協主催の青研集会の助言者を務め、青年団運動の啓蒙・啓発書を多く執筆した。『月刊社会教育』（国土社刊）等の社会教育関係雑誌への掲載文章も多数確認される。この時期の須藤は、寒河江ら主体性派の支援的立場にあり、日青協での生活記録運動のブレインとなっていた。このように、一貫して農村青年の立場から青年団のありようを説いていた。

22) 島田武雄は、長野県の出身で、1914（大正 3）年生まれ、1963（昭和 38）年没。京都帝国大学卒。戦前からの教職に加え戦後の教職員組合活動を経て、1951（昭和 26）年からは農山漁村文化協会長野県支部に勤務した。以後、青年団の助言者や新生活運動の講師等を務めるなど、青年団運動や農村文化運動振興に関わる実践家・評論家として活動した（「島田武雄」、成田久四郎編著『社会教育者辞典・増補版』日本図書センター、1989、pp.417-420）。須藤同様、青研集会の助言者を 1954（昭和 29）年から没するまで務めた。

23) 松丸志摩三は、神戸市出身で 1907（明治 40）年生まれ、1973（昭和 48）年没。東京帝国大学卒。朝鮮総督府畜産技師等を経て、戦後は静岡県函南村、次に宮崎県高鍋町に居住し、村づくり運動や自治体農政への助言、新生活運動の推進など、農民教育と農村の実情に即した評論活動を展開した（日外アソシエーツ編『20 世紀日本人名事典』紀伊國屋書店、2004）。青研集会の助言者は、1957（昭和 32）年から 1960（昭和 35）年、1962（昭和 37）年、1963（昭和 38）年と務めている。

24) 「須藤克三」、成田久四郎編著『社会教育者辞典・増補版』日本図書センター、1989、p.493。

25) 小川利夫「書評『村の社会教育』」、教育科学研究会全国連絡協議会編『教育』No. 107、国土社、1959。

26) 島田武雄・須藤克三・松丸志摩三「書評にこたえる—十一月号『村の社会教育』—」、教育科学研究会全国連絡協議会編『教育』国土社、No. 110、1960。

27) 小川 25) 前掲、p.73。

28) 同上、p.67。

29) 同上、p.73。

30) 同上。

31) 同上。

32) 同上、p.78。

33) 同上、p.80。

34) 文部次官通牒「公民館の設置運営について（1946 年 7 月 5 日）の起草者として知られる（当時は社会教育課長）寺中作雄が、同通牒の解説といえる自著『公民館の建設—新しい町村の文化施設』（公民館協会、1946）で示したのが、初期公民館構想として後年評価される、農村型の公民館像である。寺中は、「公民館は全国の各町村に設置せられ、此处に常時に町村民が打ち集って談論し読書し、生活上産業上の指導を受けお互の交友を深める場所である。それは謂はゞ郷土に於ける公民学校、図書館、博物館、公会堂、町村集会所、産業指導所などの機能を兼ねた文化修養の機関である（引用は寺中作雄「公民館の建設」『社会教育法解説／公民館の建設』（現代教育 101 選）、国土社、1995、p.202）」とした。いわば、総合的・複合的な地域振興センターとしてのイメージであった。

35) 大田堯『日本の農村と教育』国土社、1957。

36) 当時の日青協における青研集会の記録である、日本青年団協議会青年団研究所編『日本の青年』（読売新聞社、1955）、同編『日本の青年 昭和 31 年版』（読売新聞社、1956）、日本青年団協議会編『日本の青年 昭和 32 年版』（読売新聞社、1957）、同編『日本の青年 昭和 33 年版』（読売新聞社、1958）、同編『日本の青年 昭和 34 年版』（読売新聞社、1959）、同編『日本の青年 昭和 35 年版』（日本青年館、1960）、同編『日本の青年 昭和 36 年版』（日本青年館、1961）においてこの傾向が確認できる。

37) 引用は社会教育推進全国協議会編『社会教育・生涯学習ハンドブック 第 7 版』エイデル研究所、2005、p.164。

38) 奥田泰弘「農村型公民館から都市型公民館へ、そして…」（小林文人・佐藤一子編著『世界の社会教育施設と公民館』エイデル研究所）、2001、pp.288-289。

39) 例えば、平林正夫「公民館青年室の試み——青年期教育の施設と内容を高める視点——」、『月刊社会教育』20(12)、1976。

40) しかし一方、平林による上述の定義によると、「たまり場」は他者から見ると排他的な性格を持つことも暗喩している。このことは実際に、「たまり場」施設の問題として認識されていくこととなる。

41) 那須野隆一『青年団論』日本青年館、1976、p.124。

42) 同上、pp.122-123。

43) 同上、pp.124-129。

44) 同上、pp.72-73。

45) 日本青年団協議会編・発行『青年論潮』創刊号、1978。

46) いずれにしても、これらの①～④の実践には、力量あるチューターや指導者が必要であったことがわかる。かつて共同学習論の停滞の原因で挙げられた「指導性の欠如」の問題——すわなち、同じ知識量・理解力の若者だけで読書会や議論を繰り返しても「どんぐりの背比べ」状態で議論や実践が展開しないこと——が再び浮上してくることは必然であったといえよう。

47) 長澤成次「地方自治の確立をめざして」（日本青年団協議会編・発行『地域青年運動 50 年史』、2001、pp.612-614。

48) 安斎育郎「第二章 1970 年代の運動」、日本青年団協議会編・発行『地域青年運動 50 年史』、2001、p.98。

49) 掛谷昇治「地域に生き地域を支えつづける青年団活動」、『月刊社会教育』29(7)、国土社、1985、姉崎洋一「暮らしと地域にねざした学びの展開」（日本青年団協議会編・発行『地域青年運動 50 年史』）、2001。

50) 大村恵「青年のたまり場論①」『月刊社会教育』34(9)、国土社、1990、「青年のたまり場論②」『月刊社会教育』34(10)、国土社、1990、宮田和彦「青年のたまり場論③」『月刊社会教育』34(11)、国土社、1990、加藤伸治「青年のたまり場論④」『月刊社会教育』35(2)、国土社、1991 など。

51) 難波功士「戦後ユース・サブカルチャーズについて(1)」『関西学院大学社会学部紀要』96、2004a、

『『若者論』論』『関西学院大学社会学部紀要』97、2004b。

52) 難波前掲 2004a、pp.163-164

53) 平林正夫『『たまり場考』——社会教育における空間論的視点』、長浜功編『現代社会教育の課題と展望』明石書店、1986、pp.127-128。

54) 館史編纂委員会・編纂作業委員会編『財団法人日本青年館七十年史』財団法人日本青年館、1991、pp.1153-1235 所収の論文と報告においてこのことがよく理解される。

55) 藤岡貞彦「昭和 30 年代社会教育学学習理論の展開と帰結（上）」『東京大学教育学部紀要』第 10 巻、1968、p.221。

56) 齋藤純一によると、親密圏は「具体的な他者の生／生命への配慮・関心によって形成・維持される」ものであり（齋藤純一『公共性』岩波書店、2000、p.92）、親密で対話的な関係を指す。狭義には家族を意味していた用法から、特に 1990 年代以降、「公共圏」の対語として親密な関係性を指すものとして意味の拡張がなされてきた（桶川泰「親密性・親密圏をめぐる定義の検討—無定義用語としての親密性・親密圏の可能性—」神戸大学国際文化学部、神戸大学大学院総合人間科学研究科編『鶴山論叢』（11）、鶴山論叢刊行会、2011、pp.23-33。

## 第Ⅱ部 地域青年団の実態及び結合原理に関する実証的研究

### 第4章 近代日本における青年集団の二重構造に関する一考察

#### ——埼玉県旧名栗村における事例を中心に——

第Ⅰ部では、「青年団＝若者組母胎」論の生成と定着の過程を解体した。特に近代における関わる言説提示は、青年団運動指導者と政治家、官僚らからの、いわば「上」からのまなざしに基づくものであった。そうしたときに、同時代の一般の、ノン・エリート、フォロワーとしての青年団員は、どのような日常生活を送り、その中に青年団活動はどのように位置付けられていたのか。

以下、第Ⅱ部では、近代から戦後における地方青年層の日常性に視座を置きつつ、青年団における当事者から見た結合原理を確認していくものとする。本章では、まず近代における青年団の展開過程を事例とし、上記の課題を検討する。

#### 第1節 問題の所在

改めて確認するが、ムラの若者組は、1780年代の寛政改革の頃から繰り返し禁令や解散令が布告されるなどし、明治に至ってもさまざまな統制が加えられてきた。その改良をねらい、1890年代頃から若者組は青年会に改組されていく。さらに青年会は、日露戦争を経て進められる地方改良運動を重要な転換点として、1900年代から1920年代にかけて青年団として改組され、全国組織化とともに国家体制下に取り込まれていく、というプロセスで説明される。序章においても整理したように、従来、このプロセスに関しては、社会教育（史）研究の領域からは特段、違和感が示されることは無かった。そのことには、これまで述べてきたように、『青年団の使命』を端緒とし、『若者制度の研究』、『大日本青年団史』という青年団の「正史」において上記の枠組みが確立され、社会教育史においても基本認識となっていることに起因しよう。

そのときに他分野の業績を俯瞰すると、教育社会学の立場からによる佐藤守の研究は、この問題においての先駆的かつ重要な提起を行っていることが確認できる。佐藤は『近代日本青年集団史研究』（御茶の水書房、1970）において、若者組から青年団に至るプロセスに関して、豊富なモノグラフ研究に基づき、断絶型、並列型、包摂型の3類型、さらには包摂・並列型を合わせれば4類型を提起した。佐藤によると、「断絶型」とは、若者組の完全な消滅のうえに青年団が組織されるものであり、「並列型」は、若者組と青年団の機能上の相違が村落段階での両者の統合を不可能にしているもの、「包摂型」は、村落段階で若者組が青年団組織を包摂する、あるいはその逆が成り立っているものである（pp.14-15）。そして「包摂・並列型」とは、形態としては「包摂型」に近いが、機能は「並列型」に即するものである（pp.190-191）。結果、佐藤は、断絶型（西南地方）→包摂型（東海地方）→包摂・並列型、並列型（東北地方、北陸地方）の順で若者組が解体したとした。いわゆる組型の村落構造を持つ西日本でその解体が早く、同族型の東日本において解体が遅れたとする。とはいえ、西南地方においてもムラごとに支部が置かれたことは、結果として村落生活と直結した若者組と同様の機能を持つものとする。このように、官製青年団の組織化は、ムラ（集落）を基盤とする若者組、あるいはそれと同様の機能を



持つ支部を、そのまま行政村レベルで連合していくといった事例が一般的であったとする（pp.531-538）。さらに佐藤は、戦後においても、ムラの青年会が市町村青年団の分団として位置づけられながら、従来の若者組的機能、特に祭礼の運営に関わるものが継続されていたことを指摘する（p.538）。

この佐藤の類型化に関しては、事例の豊富さからもこれを凌駕するものはなく、従来、高い評価を受けている。しかし、これらの見解には鵜呑みにできない部分がある。まずは素朴な疑問ともなるが、前述のように寛政の改革以後よりたびたび逸脱的存在としての若者組の取締や禁令が出されていた、関東甲信地方における事例<sup>1)</sup>が取り上げられていないことである。次にやや安易に東西の村落構造論（東日本＝同族型、西日本＝組型）を以て、前掲のプロセスに関する解釈を行っていることである。これは既に民俗学の立場から、福田アジオと中野泰が指摘することである<sup>2)</sup>。

さらに佐藤の見解は、詳細なモノグラフから、ムラの文脈の中で若者組から青年団までの移行過程を示したものであるが、構造－機能主義的であるがゆえに、社会経済的要因を以ての説明に終始する。すなわち、青年集団の構造と機能の変容を追うことに専心し、そこにある当事者の視点や意識感覚にほとんど関心が向けられていない。そこで若者／青年がいかなる日常生活を送り、若者組や青年会、青年団をどのようにとらえていたかがうかがわれないのである。もちろん、資料的な限界はあろうが、そのことを問うことで、集落の若者組と学区単位に組織された青年会や青年団の併存、あるいは二重構造といえる状況が、生活者の論理でより具体的に意味づけられるはずである。

また、序章で整理したように、他領域の研究において、伝統的青年集団が青年団に移行していく単系的なプロセスは、実証研究から総じて否定されていると言ってよい。さらに、1980年代からの近代史研究におけるモノグラフ研究の蓄積においては、既にこれらの二重構造の状況にも言及されており、共通理解となっているといえる（序章第2節参照）。しかし、そこでも資料的限界からか、当事者たる青年層の日常性や日常意識にねざした検討が不足している。より具体的に言えば、近代あるいは現代に至っても、若者組（的機能を継承した青年集団）になぜ若者が結集したかという結合原理の説明が不十分である。

本章では、埼玉県旧名栗村（旧入間郡名栗村＝2005（平成17）年1月に飯能市と合併）での「甲南智徳会」と称する青年会組織と「若者<sup>3)</sup>」との併存状況を事例とし、上記の批判をふまえつつ、まずはその状況の展開過程と要因を考察する。

なお、甲南智徳会は、1910（明治43）年に優良青年団として表彰された組織である。その事績は、玉利庄次郎編『模範青年団』（修学堂書店、1910、pp.88-107）と石田伝吉『優良青年団の事績』（白水社、1918、pp.70-80）に挙げられているなど、1909（明治42）年から明確にその推進が図られた地方改良運動、1910年代から全国的に進められる青年団組織化に際してのモデルの一つとなっていた。しかし、ここにおいても青年団と若者組の併存・二重構造が存在したのである。

それゆえ、本章では改めて「若者」の実態に焦点を当てつつ、その二重構造が存在する意味を、この地域の文脈と当事者の日常生活に位置づけて考えてみたい。方法としては、旧名栗村に現存する近代文書を主に利用することとする。

## 第2節 調査地概観

### (1) 旧名栗村の地理的・歴史的概観<sup>4)</sup>

旧名栗村は、埼玉県西南部の荒川支流、入間川源流域に位置し、村域の94%を林野が占める。村内の中央を流れる名栗川（入間川）流域のわずかな平地に居住域と耕作地が展開している。近世に上名栗村・下名栗村が成立しており、1889（明治22）年の町村制施行以降、両地域を合わせ名栗村が成立した。当初は秩父郡に属したが、1921（大正10）年より入間郡に群域が変更された。上述の地勢ゆえ、近世以来、建築用材（西川材）の生産地として知られた。近代は用材に加え、木炭の生産地として首都圏への燃料供給地となり、戦後まで一定の繁栄を見せた。しかし、1950年代以降の燃料革命による木炭生産の衰退、1970年代以降顕著となる木材の長期不況により、1960年代以降、人口減少が続いている。1955（昭和30）年には3,355人の人口があった<sup>5)</sup>が、合併後の2006（平成18）年9月1日現在における旧名栗村域の人口は約2,507人にまで減少した<sup>6)</sup>。

### (2) 生業と村落組織

近世以来、江戸への建築用材（西川材）の一大供給地として栄え、多くの山林地主の勃興をみたが、農業は焼畑と常畑で自給用の麦・芋・雑穀等が生産される程度の零細なものであった。そのため、農民の多くは、造林から伐採、製材、筏を組んでの輸送等に関わり生計を立てた<sup>7)</sup>。また、賃労働の展開に伴って、早くから貨幣経済が進展した。江戸中期以降、農業と兼業で居酒屋・煮売屋等が多く開業されたが、それが「若い衆勘定」（後述）の遠因とも指摘されている<sup>8)</sup>。

近代以降も農業は従前の零細な経営が続いたが、近代初期の工業勃興による需要増から、名栗村内でも養蚕と木炭生産が増加した。さらに1900年代からは、後述する青年会組織である、甲南智徳会（後述）の主導によって養蚕・製炭・共同造林が活性化し、人口も増加した。

1889（明治22）年、名栗村と下名栗村が合併し行政村としての名栗村が成立した。伴って旧上名栗村、旧下名栗村とも大字となった。しかし以後も二つの大字は財産区（上名栗区、下名栗区）を作り、両区は広大な区有林（部落林野）を基本財産として運営されていた。ゆえに当初は、村会と区会（上名栗区、下名栗区）とが並立し、双方とも議員が選挙で選出されていた。学校維持等の教育予算は、財産区の負担分の方が多かった。その後、1936（昭和11）年、両財産区は、小学校建設等による財政危機が深刻化する中で廃止され、区有財産の半分は村有財産として統一された。こうしてようやく、名栗村が安定的な財政基盤を確立したのであった<sup>9)</sup>。

近世において、上名栗村には20余組、下名栗村には7、8組の村組が存在したようである<sup>10)</sup>。しかし必ずしも近接地で組が構成されているわけではなく、元来は同族団であったことが推測される。1870（明治3）年には、村組が地縁集団として再編された。さらに、1889年に名栗村制が施行された際、15の区に再編された。この区はそのまま1940（昭和15）年には、部落会として位置づけられた。戦後、この区を受け継ぐ行政区（戦後、第10区と第15区は人口減により機能しなくなり、現在は13行政区に再編）が、そのまま現在まで存在している。

なお、近世の上名栗村では、1724（享保9）年に大規模な村方騒動があった。それによ

って世襲名主町田家を中心とする「古組」と、対抗した新興層による「新組」が成立し村組が二分された。年貢割付と徴集も別個に行われるようになった。この状況は、1870年の両組統一まで続いた<sup>11)</sup>。以後も古組と新組の対立は、しばらく表出した。特に1910年代から1920年代にかけて継続した学校争論が有名である。最終的には、もともと古組の領域にあった上名栗第一尋常小学校を、古組・新組各々の旧領分に別個に建設し（古組は建替、新組は新規建設）するにまで至り、流血をも伴う騒動となった<sup>12)</sup>。

本稿で主に焦点化していく1900年代から1920年代にかけては、以上の経緯から行政村としての名栗村の財政は、租税徴収と交付金に主に頼る形態で甚だ脆弱であった。それゆえ、教育予算は、上名栗区と下名栗区の両財産区に支えられていた。同時期の村内の組織構造は、「行政村―財産区―区―組（五人組の流れを引く、後に1940年より「隣組」、戦後に「隣保班」となる<sup>13)</sup>）」という形態になっていた。またインフォーマルではあるが、財産区である上名栗区には、「新組／古組」の区分が続いていた。この中で主に日常的な生活圏として機能していたのは、区やその下にある組であった。そして次第に、3学区それぞれのまとまりが定着していったのである。

### 第3節 名栗の「若者」とその矯風

#### （1）名栗の「若者」

現在のところ、近世の「若者（中）」に直接関わる古文書として、1847（弘化4）年正月十七日の日付がある「若者議定書」のみが確認されている<sup>14)</sup>。ここでは、数え17歳から45歳までという「若者」の年齢の規定があり、名栗における「若者」が青壮年であったことがうかがわれる。1960（昭和35）年に刊行された『名栗村史』（名栗村史編纂委員会編、名栗村教育委員会）には、古老への聞き取りにもとづく「若い衆」<sup>15)</sup>に関する記述がある。ここでも「若い衆に入るのは一七才位からで、四〇才前後までこれに属」するとされ（p.310）、上記の記述が裏付けられる。

名栗の「若者」を特徴づけるのが、「若い衆勘定」や「若者勘定」といわれる慣行や驕奢な芝居興行である。前掲『名栗村史』には、「若い衆勘定」といって、「若者」が遊び日（農休日）に料理屋、酒屋等で宴を催し、その飲食代はツケ払いとして盆暮れに決済する習慣があったこと、「若い衆」が芝居の興行等を積極的に行っていたとする記述がある（p.310-313）。

近代になっても、各区あるいは2区ごとに「若者」が存在し、神社の祭礼を担っていることが文書類から確認される<sup>16)</sup>。しかし、15の行政区は、前述のように、名栗村制施行以降に区割りされたことが推測されており、近世にあった村組の系譜をそのまま引くわけではない<sup>17)</sup>。ゆえに村内に複数ある神社・祠堂の氏子組織も、元来、各区あるいは2区ごとに分かれていたとは考えにくい。むしろ行政区の画定後、各区に拠るべき（産土として）神社・祠堂が画定され、区の住民がそのままそれらの氏子組織としても組織されていた経緯が自然と思われる<sup>18)</sup>。関わる文書類に、各区の「若者」の公印が押されていることも確認される。そのため、実はこれら「若者」が、町村制施行後の産物であり、近世からの連続性が必ずしもない可能性もある。いずれにしろ、「若者」は、祭礼運営やその他集落の実務的労働力として、あるいは日常的な社交娯楽の場として機能していたことが後述の事例からもうかがわれる。

### （３）「交詢会」「同窓会」の設立

1889（明治 22）年の町村制施行後、名栗村にも青年会組織が教員主導のもとに組織される。同年 3 月、「青年風儀の矯正学力の温補を策し談話会討論会等を開き後<sup>19)</sup>」、共盛会と称した組織が結成された<sup>20)</sup>。1890（明治 23）年、大字下名栗に「交詢会」が、1892（明治 25）年、大字上名栗に「同窓会」が設立された<sup>21)</sup>。なお、共盛会は、「（筆者注：明治）二十三年七月交詢会と改め<sup>22)</sup>」とあるため、下名栗に結成されたものと見てよいであろう。これらを、「交詢会規則（明治廿三年七月創立）」「同窓会規則（明治廿五年十二月創立）」「交詢会同窓連合会規約（明治三十年一月議定）」<sup>23)</sup>を以て概観してみたい（以下の引用は上記資料による）。

交詢会設立の趣旨は、規則第 1 条に「本会ハ同窓ニ於テ研磨シタル學術品行ヲ維持シ併セテ益々親睦ヲ厚フスルヲ以テ目的トス」とある。第 4 条によると、その会員は「大字下名栗小学校ニ於テ教育ヲ受ケタルモノ」である。第 5 条には「地方ノ名望家ヲ推戴シテ客員トシ本会ノ監督ヲ委ス」こと、第 9 条には「会員タルモノハ品行ヲ端正ニシ業務ノ余暇ト雖モ學業ヲ励ムベシ」とあり、不品行の者は除籍処分となる旨が規定されている。その他、会則によると、定例会が 1 月、4 月、8 月の 3 回開催されること（第 12 条）、定例会において、会務報告、談話・討論・演説等を行うこととなっている。このように交詢会は、「地方名望家」の監督のもと、小学校卒業後に在村する若者の学力温習や矯風を目的として組織されていたことがわかる。

次に、交詢会に遅れ発足した同窓会の設立趣旨は、会則第 1 条に上名栗における小学校卒業生の「同窓ニ於テ研磨シタル學術品行ヲ維持シ併セテ交誼ヲ厚フシ教育ノ旺盛ヲ謀ルヲ以テ目的トス」とある。前段は交詢会設立の趣旨とほぼ同文であるが、後段には「教育ノ旺盛ヲ謀ル」ことが付加されている。このことに関わって注視すると、会則第 12 条において、定例会の活動内容に交詢会と同様、談話・討論・演説があることに加え、「教育法令ノ研究」「教育雑誌ノ購読」が挙げられている。さらに、会規則第 4 条において、小学校卒業者＝正会員、小学校教員＝名誉会員、特別賛成員（賛助会員）の 3 種の会員を設定している。小学校教員を名誉会員とすることについては、同条に「本会ノ監督ヲ委ス」ためとされている。これらのことから同窓会は、小学校教員の主導のもと、小学校卒業生への「教育」を行うことがより明確に意識されていた組織といえる。

なお、両会とも、規則には定例会のみが規定されているが、1907（明治 40）年に刊行された「甲南智徳会会報」<sup>24)</sup>中、「本会の経歴並に事業」には、両会が「平素は青年書類新聞雑誌等の購読をなし或は夜学会を開設し専ら智徳の錬磨に努めたり」とある。このことは、1891（明治 24）年から翌年に渡る下名栗在住の小沢角太郎<sup>25)</sup>の日記において、交詢会の臨時会や夜学会が頻繁に小学校で実施されている様子がうかがわれる<sup>26)</sup>ことから、相応の実態を伴ったものであろう。

このように、名栗村制施行以後に組織された交詢会と同窓会は、地域名望家や小学校教員の主導のもと、小学校卒業後の在村青年に対しての修養、矯風・学力温習等の目的を持って設立された組織であったことが推定される。

### （４）甲南智徳会の成立

1897（明治 30）年 1 月、まずは一度、交詢同窓連合会が設立された後、同年 11 月には

両会が改組統合され、「甲南智徳会」が設立された。同会は、1904（明治 37）年からは第 1 部会（下名栗尋常小学校区＝1～6 区）、第 2 部会（上名栗第一尋常小学校区＝7～11 区）、第 3 部会（上名栗第二尋常小学校区＝12～15 区）の 3 つの部会に分けられ、実質、部会ごとに活動を行っていた。前掲の「甲南智徳会会則」によると、会の目的は、第 1 条に「教育勅語ノ趣旨ヲ遵法シテ智徳ヲ錬磨シ交誼ヲ厚フシ社会ノ改善ヲ謀ルヲ以テ目的トス」とあり、設立の目的が交詢会・同窓会と同様で、小学校卒業後の在村青年層の学力温習と矯風にあったことがうかがわれる。

小学校区内において組織されていること、名誉会員として「本村内小学校職員」が規定されていることは、前身の交詢会・同窓会から継続して、小学校教員の主導的役割が強かったことをうかがわせる。主に冬期に実施された夜学会・壮丁講習等も、小学校教員が講師となっていた<sup>27)</sup>。また、会長を長く名栗村立高等小学校校長の町田角太郎が務めていたことも確認される<sup>28)</sup>。

会規則第 7 条によると、正会員は満 17 歳以上 40 歳までとされていた。さらに、正会員で 40 歳以上の者は、特別会員として在籍できた。この正会員と特別会員の年齢設定は、前述した近世以来の「若者」の年齢とほぼ合致する。さらに各区の幹事が設定されていることが確認されることなどからも、甲南智徳会は、従来、各区にある「若者」を小学校区で包含しようとした組織としてみることができよう。

この交詢会・同窓会設立から甲南智徳会設立までの動きは、一貫して在地の「若者」の改良を目的とした、矯風の動きであったといえよう。しかし、その時期も「若者」は存在していたのである。

#### （５）在村青年における「若者」と「甲南智徳会」の位置

成立期の「甲南智徳会」と「若者」との関係性を浮き上がらせる資料として、下名栗在住の豊住正平の日記<sup>29)</sup>が現存している。豊住は 1882（明治 15）年に生まれ、1961（昭和 36）年に没した。豊住家は下名栗の旧家の一つである。近世には村役人を務め、近代以降も各当主は区会議員（村会議員に相当）等を歴任している。豊住自身も後年、下名栗区会議員などを務めた。

豊住は、1897（明治 30）年に名栗高等小学校を経て埼玉県立第一尋常中学校に入学し、一時、名栗を離れた<sup>30)</sup>。その後、1899（明治 32）年 11 月には、帰村して家業に従事していたようである。1899（明治 32）年 11 月 1 日～1900（明治 33）年 6 月 17 日、11 月 1 日～11 月 8 日、1901（明治 34）年 1 月 1 日～10 日、2 月 11 日～15 日の間、すなわち彼が満 17 歳から 19 歳に至る期間の日記が残されている。

日記からたどる彼の日常生活は、以下のようなものである【表 4-3-1 参照】。日中は炭焼、炭負い（炭運び）、畑の耕作、養蚕等に従事した。休日は、悪天候のときと祭日等、不定期であった。特に 5 月から 6 月にかけては、桑畑の管理等も含め養蚕にかかりつきとなり、休みが極端に減る。なお、豊住は、就寝前の読書を習慣としていた。そのことに加え、測量の専門書を取り寄せて自学していること、1900 年 11 月 2 日から 6 日まで、自宅や友人宅で「夜学会」を実施するなど、その知識・教養への関心がうかがわれる。

しかし、この頃に成立していた甲南智徳会に関しては、日記から 1899 年、1900 年後半の記述が欠落していることを差し引いても、1899 年 11 月初めの遠足（行軍）と 1901 年

【表4-3-1】豊住正平の日常生活（1899(明治32)年12月15日～1890(明治33)年1月18日）

年月日	家事・労働	学習等	遊興
M32.12.15	終日、炭焼。	就寝前に読書。	
M32.12.16	終日、炭焼。	夕食後、読書。	
M32.12.17	終日、炭焼。		
M32.12.18	朝、炭負い。	「終日学問ヲナシタリ」	
M32.12.19		「終日勉強ヲナセリ」	夕食後、加藤家に行き、一泊する。
M32.12.20	朝帰宅。終日、炭焼。	就寝前に読書。	
M32.12.21	終日、炭焼。	就寝前に読書。	
M32.12.22	夕方から草鞋作り	不明 「□国ヲ読ミ」	夜6時から加藤家に本を持参。一泊する。
M32.12.23	朝帰宅。終日炭焼。	就寝前に読書。	
M32.12.24	終日、炭焼。		
M32.12.25	終日、炭焼。	就寝前に読書。	
M32.12.26	朝から石倉に薬を取りに行く。昼前に帰宅。雄松と榊を切る。その後炭負い。6時から臼挽き。		
M32.12.27	朝から昼まで炭焼。午後藤を切り、夕方帰宅して臼挽き。	就寝前に読書。	
M32.12.28	終日、炭焼。		
M32.12.29	終日、炭焼。	手紙を書き、就寝前に読書。	
M32.12.30	朝、理髪店に行く。その後、終日炭焼。	夜に読書。	
M32.12.31	朝、浅海戸(加藤家)に行き、朝食を食べる。その後、炭焼。		夕食後、遊びに出て、10時に帰宅。その後、10時40分に出発して初詣に行く。
M33.1.1			高水山に参詣して早朝2時半に戻る(青梅市成木の高水山常福寺。裸参りに行くことがあったという)。その後、9時に家を出て、加藤・町田・小沢・神能・竹内等へ年始。祝賀式に参列し、一時帰宅。夕食後、上林へ遊びに行き、11時45分就寝。
M33.1.2	朝、柿加井羅で枝打ちか。		11時から岡部・塩野・有馬・鈴木・塩野等へ年始。12時に帰宅し、加藤宅へ遊びに行く。2時から上名栗へ遊歩し、白木屋で酒盛をする。夜12時に帰って就寝。
M33.1.3			昼に起床。午後3時より白木屋へ遊びに行き、5時帰宅。
M33.1.4	朝、炭負い。午後の作業不詳。		
M33.1.5			朝9時に出発。中西・戸羽等へ年始。11時半、名倉(伊倉か)に着いて年賀。2時半に出て、2時55分に白岩へ着いて年始。5時に帰宅。夜8時に塩野文平氏宅に行き、加藤福太郎氏と同道して馬通(?)へ福引きに行く。町田七之丞氏と浅岡屋で汁粉を飲む。11時半に帰宅。
M33.1.6	柿加井羅へ炭窯の掘り出しへ。		
M33.1.7	降雪で農休か。	帰宅後と就寝前に読書。	不明 □造君と同道し浅海通へ行って昼飯を食べる。2時に帰宅。
M33.1.8	積雪で農休か。	「終日勉強シタリ」	
M33.1.9	積雪で農休か。	終日読書。	
M33.1.10	降雪で農休。終日、草鞋作り。		
M33.1.11	朝に雪はらい。午前中草鞋作り。昆布洗いをして、午後草鞋作り。	就寝前に読書。	
M33.1.12	午前中、草鞋作り。後に蘭玉の木(小正月の飾り)を切りに行く。		
M33.1.13	早朝3時に起床して午前は餅つき。木の皮も剥く。午後、種々の用を済ませる。		午後、加藤氏のもとへ雑誌『少国民』を回送に行く。夜7時に帰宅。
M33.1.14	朝から蘭玉を作り、飾りを作る。飾りを朝海戸に届け、榊をきって神に供える。掃除をして夕方5時半から酒灯を供える。	夕方に読書。	夜の6時50分から浅海戸へ行き、10時、鍛冶屋橋薬師如来へ参詣し、浅岡屋で汁粉を飲む。市場(地名)等へ遊びに行き、深夜2時に帰る。
M33.1.15			7時に起床後、白木屋へ行く。午後2時頃、伊一・安五郎・文平氏来る。花加留多をする。5時に帰宅して夕食後、頭痛で就寝。
M33.1.16	起床後、理髪店に行く。		13時半から金子組太郎氏宅で5・6区の若者勘定を行う。深夜12時半頃に出て、白木屋へ行く。深夜1時15分に帰宅。
M33.1.17			加藤安太郎氏と1時に出立、三ツ角屋へ遊びに行き、夜の9時半に帰宅。
M33.1.18	炭窯塗りを行う		

(出典:「日記」(明治32年11月1日) 豊住三芳家文書)

正月の定例会に関するものだけしか確認できない。このことは前述のように、植林・造林等に積極的に関わる 1900 年代以前の智徳会の活動が、日常的、あるいは活発なものではなかったことを示唆するものである。

一方として日記からは、以下のような休日と夜間の過ごし方が見て取れる。1899 年 1 月 16 日に 5・6 区の「若者勘定<sup>31)</sup>」が開催され、午後 1 時半から深夜 12 時半頃まで個人宅で続けられていた旨の記載がある。また、「オシラ講<sup>32)</sup>」等の行事に参加して、深夜帰宅することもあった。これらは、いわゆるハレの日に相当することである。しかしそれ以外にもかなりの頻度で料理屋や酒屋に行って飲食をしていたこと、日常的に夕食後、近隣の友人宅を訪れ「遊話」し、深夜帰宅していたことがわかる。

いわば在村エリート青年といってもよい豊住の日常生活を垣間見ても、「若者」として遊興の場に加わり、また同年輩の仲間たちと遊話することと、小学校教員が主導する甲南智徳会の活動、いずれが当人にとってなじみやすく日常的であったかは自明であろう。

#### 第 4 節 甲南智徳会の「公益事業団体」化と「若者」

##### (1) 甲南智徳会の「公益事業団体」化

甲南智徳会の事業として、「甲南智徳会会則」第 4 条に 21 項目が挙げられている（【表 4-4-1】）。1907（明治 40）年当時の会の事業として、①～③は補習的役割・④・⑤は風紀維持、⑥～⑨は情報・教養普及、⑩～⑮は勸業、⑯・⑰は資金・共有財産、⑱は体育奨励、⑲・⑳は兵役、㉑は女子教育に関わる内容となっている。このように活動内容は多岐にわたっているが、「第二部会記録<sup>33)</sup>」からも、一部は単発的であるにせよ、そのほとんどが実施されていることが確認される<sup>34)</sup>。その活動の大半は、同時期の埼玉県内における青年団体ではまま見られるものであったが、甲南智徳会は、養蚕、木炭生産、木材資源を維持するための植林・造林等を中心とした、勸業に力点を置いていたことが特徴的である<sup>35)</sup>。

1904（明治 37）年に始まり、1905（明治 38）年に終わった日露戦争以後、1890 年代から 1920 年代にかけての資本主義経済の進展に伴う養蚕業の発展、燃料需要の増大に伴う木炭生産の増加、建築用材の木材需要が高まった。これらを背景とし、甲南智徳会は、従前の矯風・学力温習を目的とすることから、青年補習教育と勸業、貯蓄や公共事業に総合的に関わる「公益事業団体<sup>36)</sup>」としての性格を強め、地方改良運動以降に期待された青年団組織としての基盤を確立させていったことがうかがわれる。とりわけ、1936（昭和 11）年の上名栗区と下名栗区の区有財産統一まで、村有財産の基盤を確立させていなかった名栗村では、行政補完の意味において甲南智徳会の公益事業が大きな意味を有していたといえる。

1906（明治 39）年には、活版印刷による「甲南智徳会会報」が発行されている。そして第一部会では 1910（明治 43）年に 3 回、第二・三部会では 2 回、会報が謄写版の冊子として発行されている。さらに、同年 8 月 10 日に発生した大水害における救助・復興作業において多大な貢献をするなど、この時期の甲南智徳会は、非常に活性化していたことがうかがわれる。なお、「甲南智徳会会報」の大部分は、1905 年 11 月に開催された「甲南智徳会主催重要農産物品評会」に關しての記録となっている。このため、「会報」は、品評会の開催を記念して刊行されたと思われる。文化祭の様相も呈していた同品評会は、実に 4 日間で 1,425 人もの見学者があったと「会報」に記録されている（p.23）など、盛

【表4-4-1】 甲南智徳会の事業

番号	事業内容
①	補習的学術研究会の開設
②	学術講話会の開催
③	夜学会の開設
④	青年風儀の改善
⑤	模範青年の表彰
⑥	展覧会、品評会、幻灯会等の開催
⑦	新聞・雑誌の購読
⑧	通俗図書館の設置
⑨	新聞掲示場の設置
⑩	農林業短期講習会の開設
⑪	植林事業の経営
⑫	農事改良の推進
⑬	試作場の設置
⑭	農作物種子の共同購入
⑮	害虫駆除、益虫保護
⑯	共同貯金
⑰	基本金の蓄積
⑱	体育の奨励
⑲	兵士の送迎
⑳	働き手が兵役服務している家族の補助
㉑	女子教育の奨励

出典) 甲南智徳会規則第4条より筆者作成



会に終わった。しかし、以後は智徳会全体で開催されたかは不明である。一方、「第二部会記録」によると、第二部会独自で、1911（明治 44）年から 1917（大正 6）年まで品評会が開催されていたことがわかる。

甲南智徳会は、1909（明治 42）年には埼玉県庁より、「経営機宜ニ適シ教育上裨益尠カラザル」を以て 5 円の報奨金を得た。さらに翌年には、文部省から「補習教育施設其ノ宜シキヲ得、成績見ルベキモノアル」を以て 30 円の報奨金を得るなど、その活動は対外的にも評価されるものとなった<sup>37)</sup>。日露戦争記念から始まった植林・造林事業に加え、第二部会では、1909 年から巡回文庫事業、蔬菜栽培試験場設置なども行っている<sup>38)</sup>。このような事業が総合的に評価され、報奨金授与へと至ったのである。

以上見たように、この時期の甲南智徳会の活性化は、収入増に直結する勸業、実利的な事業と関わる学習が展開したことにより、より主体的・日常的に青年層が甲南智徳会の活動に関わったことによるものと推測される。

## （２）「第四区青年団規約」の意味

しかし、一方としてこの時期も、従前の「若者」が存在していたことがうかがわれる。

1909（明治 42）年における、「第四区青年団規約」<sup>39)</sup>が存在する。その第 1 条には、「本団ハ戊申詔書ノ御旨趣に基キ謹慎ヲ主トシ正業ニ勉励シ交誼ヲ厚クシ互ニ智識ノ發達ヲ謀ルヲ以テ目的トス」とある。このことから第四区青年団が、1908（明治 41）年の戊申詔書煥發後、「若者」の風儀矯正を目的として新たに組織されたものと推察される。

「第四区青年団」は、規約第二条によると、第 4 区の 17 歳～35 歳以下の全ての者（雇人、一時居留者も含む）を包含する組織として規定されている。その目的が「若者」の風儀矯正にあったことは、以下の条により明らかである。（適宜句点を補った）

第八条 本団員ハ業務ノ余暇及ビ遊ビ日縁日等ニハ読書ヲナシ知識ヲ鍊磨スルコト但シ徒ラニ遊歩スベカラズ身体ノ健康ヲ謀リ心胆ヲ練ルタメ武術ヲ研究スルハ大ニ可ナリ。

第九条 本団員タルモノハ決シテ左ノ各項ノ行為ヲナサザルコト。但シ本条ニ触ルハルモノアルキトキハ相互ニ忠告シ謹慎セシムルコト。若シ其状ナキトキハ總會ヲ開キ決議ノ上除名ス。

一、日々正業ニ従事シテ怠惰ニ流レザルコト。

二、猥<sup>みだ</sup>リニ他人ト口論且ツ粗暴ノ行為ヲナサザルコト。

三、料理店飲食店等ニ登リ徒費セザルコト。

四、区内ハ勿論其他区外ノ家へ諸芸人宿泊セシ場合ニハ酒肴其他飲食物ヲ携帯シ飲食且宴会等ハ決シテナサザルコト。

五、本団員中ニ於テハ自今諸芸人ヲ宿泊セシメザルコト。

但シ本団員協議ノ上ハ此ノ限りニアラズ。

六、刑事上ニ触ルルガ如キ行為ハ断ジテナサザルコト。本条第一項ヨリ第五項ノ外第六条ノ所為ヲナスヤノ風説且ハ実行セシモノアルトキハ一旦忠告シ尚聞レザルトキハ容赦ナク警察官吏ニ申告スルコト。

第八条においては、「遊び日」（農休日）、さらには「縁日」（社寺祭礼）というハレの日でさえも読書を奨励し、「遊歩」を禁じている。ここから「遊び日」「縁日」等の休日における若者の遊興の度合いが、村内識者、指導層からみて甚だ目に余るものであったことが推測される。さらに第九条の各項は、当時の「若者」の行状の一端が現れているとみてよい。特に「三、料理店飲食店等二登り徒費セザルコト」からは前述の「若い衆勘定」に代表されるように、かなりの頻度で若者たちが飲食店に通っていることがうかがわれる。四、五項は、「若者」が、芸人・遊芸人らを招いて盛んに諸芸の興行を行っていたことの統制を狙ったものであろう。

この4区における青年団組織化の動きは、甲南智徳会の活動が展開し、外部からの評価が高まる中でも、「若者」の行状が「おとな」たちを煩わせていたことをうかがわせるものである。第二部会の活動記録<sup>40)</sup>からも、部会では各区からの役員選出は行うものの、各区の活動は記録されていない。そのため、甲南智徳会は、あくまでも小学校区全体での活動を前提としていることが推測される。ゆえに「若者」が、甲南智徳会とは別個の自律性を以て存在していたことがうかがわれる。

### （3）同時期における名栗村内の「若者」

では同時期、名栗村内他地区の「若者」の実態はどのようなものであったのか。本章第3節に前述したように、祭礼時にその存在が明らかなものとなる。

村内には1890年代からの祭礼案内の記録や案内状が残る<sup>41)</sup>。上掲「第四区青年団規約」が制定された1900年代においては、1907（明治40）年10月13日、14日両日に下名栗第1区・2区若者によって催される、下名栗1区虚空蔵尊・第2区八坂神社の祭礼の案内状がある<sup>42)</sup>。同状には、両日とも川原で演劇興行が挙行される旨が記載されている。次に1913（大正2）年9月28日に、第9区若者が、同地区の水天宮と山神神社祭礼において「旧派演劇」を上演する旨が記載された案内状がある<sup>43)</sup>。また、1915（大正4）年10月11日、12日に第3・4区若者が、大神宮祭礼において歌舞伎興行をする旨が記載された案内状もある<sup>44)</sup>。

これら祭礼での演劇上演は、おおよそ東京から歌舞伎一座を招聘するものであったようだが、「若者」がどれだけの準備をしていたかがうかがわれる資料がある。1916（大正5）年10月12日、13日の両日、第五・六区若者が、同地の金比羅神社と熊野神社祭礼の余興として東京から歌舞伎一座の守田座を招聘した<sup>45)</sup>が、このときの会議録<sup>46)</sup>である。最初の会合は同年の9月15日であり、そのときには1人1円ずつを原資として提供すること、原則1戸当たり5回人夫として出役すること等が定められている。出役は帳簿によって、厳格に管理されていた。出資金額は総額500円にも上った<sup>47)</sup>。以後、ほぼ毎日会合が開かれ、会場準備や当日の炊事・風呂焚き等も含め、綿密に係分担がなされていく。9月24日の協議では、「廻舞台手直しの件」とある。芝居興行のために廻り舞台が常備されてきたことが推測される。これらからも祭礼時の芝居興行が、恒例となっていたことがわかる。こうして実に1ヶ月ほど、祭礼と余興の準備で若者が会合を繰り返し、準備に熟を上げていた。

なお、同祭礼時の「薪炭売上帳」<sup>48)</sup>には「下名栗五六区若者」の印が押されているが、先に述べた出役確認の帳簿には「名栗村五六区青年団」の記名が、祭礼案内状には「名栗

村大字下名栗第五六区青年中」が差出人となっている。この時期が、名栗においても、「若者」から「青年」への語の移行期であったことがうかがわれる。あるいは5・6区の「若者」においても、4区同様に戊申詔書煥発期に風儀矯正をねらう動きがあったことも推測される。前掲「第四区青年団規則」では、縁日にも読書を奨励し、遊話を禁止するなどしているが、この5・6区の芝居興行の準備を見ても、それは甚だ実態に即しない条項であったことがうかがわれる。

序章でも取り上げたが、大江志乃夫は、『国民教育と軍隊』（新日本出版社、1974）において、1908（明治41）年の戊申詔書煥発後、強い教化志向のもとに組織化された「戊申青年会」について、茨城県旧勝田市内の事例から「行政向け＝よそむけの戊申青年会と、旧来の自律的な青年組織である若衆連、俗にいう『お祭青年団』との使い分けによる二重組織」が存在し続けたことを指摘している（pp.349-351）。ここでの二重構造は、ムラと行政あるいは国家双方の要求に応えるため、あるいは官製のお仕着せの組織に対する若者たち自身の抜け道として、若者組が温存されたためだとする（p.351）。本章で取り上げた「第四区青年団規則」もまさに戊申詔書煥発後の動きであり、同様の性格を持ち得ていたと考えられる。

大江の挙げた事例地に近い茨城県大子町の事例でも、1900年代における県からの村是策定指導と1908年の戊申詔書煥発が相まって、大字（小学校区）ごとに教員主導のもと、「上から」青年会が結成されていったことが詳述されている<sup>49)</sup>。福島県旧保原町（現：伊達市保原町）の事例では、戊申詔書煥発後に県からの結団奨励によって、教育勅語と戊申詔書の聖旨を奉戴した活動が謳われる、町村単位での青年会が結成されている。そこでは大字単位の若者組がその分団として組み込まれていくが、その頃、某村の校長が従来の若者組を「野蛮」と批判したところ、若者に謝罪させられたというエピソードが紹介されている<sup>50)</sup>。これも「上から」の一方的な青年会組織化があったことがうかがわれる。

以上の例からも、「第四区青年団規則」もやはり戊申詔書に応じた「建前」であったか、厳格な「おとな」が課したものという推論がまた重ねられよう。

#### （４）青年集団の二重構造

前述のように、「交詢会」「同窓会」、そして初期の甲南智徳会は、主に小学校教員と地域名望家による教化的色彩が強かったと思われる。活動も形式的で、決して日常的なものではなかったようである。しかし、甲南智徳会が1900年代以降、「公益事業団体」としての色彩を強め、特に勸業にかかわる事業が展開していった頃にも、「若者」が同時に存在していた。このことから、甲南智徳会の性格が、会員にとって、やはり必ずしも日常的なものではなかったことが推測される。

さらに、当時の人口総数と会員数の比較から、メンバーが選抜もしくは限定されていた可能性もあり<sup>51)</sup>、聞き取りにおいても甲南智徳会への入会は相応のステイタスを示したことがうかがわれる。このように甲南智徳会は、いわば小学校を結節点とし国家と村を結びつける、「公式」の組織であったと思われる。ゆえに1900年代から1910年代までは、実態として小学校区において活動する智徳会部会と、区レベルにおける「若者」という青年集団の並存、当事者に即してみれば二重構造が存在してとみてよいであろう。

### （５）名栗村青年団と「若者」

甲南智徳会は、1922（大正 11）年、名栗村青年団へと改組された<sup>52)</sup>。このときに団員の年齢は 17 歳から 30 歳までとされ、従来の「若者」や甲南智徳会の年齢構成と異なる、いわゆる官製青年団としての形が整ったことがうかがわれる。名栗村青年団は、しばらく甲南智徳会以来の 3 部会制を採っていたが、1927（昭和 2）年よりは下名栗は 2 区ごと、上名栗では 10・11 区を合同とした 11 支部制を採るに至った<sup>53)</sup>。従前の甲南智徳会が、会の趣旨に賛同する旨を明記して入会届を提出する形式であった。それに対し、名栗村青年団では、各支部長が入団者（該当者）を調査し、報告する旨が会則に明記されている。このことから、高等小学校卒業後、名栗村の若者は、自動的に青年団に加入することになっていたようである。こうして各区（あるいは 2 区ごとの）の「若者」が、「青年団」に取り込まれていった。なおこの時期、1924（大正 13）年を最後に、「若者」「氏子青年」が主催する芝居や花火、若い衆勘定に関する記録等が一時見られなくなる<sup>54)</sup>。

### 第 5 節 事例のまとめと考察

以上のように、旧名栗村域での近代における「若者」とその矯風・再組織化の過程を見てきたが、甲南智徳会から名栗村青年団への改組前後から 1927（昭和 2）年における名栗村青年団の 11 部会制への改組を経て、「若者」「氏子青年会」等の活動が資料上は見られなくなる。各区の「若者」が青年団支部として全国組織中に位置づけられたときに、「公式」にはその存在が不可視化されたのではなかろうか。

というのも、終戦後、名栗では再び祭礼と関わって「氏子青年」が文書名に表出し始めるのである。終戦後すぐから名栗では、有志による革新的青年運動が勃興したが、早くに支持を失った。その後、従来、祭礼の際に余興として行われていた、やくざ踊りを催す演芸会や素人芝居が、分団ごとに盛んに行われたという<sup>55)</sup>。これは行政村範囲の青年団という覆いが外れ、實際上に機能していた組織が再び可視化されたと理解される。

もし町村規模で組織化された青年団が当事者に受け入れられ、実質的・日常的に機能していたとすれば、戦後の自主的な青年団組織、「新生青年団」の復興は、当初からその構成単位である町村単位で見られたはずである。しかし、実態を見ると多くは異なる。『日本青年団協議会二十年史』（日本青年団協議会編、日本青年館、1971）においても、戦後初期の新生青年団に関して、「最初に村落（部落）の青年団（以下部落団という）が再編されたり、活動を再開したりして、それから町村青年団（以下町村団という）の結成に進んでいった例」が、「もっとも早く、かつ普遍的にその動きをみせた」とされている（p.38）。1960 年代に至っての青年団論においても、「お祭り青年団」の是非やその変革をめぐる議論がなされていたことは、この実態を反映するものなのである<sup>56)</sup>。

この観点でみると、名栗の 1920 年代頃までの「若者」と甲南智徳会は、年齢構成は重なるものの、「行政区／学区」と組織範囲が異なる。当事者の感覚では、両者は「日常的・娯乐的／公式・形式的」というように、別のものとしてあったのではなかろうか。また、それがゆえに両者は並存しえたといえよう。さらにいえば、1900 年代からの甲南智徳会の活性化は、それらの活動が「勸業」という実利、すなわち生産や生業という日常の営みに接近し結びついたがゆえのことでもあったといえよう。

この時期までの農村青年層においては、第 2 章第 7 節に整理したように、年齢集団によ

るインフォーマルな教育による「学び」があったことは、その功罪も含め指摘されてきた。加えて、特に資本主義化や大消費地の登場、地方改良運動における町村是の実現、農林水産業のイノベーションに対応するため、青年会・青年団等を基盤とし、集落や町村内に組織化された教育（インフォーマルな教育）による「学び」が展開・深化した。

前者のインフォーマルな学びは、日常に構造的に埋め込まれていたといえよう。後者のインフォーマルな学びは、そもそも修養・教化的な意味が強いときは「上すべり」していたものが、そこで暮らし続けるための生業と直結した、実学的あるいはプラグマティックな性格を強めたとき、多くの人びとから支持され、活性化される。関わって手打明敏は、『近代農村における農民の教育と学習』（日本図書センター、2002）において、明治農法の普及に際して、特に 1900 年代以降、農事講習会とその修了生を母体とした農事改良団体が組織化されていく過程に、在村地主層・上層農のイノベーターとしての役割を見出した。特にそこでは、試験場や篤農による実証が重要視され、「実利」が農事改良団体の結集の原理となったことが示されている。

甲南智徳会においても、1900 年代より農産物品評会や蔬菜栽培試験場の設置、作物の種苗品評会、農会との共同による木炭生産の改良講習会等がしばしば開催された。「見て学ぶ」こと、実証性の重視がそこに認められる。

上述のように、甲南智徳会と「若者」とを一度、公的／日常というように区分はしたが、1900 年代から 1920 年代にかけての共同造林や木炭製造、蔬菜の生産拡大、養蚕の新技術の導入などに代表される「実利」志向により、甲南智徳会がより日常に近づいたのではなかろうか。その実利志向をふまえ、特に 1900 年代からの甲南智徳会発展の時期にリーダーシップをとった役員層は、後に近世以来の山林地主・豪農として名望家支配を続けていた層と拮抗しうる勢力となり、村内の要職として戦後に至ることが確認できる<sup>57)</sup>。

しかし、1920 年代に加速化する官製青年団化の伸展、青年訓練所から青年学校へと至る青年補習教育の制度化・義務化に至ると、全国的にも町村単位での勸業・興業をミッションとした活動は停滞化していく。やはり名栗村においても、1922（大正 11）年の名栗村青年団の成立以後、補習教育と勸業は同青年団の事業から切り離された。

なお、ここでみた近代における青年集団の二重構造は、冒頭に掲げた佐藤守の類型でいえば並列型に近い。機能から見ると、「若者」が、最終的には市町村青年団の支会として位置づけられながらも、従来の若者組的機能、特に祭礼の運営を中心とした機能が継続されていたものとみて妥当と思われる。一方、当事者の視点で見ると、ややもすれば形式的になりがちで頻度の少ない村単位での青年団活動に対し、日常の生活リズムに合わせつつ、娯楽や対話的空間としての「たまり場」を確保する、若者たち自身の主体的な動きともいえよう。

## 第 6 節 結語

本章では、地域の文脈の中に「若者」と青年会あるいは青年団の存在を位置づけ、それらの並存あるいは二重構造が存在する意味を、当事者の日常性に立脚しつつ解釈しようと試みた。本章では、特に娯楽や「たまり場」の希求という、戦後青年団論においても着目された「素朴な結合要求」と通底する、いわば「親密圏」の希求を、名栗での伝統的青年集団である「若者」の結合原理として推定した。

若者組からの青年団までへの単系的な再編統合過程については、青年団の「正史」上の定説と異なることを、本事例は例証した。改めてここで、田澤義鋪が『青年団の使命』（日本青年館、1930）で示した、近世以来の「我青年団の特色」として挙げられた5点を再度想起してみる。それは、①自然に発生せる団体であること、②自治的団体であること、③地方的単位を有しつつも、国家的連絡を有すること、④青年期の社会生活の団体であること、⑤その目的とする修養は一般的であること、であった（pp.70-71）。①は、近代の青年会勃興期以降における、若者組の再編過程を全く見ていない。②は、1900年代からの甲南智徳会にはある程度当てはまるものであったといえる。③は、近代における行政機構の発展とリンクした事項である。④⑤は、第2章で論じたように、軍事利用の忌避と脱政治化の想いが背景にあらう。なお、④は、いわゆる「素朴な結合要求」を結合原理としたところは評価できるものの、田澤が示した健全なそれと、名栗の「若者」の実態とはかけ離れている。ひとまずこれら5点は、実態ではなく、望ましき青年団像を示したものであったと改めて解釈できよう。

しかし、ここで改めて意識化せねばならないのが、特に1970年代以降、隣接領域で近代における青年集団の二重構造の存在に関して言及されてきているのにも関わらず、社会教育史での説明は変化しない点である。その背景としては、先に整理したように、従来ある青年団論、青年団運動における言説を無批判に再生産してきたこと、自己教育の観点にかなった事例でもって歴史が再構成される傾向が強かったことが挙げられる。さらに言えば、対象となる青年団組織の衰退も含め、勤労青年教育自体が衰退したことにも起因しよう。

改めて言うまでもなく、戦後社会教育研究では、社会的実践を命題としてきたはずである。青年団研究においても、対象とする時代と地域社会の文脈をふまえ、かつ関わる当事者の視点に依拠しつつ多面的に実践に評価を加えていくことにより、現在の教育実践に示唆を与えるものとなろう。

続いて次章以降では、戦後の地域青年団の実態を検討していくこととする。

---

1) 萩原進『群馬県青年史』群馬県神道青年会、1957、多仁照廣『若者仲間の歴史』日本青年館、1984、古川貞雄『増補 村の遊び日』農山漁村文化協会、2003。

2) 福田アジオ「若者組」、竹田旦編『日本民俗学講座5』朝倉書店、1976、pp.229-230。中野泰『近代日本の青年宿』吉川弘文館、2005、pp.24-28。両者は、前述した「並列型」の構造が東日本に見られるのは、同族型の村落構造ゆえではなく、若者組の年齢構成の差（東日本＝青壮年型、西日本＝未婚型）であるとする。それゆえ、官製青年団における年齢設定（20歳から最終的には25歳）と合致するか否かが、若者組の消滅あるいは残存に影響あるものとして、佐藤を批判している。

3) 旧名栗村での文書類では伝統的青年集団を「若者」と標記しているため、この表現を用いる。

4) 加藤衛弘「名栗村の四〇〇年」、さいたま民俗文化研究所編『名栗の民俗 上巻』名栗村教育委員会、2004、pp.29-54 参照。

5) 昭和35年度国勢調査による。

6) 埼玉県飯能市ホームページ（<http://www.city.hanno.saitama.jp/jinkou/h18.htm>）、2006年9月7日閲覧。

7) 4) 前掲、p.36。

- 8) 名栗村史編纂委員会編『名栗村史』名栗村教育委員会、1960、pp.222-223。
- 9) 飯能市名栗村史編集委員会編『名栗の歴史 下巻』飯能市教育委員会、2010、pp.45-51、232-240、283-286。
- 10) 4) 前掲、p.33。
- 11) 飯能市名栗村史編集委員会編『名栗の歴史 上巻』飯能市教育委員会、2008、pp.237-243。
- 12) 1900年代から校地移転をめぐっての対立があったようである。特に1918(大正7)年から激化し、1924(大正13)年には建替校舎と移転校舎による二校が並立し、移転許認可等をめぐっての混乱も続いた。1927(昭和2)年によりやく二校並立は解消された(9)前掲、pp.248-259)。
- 13) さいたま民俗文化研究所編『名栗の民俗 下巻』飯能市教育委員会、2008、p.21。
- 14) 弘化四年正月一七日「若者議定<sup>(書)</sup>所」上名栗湯ノ沢観音堂文書。
- 15) 8) 前掲『名栗村史』においては、若者組は、「若い衆」とされている(pp.222-223、pp.310-313)。
- 16) 飯能市名栗村史編さん室所蔵史料目録(2006年4月13日)において、「若者」は1900年代から「青年」「氏子青年」へと変化していくことが確認される。
- 17) 4) 前掲、p.43。
- 18) 寺沢一人「信仰と祭り」、(4)前掲『名栗の民俗 上巻』、pp.198-223。
- 19) 玉利庄次郎編『模範青年団』修学堂書店、1910、p.89。
- 20) 同上。
- 21) 安藤耕己「甲南知徳会報関係史料解説」、名栗村史編集委員会編『名栗村史研究 那栗郷』4、名栗村教育委員会、2004、p.4。
- 22) 19) 前掲。
- 23) 飯能市大字下名栗豊住三芳家文書。年代不詳だが、「交詢同窓連合会」の公印が押印されており、同会が存在した、1897(明治30)年1月～11月までに作成されたものと思われる。
- 24) 「甲南智徳会会報」(明治40年1月)下名栗豊住三芳家文書。
- 25) 生没年は不詳であるが、名栗村名郷<sup>なごう</sup>町田家に入婿し町田姓となった。後に名栗村高等小学校長、甲南智徳会会長を歴任した(9)前掲、p.148)。
- 26) 下名栗小沢高司家文書。
- 27) 21) 前掲、p.6。
- 28) 飯能市名栗村史編さん室所蔵史料目録(2006(平成18)年4月13日)から、少なくとも1903(明治36)年から1914(大正3)年までは、町田が会長であったことが確認される。
- 29) 下名栗豊住三芳家文書。
- 30) 下名栗豊住三芳家文書中の豊住正平関係資料より。
- 31) 日誌中には「若者勘定」として記載してあった。
- 32) 蚕神を信仰する講である。主に主婦たちによって構成されており、昼に講の行事自体は終わるが、そのまま宿(当番の家)に夕方から若い衆が酒肴を持って集まり、若い娘も同席して多くは男女の交歓会になったという(8)前掲『名栗村史』、p.312)。
- 33) 明治三十七年一月「甲南智徳会第二部会記録」、上名栗町田晋家文書。1904(明治37)年1月13日から1918(大正7)年10月15日までの甲南智徳会第二部会の活動に関する記録である。
- 34) しかし、女子教育に関しては1914(大正3)年に淑女会が結成される(8)前掲『名栗村史』p.325)までは、その具体的な活動は確認されていない。
- 35) 埼玉県教育委員会編・発行『埼玉県教育史 第四巻』、1971、埼玉県編・発行『新編埼玉県史 資料編二五』、1984参照。

- 36) 大江志乃夫は、1912（明治 45）年に内務省地方局から刊行された『地方改良実例』中にある広島県青年会設置基準にみられるような教育、勸業、体育、貯蓄、公共事業等を複合的に実施していた青年会を「公益事業団体」と表現し、地方改良運動の担い手として位置づけている（大江志乃夫『国民教育と軍隊』新日本出版社、1974、pp.353-355）。
- 37) 「名栗村青年団沿革史」（名栗村青年団編・発行『団報』第 8 号）1934。
- 38) 21) 前掲、p.11。
- 39) 「名栗村第四区青年団規約（明治四十二年七月）」下名栗小沢高司家文書。
- 40) 33) 前掲。
- 41) 明治 29 年 11 月「八雲神社例祭にて演劇興行に付案内状」、下名栗豊住三芳家文書。
- 42) 明治 40 年 10 月「一区虚空蔵尊、二区八坂神社採点として演劇興行に付案内状」、下名栗豊住三芳家文書。
- 43) 大正 2 年 9 月 28 日「水天宮并山神両社祭典余興として旧派演劇興行に付案内状」、上名栗加藤樹家文書。
- 44) 大正 4 年 10 月 5 日「大神宮祭典余興として中村一座演劇興行に付案内」、下名栗豊住三芳家文書。
- 45) 大正 5 年 10 月 7 日「金比羅神社、熊野神社祭礼に際し演劇興行案内状」、下名栗豊住三芳家文書。
- 46) 大正 5 年 9 月「会議録（祭典余興に付）」、下名栗豊住三芳家文書。
- 47) 大正 5 年 9 月 20 日「名栗五・六区青年団 芝居人夫出役簿」下名栗豊住三芳家文書。
- 48) 大正 5 年 10 月 18 日「薪炭売上帳」下名栗豊住三芳家文書。
- 49) 大子町史編さん委員会編『大子町史通史編 下巻』大子町、1993、pp.98-102。
- 50) 保原町史編纂委員会編『保原町史第四巻 民俗』保原町、1981、pp.375-378。
- 51) 21) 前掲、p.12。
- 52) 名栗村青年団編・発行「団報第二号」、1928、上名栗町田晋家文書。
- 53) 21) 前掲、p.12。
- 54) 「大正八年拾四区若者会計簿」（上名栗佐野国太郎家文書）は、1919（大正 8）年から 1924（大正 13）年までの「若者勘定」と祭礼に際しての会計簿である。
- 55) 「名栗のあゆみ(63)」(名栗村「広報なぐり」No. 336) 2004 における浅見康夫氏（飯能市大字下名栗在住）へのインタビュー記事と本人へのインタビュー（2006（平成 18）年 8 月 5 日浅見氏自宅にて実施）による。
- 56) 安藤耕己『『集落青年会』の実相とその意味—戦後青年集団史研究の課題およびライフ・ヒストリー法の可能性—』、筑波大学大学院博士課程教育学研究科『教育学研究集録』第 25 集、2001、pp.23-33。
- 57) 特に 1916（大正 5）年に第二部会長となった柏木眞八が、その典型である。柏木は 1893（明治 26）年生まれ、1978（昭和 53）年に没した。第二部会長を務めた後、1929（昭和 4）年に村会議員に就任し、1932（昭和 7）年に村長に就任し、1944（昭和 19）年まで務めた。戦後には埼玉県会議員も歴任した。柏木家は近世以来、古組の町田家と姻戚関係もあり近い立場であった。眞八の父である代八から、柏木家の林業を足場とした事業拡大が始まり、眞八の代にかけて運輸業、観光業等に経営を広げ、町田家を凌ぐ柏木家の急速な繁栄を担った（9）前掲『名栗の歴史 下巻』、pp.533-546、杉原弘恭、松島耕太、大口遼太郎、鬼崎衛、雑賀順己、花井聖仁、小田幸子「近世～現代名栗村の地域経済に関する研究序説—町田家と柏木家の比較を通して—」、学校法人 自由学園最高学部編・発行『生活大学研究』vol.2、2016、pp.82-86）。



## 第5章 戦後における集落青年会の実相とその意味

### ——岩手県花巻市棚目青年会の事例を中心に——

#### 第1節 問題の所在

従来の社会教育研究では、終戦後の地域青年団<sup>1)</sup>の活動がやくざ踊りなどを催す演芸会の流行に始まり、それへの批判と反省を経て、自主的な学習活動、青年学級の自発的な発達・展開を見たとされてきた<sup>2)</sup>。そして1953（昭和28）年における、青年学級法制化反対運動の盛り上がりの中、共同学習論が提唱され各地で導入されていった。その後、高度経済成長を迎え、産業構造の変化と都市への青年人口の流出もあり、農村青年の学習活動も地域青年団も衰退していく、という構図で説明されてきた。

この通説に関しては、1950年代に消滅するとされる演芸会がそれ以降も残っていることや、演芸会と青年演劇や生活記録運動が併存していた実態が報告されている<sup>3)</sup>。これらの事例をみると、従来の通説では、なぜやくざ踊りが残り続けていくかが説明できない。

序章第2節で整理したように、終戦直後から社会教育行政からの現状報告等にやくざ踊りの実態報告が散見されるものの、従来の社会教育研究では、終戦直後からの集落青年会の実態には注目しておらず、日常生活における集落青年会の意味、あるいは「やくざ踊り」の流行の意味、その消滅と学習活動との併存などの意味をとらえきれていない。やはりまた序章第2節で整理したように、現代史研究、民俗学・文化人類学等の関連領域に視野を広げてみても、終戦直後から1960年前後、すなわち高度経済成長にさしかかるまでの時期の集落青年会の実相は、十分にとらえられていないことがわかる。

これらの課題を明らかにしていくためには、当事者の視点とその集落青年会のおかれた地域特性を理解する必要がある。その際に有効なのは、口述、生活記録、日記等を用いた民俗学的・社会史的アプローチである。そしてそこで得られたライフストーリーからは、当事者の意味づけ、当事者の生活史上における青年会の意味を読みとっていくことができると考える。

以下、筆者調査の岩手県花巻市の水田単作地帯にある棚目集落の事例をもとに、終戦直後から1960年代までの集落青年会活動の実相と、当事者の日常生活における集落青年会の意味、結合原理を明らかにする。なお、棚目青年会に着目したのは、生活記録運動に打ち込み、後に農民詩人として知られるA氏（仮名）が、そこを元来の活動拠点としていたことによる。同青年会は、1955年度から1960年頃にかけて、A氏を中心に青年演劇に取り組む。A氏らと他の会員とにおける意識の「乖離」にも着目しつつ、なぜ日常的に青年会にノン・エリート青年層が結衆していたのかを読み解き、集落青年会の結合原理を考察したい。併せて、同時期に岩手県教育委員会の社会教育主事・池野正明が主導し、全国的にも注目された「実践的学習論」と、一般青年層との志向の乖離についても考察を行う。

#### 第2節 棚目青年会の概要と実態

##### （1）調査地概要

調査地の棚目集落は、岩手県中央部の盆地にある花巻市西部に立地し、調査当時の戸数は約110戸であった。全戸数の半数以上が非農家となっている<sup>4)</sup>。集落内を主要県道が交

差し、かつて花巻電鉄の駅<sup>9)</sup>が設置されるなど交通の要衝であった。鎌倉時代以来の開村伝承を持つ集落で、現在の集落域は、ほぼ藩政村の柵目村と一致する。近代以降、稗貫郡湯本村に、そして1954（昭和29）年の市制施行により、花巻市に属する。

同族組織として、6つの姓がマキ（同族団）を構成している。ツキアイを見ると系譜的に最も古いS姓が、集落の各マキのオオヤ（本家）の大本家として頂点に立っている。特に集落の相談役職は、各姓の本家株の家によって占められている。1995（平成7）年、1996（平成8）年の調査時においても、祭礼などの際の戸主の座順には、本分家の位置が顕在化していた。

## （2）柵目青年会の概要

この地において、近世には明確な規約等を持った青年集団の存在は確認されないが、山の神塔（党）が青壮年型組織としてあったことが類推される<sup>6)</sup>。1910（明治43）年の湯本村青年団結成時に分団として「柵目青年会」の名が見える<sup>7)</sup>が、以後は湯本村青年団の分団として存在し、大日本青少年団の解散とともに消滅した。

戦後の柵目青年会は、終戦直後に神社脇に、復員した青年を中心に青年会館（現：柵目公民館）を自主建設することでその活動を顕在化させた<sup>8)</sup>。会館は青年会員しか入ることが出来ない、いわばアジールとして存在していた。その主な活動は、やくざ踊りを上演する演芸会の主催と運動会への参加、夜間の常会であった。建設直後は頻繁に夜に集まって懇談していたという<sup>9)</sup>。1955年頃においても常会は最低月に2回はあり<sup>10)</sup>、結果として1週間に1回は必ず集まって世間話をしていたという<sup>11)</sup>。このように、青年会館は「たまり場」として日常的に用いられ、青年会はいわば娯楽集団としてその結合を見せた。

組織としては、会長以下、他に1年改選の役職も存在し、15歳から30歳程度、原則として未婚の男女が加入できた。財源としては、集落からの援助と、田打ち請負や演芸会での「お花」が当てにされていた<sup>12)</sup>。

## （3）演芸会

会の主要な活動であった演芸会の練習の様子は、以下のA氏の描写にうかがわれる<sup>13)</sup>。

ガランとした集会場の片隅で、すりへったレコードがなり出す。「おうKはいねえか」と演芸部長がいう。今までしきりと女同<sup>(ママ)</sup>志の話に横から滑稽な相槌を打って笑わせていたKは、最後にまたひとしきり笑わせて立ち上がり、「刀はねえか？刀は」と云ってあたりを見廻す。誰かゝ黒い漆塗りの優勝旗の柄を投げてやる。それをとってKは最初からレコードをかけて踊り出す。次郎長旅しぐれ。センチで悲壮なメロディに合わせてKは、指先をしなわし、その指先を真剣に見やり、肩をいからせて歩き、そして優勝旗の柄の刀を頭から左右に振り廻し、メロディがなり終わるところで急にみんなの方向に向け、にがみ走った表情をつくってすごみをきかせる。

「うめえぞ」「すげえ」見ているみんなはそんな声をかける。――

そして又次のレコードがなり出す。

青年会で祭りにやる演芸会の練習なのである。毎晩九時頃からこの集会場集って、十二時頃までも一時までも、踊りの練習をやり、そのかたわらでしきりにしゃべり、

笑い、果ては取っ組み合いをしているのだ。それが一ヵ月以上もつづく。人一倍好きなある者など、目がひっこみ頭がグルグルすると云って、ガンガン騒いでいる中で、いびきをかいて眠っている。祭りが近づくと、一台の蓄音機では足りなくて、自分の家のを持って来て、庭で、月明かりを頼りに二、三人やっているのもある。

これは 1955 年頃の櫛目青年会における、演芸会練習の風景である。報告者の A 氏は、このやくざ踊りを批判する立場にあった。ゆえに、この文章は、冷静に状況がとらえられているといえる。

#### （４）A 氏の戦後

ここで A 氏について詳しく触れておく必要があるだろう。1950 年代、櫛目青年会が郡（後に市）青年団体協議会中の単位団として改組されていく中で、積極的に青年運動が導入されていく。具体的には、集落青年会の上部組織である湯本村青年団体協議会において、生活記録運動が盛んとなる<sup>14)</sup>。櫛目で生活記録運動に盛んに関わったのが、まずは 1928（昭和 3）年生まれの A 氏であった。A 氏は、後に岩手農村文化懇談会メンバー、そして農民詩人としても知られることになる。終戦時、A 氏は旧制中学校在学中であったが、結局は新制高校に進学せず、自宅で就農していた。

このときの事情を A 氏は以下のように語っている<sup>15)</sup>（――は筆者、以下本章同じ）。

##### ① 終戦後の価値転換

（A）…ちょうど、あの、今、あの高校、今の北高<sup>16)</sup>さ行った（筆者注：通学し始め）たならば、行く時、おれあ、あの、昭和 20 年だった。…行ったら、（笑いながら）、だからその軍隊式で、うん。…開墾、ジャガイモ掘り、授業…。それで 8 月 15 日、ほれあのう、今の北高とは場所が違うんだけど<sup>17)</sup>、あのう、桜雲台っていう、あの桜が、米内光政が名前つけたんだそうだけれども、そこの桜植えてる土手に並ばされて、開墾から帰ってきて、…おら聞き分けられなかったな。天皇の声っていうの。…もさもさもさもさして。…ただ、あのリズムつつうか、独特のあのイントネーションというのがある、それだけ変だなあって思ってたども。

んであのう、先生たち右往左往してさ、……その時、第 1 回の、価値の転換があったなあ、おれに。

――はああ。

（A）価値の転換っていうのは、疑いと疑問。

――疑いと疑問…。

（A）…そっちが言っていることは、あの、必ずしも正しくなかった…。

――んー。先生なり、何なりが言っていたこと…

（A）うーん、だって、今まであのう、英語の教師なんかなあ、いじめられでだの。あの教師仲間でさ。

――ははは、

（A）スパイ、あいづスパイだって。

――ふんふん、

(A) あんづき (筆者注：あの時)、確か感じ悪かった…、色白くてさ、外国人、みでえな顔つき (笑)。ふふ、いやー。…そしてある日突然、ほらえらぐ、何てか、あのう、その人がなんてえか、逆らってくるんじゃないの。おらあ、子供だからさ…。雄山寺っていう寺あるんだけど、配属教官、教官ってあの軍隊を…、学校さ配属する将校。…日本刀の軍刀下げて、横柄にして歩くわけ。がつつがつつと。たいしたいがった (筆者注：威勢がよかった) んだもん。…その人なんか、ある日突然、やめだ。やっぱり。  
——すっかり変わっちゃうんですね。ころっと。

(A) …ん～だがら、すっかり変わったの。  
——先生、そのあとどうなりましたかね。

(A) だから、食えねがったえ (食べていけなかったろう)。だから、「おめ農家だべ。今度の試験上げて、点数上げてやるから、ジャガイモ持ってこい」。…であのう、忠霊室つつうのあったの。忠霊室でね、何て言ったかなあ…。あの、北高のいちばん真ん中の校舎の2階だか3階にある、聖なる場所があったわけ。要するに、天皇陛下の、そこさ呼ばれて…。

——呼ばれて、先生に。

(A) だって、その人が、ある日突然、今度は教育、日教組の委員長になった (笑)。  
—— (笑) 日教組の、なるほど。

(A) 昨日まで教えたことだめだよって、墨塗りがって、みんな。  
——はああ。…やっぱり、塗りましたか？ご自分で。

(A) いやあ、塗りましたも何も、やれって言われたから、そして教科書じゃないのう。今の新聞…だっとうこういうふうにおっきいの畳んだやつ。  
——はあ。

(A) 教科書も何も。…第一、紙ねがったんだよ。そして試験するからって、学校で紙ねえんだもん。家がら持ってこいと。学校でねえくらいだから、うちの中なんか紙なんてのはあるはずねえんだもんなあ。  
——はあ。……どうしたんすか。

(A) …煤けた、煤けた障子に貼った紙、書いた記憶あるなあ。…書いたんだよ。その頃からほれえ、ぐれでしまった。はっきり言うと (笑)。…だがら、おもしろくねえものをおもしろくねって、…数学なんか小学校の時からついていけなかった。その代わり、友達の下宿の家で文学全集あったの。  
——はあーん、

(A) そいづを、ばっかり読んでらった。んだがら、明治時代の小説つつうの、相当読んでらはずだ (笑いながら)。

——はああ、ずいぶん、あれですか。本があるってのは、ほに、裕福な家だったのですか。

(A) 裕福じゃなく、誰か興味ある人、新潮社だかなんだかな、…「円本」っていうあれがあったの。昔1円で買える。俺もわがね (筆者注：わからない)。…それで志賀直哉の小説あって読んだあ。

——はあ。

(A) だってこの授業より遙かにおもしろえがったもん。読んでる方が。  
——なるほど。…詩なんかに興味っていうのは…。

(A) 詩ってというのは、…だからその、学校の中で、あの、島崎藤村なんて朗々と朗読してくれた先生がいたったわけ。国語じゃないよ。社会かなんかの…。

——そのご時勢に…

(A) うん、いやいや、そいつは戦争終わってからだ。

——終わってからですか。はあー。

(A) いや、その響きたるや、ほれあ、そのものすごい、いいんだよなあ。…リズムだ。…そういえばあのう、いや個性的といえば個性的な人がいっぱいいたわけ。…あの、石川啄木の短歌をさ、黒板さざーっと何首も書いた人もいだったし、教師に。…賢治とは何か。なんてやった (笑)。…んだがら、今の…、文化と文明の違いは何だろうなんて、聞いただす先生なんて。…わがらねえべえ。その、15、6 に。

## ② 新制高校に進学せず

(A) …俺の場合は、別に行ってもいいし、行かなくてもいいことだったけれども、行く意味も無いし…。で、なんとなくやめてしまったのが実情。何となくうちにいてしまった。だから、職業ってというのは選択でも何でもねがったわけだ (笑)。

——昭和 23 年ですか、4 年ですか、卒業は？

(A) その頃一、だな。

——あとはずっとうちのほうで…。

(A) うーん、ずっとずっと要するにずっとここにいるなあ。…でも土方なんか相当やったよお。…電信柱の穴掘りだとか、350 円くらいの日当だったと。…んで、そば一杯 35 円ぐらいだったなあ、…その時あのう、今調べてみると、…筑摩書房ってあるの。そこでほらあのう、戦後の最初の文学全集なんだなあ。ほれ、そいつが 350 円だったなあ。何年かかかって、…100 冊近く出したの。みんなあるはずだ。

——ふうん。それ買われたんですか、みんな。

(A) うん。だから、その頃から言えば、…馬鹿だえなあ。

——なんか親御さんから文句言われましたか？

(A) だから、最終的には親父とものすごく喧嘩してしまう…。

——はあー。

以後、A氏は共産主義に傾倒して共産党シンパとして活動しており、周囲からも「アカ」視されていた<sup>18)</sup>。A氏は、大牟羅良<sup>19)</sup>が編集人を務める雑誌『岩手の保健』<sup>20)</sup>への投稿を皮切りに、『雲』という生活記録文集を発刊していたが、それは個人文集の域を脱するものではなかったようである<sup>21)</sup>。しかし、A氏同様に集落での活動に飽き足りない有志が、湯本村の青年団の連合組織である湯本村青年会（1954（昭和 29）年の花巻市制発足以降は、「湯本青年会」）に結集していた。そのメンバーにより 1952（昭和 27）年に刊行されたのが、『広場』という生活記録文集であった。ここには後に、やはり梶目の出身であった、1940（昭和 15 年）生まれの女性、E氏も後に深く関わっていくことになる。彼女は中学校卒業後、自宅で就農していたのであった。

## （５）青年会の実相

梶目集落青年会の事業では、下掲の【表5-3-1】にあるように、娯楽事業と資金調達のための田打ち（田起こし）、農閑期に演芸会等が企画されているのが主であり、生活記録が活動に位置づけられることはなかった。とはいえ、その号限りのものであったようだが、「つどい」と題した「1955.12.30 梶ノ目青年会」と表紙下に記載がある、ガリ版刷りの会報が発行されている<sup>22)</sup>。会務報告、会計報告以外は作文と詩が多く掲載されている<sup>23)</sup>。

この「つどい」に掲載された作文からは、日々の常会・農休日の集会の様子がうかがわれる（下線筆者、以下本章同じ）。

「常会」

S. T（女性：仮名）

今日も常会か……と私の口からため息が出る。いつもおきまりの常会……相談がすむとすぐに世間話に夢中になる。あの世間話にひまを費やさずもうちょっと別な方法がないものでしょうか。例えばみんなの知っている歌を合唱してもいいでしょうし、「未来」について話し合ってもいいと思います。

「青年会に入って」

O. T（女性：仮名）

私は青年会に入るとき、何の目的も持っていなかった。ただ漠然と入会してみたいと思った。しかし少なくとも何等かの知識は得られるだろうとは思った。入会してから今日までのことを振り返ってみると、花見や川のカップライは楽しい思い出のひとつだ、青年会の目的はやはり会合にあると思う。今までの会合中私は3回ほど欠席したと思うが会合の日がちかづくと皆に逢えるというのがなにより楽しみである。しかし、会合のたびに思うのは、梶目青年会として何の活動もしていないということです。会長さんから市青連催し等の話しがあるだけで、あとはバカ騒ぎで解散、これでは青年会が何のためにあるか全く無意味だと思う。もう少し青年らしい誇りをもって青年会という機関を有効に活動していきたいと思う。

上掲は現状を憂う声であるが、逆にそこから当時の常会や集会の様子がうかがわれる。同時期、梶目青年会内には、花<sup>はなざかり</sup>盛舞踊団と称する舞踊サークルも結成されていた。踊りに代表される、娯楽を主眼とした活動を推進する派と、A氏を中心とし、生活記録など学習活動をすすめようとする派が対立する。

舞踊団の中心であった 1932（昭和7）年生まれのB氏による、以下の「つどい」所収の作文には、その「らんと（乱闘）」の状況が表れている。

「演劇をやろう！」

青年会の皆様、此度は誠に申し訳<sup>ママ</sup>ありません。

此の若き青年の皆の夢と希望をかなえたいと盛上がったまででした。

一九五五年のらんとを水に流して、一九五六年を、あのようなことのないようにほがらかにやりましょう。

希望、希望をすてるな。

集会もおもしろく、皆んなで語り合い、楽しい青年活動を盛んにいたしましょう。正

【表 5-3-1】 1956（昭和 30）年度梶目青年会の年間活動

月 日	行 事 ・ 活 動
1 月 23 日	○旧正演芸会と劇発表会を持つこと ○貸本文庫配本
1 月 25 日	○ピンポン大会予選 ○夜、新年宴会
2 月 12 日	○演芸会開催（梶目小学校）
2 月 26 日	○演芸会（湯口）
3 月 17 日	○青年学級（梶目 <sup>マフ</sup> 学校） 大牟羅良「農村の生活について」
3 月 26 日	○入団式
4 月 24 日	○運動会 男女とも第三位
4 月 27 日	○田打ち（個人宅）
4 月 29 日	○花見 38人 盛岡一人二三〇円
5 月 1 日	○田打ち（個人宅）
5 月 3 日	○田打ち（個人宅）
6 月 22 日	○女子副会長選出 ○市青連理事選出
7 月 10 日	○野球大会（湯青協）
8 月 15 日	○盆踊り（婦人会共催）
16 日	
8 月 17 日 ～	○友好大会（湯口） ○参加者 四名
8 月 19 日	
8 月 26 日	○歌と踊りの会
9 月 12 日	○演芸会 花一 <sup>ハナ</sup> 〇〇円
9 月 13 日	○演芸会（梶目 <sup>マフ</sup> 学校）鬼剣舞と合同
14 日	○慰労会
11 月 16 日	○いものこ食い
12 月 16 日	○常会 クリスマスのこと とき十二月二四夜 贈物一人五〇円以上 ツリーをかざる 写真をとる
12 月 24 日	クリスマス会
12 月 30 日	○総会

出典）1955（昭和 30）年度梶目青年会誌『つどい』より筆者作成。

集会の前後をしっかりとお願いします。クリスマスも、楽しくすごして、とてもおもしろくやりました。いよいよ今年の最後の集会を飾る総会もやって来ました。一番大事な日なのです。

一年の計は元旦にありとゆうが私は来年、一年の計は此の総会に有るように思います。皆さんよく胸に手をあてて考えて見ましょう。

梶目青年会をおたがいにも明るく楽しくやっ<sup>マ</sup>て行くにはどのようなことをしたらいいでしょう。私はまず、何んとか此の二三年も前から口<sup>マ</sup>にしていた演劇を皆さんの力で実行したらいいと思います。劇についてはなにも知<sup>マ</sup>つていませんが演劇をやってみ<sup>マ</sup>たいものだ<sup>マ</sup>と私は心から思<sup>マ</sup>って居ります。皆さんにも演劇をおすす<sup>マ</sup>めしたい<sup>マ</sup>と思います。

芸、芸、芸を身につけましょう。

青年会の皆様、青年活動はまず演劇からやっ<sup>マ</sup>て行き<sup>マ</sup>ましょう。

B氏(※本名記載)

同じ「つどい」には、「らんとうに始<sup>マ</sup>りらんとうに終<sup>マ</sup>った青年会」と題して、やはり青年会内の対立が示されている。その両者の着地点が、まずは1955(昭和30)年から取り組んだ、この青年演劇であったと解釈される。しかし、演劇の中心メンバーは、先んじて解散を決めた花盛舞踊団のメンバーと、梶目で伝承されていた田植踊りの幕間に行く狂言芝居に出ているメンバーが主であったこと、B氏の作文中の下線部、「芸、芸、芸を身につけましょう」にあることから、彼らにとって青年演劇は、「芸」の延長と認識されていたことがうかがわれる。この志向は、当然ながら、生活記録を通して農村と農村青年の直面する問題に取り組んでいたA氏のそれとは、必ずしも合致するものではなかった。

#### (6) 青年演劇への積極的な取り組み

しかし、これを契機に、梶目青年会は青年演劇コンクール出場が一つのミッションとなり、活動が活性化する。B氏も自ら「ひとり立ち」という脚本を書き上げ、1956(昭和31)年3月4日に花巻市中央公民館で開催された、花巻市第2回青年演劇発表会で上演するに至った<sup>24)</sup>。このときB氏は、『家の光』に掲載された脚本とA氏の助言をもとに脚本を書いた<sup>25)</sup>。

B氏は芸能好きな一家に生まれ、幼い頃から大黒舞、田植踊りなどを踊り、前掲の若盛舞踊団の一員として、盛んに踊りを披露してきた。また青年会では演芸部長を務めるなどし、青年会内の数名と「メチャクチャ楽団」を創設し、演芸会などで披露をしていた。この彼が演劇に興味を持ったのは、花巻市青年団体連合会主催の第1回演劇講習会に参加し、地元の演劇人であった小林和夫氏の指導を受けたことが大きかったという。

「ひとり立ち」の主要な登場人物は、歳のだいぶ離れた末子(おじ)の立場で、大工を生業としている重夫、そして父(重夫の兄)、リエ(重夫の兄の妻)、順一(重夫の兄の長男)、健二(同・次男)洋子(順一の妻)、マユミ(重夫の恋人)らである。あらすじは以下の通りである。

家で大工をしている重夫のもとに青年会の常会があることを告げに、マユミが現れるところから幕が開く。重夫の家では一家の長である重夫の兄は病弱で、また重夫の兄の長男



・順一は役場勤めであるため、次男の健二が遊びたい盛りではあるが、農作業を主に担っている。順一は借金を作ってまでも酒を飲み歩くなど素行が今ひとつで、家族を嘆かせていた。

この状況に耐えかねて、健二は前々から誘われていた出稼ぎに出ることを家族に打ち明ける。その時ちょうど役場から戻った兄の順一に出稼ぎを反対された健二は、順一のせいで自分が家に縛りつけられていると兄の素行をなじり、二人は喧嘩となる。

その一部始終を玄関で見ていた重夫は、家の経済状況も鑑み、「俺も家の世話になってるの申し訳ねえどもなす。俺、ひとり立ちになってやってみたいと思っているあんす」と、自立の決意を示す。やりとりの後、健二の気持ちを押し量り、両親は健二の出稼ぎを認めるが、既に健二は置き手紙を残して駅へと向かっていた。重夫は兄夫婦に託された小遣いを持って、健二を見送りに急ぐのであった。

「自分のこと書いたもんだ」と本人が語るように、この脚本は、B氏が自身とその家族とをモデルに書いたものであった。実際にB氏は甥（長兄の子）より年下、という立場の末子であった。

その分、農家の次三男問題をテーマにしているかという点、それが前面に出ているわけではなく、また、B氏をモデルとした重夫による、自立への表明が後半にやや唐突に出てくるなど、筋にはやや中途半端なところがある。しかしひとまずA氏ではなく、娯楽一辺倒であったB氏が上演に向けて、自ら脚本を書き上げたことに大きな意味が認められた。

この時は上演中に舞台が壊れてしまうなど、よい評価を得るものではなかったというが、B氏は大いに満足であったという。

その後、A氏が「土の中の青春」という脚本を書いたが上演されなかった。また、「結婚成立」という自主制作脚本と阿部光夫作「モデル結婚」という脚本が残っている。<sup>26)</sup>、そこへの書き込みからも、実際に上演されたことが推測されるが、具体的な上演機会等は定かではない。ここに関わっては、予選で落選して市の大会に出られないことが数年続いたという証言もある。実際に、花巻市青年演劇発表会において、1957（昭和 32）年の第3回、翌年の第4回発表会に柵目青年会の名は確認できない。その後B氏は、1958（昭和 33）年に入婿して柵目を離れた。

久しぶりに柵目青年会が市のコンクールに出場したのは、1959（昭和 34）年の第5回花巻市青年演劇発表会においてであった。高橋昭作「峠の青春」を演じている。このときの配役は、花巻市青年団体連合会演劇懇談会に加わり、講習会に参加していたメンバーが中心となっている。さらに翌 1960（昭和 35）年の第6回発表会には、須田英夫作「若い土」を上演した。これが柵目青年会として最後の出場となった。

この時期を境に、柵目では青年会員も減少し、目立った活動が減少した。結果として1970年前後には一度会自体が消滅したという。数年後に復活したが、その主な活動は神社の祭礼の運営、盆踊りの運営、スポーツ大会の実施等であった。最終的に 1991（平成 3）年に集落青年会も消滅した。

#### （7）当事者にとっての青年会

それでは、当事者の青年たちは集落青年会に何を求めて集まっていたのであろうか。以

下の事例を示したい。

【事例 1】 C 氏（1938（昭和13）年生・女性）

1953（昭和 28）年、中学校卒業後に櫛目青年会に入会し、1958（昭和 33）年に結婚退会した。同級のD氏（1937（昭和 12）年生・女性）と組んで、「若盛舞踊団」で踊りを披露した。農閑期には花巻の町にD氏と洋裁を習いに行っては、映画を見るのを楽しみにしていた少女であった。

——花見ってのは、これはみんなで…、

そうです。で、あの頃、あんまりほらあ、乗用車で、マイカーなんちゅうものもなかったものですから、バス貸し切りでね。あと、電車に乗って、盛岡あたりだと汽車に乗ったりしてね。結構、それも楽しみのひとつで、春はお花見とかなんとかして、そしてその、お花見するにやっぱり、いくらかでもあのう、足しになるようにって、朝、1時間か2時間くらいね。あのう、ほら、農業で、今みたいに機械で田圃掘るわけじゃなかったの、あのう、結局ね、田打ちっていうんですか、そういうのをやって《笑いながら》あのう、働いて、その金で足しにして、お花見をしたり…、

——よそのお宅さ…、

ええ、そうです。部落内のね。して、青年会の人たち、田打ちさ行くづって、あのやっぱり頼まれたりしてね。ええ、して朝2時間やそこらの時間で、働いたもんです。そしてそれで、花見したりね…。

—— はい、それは青年会でっていうことでやったんですか。

はい。青年会っちゅう、…あの頃結構ねえ、今だと青年会ってないんですって。もう勤めにね。

——そうですね。

…みんな出てるので、青年会作ってもなかなか集まらないっていうんですけど、私らの頃はみんなうちにいたもんですからね。まず、青年会っても結構、20 人かそこらの会員がありましたので。…その中から、毎年やっぱりね、会長さんとか、副会長さんとか、会計とかってね。決めて、そしてやっぱり、会を運営してね。で、そしてやっぱり花見とかなんたって…、ええ。

——なるほど、そうですか。

あ、ほんとその頃、ちょっと花見の前にね、青年会の運動会つのもあったんですよ。…あの、湯本村、13 部落あるんですけど、部落対抗でね。青年会の運動会なんてあって…。…やっぱり、それも楽しみのうちで、夜、ちょこっと仕事が終わって、夜、今度その前は、その今、本多エレクトロンになっている<sup>27)</sup>んですけど、前はもとの分校って、小学校があるんですよ。

——はあ、なるほど。

そこの、庭で練習したりね。で、結構、あのう、運動会っていえばみんなやっぱり、みんな応援して、して、優勝、昔は私ら入る前は、優勝したりもしたんですって。んだけれども私らの頃は、あんまり、そういうこともなかったんですけど、でも、意外とねえ、みんなやっぱりこう、<sup>不</sup>明<sup>明</sup>ちゅうかなんか、走る人たちがいっぱいありましてね。1日楽

しんで、あと、夕方になれば、あの今度部落に、あの頃は青年会館ってあったんですよ。そこへ帰ってきてから、今度みんなで、あのう、なんていうの食事の支度したりして、慰労会みたいなことをやってね。…そうやってで、今度はほら、んじゃ、今度花見に行こうかなんて決めたりして、そしてそういうこと、結構楽しくええ、まとまってきましたねえ。あの頃の青年会はねえ。

#### 【事例 2】 E 氏（1940（昭和15）年生・女性）

1955（昭和 30）年に中学校卒業後に入会。やくざ踊りも踊りながら、前述のように生活記録、青年演劇、さらには女性問題の討議等に積極的に参加し<sup>28)</sup>、花巻市青年団体協議会の役員も務めた。1962（昭和 37）年に同協議会活動で知り合った男性と結婚。以後は転勤生活を続ける。現在は夫の退職で花巻に戻り、市民運動と趣味に没頭している<sup>29)</sup>。

…そしてそのね、櫛目の青年会っていうのは、当時は、テレビも何にもないでしょう、ラジオなんていったって、ほんとにまだ全国的にラジオなんて加入していない時ですから、すると楽しみってのは何にもないんです。そうすると、雨が降って、そして働かない、働けない日は、遊び日とかなんとかっていうのが出てくるんですよ。農家の中でね。そうするとやっぱり、若い人たちは、じゃあ、公民館に集まって、っていう感じ…がそもそもの青年会なんですよ。

——なるほど。

私のね、記憶からいえばね。また人によっては違う面もあるでしょうけれども…。本当にそういうふうにしないと、あのう、娯楽っていうのが何にもなかったんですよ。

#### （8）青年会の結合原理

【表5-3-1】にあるように、1955（昭和 30 年 3 月 17 日には、雑誌『岩手の保健』の編集人であり、ベストセラーとなった『ものいわぬ農民』（岩波新書 1958）の著者、大牟羅良の講演・学習会が催された。つながりがあったA氏が招いてのことであったが、A氏以外には記憶する人がなかった。

これまで提示してきた【表5-3-1】と生活記録文、【事例 1・2】から櫛目青年会に集まった青年たちの結合原理は、「娯楽」と「たまり場」への欲求といった「素朴な結合要求」と通底する、「親密圏」の希求にあったといえよう。櫛目青年会では「やくざ踊り」に青春をかける層と、青年運動を流入させようとする若者たちとの葛藤があり、続いて両者の妥協点、あるいは落としどころとしての青年演劇へ取り組む過程が認められた。当初は自主制作脚本が用いられたものの、以後はそうではなかったことから、青年演劇を学習過程として位置づける志向が、必ずしも強いものではなかったと思われる。

ついには、「娯楽」の多様化もあり、また農作業のサイクルにあわせて企画されていた活動（【表5-3-1】）が、高校などへの進学率上昇と離農傾向によって、青年の生活サイクルと合致しなくなっていった。これによって必然的に事業・活動の縮小と会員数の減少がもたらされたのである。

### 第3節 岩手県における「実践的学習論」の提起と集落青年会の志向との乖離

#### (1) 岩手県における「実践的学習論」の展開

前節までで検討したように、集落青年会の結合原理は、娯楽性と素朴な結合要求の希求にあった。そのことが逆説的に裏付けられるのが、岩手県において 1960 年代に県教育委員会主導で理論化され、その実践が提唱された「実践的学習論」をめぐる新聞紙上の議論である。

1961（昭和 36）年、共同学習論批判とその実践性の欠如の克服を謳った理論書が岩手県において刊行される。それが県社会教育主事・池野正明<sup>30)</sup>が著した『青年団体構造改革—実践的学習論の立場—』（岩手県教育委員会）であった。この『青年団体構造改革』は刊行後、日青協関係者をはじめ、全国の青年団関係者に注目されるものとなった<sup>31)</sup>。

岩手県の 1950 年代から 1960 年代における（勤労）青年教育においては、生産学習を基盤に置き、「日本のチベット」の克服、すなわち生産性と生活水準向上をめざした行政間連携や関連組織・団体間の協働が展開していた。そこには池野をはじめとした、県社会教育課のイニシアティブが発揮されていた。県社会教育課は、特に岩手県青年団体協議会（以後、県青協とする）と密接な関係を持ちつつ、青年運動の理論化と普及を行っていたのである。

#### (2) 実践的学習論とその裏付け

実践的学習論とは、青年団の全活動を社会的実践の過程に結びつけ、地域の変革を行う主体・運動体として、その機能と性格とを明確化した学習論・組織論であり、共同学習論の岩手での展開形態といえる<sup>32)</sup>。同論では、当時の実態からもその組織の基盤として単位団＝地域青年団を重視する。しかし、単なる地域網羅的な青年団や、「素朴な結合要求」による半目的集団は否定し、単位団の目的集団化、単位団中の機能分化を目指す。さらに、生活記録・青年演劇をはじめとした文化活動やその他レクリエーションもそれを単独の活動とせず、学習の方法・実践の過程として位置づけた。後年、このことが地方紙上での青年演劇をめぐる論争を引き起こす。

池野は 1956（昭和 31）年に青少年担当に就任して以来、県青協と取り組んだ葉タバコ耕作安定化運動<sup>33)</sup>、その後の余マス闘争、選挙公営化運動<sup>34)</sup>を实践例として、実践的学習論を展開させた。

ここでは池野の理論構築に最大のインパクトを持った「余マス闘争」のプロセスを取り上げたい。「余マス」とは、農家が米を政府に売り渡す際、規定の分量（1 俵＝60 kg）よりも余分に米を詰めることである。米を倉庫に保管している間の水分蒸発・鼠害、流通過程での目減りに対応するものであった。法的根拠がないものの、慣行として長く半強制的に行われてきた経緯があった。その量は全国的に差異があり、岩手県はほぼ 400 グラム（約 3 合）として、食糧事務所、そして県と県経済連などで組織される穀物改良協会によって指導されてきた<sup>35)</sup>。

1959（昭和 34）年、衣川村（現：奥州市衣川区）青年団体協議会の会長を務めていたのは菊地豊であった。中央大学法学部を卒業後、帰郷して衣川村で農業に従事しつつ青年団活動に携わっていた<sup>36)</sup>が、うたごえ運動に関わるなど革新系の立場を明確にしていた

37)。当時の菊地は余マスを農民が負担すること、そして各都道府県で不統一なことなどに不合理を感じた。また、余マスは実質的には経済連などから米穀業者へのリベートに充てられているのではないかと感じ始めていた。そして地元での生活記録を用いた学習会でも疑問の声が上がり始めたことから、徐々に農民から問題視する声が上がっていった。これに対して、各農協が連合して押さえ込む態度が見えたことから、菊地は自ら規定の半分の 200 グラムのみを余マスとして供出したが、食料事務所に検査拒否をされた。それに対し、菊地は食糧事務所に異議申立をしたことから、朝日新聞で余マス問題が報じられた<sup>38)</sup>。結果、全県的に反対運動が飛び火し、農林大臣が、保管中の自然減量は政府が補償する旨の答弁を行うまでに至った。しかしなお、食糧事務所、穀物改良協会等は妥協せず、農民との対立が続いた。

この問題は、1960（昭和 35）年の県青年問題研究集会で菊地によって報告され、翌 1961（昭和 36）年度には、県青協の一大運動として取り組まれたのであった。この年に県青協会長に就任した菊地は、同年の全国青年問題研究集会で余マス問題を報告し、全国的な注目を受けたのであった。この成果をもとに、県青協は、余マス問題を実践的学習論に基づいて学習するテキストを作成し、学習会等で用いた<sup>39)</sup>。結果として 1961 年度中に青年団体と県経済連との話し合いが持たれ、300 グラムの余マス負担という妥協において問題の決着が見られたのであった。

この一連の過程が、生活課題を提起し、青年団が学習・実践を続けた成果として、池野が「実践的学習」論を構築する際のモデルとなったのであった。生活記録などを用いたフランクな話し合いが、結果として国をも動かす。「たまり場」からの「声」とそれに対する共感が政治性を帯びた運動と展開していったのである。

なお、菊地は 1963（昭和 38）年、1964（昭和 39）年度と日青協副会長を務めた後、1971（昭和 46）年には革新系無所属として衣川村長に当選。以後 1 期落選を経て再び咲き、続けて 1979（昭和 54）年から 1987（昭和 62）年まで 2 期村長を担った<sup>40)</sup>。

### （３）実践的学習論への批判

上掲した葉タバコ闘争、余マス闘争、選挙公営化運動などをモデルとして構築された実践的学習論は、県内の青年団員からはどのようにとらえられていたのか。以下、当時の資料に基づき検討してみたい。

前述のように、池野は青年演劇を非常に評価し、自作脚本の製作とそれに基づく上演を実践的学習の方法とも位置づけていた。そのことに関わり、1959（昭和 34）年から、池野および県青協役員と北上市・和賀郡の青年団役員との間に、青年演劇の位置づけ等をめぐる議論が『岩手日報』紙の「論壇」「夕刊論壇」で交わされていた<sup>41)</sup>。

まず池野は、1959 年 10 月 7 日付「夕刊論壇」にて「青年演劇の疑問に答える」と題し、「われわれの考えている青年演劇は、一つには人間改造劇であり、一つには地域（社会）改造劇であることを基本とする」とし、「人間の質をかえるには青年演劇共同学習を必要とする」と青年演劇を共同学習の一方法として位置づけた。このことは県の青年演劇指導者や県青協役員からは支持された一方、青年演劇をも学習の方法・過程とする池野論に対し、1960（昭和 35）年 6 月 10 日付の「論壇」には、「青年演劇はこれで良いか 観客

無視の演劇はあり得ぬ」と題した、北上市青年団体協議会会長高橋与平による批判的な意見が掲載された。高橋は、以下のように池野の論を批判する。

県教委の方（筆者注：池野）が主張される歴史的、経済的、社会的角度から徹底的に共同学習をして作り上げられた、そのことだけで青年演劇が規定を受けるとする考えは、机上の理論としては成立するかも知れません。しかし私の薄っぺらな体験から推して（体験ほど危っかしいものはないと決めつけられるでしょうが）青年が演劇を作るということにおいて、これほど冷厳な拘束にうちひしがれねばならないとするならば、青年運動のどこに開放的な青春の自己表現を捜し出そうとするのでしょうか。

高橋は、青年演劇の上演に至る「学習」がその成功や評価の一義的な基準となるのではなく、観客の反応という「プリミティブな意思表示」でもってそれは評価されるべきではないのかと疑問を呈する。

高橋は、以前から池野及び県青協の進める実践的学習論の展開に疑義を呈していた。1960年2月8日付「夕刊論壇」において、「青年団運動の転換を」と題し、「少年じみた共同学習がどうだろうと、青年が『理想社会』に近づくためには選挙運動をやらなければならないのだ」と現実主義を打ち出す。それまで県青協が進めてきた「百人一步前進主義」ではなく、少数精鋭のリーダーが青年団を牽引する必要性を説く。さらに、そのリーダーを選挙に勝たせるために青年団が婦人会、労組等、「時にはいわゆる部落のボスでもかまわない」として、強い地域内連携を持つべきと主張した。

もちろん、これにはすぐに宮守村青年団体協議会の菊池一晃が、2月19日付「夕刊論壇」において「青年団活動の本質—高橋与平氏に反論する—」と題し、その保守的志向に批判を加え、改めて百人一步前進主義を支持した。

さらにその二人の中間的な意見は、2月26日付「夕刊論壇」に北上市鬼柳町青年団体連合会会長である舘川毅によって「青年団活動の方向」と題して表明された。舘川は高橋に対し、ただ議会に青年を送ればよいというものではなく、その過程の民主主義的あり方を重要視すべきという菊池の論を支持する。一方、菊池らが支持する県青協の学習論（≡池野論）が、現実と遊離した空論になりがちな点を批判する。「自分の生活から離れたいわゆる観念的なものに重点がおかれた学習から脱却して、青年団をとりまく生活の条件としての経済や、社会のしくみ、人間関係などの中から青年団の課題を生み出し、理念であったものを生活の中で生かし意識化し行動化することだ」と、県青協側の「理想主義」と高橋らの「現実主義」とを架橋する議論を提起した。

3月5日の「夕刊論壇」では、やはり高橋が「青年団飛躍のために あえて菊池氏の反論に答える」として再度自説を開陳したが、趣旨は前掲のものと変わりはない。

なお、1961（昭和 36）年度、「青年団体構造改革論学習会」が県下教育事務所単位で行われた。そこには県青協執行部と県社会教育主事が全員動員されたが、反対色が強かった和賀稗貫地方において、県青協理事が学習会で徹底的に批判されるという事態が生じた<sup>42)</sup>。そのため、9月10日付「夕刊論壇」では、反県青協の動きを牽制するため、県青協事務

局長村上恵三による、「地域の経験や指導者を大事に 中央向きの青年団論の克服」と題する文章が掲載された。この事態の伏線として、青年演劇を学習と結びつける池野や県青協役員への反発があったと考えられる。

#### （４）一般青年団員との意識の遊離

上掲の論争は、市町村団のリーダーらのものであったが、一般の青年団員はどのような意識を持っていたのだろうか。その点に関してみると、本章における梶目青年会の事例が示唆的である。筆者は本章において、当事者から見た集落青年会のそもそもの結合原理は、娯楽性と素朴な結合要求と通底する「親密圏」の希求、たまり場の希求にあったことを指摘した。これに基づく、「夕刊論壇」における高橋の意見は、演劇における自己表現や娯楽性を一義として示すもので、一般青年団員の志向に近いものであったといえよう。

すなわちここまでの検討によって、「実践的学習」論に集約される、池野が先導した学習論は、その変革性の過度の強調ゆえに、序章と第３章で掲げた小川利夫らによる批判同様、単なる結合要求、すなわち親密圏としての結合を捨象するきらいがあった。また、その理想とする社会づくりはややもすると価値志向的であり、青年層の置かれた日常性から遊離する傾向にあったことが指摘できよう。

序章第２節でも整理したように、1960 年前後からの共同学習論停滞後に展開される、信濃生産大学をはじめとした農民大学運動は、農業共同化を主眼とした生産学習と政治学習への集中が強調されていく。しかし、成人の日常性と学習との関係を検討してきた三輪建二は、この強調ゆえに共同学習が当初の理念としていた、日常生活の中にあるフランクな「たまり場」での「うさばらし」からの問題提起という趣旨<sup>43)</sup>が等閑視されていったと指摘する<sup>44)</sup>。

#### 第４節 結語

以上のように、当事者から見た梶目青年会の結合原理は、あくまでも娯楽性の希求、素朴な結合要求と通底する「親密圏」の希求、それに基づき成立する「たまり場」への価値にあったとみてよい。また、同会が青年演劇に取り組んでいく過程は、いわば「娯楽」青年と「政治」青年の対立後の妥協のようにみえるものではあった。しかし、取り組みを決めるまで、そして市の大会に出場するに至るまでには、相当の激論が交わされたことが記録にもうかがわれる。日常と連続性を持つ対話的空間、すなわち「たまり場」から学習が展開する余地が感じられる過程であるし、「たまり場」自体が学習・活動過程の蓄積によって形成されていくことも示唆される。

前述の「余マス闘争」を見ても、地方の一青年であった菊地豊個人の日常的な問題関心は、青年団での生活記録を用いた学習を経由して大きなうねりとなり、行政、ひいては国家への働きかけへと至った。これは共同学習でも目指された、「たまり場」からの学習と実践の展開を示す成果であった。第３章第４節でも示したように、「素朴な結合要求」として表現された「親密圏」を基底とした青年団組織と学習が、公共性、あるいは政治性をも帯びていくプロセスとして見ることができよう。ただ、もちろん、そこには日常

生活、生業と結びつくプラグマティックな志向が底流する。

序章と第3章でも述べたように、特に1960年頃の青年団論において「素朴な結合要求」として表現された、「親密圏」の希求を結合原理とみなすことは、社会教育の学界を先導する若手研究者からは、否定もしくは軽視されるものであった。この傾向は、本章で取り上げた『青年団体構造改革』においても同様であった。

この実践的学習論の展開期は、第1次安保闘争前後からの「青年の叛乱期」と重なる。日本青年館に近い論者たちからは、当時の状況はどう見えていたのであろうか。第2章に述べたように、彼らは「青年団＝若者組母胎」論を再表出させ、特にその時期は青年層に非政治化・中正の態度を望んだ。その一人である永杉喜輔は、「戦後の混乱は田沢を忘れさせ、青年団は政党にあやつられ、政治的青年団の一時期を迎えた<sup>45)</sup>」とし、さらに1951（昭和26）年の日青協成立後からしばらくは、「日青協の全国大会は政党の手さきとみられる絶叫型の弁論が支配して混乱した<sup>46)</sup>」と評している。保守的な立場からではあるが、当時の青年団を取り巻く政治的な雰囲気表現している。

このように、中央の日青協では、いわば「空中戦」が展開していたのであるが、岩手県での実践的学習論をめぐる議論は、より日常の生活世界と関わるものであった。「余マス闘争」も日々の生業としての農業と深く関わるものであったし、青年演劇の性格をめぐる新聞紙上の議論も、より生活世界に即した議論——娯楽優先／学習優先——をめぐるものであった。

その後、1970年代、「たまり場」の再生を目指す生活集団論が日青協の運動方針となったことは、再び「政治」から「日常」への視野の転換がなされたことであった。結果として、研究者や青年運動指導者の認識においても、いわゆる「素朴な結合要求」の重要性が明確に位置づけられたといえよう。

以後、「たまり場」としての青年会館の建設運動が全国的に展開される。岩手県内でも同時期に「広場・たまり場運動」が県青協の運動方針とされ、県からの補助金支出もあり、青年会館建設が行われていく<sup>47)</sup>。しかし、これらの青年会館も建設後10年以内には、その利用の停滞が顕著となっていく。次章ではこれらの消長過程の事例を通して、施設空間としての「たまり場」の意義と限界に関して検討していくこととする。

---

1)戦後に各地で勃興する地域青年団は、主に集落単位に分団組織は「会」の名称を、市町村単位の組織は「団」の名称を採用していくことが多い。本章では、後述するように主に集落単位の青年集団に焦点化している。以後、特に断りなければ、集落単位の組織は「集落青年会」とし、また市町村単位の組織は「市町村青年団」とする。また、本文中では集落を意味する「部落」は引用部でない限り用いず、「集落」に統一している。近代における用法等に関しては、序章注83)に整理した。

2)藤田秀雄『社会教育の歴史と課題』学苑社、1978、藤田秀雄・大串隆吉編著『日本社会教育史』エディトル研究所、1984など。

3)藤田秀雄「青年団における小集団学習の問題点」、日本社会教育学会編『小集団学習（日本の社会教育第3集）』国土社、1958、高橋啓吾編『青年演劇運動史』岩手県教育委員会、1962など。

4)農林水産省1995年農業センサス農業集落カード「柵目」による。

5)花巻電鉄は1925（大正14）年に開通し、1972（昭和47）年に廃止された。柵目には瀬川駅があった。



- 6) 欄目在住の郷土史家：故吉田久助氏の遺稿による。
- 7) 三田憲編『湯本村史』1920、p.57。
- 8) 資料と証言から、1945（昭和 20）年説と 1946（昭和 21）年説があるが、会員の復員状況から 1946（昭和 21）年が妥当かと思われる。
- 9) 当時の青年会員であった、F 氏（1927（昭和 2）年生・男性）の証言による（1996（平成 8）年 7 月 15 日）。
- 10) 花巻市青年団体協議会編・発行『ひたすら燃えた日々 花巻市青年団体協議会 20 周年記念誌』、1974、p.29。
- 11) B 氏談（1996（平成 8）年 11 月 2 日）。
- 12) 欄目青年会会報「つどい」（1955.12.30）により、同年の収支決算を見ると、舞踊団が集落内外の演芸会出演で得た「お花代」は、実に全収入の 50 %を超えている。一方、化粧品等の必要経費も支出の 42 %超となっているため、演芸会出演の収支はほぼ「トントン」であったことがわかる。
- 13) 「みんなとともに」、湯本村青年協議会・湯本農村問題懇談会編『生活を見つめて十余年村の生活記録運動史』1962。
- 14) 岩手県青年団運動研究所編『岩手県青年若妻記録運動史』岩手県青年団体協議会、1962 参照。この過程における生活記録文と学習の記録は、13) 前掲『生活を見つめて十余年 村の生活記録運動史』として刊行されている。筆者は同書の記述をもとに、『広場』と青年有志グループによる学習の展開過程について詳細に報告しているので、参照されたい（安藤耕己「戦後青年団における『女性問題』認識—高度経済成長期前における生活記録と学習記録の検討を中心に—」『ジェンダーフリー教育の必要性和可能性』筑波大学教育社会学研究室、2004）。
- 15) 1996（平成 8）年 7 月 14 日の A 氏に対するインタビューによる。
- 16) 当時の岩手県立（旧制）花巻中学校。現在の岩手県立花巻北高等学校の前身。筆者の母校でもある。
- 17) 戦後、岩手県立花巻中学校は学制改革により岩手県立花巻第一高等学校となり、以後、校名変更を複数回行った後、1953（昭和 28）年に岩手県立花巻北高等学校と改称され現在に至る。A 氏のコメントにあるように、当初は岩手県出身の海軍軍人・元首相である米内光政が、1941（昭和 16）年に桜雲台<sup>おううんだい</sup>と命名した校地に立地していた（参照：岩手県立花巻北高等学校ホームページ中「沿革」（<http://www2.iwate-ed.jp/hkn-h/>）2017 年 1 月 29 日閲覧）。旧校地には現在、花巻市立桜台小学校がある。
- 18) 1996（平成 8）年 7 月 16 日の A 氏に対するインタビューによる。
- 19) 本名：大村次則。1909（明治 42）年、岩手県九戸郡大川目村（現：久慈市）に小学校教員夫婦のもとに 12 人兄弟の第 6 子（5 男）として生まれた。父母は小学校の教師。高等小学校卒業後、小学校の代用教員となる。以後、東京物理学校予科（現東京理科大）を修了し、代用教員に戻る。1938（昭和 13）年に満州に渡り、協和会中央本部に勤務するが、1944（昭和 19）年臨時召集される。沖縄・宮古島へ送られ、そこで敗戦を迎えた。復員後、盛岡近郊で開墾に従事した後、古着の行商人になり 4 年間県内の山村を歩き回った。その後、1951（昭和 26）年、『岩手の保健』（20）参照）編集者になった。『岩手の保健』の編集は 1971（昭和 46）年まで続けるが、その間、古着の行商と編集者生活を通じて見た農山村の現状をつづった、『ものいわぬ農民』（岩波新書 1958）を著したほか、岩手県農村文化懇談会がまとめた『戦没農民兵士の手紙』（岩波新書、1961）の編集に関わる。さらに、1964（昭和 39）年には菊池敬一氏との共編で、戦没農民兵士の妻たちの記録である『あの人は帰ってこなかった』（岩波新書）を刊行した。さらに、1971（昭和 46）年には菊池武雄氏との共編で『荒廃する農村と医療』（岩波新書）を刊行した。1993（平成 5）年逝去（北河賢三『戦後史の中の生活記録運動—東北農村の青年・

女性たち一』岩波書店、2014、pp.74-78、岩垂弘『『岩手の保健』編集者・大牟羅良さん再評価の動き：農山村の庶民の声をすくい上げ続ける』、リベラル 21 (<http://lib21.blog96.fc2.com/blog-entry-2338.html>) 2013 年 4 月 15 日、2017 年 3 月 3 日閲覧)。

20)『岩手の保健』は、1947(昭和 22)年 8 月に創刊された岩手県国民健康保険団体連合会発行の雑誌で、国民健康保険加入のPRと保健衛生の啓蒙を主な役割としたものであった。しかし、大牟羅良が編集担当になった 1951(昭和 26)年から農村における保健衛生の状況の改善、因習の打破、青年の性習俗の改善などを目指し、岩手県の辺地性と後進性改善を訴えていく先鋭性を強めていった。『岩手の保健』には、青年団員や婦人会員、そして農業改良普及員、県や市町村の社会教育主事などによる生活記録文や報告が多数寄稿された。同誌は、自由な意見交換や生活記録発表が行われる媒体となったのであった。同誌に展開するリアリズムとヒューマニズムに全国の文化人、新聞等が注目し、それらの志向が大牟羅の『ものいわぬ農民』(1958)へと結実した。以後、1957(昭和 32)年に大牟羅らを中心に岩手農村文化懇談会が結成され、その成果は『戦没農民兵士の手紙』(岩波新書 1961)などとして多数公刊されている。北河賢三が、近現代思想史の観点から大牟羅の個人像と現代史上における『岩手の保健』の位置づけに言及している(北河賢三「大牟羅良と『岩手の保健』——雑誌の編集と読者との関係を中心にして——」、『年報 日本現代史』8、現代史料出版、2002、北河 21)前掲書、2014)。

21)10)前掲、p.23。

22)B氏蔵。

23)このガリ版切りはA氏が行ったものだという(1996(平成8)年11月1日、A氏・B氏、E氏談)。

24)なお、B氏のもとに現存する脚本には、1957(昭和 32)年1月22日の日付があった。後年再演されたときのものと考えられる。

25)以下は1996(平成8)年11月1日と11月2日にB氏にインタビューを実施した内容による。

26)B氏蔵。

27)現在の社名は株式会社ネクスグループに変更されている(株式会社ネクスグループ HP 中、「沿革」(<http://ncxxgroup.co.jp/corporate/history>)、2017 年 3 月 21 日閲覧)。

28)安藤耕己「成人の学習におけるライフ・ヒストリー法」、『成人の学習(日本の社会教育第 48 集)』東洋館出版社、2004)において、E氏の青年団時代の学習成果とその後の人生とを紹介した。

29)同上。

30)1918(大正7)年生まれ、1965(昭和 40)年没。池野の人物像については、安藤耕己「昭和 30 年代の岩手県における『実践的学習』論の展開とその帰結——池野正明著『青年団体構造改革』[1961]を手がかりに——」、『岩手大学生涯学習教育研究センター年報』第2号、2003を参照されたい。破天荒でエピソードに事欠かかない人物であった。

31)後述するように、1961(昭和 36)年度の岩手県青年団体協議会会長で、1962(昭和 37)年度に日青協理事、1963(昭和 38)年～1964(昭和 39)年度の日青協副会長を務めた菊地豊が、日青協の青年問題研究集会等に持ち込んだという(本人談 2001(平成 13)年 10 月 22 日)。当時、日青協組織対策部等の職員を歴任していた富田昌宏は、池野の実践的学習論を 1960(昭和 35)年前の共同学習論停滞期に示された学習論・組織論と位置づけた(富田昌宏「学習論再生のために」、『共同学習基礎資料集(研究室報No. 13)』日本青年館調査研究室・日本青年団協議会、1968、p.11)。また、日本青年館調査研究室・日本青年団協議会編『地域青年運動の展望』(日本青年館調査研究室、1968)では、『青年団体構造改革』から多くの引用が行われて評価されている。ここの記述は筆者無記名であったが、富田が執筆したことが確認された(本人談。2001(平成 13)年 11 月 8 日)。さらに 2001(平成 13)年、日本青年館に

において所蔵確認した吉田昇の蔵書中にも同書は確認された。このことから、同書は、日青協関係者と関わる研究者の目に留まっていたことが推測される。

32)『青年団体構造改革』の記述から、実践的学習論の特徴として、以下の5点を指摘することができる。まず、①実践～学習の反復を行う、生産（＝経済）学習を基盤に置いた徹底した実践主義の学習・運動論である。次に②その組織の基盤として単位団＝地域青年団を重視する。しかし、単なる地域網羅的な青年団や、「素朴な結合要求」による半目的集団は否定し、単位団の目的集団化、単位団中の機能分化を目指す。そして、③生活記録、そして青年演劇をはじめとした文化活動やその他レクリエーションもそれを単独の活動とせず、学習の方法・実践の過程として位置づけた。そして、④実践・学習・組織の相互関連と相互規定の提起。これはその課題（実践目標）の大きさと困難度、事業の規模によって、取り組む集団の規模が規定されていくべきとする。最後に、⑤強い指導能力を持つリーダー育成の提起であった。

33)葉タバコ耕作安定化運動は、1956（昭和 31）年に葉タバコ生産が盛んであった東磐井郡の郡青年団体協議会が、専売公社が示した耕作反別の減反方針と収納価格の引き下げに対し、生活自衛の観点から郡全体の問題として取り上げたことが発端であった。その後、4Hクラブ、農協青年部等と連合して反対運動を始めた結果、翌 1957（昭和 32）年4月に郡下耕作者大会にまで発展した。県青協も支援に当たただけでなく、日青協でも緊急動議が採決され、結果として全国的な支援と世論の支持を受けた。そして運動が全国的に波及した結果、専売法改訂・耕作組合法成立が見られた。こうして、葉タバコ耕作農家の権利に関する一定の擁護が 1958（昭和 33）年までに確立したといえる（筆者仮名「葉たばこ耕作安定化運動―東磐青年運動として―」、岩手県社会教育協会編・発行『北の生活』第四号、1960、p.80、村上恵三編『岩手県青年団運動史〈県青協編〉』岩手県青年団協議会、1963、pp.106-108）。

34)1961（昭和 36）年度に全国青年問題研究集会で報告されたのが、県青協の推進した「任意制公営立会演説会」と「任意制公報発行制度」設立運動であり、買収、供応などの金権選挙肅正をはかる選挙公明化運動の発端として知られた（日本青年団協議会編・発行『日本青年団協議会二十年史』、1971、p.370）。この選挙公営化運動もほぼ余マス闘争と同時期に、菊地が会長を務めていた衣川村青年団体協議会と婦人会の運動が発端となり、全県的に取り組まれていったものであった（著者無記名「地方自治の確立をめざす選挙公営化条例制定運動」、日本青年団協議会編『仲間の実践に学ぼう―活動家の手引第2集』日本青年館、1966、pp.113-123）。

35)松岡新五郎「余マス廃止運動」、岩手県社会教育協会編・発行『北の生活』第四号、1960、pp.68-69。

36)「いんたびゅー 砂漠植林ボランティア協会会長 菊地豊さん―衣川村」、『毎日新聞岩手版』2002年1月13日。菊地は1932（昭和7）年生まれで2018（平成30）年没。

37)菊地豊談（2001（平成13）年10月22日）による。

38)同上。

39)33)前掲、村上編、pp.213-216。

40)36)前掲。

41)なお、当初は、1959（昭和 34）年9月30日付の「岩手日報」朝刊に掲載された川村光夫（湯田ぶどう座主宰）による、「青年演劇の新しい方向 まず対象を見つめよう 青年大会演劇部門を審査して」に始まり、本文中に挙げた同年10月7日付の「岩手日報」夕刊「夕刊論壇」における、池野の「青年演劇の疑問に答える 青年演劇の審査をめぐる」、10月12日付「夕刊論壇」の川村光夫「演劇のあり方」、11月15日付朝刊「青年演劇の意図と方向 青年大会参加安代青年会の『え小屋』をめぐる」、1960（昭和 35）年5月17日付朝刊小林和夫（劇団「詩人部落」）「青年演劇を顧みて」と、ほぼ共同学習の一環

として学習過程を重視する志向が共通して示されていた。

42)33)前掲、村上編、p.199。

43)吉田昇「共同学習のすすめ方」、吉田昇・福尾武彦・碓井正久・小川利夫『青年の学習運動』農山漁村文化協会、1959。

44)三輪建二「補論 戦後日本の社会教育・生涯学習方法論」(同著『現代ドイツ成人教育方法論』東海大学出版会 1995、p.399。

45)永杉喜輔「青年教育」、永杉喜輔・藤原英夫編著『社会教育概説』協同出版、1967、p.64。

46)同上、p.66。

47)岩手県青年団体協議会編・発行『青年団 30 周年記念誌』1981、pp.199-206。

## 第6章 若者の「たまり場」づくりの消長過程とその帰結 —岩手県旧三陸町浦浜青年会館の事例を中心に—

### 第1節 問題の所在

全国で青年団の再建や再編の動きが顕著となった1973年頃から1982年頃までの一時期は、これまで繰り返し述べてきたように、「青年団第二の高揚期」と評価される<sup>1)</sup>。第3章第3節で整理したように、この時期には、やはり前述のように那須野隆一によって生活集団論が提示され、「たまり場」が評価された。さらに同時期には、青年会館建設運動が日本青年館の新築運動と相まって展開し、そこでは「たまり場」が具体的な施設空間として語られた。特に若者の「たまり場」づくりと評される小規模な青年会館の建設においては、当事者からも「たまり場＝施設」とする傾向が強かった。公民館施設においても、同様の志向を以て青年室等の設置が行われた事例もある<sup>2)</sup>。

さらに、1970年代以降から1980年代は、公立の青年の家建設だけではなく、公民館の独立館化・デラックス化がはかられた。さらには、コミュニティ政策の進展から、各地にコミュニティセンターが建設されるなど地域集会施設<sup>3)</sup>の整備が進展していった時期であった。この時期にあえて小規模な青年会館建設が行われたことには、いかなる意味があるのだろうか。これまで、これらの小規模な青年会館の建設からその消長に関しては、当時の青年の志向に即した具体的な検証は行われているとはいえない。

ゆえに本章では、1973（昭和48）年に建設された小規模な青年会館に関して、その建設の過程とその後の使用状況を、特に他の地域集会施設の整備状況に着目しながらたどり、青年会館建設の意味を解明することを目的とする。本章では、その事例として、岩手県で1975（昭和50）年から1977（昭和52）年まで、県青少年会館建設運動と結びつけられて展開された「広場・たまり場」運動<sup>4)</sup>において、そのモデルとされた気仙郡三陸町（現：大船渡市三陸町）浦浜青年会館建設を主に取りあげ、当時の諸記録と関係者の証言<sup>5)</sup>に基づき検討を加えるものとする。

### 第2節 三陸町浦浜青年会による青年会館建設

#### （1）「浦浜青年団」から「浦浜青年会」へ

旧三陸町は、岩手県の南東部、三陸海岸に面して位置する。北上山系が海岸線にまで迫るリアス式海岸であるゆえ、耕地が少なく、必然的に半農半漁の生業形態がとられてきた。現在も近海漁業と養殖業、それらに付随する加工業への依存が高い。1956（昭和31）年、気仙郡綾里（りょうり）村、越喜来（おきらい）村、吉浜村の三村が合併し、三陸村が成立し、1967（昭和42）年には町制が施行された。2001（平成13）年10月に大船渡市に吸収合併され、現在大船渡市三陸町となっている。人口動態のピークは1960（昭和35）年の11,417人、青年会館建設直前の1970（昭和45）年の総人口は、10,279人、合併直前の2000（平成12）年は8,590人であった<sup>6)</sup>。

なお今回、主にとりあげる「浦浜」とは、旧三陸町内の越喜来小学校区（浦浜南・浦浜西・浦浜仲・浦浜東・泊の5行政区）を指す地域呼称である。ここには、越喜来地区<sup>7)</sup>の総人口のほぼ半分が集中している<sup>8)</sup>。この浦浜の中心、浦浜川脇の狭小な平地には、小規

模ながら商店街も形成され、役場や中央公民館、診療所などの旧三陸町の主要施設、さらには越喜来小学校、中学校も立地する。

この浦浜では、戦前に「浦浜青年団連合会」が存在した<sup>9)</sup>が、戦後になって新たに浦浜青年団が1946（昭和21）年に創立された。昭和31（1956）年の町村合併により三陸村が誕生した際、三陸村連合青年団が成立している<sup>10)</sup>。

浦浜青年団は、1964（昭和39）年に「一部団員のささいなでき事により動きがとれなくなり消滅した形となり<sup>11)</sup>」、ある発起人の呼びかけにより、同年8月8日に「浦浜青年会」が発足した<sup>12)</sup>。この浦浜青年団が「浦浜青年会」となったときには、若者の風紀の乱れに際し、無実化しつつあった青年団を実体化させることをねらい、元教員らの教育委員会関係者が大きく関わっていたという。そのあたりの事情を1945（昭和20）年生まれのア氏が語っている<sup>13)</sup>（——は筆者、以下本章同じ）。

（A）なんぼもたたないうちに、... 前には「団」っていうのがあったけども、無くなって、最初は「団」だったのやっぱ。それではダメだっていうことで、ほら、いろんな人が集まったもんだ。ほら、あのう、グループっていうか、暴走族いるんだやっぱ、その組織があったのがね、先生（筆者注：上掲の元教員）がひとまとめにしたもんだから、なかなかやっぱその、青年「団」としても、一年に会長三回代わるくらいね、あのう、勢力争いがね、あるもんだからね、なかなかまとまらなかったの。そして、それではとてもだめだと、で、一派が青年団をあきらめて、青年「会」ってものを組織したのす。

（中略）

（A）学校上がって（筆者注：卒業して）、2、3年は今言った通り、グループってえかあるいったんだとも、うーん、今言った通り、おらもその頃は、オートバイが流行でね、ここってえば、気仙沼までね、自然に、こうなんだ、行くとね、集まるもんでね、誰ってこと知らないで、顔だけで名前は、わかんなくてもね、それで、そのなんだ、今言った通り、国道をね、走るだけんどね、今で言う暴走族だね、

——（笑）

（A）もう、警察さえもぼっつけねっていうくらい（笑）

——（笑）

（A）そういうことやってるから、そんじゃだめっていうことで、あのうほら、先生（筆者注：元教員）が団を発足するのさ。

そのため、集会時には常に大人がついていたともいう。やはりA氏は、そのことをこのように回顧している。

——（青年会を結成した）最初は、その先生なんかも顔を出したもんですか？

（A）うん、先生は、いねば...、いねば、こうなるし（と、腕を組んでじっとにらむまねをする）、いねば、まず（笑）。何言ったって、ほら、恩師だ、おっかねえ先生だったからね。

——この、作る頃までは、先生はもう、青年会館を作るあたりはもう来ませんでした？

（A）うん、その頃は先生は死んでいなかったからね。

上記の証言と併せ、結成当時の行事の内容・数から見ても、浦浜青年会は、当初、決して主体的な組織でなかったことがうかがわれる<sup>14)</sup>。

## （２）青年会活動の活性化

ところがその浦浜青年会は、1970年代になると一気に活性化する。その発端は、浦浜念仏剣舞<sup>けんぱい</sup>の復活に関わったことであつた。浦浜念仏剣舞は、気仙地方に多く伝承されている民俗芸能・念仏剣舞の一種である。戦後になって一時期廃れていた<sup>15)</sup>が、1970年頃、駒沢大学の研究グループが調査に訪れたのを契機に復活したという<sup>16)</sup>。1972（昭和 47）年となり、前会長であつたA氏が主導し、青年会が剣舞の復活を担うことになった。このとき、勤労青年サークルを結成し活動していた経験を持つB氏（1946（昭和 21）年生まれ）が青年会に加入し、後にA氏とともに剣舞の中心的メンバーとなる。こうして、同年7月から剣舞復活への取り組みが始まった<sup>17)</sup>。B氏は革新系の立ち位置でサークル活動を展開していたが、剣舞に強い関心を持っていた。このあたりの事情をB氏はこう語っている<sup>18)</sup>。

（B）だから、オレはその時には、別な、要するにあのう、なんていうかな、歴史的な青年団なんだけども、そこに集まれない、別なものが出てきてるわけだね。気のあつた同志が、小グループを作って、いろいろ楽しむという。動き始めた時期なんだね。この、田舎ではね。ただ、「青い海の会<sup>19)</sup>」っていう、会の名前をつくってね、で、10人、20人弱のグループだったんですけど、それでいろいろあのう、文集を作るとか、あのう、要するに、歌を覚えるとかね、そういったあのう、まあ、特に拘束されない、サークル活動って言うのを、われわれが展開してっただです。

——なるほど、

（B）まあ、その結果が、あのう、要するに、なんていうかね、警察の干渉が始まってだね、要するに「青い海の会ではない」と、「赤い海の会」だっていうので、そうした、あのう、なんていうか、密かに、マークされるっていうかね、そういうような中で運動したっただです。だから、そうやって、こっちはいろいろ若い衆の歌を歌うって、別にね、流行歌歌うとかでねえんだけど、いろんな歌も教えられたり、フォークダンスやってみたり、そういう普段の、たいした問題にならないようなことが、問題になっていくんだね。古い、しきたりにこもった青年団活動が、こう息詰まって来ている最中に、片方が、あのう、やっぱ楽しそうにやってるとというのが、ちょっと面白くなかったという面があると思うんだね。

——あー、なるほど。

（B）そういう面で、ちょっとあのう、うーん、Aは今、この鹿踊り<sup>しし</sup><sup>20)</sup>にも入ってきているが、うーん、彼らとはオレ同級生なんだけども、彼は青年団、オレはサークルのほうだっということで、一時そういう面でこう、横ズレがあつただけどもね、

——ま、それは正直に素直にお話しされてましたよ。昨日。

（B）やっぱりあのう、青年団は青年団の、長い歴史があるっていうことはあるかもしれないけども、新しい物を受け入れるか入れないか、っていうそういうまあ、どっちかとい

うと保守的な要素をもったまま来ている青年団だからね。

——昨日うかがっていますと、Aさんたちがやった頃の青年団を聞きますと、どっちかというと、親睦団体の色合いが、旧来からのですね、それが強いかなって聞いていたんですけども。もっと違ったものを、

(B) どっちかというとな、その一種の殻にとじこめられないで、やってきたって言うのは、俺たちのサークルだった。

——なるほど。

(B) それは、長いこと続かなかったけどもね、やっぱりね、そういうものをしめつけるようなところで、発生していくもんだからね。だから、あのう、何年頃なのかな、その、40一、6年頃にね、その、三陸村の青年団を、どうするかっつことね、当時の役場の議場を使ってね、あのう、協議した時があるんだでば。

——青年議会とかっていう名前ではなくて？

(B) そんなもんでなくて、この青年団の活動をどうするかっていうことで、それに、オレ、青年団に入っていないときなんだとも、まあそういう、青年活動をしているというので、はめさせられたかもしれねえけども、それで、ええ、解散したら、っていう話までにいったんではないかね。あの時に。

——なるほど。

(B) 解散、いったん解散して、新たに作り直したらどうかって言う発言をめぐって、また紛糾するんだよね。けども、結果的には青年団は、生き残りをかけるわけさ、そこで、団長を変えたりしてね、で、あたらしいメンバーでスタートしていくんだけど、そういうなかで浦浜もまた、浦浜なりの動きをとってたんでねすか。私はまだちょっとね、はまってないから。わかんないども。後は、オレが関わったのは、剣舞をやるというのでね、入ってくるんだけどもさ。

——なるほど。

(B) あのう、青年、青年会、当時オレ役場にいたからね、駒沢の、駒沢大学からの調査に来たいという、話が役場を通じて話があったように記憶してるんだけど、それでその浦浜の念仏剣舞が、あるはずだというわけでね、それで、ご老体にその、せっかく来るのに、踊れない、踊ってみせられないというのもおもしろくないから、まあ、あのう、踊りを教えてもらって、それでその、駒沢の学生と、いろいろと交流したらいいんじゃないかと、それから始まってるんだでば。浦浜剣舞ってのは。

——はあー、なるほど。

(B) それまでは、ずっと踊り休んでね、3年ぐらい踊ると、もう10年近く休むという、そういうクセのあるこの浦浜剣舞だったんですね。休み期間のほうが、あのう、こうずっと長くて忘れかけられているっていうかね、こういう中であのう、やりたいっつうことでね、浦浜青年会がほとんど、メンバーだったんですよ。で、浦浜青年会に入っていない、メンバーも、何人かいたんです。オレと同じような部外者がね。それで、部外者も結構集まってやり始めたけどもね、最後に残ったのが10何人なんです。で、その母体が、結局、浦浜の青年会になってしまった。

——なるほど。

(B) で、その浦浜の青年会の中に、まあちょっと毛色の違ったオレが入ってしまってね、



だから、全然その、最初あのう、Aが、会長をしてたんだけどもね、入れないんだから、オレを青年会に。

———そうですか、

(B) だから、入れなくていい、と。入れたくないつつんであれば、青年会に入るためにでなく、オレは伝統芸能を覚えたくて入ったのであって、イコール青年会に入るという意味ではない、と。加えないっていえば、それはいらない、と。それ以上の要望はない、と。だから、オレは逆にあのう、「踊って踊って踊り抜かない限りはこの連中とは組めない」と思ったの。

———なるほど。

(B) だから、(数語不明) 練習もしたし、そういうので徐々にうちとけてったんです。

———なるほど。

(B) あの、あそこでオレはやっぱり、やめてしまえば、未だに退いて終わりだったの。

この時期の浦浜青年会の人員構成と活動内容を見てみよう。「昭和 47 年度気仙地区青年団体研修会資料 浦浜青年会の実態」によると、1972 (昭和 47) 年度の会員数は男性 8 名、女性 10 名の計 18 名である。また同年度の会の行事・事業は、【表6-2-1】の通りである。その中で三陸町連合青年団主催のスポーツ大会と、年末に行われる歳末助け合いの芸能大会が主要な行事として認識されていたことが証言からうかがわれる。さらに、「浦浜青年会の実態」には、「慣例として」、町民運動会と盆踊りの運営を行っていたとある。

同じく【表6-2-1】におけるゴシック体の行事・事業は、同年度に新規に企画されたものであるが、この年度に行事・事業が増加し、地域奉仕活動や老人ボランティア活動が盛り込まれていることがわかる。

再びA氏はこのあたりの意識の変化をこう語っている<sup>21)</sup>。

(A) 「青い海の会」ってね、

———はい、? 「青い」、

(A) うん、「青い海の会」ってね、おらたちの青年会とはまたちがったサークルがあったの。この人達はね、純粋な奉仕活動っていうか社会に対してのね、あの、古い切手集めて、いまでいうボランティアだね。ああいう活動してらったの。そして、その人たちがね、解散するから、おらほの青年会に入りたいと、自分たちの会さ。... ただね、考えがおらたちはそういうなんだ、マジメなって言うかそういう、もともとはいろんなグループ集まって、やってきたあれだし、奴らはすごくそういう、社会的な、考えがね、カリッとした奴らだったからね、やっぱり最初は、ちょっと、むずかしいなあって反対してらったの。... でもね、青い海の会の会長 (筆者注: B氏) はね、どうしても入りたいと。まあ、っていうことで、いろいろ話ししながらも、一緒になってある程度はちょっとはね、いっときうまくなかったけど、入ってうちにね、その、今までの考えまるっきり違ってるね、あのう、青年もね感づくっていうかね、違う考えもあるんだって言うことでね、... なおさらこの建物 (筆者注: 後述する浦浜青年会館の建設) に対してはね、集中力が違ったの。

———は一、

【表6-2-1】 1972（昭和47）年度の浦浜青年会の行事・事業

三陸町連合青年団行事	浦浜青年会独自企画行事・事業
1 気仙地区青年大会（体育部門）	1 美化運動（道ばたバス停などに花だんをつくる）
2 研修旅行	2 山菜取り（ピクニックと実益をかねる）
3 文集発行	3 単位団交流会
4 三陸町青年スポーツ大会	4 新会員歓迎会
5 歳末たすけ合い芸能発表大会	5 文集発行
6 青年の主張大会	6 生活記録（あとで集録してプリントする）
7 気仙地区青年大会（文化部門）	7 河口海岸そうじ
8 岩手県青年大会参加（体育部門）	8 青年会事ム所作り
	9 盆踊り大会
	10 相撲大会
	11 老人世話活動
	12 町民運動会
	13 正月もちつき大会
	14 映画鑑賞
	15 女子活動（茶道）

（「昭和47年度気仙地区青年団体研修会資料 浦浜青年会の実態」より筆者作成）

※元資料では表の形式になっていないため体裁を変えたが、表現はそのまま記載した。浦浜青年会独自企画行事・事業において、前年度にはなかったものをゴシック体とした。

【表6-2-2】 1974（昭和49）年度  
浦浜青年会の職業別構成

職業	男	女	計
大工	3	0	3
土建業	1	0	1
自営業	1	0	1
店員	0	2	2
会社員	0	1	1
事務員	0	1	1
調理師	0	1	1
保母	0	1	1
団体職員	0	1	1
公務員	3	2	5
主婦	0	1	1
家事手伝い	0	1	1
計	8	11	19

【表6-2-3】 1974（昭和49）年度  
浦浜青年会の年齢別構成

年齢（歳）	男	女	計
18	0	1	1
19	0	1	1
20	0	1	1
21	1	3	4
22	3	4	7
23	1	0	1
24	1	1	2
25	1	0	1
26	0	0	0
27	0	0	0
28	1	0	1
計	8	11	19

※大船渡市三陸公民館蔵 「昭和49年度三陸町連合青年団定例総会資料」により筆者作成

(A) やっぱりでもね、青い海の会の会員が、入ってきて、はまってきてくれないと、こういう大きな事業って言うのもできなかったかも知れない。

(中略)

(A) いろいろ活動しているうちに、あのう、はじめ外から見て、な～に、あいづらマジメすぎてどうのこうのっていう考えがね、なくなってね、同じ仲間って言うか、やっぱ意見がね、合ってきたって言うか、うーん、それによって、今までのごちゃごちゃ考えよりももう少し社会的なことをするって、それからいろいろ会館建てることによって、ま、んで、若い者を寄せただけではダメだと、若い者寄せるには、なんていうか、そういう婦人会活動とか、いろいろ、そういう、あるいは、もともとそういうことをやってきた人たちが、そっちの海の会だったの。そういうことをやることによって、親が子どもをあそこの会がいいから入れって言う、てかね、老人世話活動をやると、じいさんばあさんが、あそこの会がいいから入れって。そうすると(数語不明)会員も増えだったのす。

——は一、なるほど。

(A) 自主的な会、おらだちは、もう集められた会員だったからね、

——はあ一、

(A) 今言ったようにその、作ってもらったんだから。

——はあ一、なるほど。

このようにA氏は、地域サークル活動を実践していたB氏らが加入することで、会は半強制的に結成された受け身の集団から、自主的なものとなっていったと述懐する。

運営費は「浦浜青年会の実態」によると、会員から徴収する会費、そして山菜販売の売り上げ、行事における寄付金から成り立っていた。

なお、【表6-2-2】から 1974(昭和 49)年度の会員属性を見ると、第一次産業への専門的従事者はいない。さらに、【表6-2-3】に見るように、年齢構成も 20 歳代半ばまでの未婚の年代が中心となっており、30 歳前後までに結婚を機に退会するようになっていたという。なお、浦浜青年会は小学校区域で組織されていたことにより、そもそも行政区との結びつきはなかった。ゆえにその性格は、家族と同居して自宅から通勤する、多業種にわたる在村勤労青年のグループであったといえる。

### (3) 浦浜青年会館の建設の背景

ではなぜ浦浜青年会館は建設されたのか。建設の動機に関していくつかの証言がある。先のA氏は、B氏を初めとした自主的な志向のあるメンバーの加入によって会が活性化し、集まる場所が欲しくなったときに、町にもかけあったがうまく行かなかったと語る<sup>29)</sup>。行政区の公民館も使いづらいものであったという。建設当時の会長であったC氏(1947(昭和 22)年生まれ)も、それまでは各行政区にある公民館を利用していたのだが、鍵を借りることが煩わしく、そもそも行政区の都合が優先するため、「おらほう(筆者注:おれたち)で集めやすいところと作ったらどうかと…」いうことになったとする<sup>29)</sup>。

この二人の証言から、会合の増加によって行政区の公民館の使いづらさを感じていたことがわかる。このときに、三陸町の施設状況は以下のものであった。

同時期、三陸町では、まず比較的規模が大きい集会施設として、1970(昭和 45)年、

生活改善センターが役場からほど近い場所に建設されていた。さらに社会体育施設として、役場の脇に 1972（昭和 47）年に三陸柔剣道場が、1974（昭和 49）年には町民体育館が建設されるなど、1970 年代前半の三陸町では大規模な施設建設が進展していた。

このときに町の中央公民館は組織としてのみ存在していたため、一時期、生活改善センターに中央公民館事務所が設けられた時期もあったという。農水省関係の補助金で建設された経緯もあって、公に中央公民館とされた時期は短かったというが、1984（昭和 59）年に中央公民館が新築されるまでは、実質、中央公民館の施設機能を担っていた。

その他、公民館と地域集会施設に関してみれば、吉浜、越喜来、綾里の 3 地区ごとに地区公民館、そして集落ごとに部落（＝行政区）公民館があった。特に越喜来地区公民館は独立の施設を持たず、この時期には生活改善センター内に中央公民館とともにあった。

上記の主要な公共施設は全て浦浜地区にあり、浦浜青年会にとっては地理的には利用しやすい条件下にあったはずであるが、実態はどのようなようであったのか。

このことに関して、青年会館建設後に青年会長を務めた 1948（昭和 23）年生まれの D 氏は、1973（昭和 48）年 2 月 11 日に生活改善センターにて開催された「第 8 回三陸町青年の主張大会」において、「浦浜青年会館完成を真近にして」と題して意見発表を行った。この時の D 氏の原稿は、三陸連合青年団編の文集、『若もの 昭和 47 年度第二版』（1973）に集録されているが、ここでは以下のように当時の施設の利用しづらさが示されている。（以下、原稿からの引用は頁を付すのみとする。下線筆者。）

会館作りの動機を延べてみますと先ず使いやすい場所が欲しいということでした。集まりの場所は、部落公民館、又は商工会館を借りて行なっていましたがどこで集まりをもつ時も、なにか落ち着かないのです。そして、やりたいことをやれない。財産など置きたいものも置けない。いつも両手をいっぱいに広げることができず場所を借りる手続き、使用料のこと、使用のしかた等を考えることにあくせくしていた感じでした。そんな時、この会場である生活改善センターの一室を貸してくれるという話がありました。私も含め会員はやっと自分達の室を見つけることができた大喜びでした。ところが何がどうなったのか私はいまだにハッキリとした理由を知りませんが期待裏切られダメになってしまいました。みんなのガッカリした顔、今でも思い出します。しかたなく、再び以前のような方法で集まりは続けられました。そこへ今度は柔剣道場が建ち、その一室を青年に借せるような計画であるこということを耳にしましたが、半信半疑で受けとめていました。柔剣道場の新しい一室。しかし、これだって自由に使える訳はありません。なんと言っても柔剣道場の目的は柔道、剣道の習得の場であって青年の集会場所ではない訳です。ましてやその話もどこまで本当なのかわかりません。生活改善センターの二の舞を踏んではガッカリするばかりです。バラックでも何でもいいから自分たちの自由に使える場所が欲しい。これが会員の共通した気持ちでした。何にも束縛されない自分達の城、会員の夢でした(p.8)。

当時の三陸町では、上記のように大規模な施設の整備が進展していたのではあるが、D 氏の意見発表からは、青年会が生活改善センターの一室を利用できるとして翻弄され、さらには柔剣道場の一室を利用できる話が出ていたが、疑心暗鬼になっていたことがわかる。

さらに、当時の会員であったE氏（1951（昭和 26）年生まれ）も、生活改善センターに時間的な制約や、ものの管理があつて面倒であつたことが建設の発端となつたと証言している<sup>24)</sup>。

#### （４）建設着工

そして、1972（昭和 47）年の秋（11 月頃と推測される）のこと、三陸縦貫鉄道（現：三陸鉄道南リアス線）の越喜来区間の工事がほぼ終了した。その作業員宿泊所のプレハブの廃材を利用する話が出たことなどを契機とし、浦浜青年会館の建設が開始された。A氏は、このあたりの状況を以下のように回顧する<sup>25)</sup>。

———そうですか、... であのう、青年会館建てる時に、あのう、議論をしたって言いますが、あのう、最終的には払い下げがあるってことで、作ろうってことに、

（A）ええ、やっぱり、だから、こういうのも入ってくるし、あのう、なんだ、その集められた人でなく、自主的な人とかがだんだんに入ってくることによってね、あのう、集まる場所が欲しくなってくるんですよ。うーん、町さもかけあつて、いろいろ公民館なんてあのう、町の設備がでるんだけどもねえ、やっぱりそういう空いている部屋って言うか、もだし、ここではね、あだ、公民館づのは、地区にあつてもほら、自分のもんでないからねえ、好きなようには使えないしね、うん。

——なるほど。

（A）そういう意味で、ちょうど盛り上がり、っていうか、入ってきた盛り上がりで空気が一致したのと、材料があつたということだね、ほら、その資材っていうか、その、材料がね。

——はあー、

（A）偶然にもね、ここ、飯場ね、いわゆる飯場があつて、その飯場を利用するにいいっていうタイミングがね、ちょうど重なったというか、

——なるほど、

（A）それと、剣舞やるっていうことでね、目標がひとつに決まった、できあがつた。

——なるほど。

（A）浦浜青年会って言えば、剣舞青年会って言われるぐらいね、全員がその一つに目標、全国一になるって目標立てた。うん、小さいところにいたってしょうがない、先ず世の中出はってみるということだね、それも自主的に剣舞をはじめたんでねぐ、駒沢大学が来たことによって、そういう、なんてえかね、タイミング、ちょうどタイミングがね、いろんな面で

——揃ったんですね、

（A）うん、して、まとまってる、そのみんないくつという気持ちになってる時に、建てるっていう気持ちがね、みんななつたから、指導されながらも、夜毎日やって、一年近くはかかるんだけど、だれも職人一人頼まないでやるからね、うーん、

——やっぱり1年近くかかったのですか？

（A）うん、約ね。1年ぐらいかかったね。うーん。

D氏が、先に紹介した1973（昭和48）年2月の青年の主張大会の原稿で、「私の最近の日課は仕事以外のほとんどが青年団活動です。連合青年団の文化部活動もやっていますが、きょうまでの三ヶ月間、生活の一番のウェイトを示めたもの...それは私の入っている浦浜青年会の会館作りです（p.8）」としたように、着工から作業は翌年の3月まで続いた。

「とにかく一斉の工事を自分達会員の手でやろうということになり（p.9）」、「資金はありません。そのうちなんとかなるだろう。でも材料は鉄建々設から酒一升で譲り受けるものがあるし<sup>26)</sup>」というように、資材は自己調達であった。資金は公有林の刈り払い作業等で捻出し、土地は青年団OBの理解者から借地として役場の裏に確保した。木材はA氏や三陸町連合青年団の役員が、持ち山の木を伐採して提供したといい、さらにその他の建材等は大工をしている会員が調達した。

1972年秋の着工以来、平日夜間と土日に工事を行っていた。D氏はこの時の様子を、「母は家にいるのは、ごはんを食べる時と寝る時だけだと言ってあきれていました。仕事と会館作りのかね合いは私を苦しめました。私だけでなく会員の誰もが多かれ少なかれ同じような問題にぶつかったはずなのです（同上）」とすることからも、毎日の工事の負担が軽いものではなかったことがうかがわれる。「しかし会館作りは、楽しみでもあったのです。馴れない手つきでのクギ打ち、たまには手をたたいて泣き笑いをしたり、板を短く切って大工の会員にどやされたり、それでも毎晩作るのでも仕事の後が見えるの（同上）」のであった。

建設には、OBや三陸町連合青年団の役員などが駆けつけ、女性会員は夜食の準備を交代で続けた。この夜食は好評で、「私達男子会員にとってそれも大きな楽しみの一つでした（同上）」、「クギ打ちは嫌いでも夜食が食べたくて来た男子会員もあったかもしれません（pp.9-10）」とD氏は述べている。

このような作業を経て、浦浜青年会館は前述のように、翌1973年3月に完工した。床面積は約60m<sup>2</sup>、集会室・事務室・炊事室を持った平屋建ての建物であった<sup>27)</sup>。この建設は報道機関からの取材も受け、また県の社会教育行政もこの青年会館建設に注目し、岩手県青少年対策局、青少年育成県民会議が発刊する「青少年情報その3」（1973）に記載され、各市町村の青少年教育関係者に配布された。

### 第3節 会員から見た青年会と青年会館の位置付け

建設後の青年会館は、「（青年会員は）誰でも入れるように」鍵はかけず、利用ノートに記入するだけで自由に利用できた。町の配慮で固定資産税は半額に免除されており、水道光熱費のみを会費でまかなえばよかったという。このように、会館は青年会員限定のアジールとして存在した。

E氏は、建設後はお互いにしばらく集まらなかったが、またいつの間にか「夜に（会館に）電気がつくと、自然に何気なしに」集まっていたことを語る<sup>28)</sup>。実際は青年会館は剣舞の練習をするには狭く、練習場所としては使われなかったというが、先のA氏とC氏は、以下のように語る<sup>29)</sup>。

——かなり、毎日だからいろんな形で、毎晩なり集まっていたわけですね。

（A）うん。ま、剣舞してて集まらない日ねえんだもの。

(C) んだ。

——あ、剣舞いつも練習してたんですか。一年間にどのくらい練習してたんですか？

(A) 300 日ぐれえ。

——(笑) 300 日！

(A) そのぐらいしても全国で一位になれなかったもの。

——んじゃ、かなり毎晩、毎晩というか、練習したりしてたのですか？会館で。他に練習する場所なかったんですか。

(A) あるんだけど、おらだちだけが使えないからね。ほら、柔剣道場さ行ったり、あの生活改善センターさ行ったりね、昔の小学校の体育館借りたりはしたけどね。狭いもんだからね、うーん、ほんだけど、主には、会館でいうかね、終わって飲んでも、後かたづけそのままに、ほら、しなくてもいいし、そういう意味では、やっぱり自分のもんだからね、使いやすいから。時間に制限がないからね。

——なるほどそうですね。C さんもやっぱりかなり練習しました？

(C) (含み笑い) ああ、その当時だからね。

——踊って、その後飲む。

(A) そうそうそうそう。(笑)

(B) (笑)

(A) それが一番の楽しみでね、一升瓶おいて、お金、

——あ、お金入れて、

(A) 入れておく！それで、うん、買ってくるっていうか、

——なるほど。そうですか。

(一同笑い)

——春夏秋冬ずっと練習してるんですね。

(A) うん。

——なるほど。

以上のように二人は剣舞の練習後に荷物を運んでそのまま酒盛りをできる気安さを語り、剣舞の練習後は、懇親の場として機能していたことを語る。また、C 氏は以下のようにも回顧している<sup>30)</sup>。

——それであのう、どういうときに結局使っていたんでしょうか。

(C) ..... どういうときってのも (笑いながら)

——どったなときに集まってましたかねえ。

(C) ... なんだかんだほらあ、集まり、

——はい、月 1 回とかあったもんですか？

(C) 1 回以上集まったんでねえかなあ。

——はあー、

(C) もっと集まったんでねえの。行くところねえから。

——はあ！

(C) あの当時はねえ。今みてえに遊ぶ場所も行くところもねえしって (笑)。

——じゃ、ほんとに、仕事終わって家でメシくったりすると、

(C) んだねえ、

——ぷらっと集まるような

(C) ぷらっと、(笑)

——はあー、集まって何やってらったんですか (笑)

(C) まず、一升瓶でねえの？ (笑)

—— (笑)

このようにC氏は、「あの当時はねえ、今みてえに遊ぶ場所も行くところもねえしって」というように週に何度も集まっては酒盛りをしたことを語っている。また、建設後の青年会長であったD氏は、連夜の集まりで議論が進むため、無理しても通ったと回顧する。D氏曰く、当時からメンバーは明確に自民党支持、社会党支持、共産党支持といったように党派性を有しており、日々、激論を戦わせたという<sup>31)</sup>。

女性会員はどのように思っていたのか。F氏(1951(昭和 26)年生まれ)は当時、建設時には交代で夜食を作っていた女性メンバーであった。D氏と一緒に当時を回顧してもらった<sup>32)</sup>。

——あのう、女性会員、青年会館建てた後に、あの、集まりましたっか？ていうのは、定例会って多分あったと思うんですけど、

(F) 結構集まったよね？ 青年会館には毎日行ってるような形でしたね。

——はいはい。ご実家はどちらのほうだったんですか。下の、

(F) 小学校の上のほうなんです。

——あ、そうなんですか。あ、なんていう旧姓だったんですか？

(F) 難しいですよ。〇〇って。

——あ、〇〇さんですね。けど、字かけません、すみません (笑)

(F) (笑)

(中略)

——毎日集まってたってのは、何か理由は、特に。

(F) なんだったんでしょうね、その頃はあんまりね、(数語不明)

——じゃあ、別に、

(F) 何をするっていうんでなくてね、2、3人で電気がついていけば、飛んでいくっていう感じ (笑)。

——なるほど。

(F) 毎日行って、仲がいい子がいるんだよね、

——発表会とかの練習も ...

(F) クリスマス大会とかってね、今思うと子どもみたいなこともやったよね (笑)

——逆に今、思ってみますとね、例えばご結婚前の実際、3、4年前だったと思うんですけども、高校出た後に、こういう青年会っていうのがなかったらどうだったと思いますか。なんか抽象的な質問ですけど。たった3、4年だったと思うんですけど、多分、就職された年ですよ、



(F) なかったら、  
——なかったらとしたらどういうふうに思いますか。  
(F) なかったら ...、仕事一筋で (笑)  
——うーん、  
(D) オレは男だから、やっぱり飲みに行っっては話をして、あの、仲間を求めたんだなって ...  
  
——あんまり、その、女性だからって言うのもあるんですけども、なんか言われませんでしたか、出てくときに親御さんとかから？  
(F) そうですね、出るなって言われても行く (笑)  
——でもまあ、そんなもんだって思ってたんですかね、  
(F) うーん、... 言われなかったけどもね、言われたけどもね、なんかは。  
——なるほど。  
(F) 怒られたには、怒られたねえ。  
—— (笑) 何時ぐらいまで、普段は、まあお仕事あるっていうのはあると思うんですけど。  
(D) 11 時 .....  
(F) 青年会だよ、その日のうちには帰って来たと思うけど ...  
——なるほど。  
(F) 次の日になった覚えはないね。

また F 氏と親しい女性会員であった 1951 (昭和 26) 年生まれ G 氏にも当時を語ってもらった<sup>33)</sup>

——仕事から帰ってきた後なんかに、集まったもんですか、よく。たとえば行事とか ...。  
(G) 行事なくても、な。  
(F) (笑)  
——行事なくても、  
(G) うちさ来る前には寄るわけだ。  
——帰る前にですか。  
(G) うん、うちさ帰る前に寄るの。  
——ほー、  
(G) んだからねー、  
(F) 電気がついてれば行くっていうし (笑)  
(G) うん、電気がついてれば寄るって、電気がついてねばつけた (数語不明) なわけ、  
——はい、鍵はかかってなかったって  
(G) 鍵なんかな、かけてないものな。  
——はー。なるほど。家に帰る前って、夕食なんかは、食べてから  
(G) 食べたり食べなかったり、腹減ればパンくらい買って食ったかなあ。  
——ふんふんふん、随分目立つところだったんですよ、その場所は。  
(G) (F) (小さい声で会話)

——コタツとかはあったんですか、冬場は。

(G) (F) あった。

——あのう、独りでいったもんですか？

(G) ひとり、つつことないもんねえ。あ、行っても

(F) だれかいたったし、

(G) だれかいるし、

(F) 待ってれば

(G) 独りしても、わたしのほら。いところが、まず一緒にいかさったから、

——はい、

(G) 男でも、

——はい、

(G) 別に、男、女も関係ねえもんな

(F) うん。

(G) 兄弟、っていうか、兄弟とは違う親しみだしな。

(F) うん。

——はあー。

(G) 別に、そんな

(G) (F) (内輪会話)

(G) とにかく、時間が来れば勝手にいかさるっていう感じだべなあ。行くにいい人は。

——ほとんどじゃあ、

(G) ほとんどねえ、

——行けるときは、

(G) うん毎日、来てるっていう感じだから、来ねづど、あれ今日何してこねべってなあ。

(F) うん

(G) 反対に思われだりして

——はあー。前も質問したんですけど、親御さんは何もいわなかったんですか。

(G) な〜んにもいいません (笑)

(F) (笑)

—— (笑)

(G) 何にも言いません。(笑) 今は自分の子さは早く来どかって (笑) いうけども。

—— (笑)。言わなかったんですかね、いいたくても言えなかったんですかね。

(G) でも仕事も結局忙しいし、そんなことさ構ってられるもんでもないし。

——ああー、ご実家のお仕事って言うのは、

(G) うーんと、うちでその頃は、牛が 10 何頭いたんだね、

——はあー。

(G) それでも、帰れば、朝の時間はちゃんと仕事はしたしね。

——なるほど。

以上のように、「とにかく、時間が来れば勝手に行かさるっていう感じだべなあ。行くにいい人は」、「毎日、来てるっていう感じだから、来ねづど、あれ今日何して来ねべっ

てなあ（筆者註：今日はどうして来ないのか）。反対に思われたりして」といったように回顧することからも、毎日の仕事後に会館を「たまり場」として集まることが、会員にとって日常の営みとなっていたことが読みとられる。とても強固な親密圏として、青年会館が会員の日常に位置付いていたことがうかがわれる。

#### 第4節 念仏剣舞の全国大会出場とその後

##### （1）念仏剣舞の全国大会出場と会館への注目

1973（昭和48）年は56日間の練習を重ね<sup>34)</sup>、浦浜念仏剣舞は、第22回岩手県青年大会郷土芸能部門に出場するが、優秀賞（2位）に終わった。翌1974（昭和49）年は、1月から7月までで63日間の練習を行った<sup>35)</sup>。この年は県青年大会郷土芸能部門で優勝し、第23回全国青年大会郷土芸能部門に出場して努力賞を得た。また、同年中は盆中に地域内を廻るだけでなく、アトラクション、テレビ、発表会等に17回出演した<sup>36)</sup>が、衣装を他地域の剣舞に似せて変え、公演用に踊りを変化させたことや、積極的に公演活動を行う姿には、従来の「伝統」との絡みにおいても批判が生じた。

さらに翌年は連続の大会出場も制限されるため、剣舞の練習はこれまでのように大会出場が目的ではなくなり、練習量も減少する。そして剣舞の中心メンバーによる「剣舞青年会」の強調は、全国大会出場以後の青年会のあり方をめぐって会内の齟齬を生み出し、下の世代もこの剣舞伝承の強調に違和感を持つこととなる。その後、剣舞の中心メンバーが、浦浜にかつてあったという鹿踊りまでも他地域に行って伝習した<sup>37)</sup>ことから、彼らは「踊り」に特化していったことがうかがわれる。

同じ1974年は日青協新聞岩手版が創刊されたが、創刊号の5月25日号には当時高まっていた県青少年会館建設運動の記事に浦浜青年会館の写真が添えられている。そして6月25日号には、地域開発実践活動研究協議会での報告内容が記載されており、三陸町からは浦浜青年会館建設の事例が、「手づくりの会館づくり」として報告されている。さらに同新聞の11月25日号には、「浦浜青年会館建設記」と題して、前掲したE氏の意見発表の文がそのまま転載されている。

このように、1974年には浦浜青年会館が県青少年会館建設運動におけるモデルとしてとらえられ、翌年度に提唱された「広場・たまり場」運動においても「たまり場」のモデルとされたのであった<sup>38)</sup>。しかし、青年会館が日常的な「たまり場」として機能したのは、1974年度の念仏剣舞の全国大会出場時がピークであった。これは次第にメンバーが結婚・引退していったことだけではなく、日常的な活動の基盤であった剣舞と青年会が分離していったことが背景としてある。

##### （2）剣舞と青年会の分離、そして会館の取り壊しまで

剣舞と青年会の分離に関しては、練習の厳しさや指導法への違和感等が原因として指摘される。剣舞開始時に高校を卒業し入会したばかりであった元会員は、「剣舞青年会」になってしまい、それに関心のない若者が入会しなくなり、特に男子が少なくなってしまうとする<sup>39)</sup>。青年会と剣舞との結びつきが公式上確認されるのは、1985（昭和60）年が最後である<sup>40)</sup>。なお同年には男性19人、女性7人、計26人が会に在籍しており<sup>41)</sup>、会員数の減少が、剣舞と青年会の分離の直接的な要因ではないことが裏づけられる。その後、

念仏剣舞は、復活させたグループが中心となり、1973（昭和 48）年に結成した保存会が継続させ、保育園・小学校での指導に重点を移した<sup>42)</sup>。

会館に関しては 1980 年代になって入会した会員は、既に建物自体が傾き、利用に支障を来すほど雨漏りをしていたため、会館を補修した経験を語っている<sup>43)</sup>。この証言からは、建設後 10 年あまりで、会館の利用の停滞化・管理の粗放化が生じていたことがうかがわれる。会員数は 1980 年代においては、20 人ほどで推移していった。

なお、剣舞以後、会員が夢中になったのは、町主催の歳末助け合いで催される演芸会での劇や踊りの披露であった。この入場券の売り上げが社会福祉協議会へ寄付されるため、非常に活況を呈していたという。練習とその後の宴会が続き、家に帰らない者もいたという<sup>44)</sup>。しかし、三陸町連合青年団全体としても行事が減少し、また町主催の行事の運営、特に歳末助け合いとの関わりが失われていく中で、浦浜青年会も有名無実化した。

なお、また 1990 年代には、連合青年団が劇団公演の召致運営を行う際の集会場として使用したことを契機に、青年会館にかつての濃密な利用状況が形成されたこともあった<sup>45)</sup>。近くにある中央公民館は 21 時までしか使えないため、鍵を閉めないでいつでも入れる便利さゆえであったという。このときは浦浜青年会というよりは、連合青年団のたまり場となった。特に 1992 年頃がそのピークであったという。

このときもやはり「電気がつくと誰かが来る」状況であったという。毎週土曜日に鍋を囲んだりしていた。意味もなく毎日ビデオで 1986（昭和 61）年公開の映画「天空の城ラピュタ」（宮崎駿監督）を流しており、台詞を誦んじられるほどになっていたという<sup>46)</sup>。

しかし、以上のように青年会が行政主催の諸行事と関係が切れ、活動が定例化しなくなったことで利用の粗放化が再び進んだ。また、その当時のメンバーも結婚していった。結果、老朽化と利用の減少に伴い、青年会館は 2001（平成 13）年に解体された。

## 第 5 節 考察

### （1）青年会館利用の停滞に関して

なぜ青年会館は使われなくなったのか。これまでの検討からみて、浦浜青年会館の「たまり場」としての利用は、会館建設と剣舞復活という積極的な活動に関わりながら、利用者たる会員の中に密接な関係性が形成されていったゆえであったといえよう。その意味で浦浜青年会館は、その世代にある会員たち限定の「たまり場」であり、アジールなのであった<sup>47)</sup>。この点は、第 3 章で述べたように、同時期から展開されていく生活集団論における、「たまり場」を具現化していたものとして評価されよう。前述のように、会館に集ったメンバーたちは、隠さずむしろ各々の支持政党や思想背景を明示して、毎晩激論を戦わせていたという。その対話による合意形成が、この「たまり場」をハード／ソフトとも創り出してきたのだと言えよう。

しかし、浦浜の事例は、「たまり場」を基盤とした、生活集団論の行く先をも示していた。青年会という、年齢による引退原理を持つ組織の構成員によって形成されていた「たまり場」は、彼ら／彼女たちの引退に伴い、喪失されていく可能性である。特に浦浜青年会は、社会教育行政との関わりをほとんど持たず、自主的に活動していたことも大きい。ここに青年層を対象とした青年団やサークルの消長に関わる、法則性の存在が示唆される。

なお、浦浜青年会館建設当時の会員間、さらには建設を手伝いに来ていた周辺の青年団員らの間で多く結婚がなされていることが確認された<sup>48)</sup>。これは当時の浦浜青年会の活況が、親密圏をもとに成り立っていたことをうかがわせる。

先に挙げた岩手県の「広場・たまり場」運動の中では、いくつかの青年会館が建設された。その中で 1977（昭和 52）年、中学校区の青年団によって建設された旧川井村（現：宮古市川井）小国青年会館は、喫茶店「灯」を併設するなどして全国的にも注目されたが、浦浜と同様に早期に利用の停滞をみせた<sup>49)</sup>。

このように、青年層に利用を限定した施設や空間は、その利用者層の世代交代やミッションの終了によって利用が停滞化する可能性がある。全国的に見ても、規模の大小にかかわらず、青年会館建設とそこでの実践に関わる議論が 1980 年代まででついていった<sup>50)</sup>のも、このことが大きな要因となっていたことが想定される。

## （２）青年集団の引退原理と施設空間

全国的にみると、1965 年前後から 1970 年代にかけて、都市型公民館を前提に公民館が教育機関たることが強調され、いわゆる「公民館の近代化」論が展開する。結果、施設としての公民館のデラックス化が進み、教室・講座、高度な系統的学習を行うセミナーなどの充実化が試みられていた<sup>51)</sup>。

浦浜青年会館が建設された時期の旧三陸町でも、その直前に建設された生活改善センターが中央公民館として位置づけられ、多彩な学級・講座が実施されていた<sup>52)</sup>。しかし、そこは青年会の日常的な利用の要求が高まったときでも、活動の拠点とはならなかった。長澤成次も、この時期の青年会館建設運動に関して、浦浜と同様に新築された公民館の夜間等の利用しづらさが固有の施設建設要求へと向かったことを指摘している<sup>53)</sup>が、施設整備がかえって住民の学習活動を制約することにもなりかねないものであった。

この時期の浦浜青年会の主要なミッションは、伝統芸能の継承という文化財保護・振興の担い手としてのものであった。くわえて浦浜（越喜来小学校区）の盆踊りの運営等を行うなど、浦浜青年会には地域の公益団体としての意味があったのである。それらの活動に関わって、会が行政に求めたサービス（日常的な活動場所の確保）は、会員自身が供給主体となり、かつ受給者となることで解消された。その意味では、市民的公共性を具現化した事例としても評価されうる動きであった。

とはいえ、メンバーの共通のミッションが終了もしくは喪失されたときに、その組織や活動拠点としての施設空間もその役目を終える。浦浜と同時期の名古屋サークル連絡協議会（名サ連）での「たまり場」の実践では、アパートや民家への間借りなどで、「たまり場」を確保していたことが報告されている<sup>54)</sup>。これは結果として、必要が無くなったときにその場の解消をするに容易であった。しかしこれは、賃貸住宅事情に恵まれた都市部ゆえに可能なことであったといえよう。

## （３）「たまり場」の生成と継承、そして「居場所」へ

さらに、第 3 章で述べたように、1990 年代になると若者を対象とする実践から「たまり場」の語が退場していく。一方、それに代わり、在学青少年教育の文脈で施設空間とそこでの実践において用いられるようになっていくのが、「居場所」である。当初は中高生

を主に対象としたフリースペース等に冠せられていく<sup>55)</sup>。ここでは当初より心理学的ケア・アプローチとの関連性が強かったこともあり、現在においては児童生徒の不登校・ひきこもり支援、成人をも含んだ無業者の就業支援、障害者福祉、児童の放課後対策事業においてまで用いられ、施策用語化もされていく<sup>56)</sup>。

ところで、1980年代までの若者の「たまり場」施設（空間）と、1997（平成9）年開設の杉並区「ゆう杉並」に代表されるような、「居場所」施設（空間）の異同はいかなる点にあるのか。そもそも語自体の差異がある。「たまり場」は集団あつてのものであり、間主観的な関係である。「居場所」は、そもそも個々人の主観に起因する個別性の強いものであるはずである。その意味において、従来の宿泊訓練型青少年施設（青年の家や少年自然の家など）とは異なり、個別利用が可能で、厳格でない利用の仕方ができる「居場所」施設には、適した語であったといえる。

一方、生活世界における双方の位置づけを見てみると、「たまり場」は働く若者を主な対象としていたため、そこは家庭・職場以外の生活領域であった。「居場所」は、主にな学青少年を対象としているため、家庭・学校以外の生活領域である。その意味で共通項としては、双方とも家庭・職場あるいは学校とは異なる、〈第3の生活領域<sup>57)</sup>〉であることが挙げられるが、質的に同じものではなかろう。それは、「おとな」の存在の有無である。

施設空間としての若者の「たまり場」は、そもそも自治性、参画形態が備わっていたことが多い。なぜならば社会人であるがゆえに、種々の責任を持ちうるからである。それゆえ、アジール性が担保されていることも多かったといえよう。

とはいえ、1970年代以降、都市部において公民館等に設けられていった「たまり場」は、職員・スタッフの存在あつてこそその面があつたといえよう。第3章で取り上げたように、1980年代に平林正夫は関係性としての「たまり場」に教育的価値を認め、意図的な「たまり場」空間をどのように社会教育施設において実現していくか、その条件を綿密に検討した<sup>58)</sup>。そこにおいて、「意図的な無意図性」<sup>59)</sup>をいかにして追求していくかを最大の課題としていたことから、平林がこの「たまり場」の限界性の克服を視野に入れていたことは明らかである。いうなれば、一過性の時期である青年期のみを対象とした教育事業や施設空間の整備において、この問題は必ず生じる。世代限定性と引退原理は、青年組織そのものと、青年に利用者を限定した施設での青年組織支援のあり方における課題を浮かび上がらせるものである。上述のように、同時期に喧伝された生活集団論の限界性もここにあつたと見る。そこで平林は、職員の緩やかな関わりによって、当事者以外からは閉鎖性をも覚えさせることのある、「たまり場」の限界性の克服と再生産を常に意識していたのである。この関わり方は、以後の「居場所」施設においても継承されている。なお、ここでは自律性よりも、1990年代に高橋勝が提示したところの「自己形成空間」<sup>60)</sup>再生の志向が強調されてきたともいえよう。

しかけ、伴走し、自立とともに退いていく。このあり方には長期にわたって学習者とその組織を支援できる、職員・スタッフの専門性と組織体制が求められる。社会教育行政の縮小と相まって、大都市部ではいわゆるユースワーク<sup>61)</sup>に特化したミッションを持つNPO等が機能してきているが、地方小自治体ではやはり行政がその役割を担わねばならない状況は変わらない。しかし、その職員体制や専門性を高める動きは高まるどころかさらな

る縮小傾向を見せていることには、甚だ懸念が寄せられるところである。

---

1)序章、注 19) 参照。

2)佐藤一夫・平林正夫「“手づくり” コーヒーハウス」『月刊社会教育』20(2)、国土社、1976。

3)浅野平八は、『地域集会施設の計画と設計』（理工学社、1995）において、地域集会施設を「居住空間形成の核となり、コミュニティ活動の受け皿となつて、一定地域を対象とした地域社会の拠点となる施設群である」（p.5）と定義し、公民館や町内会館、自治公民館、コミュニティセンターなどを具体的に挙げている。

4)「広場・たまり場」運動は、岩手県青年団体協議会において、1975（昭和 50）年から 1977（昭和 52）年の運動方針となっていた（参考：横道廣吉編『明日を求めて 青年団運動の課題と方向への問題提起』岩手県青年団体協議会、1976）。この運動で「たまり場」としての青年会館や子供図書館、広場建設に対する補助金要請によって、県から補助金支出があった。浦浜に加え、金ヶ崎町青年会館、旧川井村（現：宮古市川井）小国青年会館の建設が注目されたが、ほぼ 10 年以内に利用の停滞化が顕著となる。

5)インタビュー調査は、2002（平成 14）年 6 月から 10 月まで計 17 名に対して実施した。

6)平成 12 年度（改訂版）「三陸町政要覧 資料編」による。

7)旧越喜来村域には、越喜来・崎浜・甫嶺（ほれい）の 3 小学校と越喜来中学校がある。なお、2011（平成 23）年 3 月 11 日の東日本大震災において、当地区は津波の被害を受け、死亡・行方不明者 96 名という甚大な被害を受けた。越喜来小学校は、屋上を遙かに超える津波により全壊したものの、そこで人的被害はなかった。以後、2012（平成 24）年、旧甫嶺小学校の校地に 3 小学校が統合され、越喜来小学校となっている。

8)大船渡市役所三陸支所総務課提供「行政区別住民登録人口及び世帯数の推移」による。

9)三陸町史編纂委員会編『三陸町史 第三巻』三陸町史刊行委員会、p.473。

10)大船渡市三陸公民館蔵「三陸連合青年団会則」（1956）による。

11)個人蔵「昭和 49 年 4 月 10 日 四十八年度総会にあたり」による。

12)同上。

13)2002（平成 14）年 7 月 17 日インタビューによる。

14)11)前掲資料中に、1964（昭和 39）年度の行事として、「村民運動会協力 連青陸上競技会参加 学習会 8 日 □□（不明）教室 10 日」の記載がある。

15)B 氏著「追善供養と剣舞」（三陸町連合青年団『若もの 昭和 47 年度第二版』1973）、p.21。

16)13)前掲。

17)三陸町教育委員会編『三陸町の無形民俗文化財（虎舞・剣舞編）』、1987、p.22。

18)2002（平成 14）年 7 月 18 日インタビューによる。

19)1964 年前後、A 氏が越喜来の北にある吉浜支所に勤務しているときに、地元のメンバー中心で結成したという。「うたごえサークル」とも交流があり、水沢市（現：奥州市水沢区）や北上市の喫茶店に通ったという。浦浜出身のメンバーも複数いたという（A 氏談、2002（平成 14）年 7 月 18 日）。

20)念仏剣舞保存会とほぼ同じメンバーが、1990（平成 2）年 7 月以来、「大正後半に姿を消した」浦浜鹿踊り復活を期して、江刺市（現：奥州市江刺区）の岩手県指定無形民俗文化財・金津流梁川獅子躍へ入門して伝習し、以後、金津流浦浜獅子躍として現在に至る（金津流浦浜獅子躍「概要」（[http://www.urahama.com/sisi/s\\_gaiyou/s\\_gaiyou.htm](http://www.urahama.com/sisi/s_gaiyou/s_gaiyou.htm)）、2017 年 1 月 14 日閲覧）。

- 21)13)前掲。
- 22)同上。
- 23)2002（平成 14）年 7 月 17 日インタビューによる。
- 24)2002（平成 14）年 6 月 9 日インタビューによる。
- 25)13) 前掲。
- 26)大船渡市三陸町公民館蔵「三陸連合青年団 機関誌第五号」、1972。
- 27)岩手県企画調整部青少年対策課・岩手県青少年育成県民会議発行「青少年情報その 3」、1973。
- 28)24)前掲。
- 29)2002（平成 14）年 7 月 17 日インタビューによる。
- 30)2002（平成 14）年 7 月 17 日インタビューによる。
- 31)2002（平成 14）年 8 月 17 日インタビューによる。
- 32)2002（平成 14）年 7 月 30 日インタビューによる。
- 33)2002（平成 14）年 10 月 24 日インタビューによる。
- 34)17) 前掲、p.22。
- 35)同上。
- 36)同上。
- 37)20)参照。
- 38)横道廣吉編『青年団 30 周年記念誌』岩手県青年団体協議会、1981、p.201
- 39)2002（平成 14）年 6 月 9 日インタビューによる。
- 40)大船渡市三陸公民館蔵「昭和 59 年度気仙地区青年問題研究集会 資料」、1985。
- 41)同上。
- 42)青年会で踊りをしなくなった結果、1990 年代までは浦浜念仏剣舞は子ども踊りとして知られていた。しかし、2002（平成 14）年 11 月、これまでに育ってきた若い踊り手を中心として、保存会青年部という名称で浦浜念仏剣舞は全国青年大会に出場。最優秀賞を受賞した。
- 43)以下、2002（平成 14）年 7 月 18 日インタビューによる。当日は 1966（昭和 41）年、1969（昭和 44）年生まれの前会員 2 名にインタビューを行ったが、録音はできず、メモのみで記録している。
- 44)同上。
- 45)同上。
- 46)同上。その 2 人が、実際に眼前で複数の台詞を誦んじたのが印象深かった。
- 47)第 3 章第 3 節においても指摘したが、平林正夫は「たまり場」は、本質的に他者からは閉鎖的な関係性により規定されることを指摘している（平林正夫『「たまり場」考——社会教育における空間論的視点』、長浜功編『現代社会教育の課題と展望』明石書店、1986、p.158）。
- 48)2002（平成 14）年 12 月 22 日に現地で開催された、浦浜青年会館取り壊し記念の催しに出席した際、確認できた。また同日、浦浜以外の青年団に属しつつも、お目当ての女性会員がいるので無理して毎晩通っていたエピソードもうかがった。
- 49)横道廣吉『青春は、イモ洗いなのだ！』杜陵高速印刷・出版部、1982。
- 50)上野景三「青少年教育施設の変遷と課題」、日本社会教育学会編『子ども・若者と社会教育（日本の社会教育第 46 集）』東洋館出版社、2002、p.43。
- 51)上田幸夫「公民館発達史の時期区分とその課題」、日本社会教育学会特別年報編集委員会編『現代公民館の創造』東洋館出版社、1999。



52)9)前掲、pp.499-502。

53)長澤成次「地方自治の確立をめざして」、日本青年団協議会編・発行『地域青年運動 50 年史』、2001、pp.612-614。

54)大村恵「青年のたまり場論①」『月刊社会教育』34(9)、国土社、1990、「青年のたまり場論②」『月刊社会教育』34(10)、国土社、1990、宮田和彦「青年のたまり場論③」『月刊社会教育』34(11)、国土社、1990、加藤伸治「青年のたまり場論⑥」『月刊社会教育』35(2)、国土社、1991。

55)安藤耕己「青少年の社会参加とキャリア支援」、小池源吾・手打明敏編著『生涯学習社会の構図』福村出版、2009、pp.163-165 を参照。

56)日本社会教育学会において、いわゆる勤労青年層を対象とした青年教育について最後に体系的な成果として示されたのは、日本社会教育学会編『現代社会と青年教育（日本の社会教育第 29 集）』（東洋館出版、1985）であった。ここでは那須野隆一が編集責任に当たっていることからわかるように、主に都市あるいは都市化する地方での青年層の組織化が当時の課題の主眼となっていたことが裏付けられる。那須野による巻頭論文「青年教育研究の基本的視点」以下、生活史学習と生活集団論に関わる論説が、エリクソンの発達課題論やマズローの欲求段階説にも基づき、論じられている。以後、成人学習論においても議論が高まる、心理主義的なアプローチに価値が置かれていたことがうかがわれる。それからほぼ 20 年を経て刊行された、日本社会教育学会編『子ども・若者と社会教育—自己形成の場と関係性の変容—（日本の社会教育第 46 集）』（東洋館出版、2002）では、それらの心理主義的なアプローチは継承されたものの、対象は勤労青年から在学青少年へと低年齢化する。さらに、「居場所」の語に「たまり場」は「駆逐」されたことがわかる。

57)藤本浩之輔は、家庭・学校という生活空間の間にある第 3 の生活空間である、子どもの遊び空間に子どもの「学習」の価値をおいた（藤本浩之輔『子どもの遊び空間』日本放送出版協会、1974、p.3）。〈第 3 の生活領域〉とは筆者がこの藤本の定義をふまえて用いているものである。

58)平林、47)前掲、pp.159-163

59)同上、p.159。

60)高橋勝『子どもの自己形成空間』川島書店、1992、pp.1-21。

61)田中治彦・萩原建次郎編著『若者の居場所と参加—ユースワークが築く新たな社会—』東洋館出版社、2012 参照。

## 終章 本研究のまとめと課題

### 第1節 本論文の要約

本研究の目的は、近現代の青年団が、どのような原理で青年層を結びつけていたかを明らかにすることであった。その際、青年団の全国組織化が展開していく1900年代から、その組織と活動が顕著であった1970年代までを主たる対象とし、エリートの言説レベルでの認識と、地方で青年団に加入した勤労青年層（一般の若者）という、「ノン・エリート」の実態から読み取られる視点とに分けて解明を行うこととした。そのため、具体的に以下2つの課題を設定した。

まず第1の課題は、伝統的・青年集団としての「若者組」と近代に成立した青年団とを歴史的・質的に結びつけ、それらを美化・理想化し〈教育的〉なるものとしていく言説群、すなわち「青年団＝若者組母胎」論が、構築・再生・定説化されていくプロセス、さらに戦後の青年団論における、青年団の結合原理をめぐる言説をたどり、それらに見られる、望ましき青年団像や結合原理を明らかにすることである。第2の課題は、当事者の若者から見た、近現代青年団の実態とその結合原理を明らかにすることであった。

本研究は2部構成となっている。それぞれ、第1の課題は、第Ⅰ部（第1章～第3章）において、第2の課題は、第Ⅱ部（第4章～第6章）において検討を行った。以上の課題について、以下、各章で解明したことを要約していく。

まず第1章においては、1780年代の寛政改革の頃から明治に至るまで逸脱的存在としてあった若者組像が、1900年代頃からの青年団論の中で弊風から徐々に美風へと転じていく過程を、山本瀧之助、田澤義鋪、熊谷辰治郎らの青年団運動に関わる言説提示の中から整理し、そこで示された青年団像と青年団の結合原理を確認した。結果、田澤著の『青年団の使命』（日本青年館、1930）において、「青年団＝若者組母胎」論が成立し、『若者制度の研究』（下村虎六郎編、大日本連合青年団 1936）において、若者組・若者宿の〈教育〉化が図られたことが明らかとなった。特に田澤が理想化した若者組像に仮託して示した青年団像は、「青年期の社会生活の団体」とされ、自然発生的であり、自治的かつ中正が求められるものとされた。かつ、その性格は修養色が強いものであった。また、その結合原理は、「素朴極まる」「自然の習俗」に由来する、青年期における社交欲・娯楽欲に求められた。以降の青年団論においても、このことが自明視されていった。また、田澤が『青年団の使命』で同論を構築した背景としては、青年団の軍事利用へ抗するために青年団の自立性を強調しようとしたこと、ファシズム、共産主義からの影響を絶つ思想対策の意図があったことが推測された。

第2章では、戦後、「青年団＝若者組母胎論」が、青年団論の中で再表出していく過程を整理した。特に終戦後からしばらくは、「青年団＝若者組母胎」論が否定的に扱われていたが、青年の〈叛乱〉期の最中である1965年頃からは日本青年館を中心とし、その再表出が繰り返し行われたことが確認された。また1970年代には青年団の組織・運動論である生活集団論にその歴史的イメージが用いられるなど、同論は一般的な認識とされていたことも確認された。その背後に、近代から高度経済成長を経る間、青年団運動を主導し、戦後もそのヘゲモニーを掌握しようとした青年団中央組織に関わる人びとが、絶えず

「若者／青年」の歴史を管理しようとしてきたことを見出した。その根幹には青年層の左傾化を憂いて脱政治・中正を求める志向があることを確認した。

第3章では、戦後において研究者や青年団指導者から、現場に即した言説が展開したことを確認した。特に1960年前後、青年団の性格論及び、青年の立場から見た結合原理をめぐる議論が展開した。このとき、山口武秀が示した「素朴な結合要求」を青年団の結合原理とすることをめぐって、生産学習と政治学習の展開を評価する、小川利夫や宮坂広作らの若手社会教育研究者と、当時の農村の現状と農村青年層の志向をふまえた、現場に近い立場からの言説との衝突が見られた。その後、小川らの評価軸は、生産学習と政治学習の結合形態としての農民大学運動へと向いていく。

一方、同じ教育研究者でも共同学習推進の中心にあった大田堯や吉田昇らは、「たまり場」に表象される日常的な対話空間を小集団学習の基盤として認めたが、その指すものは、山口による「素朴な結合要求」によって成立した関係性やその具現化して見える場とほぼ重なるものであった。その後、1970年代になると「たまり場」論として、青年団論の主流においても、「素朴な結合要求」を結合原理とすることが肯定されていく。さらに、その基底には「青年団＝若者組母胎」論と同論で提示された、「若者組≡青年団」というイメージが根付いていることも確認された。

第Ⅱ部からは、青年団の結合原理を実証的に検討した。第4章では、埼玉県旧名栗村に1890年代から存在した青年会組織である甲南智徳会が、地方改良運動の時期に「公益事業団体」として内外からも高い評価を得ていた一方、近世以来の若者組も村内に併存しており、青年団と若者組の二重構造が戦後しばらくまで継続していたことを解明した。これにより、「青年団＝若者組母胎」論における、若者組から青年会、青年団へという、単系的な展開を批判する視座の有効性が、改めて確認された。また、青年の日記等の分析から、いわば公式の存在である青年団と、日常の組織である若者組の使い分けがなされていたことを読み取り、在村青年層においての日常的な組織の結合原理が、「素朴な結合要求」と通底する親密圏への希求に基づくものであったことを推察した。

第5章においては、岩手県花巻市棚田青年会の事例から、終戦後から1960年代にさしかかる時期の集落青年会の結合原理を、娯楽性と「素朴な結合要求」と通底する親密圏への希求にあることを確認し、「政治」青年と一般青年層との志向が乖離する相をとらえた。また、同青年会が戦後初期に建設した青年会館が、一種のアジールとして機能していたことが示唆された。さらに、本章では1960年代に日青協の運動理論としても取り上げられた、岩手県における「実践的学習」論の展開について検討した。同論は、実生活に直結する生活課題の解消に関わっては相当の有効性を発揮したものの、過度に社会変革を求める志向性は、一般青年層の日常性から遊離する傾向にあったことを例証した。このことから一般青年層においては、集落単位の青年会組織が娯楽性と親密圏への希求によって価値づけられていることが裏付けられる結果となった。

第6章においては、1970年代に自らの手で「たまり場」としての青年会館作りを行い、岩手県発の若者の「たまり場」づくりのモデルとなった岩手県旧三陸町浦浜青年会の事例を検討した。伝統芸能の復活を契機に会活動を活性化させた青年会が、拠点となる青年会館を自ら建設し、それが取り壊されるまでの過程を追った。そこから「たまり場」としての施設空間の可能性と限界性とを検討した。一種のアジールとなった「たまり場」を拠点

とした、対話的実践の意義は強くうかがわれた一方、「たまり場」に伴うある種の閉鎖性と世代限定性の課題が浮かび上がった。

## 第2節 本研究の成果と得られた示唆

### (1) 本研究の成果

まず、本研究の第1の課題について成果を示したい。少なくとも1780年代頃から明治となった1890年代に至っても統制の対象としてあり、言説上も「弊風」としてあった若者組は、1900年代、日露戦争以後の山本瀧之助による「地方青年」論を端緒に次第に美風へと転換されていく。それが最終的に「青年団の父」とされ、執筆当時、日本青年館理事であり、後年、同館理事長ともなる田澤義鋪による『青年団の使命』において、いわば「美風」として明確に転換された。そして「青年団＝若者組母胎」論が成立する。そして同論は『若者制度の研究』、『大日本青年団史』（熊谷辰治郎著・発行、1942）という青年団中央組織の「正史」において権威づけられ、定着した。なお、そこにおける「若者組≡青年団」像は極めて教化的・修養的であり、政治的な中立性が強調されるものであった。戦後に至っても、戦前から青年団中央組織に関わる人びとが、絶えず「若者／青年」の歴史を管理しようとしたが、その根幹には青年層の左傾化を憂いて脱政治・中正を求める志向があることを確認した。特に1930年代における、美化された若者組像をもって、あるべき青年団像とその結合原理を根拠づけた言説の生成過程は、まさにフォークロリズムの状況であった。

さらに戦後の議論を整理した結果、近現代の青年団論において、いわば教化的・修養的な「上から」の視点、さらに「下から」の一般青年層の立場からと、その意味合いや強調点の差異はあれども、青年団の結合原理を「素朴な結合要求」と通底する、いわば「親密圏」の希求に求める言説が、底流していることが確認できた。この「素朴な結合要求」を青年団の結合原理として位置づける流れは、農村青年の「青年期」を確立・保障する志向にも基づいていたが、結果としてこれらの言説に底流し、ときに支えることになったのが、1930年代に構築された「青年団＝若者組母胎」論とそこで提示された「若者組≡青年団」という像なのであった。

以上のように、1930年代までに青年団中央組織によって、教化的・修養的意味が込められた「青年団＝若者組母胎」論が構築されたのであるが、逆に戦後、1960年頃からは、社会教育研究者から、戦前からの青年団論に対抗する、オルタナティブな性格を付与した青年団論も提示された。つまり、それだけに「青年」層の掌握・包含は、近現代を通しての国家的命題であったことが、改めてうきぼりとなったと言えよう。

次に第2の課題に関して、近代から1970年代までの、いわばノン・エリート的一般青年団員から見た青年団の結合原理を解明したが、そこではやはり「素朴な結合要求」と通底する親密圏への希求が結合原理であることが確認された。ここで改めて整理すると、「素朴な結合要求」とは、主に農村にいる青年期にあるメンバー間において自然にわき上がる、気の置けない友人たちと話したい、遊びたい、というような対話や娯楽、さらには密接な関係性の構築を求める要求である。そして「素朴な結合要求」によって成立した関係性やその具現化して見える場が、「たまり場」として、1955年前後から1960年代にさしかかる、共同学習論が提唱された時期において、さらには1970年代以降に青年期教育の枠組

みにおいて用いられたのである。いわば「親密圏」の希求が「素朴な結合要求」であり、それによって成立した対話的な空間・場が「たまり場」なのであった。

さらにこれらの検討の結果、「素朴な結合要求」と通底する「親密圏」、「たまり場」の希求と形成、自律的なアジールの確保という、日常性に立脚した地域青年団の結合原理と、その「たまり場」を基盤とし、地域課題の解決などのミッションを展開させていく対話的実践の意義が確認出来た。なお、組織論的な観点で言えば、本論文では社会教育行政との関わりが直接見られない事例を検討したため、青年団活動における世代限定性とそれによる活動の停滞が、自然に招来される傾向が把握された。

以上の2つの課題に関する考察の結果、1930年代より、「言説」上は、青年団の結合原理が「素朴な結合要求」に収斂する傾向は確認できた。しかしながら、いわば「上から」の視点である、田澤の『青年団の使命』において示されたそれと、戦後における、「下から」の視点に基づく、山口らの言説における「素朴な結合要求」の「素朴」さとは、そのまま重ならない。以上検討してきたように、「素朴な結合要求」論は、青年期概念と深く関わるものであるが、第1章において示したように、特に田澤が示した「素朴」さとは、まさに学校教育の延長線上にある「素直さ」「純朴さ」でもあった。となれば、体制やおとなに対しての「素朴な」疑義によって、青年が「結合」することは認められるものではなく、よりよき青年像・国民像の枠を外れることは許されなかった。高度経済成長にさしかかる1960年前後、小川利夫や宮坂広作らが「素朴な結合要求」に一定の理解を示しつつも、そのこと（のみ）を青年団の結合原理として称揚することに懸念を示したのは、「素朴な結合要求」が、結果として国家権力に無自覚・無意識に絡め取られていったこと、さらに1930年代において求められた「素朴さ」が、再び「上から」押しつけられることへの懸念があったがゆえであった。

一方として1960年前後、現場に近い立場の研究者や実践家、評論家の言説では、「素朴な結合要求」は青年期の特徴として受け止められ、それが青年団の組織及び活動の「基盤」としてあること、そこからの学習と実践への発展性に強く価値が示された。第3章で述べたように、特に1955年前後からの共同学習論提唱の時期における、ノン・エリート青年たちの学習に寄り添った実践に基づく、大田堯の「たまり場」論はその先駆的なものであり、この志向は1970年代における生活集団論に発展・継承されていった。これらの言説の通用性は、第2の課題に関する、第Ⅱ部でのノン・エリート層に着目して行った実証研究において裏づけられたと言えよう。

なお言えば、その「素朴な結合要求」によって成立した「たまり場」を基盤とする限り、青年団の活動は過度に日常性から遊離しない傾向も看取された。すなわち「たまり場」が個人の要求と青年団、ひいてはその成立基盤である地域社会（のロジック）とをつなぐ役割を果たしているのである。

## （2）得られた示唆

第Ⅱ部での検討の結果、現在の地域コミュニティ（主に中山間地域、農山漁村部を想定する）における、若者の組織化のあり方に関する示唆を得た。現在の地域コミュニティにおいては、かつての青年団や婦人会に代表された中間集団が機能しているとはいえない。すなわち、家族や仲間といった対話的な関係の領域にある「親密圏」と、地域コミュニテ

ィにおいて生成される「公共圏」とが大きく離れている。

第3章第4節においても示したが、齋藤純一によると、親密圏は、「具体的な他者の生／生命への配慮・関心によって形成・維持される」ものであり、公共圏とは「人びとの〈間〉にある共通の問題への関心によって成立する」ものである<sup>1)</sup>。この関係性によって両者を理解すると、両者は全く対のものではなく、転換性あるいは相互に共通性を持ちうる。齋藤はセルフヘルプグループの例示をもとに、「親密圏は同時に公共圏の機能を果たすこともある。というよりもむしろ、新たに創造される公共圏のほとんどは親密圏が転化する形で生まれるといった方がより正確だろう<sup>2)</sup>」とする。そこに親密性を持ちつつも公共性を持ちうる「中間圏<sup>3)</sup>」となる、中間集団や組織の必要性が改めて浮かび上がる。なお、この際の公共性とは、筆者は田中重好が提起する、「小さな公共性」「小文字の公共性」を前提にしている<sup>4)</sup>。従前の地域コミュニティの活性化を図りつつ、その中で対話的实践を通して「小さな公共性」「小文字の公共性」を言語化し、実体化させていくイメージである。

このイメージを実態化させるに当たっては、より強固な紐帯を持った従前の地域コミュニティの組織としてありつつも、一種のアジール性を確保していたといえる、活性期の青年団活動の中にその可能性、そしてその課題・限界性をも見出すことができると考える。「上から」押しつけられるのではなく、その内部の親密性を深めつつ、公共性を展開する可能性は、その対話的实践の中に見出せるのではなかろうか。ここで改めて、社会教育論で注目されてきた「たまり場」を、親密圏と公共圏との中間圏として読み直せるのではないかと考える。

前項では、「親密圏」の希求が山口武秀が示した「素朴な結合要求」であり、それによって成立した対話的な空間・場が「たまり場」、というように結論づけた。

しかし、「たまり場」は、親密圏そのものではない。そこには、親密圏から公共圏の間に拮がりうる、あるいは両者の間隙を埋めていくような性格、まさに中間圏といえる性格があるのではないか。特に、本論文第5章、6章で取り上げた事例は、もちろん時代的制約はあったものの、私事性が公共性を獲得しそれを拡張させ、中間圏としての「たまり場」を経由しつつ、課題の共有や解決を実現していくプロセスであったと見てよい。ここには、「上から」何らかの強制力が働くときには個人の緩衝材となりつつ、一方で個人だけでは果たし得ないことを実現させるときのアソシエーションとして機能する、中間圏としての「たまり場」が想定できる。例えば第4章の検討からも、特にプラグマティックな課題を共有できたとき、エリート／ノン・エリート、あるいはおとな／若者双方の視点や立場は接近し、重なることも、確認された。ここにも両者の接点となる、中間圏としての「たまり場」の意義が認められよう。

さらに、第5章、6章でもみたように、それらの関係性は、一連の事業・活動の中で生成・深化されていることも見逃せない。「たまり場」を作ろうとしたのではなく、結果として「たまり場」が生成されたのである。しかし、くり返し述べるように、その限界も見える。梶目と浦浜の2事例からもうかがわれるように、行政の関与なしに立ち上がった「たまり場」では、下の世代や新規参入者に対する閉鎖性が強く示され、それがゆえにメンバーの引退でその紐帯が弛緩・終焉することが示唆されている。ましてや青年期という、一過性の時期にある年代層が対象であり、引退性を持つことが「たまり場」の持続性を困難

にすることが理解された。

### 第3節 残された課題

まず本研究では、1970年代までを主たる事例の検討時期としたため、1980年代以降の青年団の状況については、実証的にとらえることができなかった。また、4Hクラブ等の農林行政が所管する、よりプラグマティックな性格をもつ青年組織と、青年団との関係性をとらえることができなかった。

次に、「たまり場」における教育的意義を、長期的なスパンで読み取ることまでは至らなかった。これは従前より、筆者が成人学習の「成果」を評価する意味においても提唱し、試みてもきた<sup>5)</sup>ことでもある。これにより、青年期のノンフォーマル／インフォーマルな学びがどのように転移されていくのかを例証することが可能であると考え。たとえば、第6章で取り上げた浦浜青年会館の関係者が、東日本大震災後に地域復興に深く携わっている姿を知るにつけ、その思いは深まっている。このように、若き日に対話的实践を行った人びとの、「その後」を確かめてみたいと考える。

さらに、政治史的考察の必要性も痛感した。第2章でも言及したように、戦後の青少年（教育）施策の展開において、末次一郎らの「保守人脈」の働きがどのようなものであったのか、より詳細に検討する必要がある。前述したように、末次らが戦後のボランティアセクターの展開に寄与した面は否定できず、よりマクロな観点で戦後社会教育史を俯瞰する必要がある。

そして、以上見てきたように、「たまり場」は、時間と場所を共有した人びとが、対話と行為の交換により生成していった関係性、およびそれを伴う空間・場である。それゆえ、ときに、外部に対する閉鎖性や世代限定性を持つ。これは前述した「中間圏」として位置づけるとき、大きな課題となる。また、身近な生活世界のみに視座を固定してしまい、国家体制や政治・経済状況等へのマクロな状況への目配りを行わないと、大きな動きに絡め取られていく。その逆もまた、日常性との遊離が進む。

これらを克服するしかけが必要となる。「たまり場」を結節点に、その短期的なビジョン・実践と長期的な展望とを、対話を通して形成していく営みの継続が求められよう。

関わってふりかえるに、第6章に述べたように、引退原理を持つ青年団を前提とした農村部の「たまり場」は、1980年代には停滞した。一方、都市部における「たまり場」は、1990年代まで公民館等の施設空間において、職員の関与により継続した。すなわち、そこには、行政職員やスタッフによる伴走性が発揮されていたのである。この職員・スタッフの専門性、その設置主体に関しても含め、地域コミュニティにおける若者の組織化及びその支援のあり方については、それぞれの実態に即した検討が必要となろう。

山形県に移り住んでもうすぐ10年となる。さまざまな取り組みを見聞するのみならず、直接的な関わりも増えてきた。特に若者たちに伴走する支援の主体、そのあり方に関しては、地方における行政やNPO等の実態、および両者の協働に関する研究に基づきつつ、積極的に世に問うていきたいと考える。

---

1) 齋藤純一『公共性』岩波書店、2000、p.92、傍点ママ。

2) 同上、p.95。

3) 中間圏とは、提唱者である秋津元輝によると、「親密圏／公共圏という両極の継ぎ目として、それらを前提としながら設定される領域」であり、「親密圏と公共圏の“中間”に位置することから、両極の持つ社会関係上の特質が併存し、競合する領域となろう」と意味づけられる（秋津元輝「中間圏：親密性と公共性のせめぎ合うアリーナ」、秋津元輝・渡邊拓也編『せめぎ合う親密と公共—中間圏というアリーナ—』京都大学学術出版会、2016、p.13）。また、渡邊拓也は、その中間圏を対話的空間として通時的に位置づけ直す。しかし渡邊は、地域コミュニティ回帰論にはその背後に「社会的であれ」というメッセージや、地域住民の互酬的関係を強要するある種の「ガバナンス」の強制があるのではないかという指摘する（渡邊拓也「雑談が人を結ぶ—つながりに関する歴史社会学的考察」、秋津・渡邊前掲書所収、p.235）。つまり、「つながり」の称揚はその強制ともなるわけである。対話的コミュニケーションが苦手な人たちをどのように地域活動に巻き込んでいくかは、心身にハンディキャップを持つ人びとの学習保証と併せ、重要な課題である。

4) 地域コミュニティにおける公共性の生成を検討する田中は、画一的・単一の価値となりがちな「大きな公共性」「大文字の公共性」としての国家的・行政的公共性と、より小さな生活に根ざした「小さな公共性」「小文字の公共性」とが、重層的に対話可能な形で存在することの可能性を見る（田中重好『地域から生まれる公共性—公共性と共同性の交点—』ミネルヴァ書房、2010、pp.221-225）。ときにそれは、グローカルな展開をも想定できる。また、田中はこの実現のため、「公共性なき私性」とその表裏の関係とする、「公共性なき行政」とを解消することを課題とする（同上、pp.263-265）。

5) 安藤耕己「成人の学習におけるライフ・ヒストリー法—学習の意味を人生に即してみる—」、日本社会教育学会編『成人の学習（日本の社会教育第48集）』東洋館出版社、2004



## 参考文献一覧〔著者50音順〕

- 秋津元輝・渡邊拓也編『せめぎ合う親密と公共—中間圏というアリーナ—』京都大学学術出版会、2016。
- 浅野智彦『「若者」とは誰か—アイデンティティの30年【増補新版】—』河出書房新社、2015。
- 安孫子麟「近代村落の三局面構造とその展開過程」、村落社会研究会編『村落社会研究』19集、御茶の水書房、1983、pp.3-35。
- 雨宮昭一『占領と改革（シリーズ日本近現代史⑦）』岩波書店、2008。
- 池野正明『青年団体構造改革—実践的学習論の立場—』岩手県教育委員会、1961。
- 岩田重則『ムラの若者・国の若者 民俗と国民統合』未来社、1996。
- 岩手県青年団運動研究所編『岩手県青年若妻記録運動史』岩手県青年団体協議会、1962。
- 岩手県青年団体協議会編・発行『青年団30周年記念誌』1981。
- 岩本通弥編『ふるさと資源化と民俗学』吉川弘文館、2007。
- 岩本通弥・菅豊・中村淳編著『民俗学の可能性を拓く』青弓社、2012。
- 上野景三「解説」、熊谷辰治郎全集刊行委員会編『熊谷辰治郎全集』勁草書房、1984、pp.911-926。
- 上野景三「青年指導論と施設」、横山宏・小林文人編著『公民館史資料集成』エイデル研究所、1986、pp.755-766。
- 上野景三「青年教育史研究の課題と展望—青年団史研究を中心に—」、『日本教育史研究』第15号、1996、pp.111-130。
- 上野景三「青少年教育施設の変遷と課題」、日本社会教育学会編『子ども・若者と社会教育（日本の社会教育第46集）』、東洋館出版社、2002、pp.38-50。
- 上野景三「社会教育の変容が若者にもたらしたもの」、石井まこと・宮本みち子・阿部誠編『地方に生きる若者たち—インタビューからみえてくる仕事・結婚・暮らしの未来—』旬報社、2017、pp.249-277。
- 上原直人『近代日本公民教育思想と社会教育—戦後公民館構想の思想構造—』大学教育出版、2017。
- 碓井正久編『日本社会教育発達史（講座現代社会教育Ⅱ）』亜紀書房、1980。
- 江守五夫『日本村落社会の構造』弘文堂、1976。
- エリック・ホブズボウム／テレンス・レンジャー編、前川啓治他訳『創られた伝統』紀伊國屋書店、1992。
- 大石嘉一郎・西田美昭編著『近代日本の行政村—長野県埴科郡五加村の研究—』日本経済評論社、1991。
- 大江志乃夫『国民教育と軍隊』新日本出版社、1974。
- 大串隆吉「地方社会教育史研究の方法」、津高正文編『地方社会教育史の研究（日本の社会教育第25集）』、東洋館出版社、1981、pp.44-61。
- 大平滋「戦後自己教育論の展開」、大槻宏樹編著『自己教育論の系譜と構造』早稲田大学出版部、1981、pp.114-138。
- 小川利夫「戦後青年団運動の系譜——日青協十年の道程——」（宮原誠一編『青年の学習』

- 国土社、1960、pp.138-166。
- 小川利夫「歴史的イメージとしての公民館」、小川利夫編『現代公民館論(日本の社会教育第9集)』東洋館出版、1965、pp.6-39。
- 小川利夫編『現代社会教育の理論』、亜紀書房、1978。
- 小川利夫『青年期教育の思想と構造』勁草書房、1978。
- 小川利夫・倉内史郎編『社会教育講義』明治図書、1964。
- 小川利夫・橋口菊・大蔵隆雄・磯野昌蔵「わが国社会教育の成立とその本質に関する一考察(一) 一地方自治と社会教育一」『教育学研究』第24巻第4号、金子書房、1957、pp.1-18。
- 小川利夫・橋口菊・大蔵隆雄・磯野昌蔵「わが国社会教育の成立とその本質に関する一考察(二)」『教育学研究』第24巻第6号、金子書房、1957、pp.29-37。
- 荻野亮吾「『社会関係資本』論の社会教育研究への応用可能性」『東京大学大学院教育学研究科紀要』53、2013、pp.95-112。
- 掛谷昇治「日本青年館と柳田國男」、柳田国男研究会編著『柳田国男・ジュネーブ以後』三一書房、1996、pp.41-50。
- 片瀬一男『若者の戦後史一軍国少年からロスジェネまで一』ミネルヴァ書房、2015。
- 川村邦光『〈民俗の知〉』の系譜一近代日本の民俗文化一』昭和堂、2001。
- 館史編纂委員会・編纂作業委員会編『財団法人日本青年館七十年史』財団法人日本青年館、1991。
- 北河賢三『戦後史のなかの生活記録運動』岩波書店、2014。
- 北河賢三『戦後の出発 文化運動・青年団・戦争未亡人』青木書店、2000。
- 北原泰作『賤民の後裔一わが屈辱と抵抗の半生一』筑摩書房、1974。
- 北村三子『青年と近代一青年と青年をめぐる言説の系譜学一』世織書房、1998。
- 木村直恵『〈青年〉の誕生 明治日本における政治的实践の転換』新曜社、1998。
- 熊谷辰治郎編『山本瀧之助全集』山本瀧之助氏功劳顕彰会、1931。
- 熊谷辰治郎「回顧二十年」、熊谷辰治郎著・発行『大日本青年団史』1942、pp.1-65。
- 熊谷辰治郎著・発行『大日本青年団史』、1942。
- 熊谷辰治郎先生の受章を祝う会編・発行『一人の青年運動家』、1962。
- 健青運動十五年史編纂委員会編『健青運動十五年史一人づくりをつみあげて一』日本健青会中央部、1964。
- 小国喜弘『民俗学運動と学校教育』東京大学出版会、2001。
- 国立教育研究所編・発行『日本近代教育百年史 第八巻』、1974。
- 後藤文夫編『田澤義鋪選集』財団法人田澤義鋪記念会、1967。
- 埼玉県教育委員会編・発行『埼玉県教育史 第四巻』、1971。
- さいたま民俗文化研究所編『名栗の民俗 上巻』、名栗村教育委員会、2004。
- さいたま民俗文化研究所編『名栗の民俗 下巻』、飯能市教育委員会、2008。
- 齋藤純一『公共性』岩波書店、2000。
- 酒井三郎『昭和研究会 ある知識人集団の軌跡』中公文庫、1992。
- 寒河江善秋『青年団論』北辰堂、1959。
- 塩崎弘明『国内新体制を求めて』九州大学出版会 1998、pp.235-262。

下村虎六郎編『若者制度の研究』大日本連合青年団、1936。  
 社会教育・生涯学習辞典編集委員会編『社会教育・生涯学習辞典』朝倉書店、2012。  
 昭和同人会編著・後藤隆之助監修『昭和研究会』経済往来社、1968。  
 生活科学調査会編『青年教育（講座・日本の社会教育第Ⅲ巻）』医歯薬出版、1961。  
 関口敏美『柳田國男における「学問」観の展開と教育観の形成』風間書房、1995。  
 大日本連合青年団編『青年宿』日本青年館、1931。  
 田澤義鋪『青年団の使命』日本青年館、1930。  
 田沢義鋪記念会代表丸山鶴吉編（下村湖人著）『田澤義鋪』財団法人田澤義鋪記念会、1954。  
 田嶋一「共同体の解体と〈青年〉の誕生」、中内敏夫他『教育—誕生と終焉（叢書産む・育てる・教える1）』藤原書店、1990、pp.32-50。  
 田嶋一『『青年』の社会史—山本瀧之助の場合—』、編集委員会編『教育—誕生と終焉（叢書産む・育てる・教える1）』、藤原書店、1990、pp.132-160。  
 田中重好『地域から生まれる公共性—公共性と共同性の交点—』ミネルヴァ書房、2010。  
 田中治彦『ユースワーク・青少年教育の歴史』東洋館出版社、2015。  
 田中治彦・萩原建次郎編著『若者の居場所と参加—ユースワークが築く新たな社会—』東洋館出版社、2012。  
 多仁照廣『若者仲間の歴史』日本青年館、1984。  
 多仁照廣『青年の世紀』同成社、2003。  
 多仁照廣『山本瀧之助の生涯と社会教育実践』不二出版、2011。  
 千野陽一『近代日本婦人教育史』ドメス出版、1979。津高正文編『戦後社会教育史の研究』昭和出版、1981。  
 津高正文編『地方社会教育史の研究（日本の社会教育第25集）』東洋館出版、1981。  
 手打明敏『近代日本農村における農民の教育と学習』日本図書センター、2002。  
 中嶋久万吉『政界財界五十年』まつ出版、2004。  
 永杉喜輔『青年の父・田澤義鋪』民主教育協会、1966。  
 中野泰『近代日本の青年宿—年齢と競争原理の民俗—』吉川弘文館、2005。  
 中村政則『日本近代と民衆—個別史と全体史—』校倉書房、1984。  
 中村宗悦『後藤文夫』日本経済評論社、2009。  
 中山太郎『日本若者史』春陽堂、1930。  
 名栗村史編纂委員会編『名栗村史』名栗村教育委員会、1960。  
 那須野隆一『青年団論』日本青年館、1976。  
 夏目琢史『アジールの日本史』同成社、2009。  
 成田久四郎編著『社会教育者事典・増補版』日本図書センター、1989。  
 難波功士「戦後ユース・サブカルチャーズについて(1): 太陽族からみゆき族へ」、『関西学院大学社会学部紀要』96、2004a、pp.163-178。  
 難波功士『『若者論』論』『関西学院大学社会学部紀要』97、2004b、pp.141-148。  
 日本社会教育学会編『小集団学習（日本の社会教育第3集）』国土社、1958。  
 日本社会教育学会編『農村の変貌と青年の学習（日本の社会教育第6集）』国土社、1961。  
 日本社会教育学会編『現代社会と青年教育（日本の社会教育第29集）』東洋館出版、1985。  
 日本社会教育学会編『子ども・若者と社会教育—自己形成の場と関係性の変容—（日本の

- 社会教育第 46 集)』東洋館出版、2002。
- 日本社会教育学会編『社会教育研究における方法論（日本の社会教育第 60 集）』東洋館出版社、2016。
- 日本青年館編・発行『大日本青少年団史』、1970。
- 日本青年団協議会編『仲間の実践に学ぼう—活動家の手引第 2 集』日本青年館、1966。
- 日本青年団協議会編『日本青年団協議会二十年史』日本青年館、1971。
- 日本青年団協議会編『青年団強化の手引 続ビジョンを求めて』日本青年館、1978。
- 日本青年団協議会編・発行『地域青年運動 50 年史』、2001。
- 橋口菊「国民教育の再編成と社会教育行政確立に関する一考察」『教育学研究』第 27 巻第 3 号、1960、pp.196-205。
- 萩原進『群馬県青年史』群馬県神道青年会、1957。
- 畑中章宏『『日本残酷物語』を読む』平凡社、2015。
- 花巻市青年団体協議会編・発行『ひたすら燃えた日々 花巻市青年団体協議会 20 周年記念誌』、1974。
- 飯能市名栗村史編集委員会編『名栗の歴史 上巻』飯能市教育委員会、2008。
- 飯能市名栗村史編集委員会編『名栗の歴史 下巻』飯能市教育委員会、2010。
- 平林正夫『『たまり場考』——社会教育における空間論的視点』、長浜功編『現代社会教育の課題と展望』明石書店、1986、pp.112-163。
- 平山和彦『青年集団史研究序説 上巻』、新泉社、1978。
- 平山和彦『青年集団史研究序説 下巻』、新泉社、1978。
- 福井直秀『柳田国男—社会変革と教育思想—』岩田書院、2007。
- 福田アジオ『日本民俗学方法序説』吉川弘文館、1984。
- 福田アジオ『日本の民俗学—「野」の学問の二〇〇年—』吉川弘文館、2009。
- 福田アジオ『現代日本の民俗学—ポスト柳田の五〇年—』吉川弘文館、2014。
- 福田アジオ・新谷尚紀・湯川洋司・神田より子・中込睦子・渡邊欣雄編『日本民俗大辞典 上巻』吉川弘文館、1999。
- 福田アジオ・新谷尚紀・湯川洋司・神田より子・中込睦子・渡邊欣雄編『日本民俗大事典 下巻』吉川弘文館、2000。
- 藤岡貞彦「昭和 30 年代社会教育学学習理論の展開と帰結（上）」、『東京大学教育学部紀要』第 10 巻、1968、pp.201-224。
- 藤田秀雄『社会教育の歴史と課題』学苑社、1978。
- 藤本浩之輔『子どもの遊び空間』日本放送出版協会、1974。
- 古川貞雄『村の遊び日—休日と若者組の社会史—』平凡社、1986。
- 古川貞雄『増補 村の遊び日』農山漁村文化協会、2003。
- 法政大学大原社会問題研究所編『協調会の研究』柏書房、2004。
- 松田武雄「社会教育史研究の課題と展望—社会教育の概念と研究方法論に焦点つけて—」、日本教育史研究会編『日本教育史研究』第 24 号、2005、pp.39-56。
- 松田武雄『近代日本社会教育の成立』九州大学出版会、2004。
- 松本大「交渉と闘争としての成人教育—『パワー』の観点から—」、『日本社会教育学会紀要』No. 42、2006a、pp.77-86。

- 宮坂広作『近代日本社会教育政策史』国土社、1966。
- 宮坂広作『近代日本社会教育史の研究』法政大学出版局、1968。
- 宮地正人『日露戦後政治史の研究—帝国主義形成期の都市と農村—』東京大学出版会、1973。
- 宮原誠一『教育と社会』金子書房、1949。
- 宮原誠一編『青年の学習』国土社、1960。
- 宮前耕史『『若者制度』の誕生—地方改良運動期以降における政府青年団(体)施策と「若者組=教育機関」説の成立—』筑波大学教育学会編『筑波教育学研究』第2号、2004、pp.17-31。
- 宮本常一『忘れられた日本人』未来社、1960。
- 三輪建二「補論 戦後日本の社会教育・生涯学習方法論」(同著『現代ドイツ成人教育方法論』東海大学出版会 1995、pp.376-400。
- 村上恵三編『岩手県青年団運動史〈県青協編〉』岩手県青年団協議会、1963。
- 森川輝紀『国民道徳論の道—「伝統」と「近代化」の相克—』三元社、2003。
- 柳田國男『郷土生活の研究法』刀江書院、1935。
- 柳田国男研究会『柳田国男伝』三一書房、1988。
- 山口武秀『青年運動の理論—その基本法則はなにか—』三一書房、1960
- 山口武秀『山口武秀著作集』三一書房、1993。
- 山中永之佑『日本近代地方自治制と国家』弘文堂、1999。
- 山本瀧之助『地方青年団体』洛陽堂、1909
- 山本悠三『社会教育概念の史的考察』梓出版社、1989。
- 山本悠三『近代日本社会教育史論』下田出版、2003。
- 吉田昇・福尾武彦・碓井正久・小川利夫『青年の学習運動』農山漁村文化協会、1959。
- 依田新・大西誠一郎・斎藤耕二・津留宏・西村直喜・藤原喜悦・宮川知彬編『青年心理学研究の方法と課題』金子書房、1973。
- レイヴ／ウェンガー著、佐伯胖訳、福島真人解説『状況に埋め込まれた学習：正統的周辺参加』産業図書、1993。
- 和崎光太郎『明治の〈青年〉—立志・修養・煩悶—』ミネルヴァ書房、2017。